埋蔵文化財発掘調査報告

—山陽新幹線建設に伴う調査—

岡山県教育委員会

序

岡山県は古代吉備文化の中心地で，重要な埋蔵文化財を多く包蔵している地域であります。ところが，近年の諸開発にともなって，埋蔵文化財と開発との競合がいたるところで生じてまいりました。山陽新幹線建設にともなう埋蔵文化財の取り扱いについては，文化庁と国鉄本社との間に昭和41年「覚書」が締結され，これにもとづいて文化財を保護すべく国鉄と県とでたびたび交渉をかさねてまいりました。その結果，路線内の埋蔵文化財については，県直営による発掘調査というまったくはじめての形をとって実施してまいりました。この間，予期しない数々の困難な問題も生じ，関係者は血の出るような苦労をしました。また，雄町遺跡については，遺跡保存の要望を受けた国鉄のご理解により橋脚幅をひろげて一部を現状で保存するという措置もとりました。本書は経験のとぼしいわたしたちからみても不満足なものであり，不備な点が多々あろうと思いますが，埋蔵文化財に対する認識と理解のために少しでも役立つならば望外の幸と思います。

発掘調査の実施にあたっては，国鉄当局のご理解とご協力を始めとし，山陽新幹線埋蔵文化財保護対策委員会の諸先生からご指導，ご助言をいただき，また，関係市教育委員会をはじめ地元の方々のご協力とご鞭撻を賜りました。ここに，心からお礼申し上げます。

昭和 47 年 3 月

岡山県教育委員会

教育長　小野啓三

例　　言

1．この報告は，山陽新幹線建設に伴い岡山県教育委員会の主催によって行なわれた岡山以東における発掘調査の概要である。

2．発掘調査は，1967年12月不老山東口古備前窯址に着手して以来，1971年３月末日雄町遺跡側道敷部分の完了まで，実に足掛け５年間を要した。遺跡および調査区を列記すれば，不老山東口古備前窯址，不老山西口古備前窯址，雄町遺跡，高島新屋敷調査区，船山遺跡，大門遺跡の６個所である。

3．山陽新幹線埋蔵文化財保護対策委員会の設置については，岡山県考古学研究者の会から次のような申し入れがあり，教育長から後記の諸先生をご委嘱した。対策委員各位からは絶えず援助と叱咤激励を受けた。記して謝意を表したい。

① 山陽新幹線建設に伴う埋蔵文化財緊急調査にあたって設置が予定されている諮問機関は，埋蔵文化財保護に関し発掘調査も含む諸問題を審議すること。

② 諮問機関の意見は尊重，実施されること。

③ 諮問機関の人選にあたっては，岡山県考古学研究者の会の意見を尊重すること。

④ 将来生ずる類似のケースについては，同じ内容と構成をもつ諮問機関が設けられること。

4．この報告をまとめるにあたって，山陽新幹線埋蔵文化財保護対策委員ならびに同調査委員の各位，および熱残留磁気測定については大阪大学基礎工学部助手広岡公夫氏，自然遺物の鑑定は岡山大学農業生物研究所笠原安夫教授，石材の鑑定は岡山大学理学部光野千春教授，以上の諸先生に分析・測定をお願いし，そのうえ有益な教示と助言を受けた。記して感謝の微意を表したい。

5．調　査　組　織

山陽新幹線埋蔵文化財保護対策委員

岡山理科大学教授	鎌　木　義　昌
岡山大学教授	近　藤　義　郎
山陽学園教諭	西　川　　宏
倉敷考古館副館長	間　壁　忠　彦
甲浦郵便局長	三　杉　兼　行
美作考古学研究会会長	渡　辺　健　治
岡山大学教授	故　和島　誠一

山陽新幹線埋蔵文化財調査委員（不老山古備前窯址につき）

石井中学校教諭	池　葉　須藤樹
岡山県立博物館主任	岡　本　明　朗
玉島高等学校教諭	小　野　一　臣
瀬戸中学校教諭	角　田　　茂
岡山市教育委員会主事	出　宮　徳　尚

岡山大学助手	春成秀爾					
倉敷考古館主事	間壁葭子					
岡山県教育委員会						
教育長	小野啓三					
教育次長	小若義朗					
文化課長	神野力					
参事	萩原一郎					
文化主幹	光嶋尚之					
文化財係長	森忠彦					
文化財保護主査	高橋護					
文化財保護主事	河本清	葛原克人				
主事	中力昭	枝川陽	正岡睦夫	伊藤晃		
	泉本知秀	栗野克己	井上弘	山磨康平		
主事補	樋口啓子					

調査協力者

地元民若干名，岡山理科大学考古学研究部有志，順正短期大学考古学研究部有志，橋本幸男，則本雅子，岡山真知子。

とくに備前市教育委員会ならびに岡山市教育委員会の担当職員の方々には種々お世話になった。心からお礼申したい。また，遺物の写真撮影は青淵均氏の手をわずらわした。

6．本書で用いた高さの数値は，海抜絶対高である。

ま　え　が　き

Ⅰ．発掘調査前の問題

路線の決定について

山陽新幹線の路線決定にかかる事前協議については，当時埋蔵文化財主管課であった岡山県教育庁社会教育課にたいする国鉄当局からの直接の打診はなく，県地域開発課を媒介しておおずかみの路線計画の内示があったにすぎなかった。そこで，社会教育課の埋蔵文化財担当主事（当事１名）が県南部における遺跡の分布状況を，昭和35～６年時点で岡山県遺跡保護調査団の主導で作成された岡山県遺跡分布団にもとづき，とりわけ周知の遺跡の適確な位置および土器散布地の密度などに留意しつつ，地図上に記入する作業を開始し，ルート選定の基礎資料を提供した。

昭和41年９月の第１回交渉時から国指定史跡牟佐大塚付近を東西によぎるルート，あるいは賞田廃寺近辺を通る計画など，数本の比較ルートがあったが，それらは岡山平野がすぐ南に展開する低丘陵地帯にあたり，すでに多数の遺跡が確認されているだけでなく，そうした立地条件のもとには未知の遺跡が新発見される可能性も高いと考えられたので，文化財保存の観点から望ましくない旨くりかえし伝えてきた。

昭和42年度に至り，新幹線用員として２名の専従職員が増員された。前年からのデスクワークや分布調査のあとをうけ，再び分布調査をおこなった。岡山市内においては，一部に赤白のポールがセンター杭として打ちこまれているだけで幅杭まで入っている地域はきわめてまれで，なお用地買収は難航している様子であったにもかかわらず，すでに国鉄は各市町部局の承諾をとりつけ，ルートは動かしがたいものとなっていた。一方，いくつかの地域において，絶対反対闘争や条件闘争が断続的にくりかえされていた。このような中でおこなわれた昭和42年前半期での分布調査は，ルート決定前においてできるだけ遺跡を避けるよう協議するという基本的観点からすれば，何らの効力ももたない作業であった。

山陽新幹線埋蔵文化財保護対策委員会および同調査委員会の設置について

すでに「例言」で記したとおり，昭和42年５月22日付けをもって岡山県考古学研究者の会から岡山県教育委員会教育長あて４項目の申し入れがあり，教育委員会はそれに同意したのち，岡山県遺跡保護調査団からの推薦にもとづき，同年８月２日付けで山陽新幹線埋蔵文化財保護対策委員を委嘱した。

教文社第1915号
昭和42年８月２日

各　位　殿

岡山県教育委員会教育長

山陽新幹線建設にともなう埋蔵文化財保護対策委員の委嘱について埋蔵文化財の保護については，常々ご高配をたまわり深く感謝しております。

この度，山陽新幹線の建設にともない埋蔵文化財の調査を実施するとともに，これの適切な保護対策をこうずるため，対策委員会を設置することになりました。ついては，貴殿を山陽新幹線埋蔵文化財保護対策委員に委嘱いたしますので，よろしくお願い致します。

翌日にはさっそく第１回の会開議すを催ることとなった。

山陽新幹線埋蔵文化財保護対策委員会の開催について

標記のことについて，下記により開催いたしたく存じますので，ご出席下さるようご案内申しあげます。

記

1. 日　　時　昭和42年８月３日(木)午後１時半～５時
2. 会　　場　岡山市古京町　三光荘
3. 議　　題　∘山陽新幹線の建設に伴う埋蔵文化財の保護について
　　∘調査計画について
　　∘そ　の　他

この会議では，埋蔵文化財包蔵地であることが明白であっても，土地未買収地域であるかぎり発掘調査に着手すべきでないことがまず話しあわれ，さらに，表面からの土器片散布状況をもって遺跡の所在を云々するのではなく，予定の全路線にわたってボーリング調査を実施する必要があることも，合せて確認された。

ついで，昭和42年11月15日，分庁舎５階第２会議室において，第２回の対策委員会を開催し，

（１） 不老山東口窯址の調査についてその経過及び方針，

（２） 山陽新幹線埋蔵文化財調査委員の委嘱について協議した。県側がおこなった経過報告の中では，とくに国鉄による用地買収とのからみが問題点として指摘された。そこで，昭和42年８月２日付け教社文第1915号で岡山県教育委員会教育長名をもって関係市町の教育委員会教育長あてに依頼した内容について説明することとなった。それは，以下のとおりである。

山陽新幹線建設工事にともなう埋蔵文化財発掘調査に
関する土地所有者の承諾のとりまとめについて

今般，山陽新幹線の建設にあたって破壊される危険のある路線予定地内の埋蔵文化財について，文化財保護のため工事着手前に発掘調査を実施することになりました。

つきましては，貴管下の下記遺跡について別紙様式により，土地所有者等の承諾の取りまとめ方についてご協力をお願い致します。承諾のとりまとめにあたっては，埋蔵文化財の重要性と文化財保護の意義を周知徹底し，文化財保護に対する協力として発掘承諾を求めることとし，遺憾なく取り計らわれるようお願いいたします。

なお，作付補償等については，別途国鉄の負担において支払われることとなっております。

記

遺跡所在地　　遺跡名

また，調査員はすべての遺跡にわたって委嘱するよりむしろ遺跡単位で人選するほうが望ましいとされたため，岡山県遺跡保護調査団の中から，該当遺跡にたいする関心の度合や，居住地からの距離などを考慮して，まず不老山東口古窯址にかぎって調査員を委嘱することとなった。その後，不老山西口古窯址，高島新

屋敷調査区についても，当初の方針どおり調査員の委嘱をおこなってきたが，昭和44年５月，岡山県は明治百年記念事業として岡山市津島遺跡に武道館建設をはじめた。ところが，この遺跡は文化庁発刊の遺跡台帳にも明記された著名な遺跡であるところから，県教育委員会と県内研究者との間に遺跡の保存と文化財保護行政の姿勢をめぐってはげしい対立が生ずるにいたった。それ以来，対策委員会の開催はとどこおり，研究者側から要望があったにもかかわらず，調査員の委嘱も果さないまま新幹線にかかわる発掘調査は継続された。昭和45年秋，県教育委員会は対策委員会に対し，今後このようなことのないことを約し遺憾の意を表した。

予備調査の実施について

対策委員会を開催するたびに何回となく指摘されたことであったが，沖積地に立地する遺跡の範囲及び構造を一部たりとも把握するためには，少なくとも各地点におけるボーリングがなされなければならない。ところが，昭和42年度上半期においては，用地未買収のため県教育委員会が建設工事とはまったく別個にボーリング調査に入ることはできなかった。そのため，部分的に地権者の了承の下に実施された国鉄によるボーリング・データーの収集と整理にたよらざるをえなかった。しかし，国鉄のボーリング・データーはもともと建設にあたっての基礎杭が安定する層位を求めたもので，一般的に遺物包含層がひろがる地表下１～２ｍの部位についてはかならずしも詳細な資料とはなりえなかった。とはいえ，一例であるが，字名と周辺の自然条件から古代寺院址あるいは館址を想定した備前市大門の大門遺跡については，その付近で採集された国鉄のボーリングの採土の中に，弥生式土器片の混入があることに気付き，遺跡の存在を予想することができた。ボーリング調査の重要性に対する喚起が対策委員会からなかったならば，また国鉄新幹線大阪工事局岡山工事事務所の厚意がなかったなら，こうした基礎的作業もできなかったであろう。しかし残念ながら，全路線にわたる県教委独自のボーリング調査は，ついに実施することができなかった。

さらに，どのように綿密な基礎調査をおこなったとしても，遺跡が工事中に不時発見される場合も当然予想できるところである。したがって工事中の常時パトロールが必要であると，われわれも考え対策委員からも強い指摘があったにもかかわらず，実行にうつすことができなかった。雄町第３調査区，同第４調査区などは，工事施工者による建設工事のための側溝があたかも遺跡発掘のトレンチ調査としての機能を果した結果，確認された遺跡である。この一事例をとっても，工事前及び工事中のパトロール体制は当初から徹底して実施されなければならないことを痛感した。

Ⅱ．発掘調査の問題点

機械力の導入について

ベルトコンベアーおよび水揚げポンプを導入して発掘の進行をはやめることにつとめたが，その使用は排土排水に限定し，遺構を損傷することはなかった。問題は，大門遺跡へのユンボーの導入にあった。大門遺跡については，さしせまった工事工程との関係上，遺跡の範囲をたしかめるためのトレンチ調査にはじめてユンボーを入れざるをえなかった。少数の調査員で期間を短縮させられたため，やむなくこの方法がとられたのであるが，人力によるトレンチ調査と相違して，層位ごとに遺物を観察あるいは採集することも遺構の検出もまったく不可能であった。わずかに土壌の断面観察がなされたにすぎなかった。これを教訓として，今後，ユンボーやブルトーザーを調査に使用することは避けなければならない，と対策委員会で確認された

が，それ以上に十分な調査員と期間をまず確保することが大切であると痛感した。また，雄町遺跡の調査後半になって，広い調査面積と密度の濃い遺構の状態から調査計画と工事工程との調整がとれなくなり，写真撮影や平面測量などを短期間に処理するため，アジア航測株式会社に依頼してバルーン測量をおこなった。気球をあげそれに固定された二台のカメラによって立体的に遺構の撮影をおえ，後に図化機にかけて作図する方法である。雄町第3調査区，同第4調査区の全体図はこうして作成されたものを一部手直ししたものである。この方法は，幾枚もの写真を合整して全体図ができあがるので，なにより測点が重要になる。測点の指示はどうしても調査員自身があたらなければならず，気球うちあげ後あらたな遺構が検出された際，全体図との関連がなかなか容易でない。だから，気球をあげる時機がきわめて大切である。

調査対象地域の決定について

雄町遺跡および大門遺跡ともに，一部未調査区域を残さざるをえなかった点をまず銘記しなければならない。雄町遺跡は，事前交渉の段階で遺跡予想地域として図示していたとはいえ，あくまで予想の域を出なかったため，現実には工事中不時発見によって，範囲は拡大した。工事がすでに発注されたのち，雄町第4調査区が遺跡として確認され，その時点から施工業者も交じえて工程の細部協議に入りやっと発掘調査を割り込ませえたという事情があり，そのうえ雄町第3調査区もあらためて発掘調査の必要があると判断するにいたったところである。第3調査区については，工事工程との関係上また調査の人員的構成や能力的限界から，黒色の包含層をもつ最も遺構密度の高い区域以外は発掘調査できなかった。後日，対策委員からこの点をふくめ調査区及び区間の取り扱いについても質疑が出され，その疑問は県教育委員会としても当然のこととしてうけとめられ，後に触れる側道敷部分の全面調査によって，その空白部分を埋める約束をおこなった。しかし，その約束はついに果すことができず，この点においても対策委員会の信をうらぎることとなった。一方，大門遺跡では，側道敷部分に家屋があり，最終段階で強制収用がなされたため，部分的に遺構のひろがりが予想されたにもかかわらず，まったくの未調査に終った。

軌道敷と側道敷との分離調査について

雄町遺跡においては，工事が発注されたなかでやむなく工事と併行する状態で発掘調査を実施した。いうまでもなく，発掘調査においては工事計画内全体を切断されることなく調査しなければ，連続した遺構を有機的関連の中でどう判断するか困難である。そればかりか，個々の遺構のもつ意味についての認識も不十分になってしまうおそれがある。しかし，発掘の調査区を確保し他の工区での建設を認めようとすれば，どうしても側道の土盛工事が必要となる。そのため第1次の軌道敷調査と第2次の側道敷とに分離した発掘体制を組まざるをえなかった。このことは，上記したように両方の敷地にまたがる遺構の場合，一挙に調査できないことから遺構認識の不十分さを生じた。さらに，側道敷部分では重機械がたえず通過しその重量によって，地表下の遺構面にひずみをおこさせた。これらの点は，対策委員会で指摘された問題点であり，今後改められなければならない事柄である。

関係機関との連絡調整について

まず国鉄との関係から記すならば，工事の初期の段階においては，起工承諾をとりつけて施工業者に発注するという方式がかなり多用されたので，国鉄の担当職員が非常な努力を払われたにもかかわらず，県教育委員会の示す発掘計画との調整がかならずしも十分になされたとはいえない。当然，施工業者は企業として一定の利益を見込んで作業にかかるわけで，埋蔵文化財はまさに障害物件として強く印象づけられたに違い

ない。施主である国鉄および施行業者に対し文化財を大切に保存する展望と決意をはぐくむことができたか否か不安が残る。行政機関として果すべき文化財保護行政の機能を十分に果しえなかったこと，またこの問題について研究者の代表である対策委員会の役割を十分に生かしえなかったことは，反省すべき点である。こうした事態は，いきおい発掘調査にあたった県の調査員に限りないしわよせとして表われ，多忙を極めるなかで本庁との連絡も欠き，意志の疎通がなくなるという状態に陥った。そうした中で，南方蓮田遺跡は新幹線予定路線内であり本来県教育委員会で調査することとなっていたが，岡山市教育委員会の手をわずらわすこととなった。この遺跡については，先にふれたように対策委員会へはかることなく調査を進める事態になったことを反省する。

Ⅲ．発掘調査後の問題点とその他の問題点

遺物の保管について

出土遺物は，発掘調査を実施した関係市町の学校施設等に保管を願っていたが，やがて量的に管理不能の状態に達し，また分散して管理するより一個所に集中した方が望ましいため，岡山県総合グランドのプール施設の収蔵庫へ収容した。その後，約束の借用期限がきれたため岡山県婦人会館へ一括して移動した。ここは，収蔵庫建設の予定候補地の一であったが，狭小であるため一部露天積みを余儀なくされた。ほぼ一年間遅れて岡山県開発公社取得の土地を借りあげ，とりあえずプレハブ2棟をたて遺物等の搬入をおこなった。その間，この遅れは，若干の量について出土地点や層位などを記入したラベルに損傷をきたし，あるいは木製品の水分が蒸発するなど，遺物管理の失態と限界を感じたが，現在のところどうやら維持管理できる見通しがついた。

出土遺物の整理と報告書の作成について

東岡山に建てられたプレハブの収蔵庫において，主として2名の専従調査員が一年間以上の整理期間を与えられ，そこで土器の水洗，復原，分類にあたった。ところが，対策委員に対しては整理期間に入ることを伝えただけで，以後の進行状況などについて何ら連絡することなく終始し，対策委員会を軽視する結果となった。また毎月の作業報告などが対策委員会に示されることなく，県内外の人達に送付される事実なども指摘され，資料の公開や利用，資料管理の公正さなどについて改善すべき点が要求された。加えて，整理だけに専従する者と発掘に追われながらも同時に整理にも当る者，軌道敷を調査した職員と側道敷部分を調査した職員等々，複雑な人間関係が生じ，そのうえ上部機関の意見が一貫しないため，今日みられる種々の禍痕を生んだ。以上のことは報告書作成にまで尾を引いた。原則的には，発掘調査を担当した調査員がその部分を分担することとし，章節の決定とその骨子を作成したが，発掘調査についやした調査員個々のエネルギーをかならずしも均等的に配分できず，全体として不統一のそしりをまぬがれない結果となった。

遺跡の現状保存の原則について

後述するとおり，不老山東口古備前窯址の場合，路線内にかかる窯体および灰原の調査にとどめ，他は現状保存することとなった。雄町遺跡では，第3調査区，第4調査区において，それぞれ16m，25mの橋脚拡幅措置をとって現状保存することとなった。全体の調査面積からすれば，きわめて小範囲に限られているし，県教育委員会としては，生産の場である水田址あるいは水路址，生活の舞台としての住居址，さらに死

後の墓壙群などを一体的に保存したい旨を伝え，国鉄と交渉してきたのであるが，設計変更に用する費用，全体的景観などから上記の線で結論がでたのである。むろんそうした特定の個所だけが重要であるとはいえず，また路線外へのひろがりも十分予想されることはいうまでもない。

船山古墳の処置について

備前市坂根に所在する船山古墳は，前方部を西に向けた長約85mの前方後円墳で，その墳形は後円部に対して前方部の幅がいちじるしくひろがり，その高さも高いという特徴をもつ古墳である。しかし，この古墳は昭和41年～42年の時点で，すでに東側と南側の墳端部を民間土取業者によって削り取られていた。そこに新幹線が，本墳をはなれごく接近した南端を通過することに決定し，その保存策が，対策委員会でもしばしば問題となっていた。そこで，県教育委員会は国鉄に対して，擁壁を造り工事中ならびに開通後においても支障のないよう善処方を要望し，さらに町当局や地権者を含め現地での現状保存協議，あるいは公文書による要望などの措置をとってきたが，地元業者の営業権と対立し法による規制もできないまま今日を迎えることとなった。初期の段階で適切な保存策を講じえなかったことは重大なあやまりで，民間業者による土取は後をたたず，昭和47年の現時点では見るも無残な状態におかれている。

以上のべたように，様々な誤りと失態を重ねてきたが，これを教訓として文化財保護の行政主管課は，一貫して文化財保存の努力をつづけなければならず，今後の誠実な行政努力を誓うものである。

この項をまとめるにあたっては，県従調査員がいくつかの問題点を整理して討議したのち，対策委員会の席上ではかり，委員各位から種々ご意見をたまわった。委員各位は深夜に及ぶまで討議に参加され積極的に意見を提出された。その内容を十分に吸収しえたとは思われないが，これをもって総括にかえたい。

なお，内容を検討した際，小野一臣，春成秀爾，西岡憲一郎氏など昭和46年度以降の新対策委員の諸氏からも有益な教示をうけた。末筆ながら記して謝意を表したい。

目　　次

不老山古備前窯址……1
第1章　調査の経過……3
第2章　遺跡の位置と環境……9
　Ⅰ　地理的景観……9
　Ⅱ　歴史的景観……11
第3章　不老山東口古備前窯址……13
　Ⅰ　窯体の構造……13
　Ⅱ　灰原および外部施設……14
　Ⅲ　出土遺物……16
第4章　不老山西口古備前窯址……18
　Ⅰ　第1号窯の構造……18
　Ⅱ　第2号窯の構造……21
　Ⅲ　出土遺物……23
まとめにかえて……25

船山遺跡……31
はじめに……33
第1章　歴史・地理的環境……33
第2章　遺跡の概要……36
　第1節　調査経過……36
　第2節　遺構……38
　第3節　遺物……41
　第4節　終りにあたって……43

大門遺跡……55
はじめに……57
第1章　歴史・地理的環境……57
第2章　遺跡の概要……59
　第1節　調査経過……59
　第2節　遺構……59
　第3節　終りにあたって……62

雄町遺跡……67
第1章　歴史・地理的環境……69

第2章　発掘調査の経過……71
第3章　遺跡の概要……73
第4章　遺　　構……77
　第1節　第1調査区……77
　第2節　第2調査区……79
　第3節　第3調査区……80
　第4節　第4調査区……84
第5章　遺　　物……109
　第1節　土器，土製品……109
　第2節　石器，石製品……118
　第3節　金属製品……121
　第4節　玉　　類……121
　第5節　木器，木製品……122
　第6節　自然遺物……122
まとめにかえて……124

高島新屋敷調査区……129

不老山古備前窯址

図　目　次

第1図　不老山東口古窯址地形実測図（実測　河本清・葛原克人，　製図　河本）……28
第2図　不老山東口窯体平面，断面図（実測　河本・葛原，　製図　河本・栗野克己・柳瀬昭彦）……挿頁1
第3図　不老山東口灰原縦断，横断面図（実測　河本・葛原，　製図　河本）……挿頁2
第4図　不老山東口遺物実測図　（実測　河本，製図　河本）……29
第5図　不老山西口古窯址地形実測図（実測　河本・葛原，　製図　葛原）……30
第6図　不老山西口1号窯址平面図，縦断，横断面図　（実測　河本，　製図　葛原）……挿頁3
第7図　不老山西口2号窯址平面図，縦断，横断面図　（実測　葛原，　製図　葛原）……挿頁4

図　版　目　次

不老山図版1－1　不老山東口古窯址遠景　（前面より）（撮影　河本）……1
不老山図版1－2　不老山東口古窯址灰原東西断面　（後背部より）（撮影　河本）……1
不老山図版2－1　不老山東口古窯址灰原南北断面南側　（南より）（撮影　河本）……2
不老山図版2－2　不老山東口古窯址，灰原南北断面南側　（東より）（撮影　河本）……2
不老山図版3－1　不老山東口古窯址，灰原南北断面　（東から）（撮影　河本）……3
不老山図版3－2　不老山東口古窯址，ピット1　（東から）（撮影　河本）……3
不老山図版4－1　不老山東口古窯址，溝及び土塁　（南から）（撮影　河本）……4
不老山図版4－2　不老山東口古窯址，溝及び土塁断面Ⅰ　（東から）（撮影　河本）……4
不老山図版4－3　不老山東口古窯址，溝及び土塁断面Ⅱ　（南から）（撮影　河本）……4
不老山図版5－1　不老山東口古窯址，窯体と前庭部　（東から）（撮影　河本）……5
不老山図版5－2　不老山東口古窯址，窯体部　（東から）（撮影　河本）……5
不老山図版6－1　不老山東口古窯址，焼成室　（東から）（撮影　河本）……6
不老山図版6－2　不老山東口古窯址，窯体　（西から）（撮影　河本）……6
不老山図版7－1　不老山東口古窯址，焼成室南窯壁（撮影　河本）……7
不老山図版7－2　不老山東口古窯址，焼成室北窯壁と床面切断面（撮影　河本）……7
不老山図版8－1　不老山西口古窯址遠望　（南から）（撮影　河本）……8
不老山図版8－2　不老山西口第2号窯東側壁　（西から）（撮影　河本）……8
不老山図版9－1　不老山西口第2号窯窯体全景　（南から）（撮影　河本）……9
不老山図版9－2　不老山西口第1号窯窯体全景　（南から）（撮影　河本）……9
不老山図版10－1　不老山西口第1号窯焼成室上部縦断面（東から）（撮影　河本）……10
不老山図版10－2　不老山西口第1号窯焼成室下部縦断面　（東から）（撮影　河本）……10
不老山図版11－1　不老山西口第2号窯焼成室と煙道との接続部（撮影　河本）……11
不老山図版11－2　不老山西口第2号窯西側壁及び天井残存体裏面（撮影　青淵）……11

不老山図版12　不老山東口出土遺物（撮影　河本）……12
不老山図版13—1　不老山西口第2号窯出土擂鉢（撮影　青淵）……13
不老山図版13—2　不老山西口第1号窯出土擂鉢（撮影　青淵）……13

挿図目次

挿図1　不老山東口古窯址周辺図（作成　葛原）……9
挿図2　溝及び土塁断面図（実測　新東晃一・池畑耕一，製図　河本）……16
挿図3　不老山西口遺物実測図（実測　葛原，製図　葛原）……24
挿図4　熱残留磁気測定値（作成　広岡公夫）……27

船山遺跡

図目次

第1図　船山遺跡周辺遺跡分布図（作成 泉本知秀・正岡睦夫）……挿頁5
第2図1　1号住居址平面，断面図（実測　正岡・泉本・新東，製図　泉本）……46
第2図2　2号住居址平面，断面図（実測　正岡・泉本・新東，製図　泉本）……46
第3図　3号住居址平面，断面図（実測　泉本，製図　泉本）……47
第4図1　4号住居址平面，断面図（実測　正岡・泉本・新東，製図　泉本）……48
第4図2　4号住居址内土壙平面，断面図（実測　正岡，製図　泉本）……48
第5図1　4号住居址内土壙出土土器実測図（実測　正岡，製図　泉本）……49
第5図2　舟形土壙1平面，断面図（実測　正岡，製図　泉本）……49
第6図1　舟形土壙3平面，断面図（実測　泉本，製図　泉本）……50
第6図2　土壙1平面，断面図（実測　正岡，製図　泉本）……50
第7図1　土壙2平面，断面図（実測　泉本，製図　泉本）……51
第7図2　土壙15平面，断面図（実測　正岡，製図　泉本）……51
第8図1　土壙16，溝状凹み平面，断面図（実測　泉本，製図　泉本）……52
第8図2　溝2横断面図（実測　正岡，製図　泉本）……52
第9図　船山遺跡遺構全体図（実測　正岡・泉本・新東，製図　泉本）……挿頁6
第10図　船山遺跡出土土器実測図（実測　泉本，製図　泉本）……53
第11図　船山遺跡出土土器拓影（拓影 泉本・樋口）……54

図版目次

船山図版1—1　船山遺跡（北西より）（撮影　正岡）……14
船山図版1—2　1号住居址（北より）（撮影　正岡）……14
船山図版2—1　2号住居址（北より）（撮影　泉本）……15

船山図版２－２　４号住居址（北より）（撮影　泉本）……15
船山図版３－１　舟形土壙１（西より）（撮影　正岡）……16
船山図版３－２　土壙１（南より）（撮影　正岡）……16
船山図版４－１　土壙16（北より）（撮影　泉本）……17
船山図版４－２　溝２断面（南より）（撮影　正岡）……17
船山図版５　土器，石器（撮影　泉本）……18
船山図版６　土　器（撮影　泉本・仁木）……19

挿図目次

挿図１　船山遺跡付近地形図（作成　泉本）……35
挿図２　層位図（作成　泉本）……38

表目次

表（１）　香登・長船平野の主要前期古墳……34
表（２）　遺跡分布図対照表……34
表（３）　船山遺跡発見遺構一覧表……挿頁６
表（４）　第10図対照表……挿頁６
表（５）　第11図の拓影対照表……挿頁６

大門遺跡

図目次

第１図１　古墳時代前期溝横断面図（実測　泉本，製図　泉本）……63
第１図２　暗渠平面，断面図（実測　泉本，製図　泉本）……63
第２図　窯槨塚平面図（実測　泉本，製図　泉本）……64
第３図　大門遺跡遺構全体図（実測　泉本，製図　泉本）……挿頁７
第４図　築地状遺構横断面図（実測　泉本，製図　泉本）……65

図版目次

大門図版１－１　大門，鶴山丸山古墳を望む（北西より）（撮影　泉本）……20
大門図版１－２　古墳時代前期溝断面（撮影　泉本）……20
大門図版２－１　窯槨塚主体部（東より）（撮影　泉本）……21
大門図版２－２　築地状遺構（北東より）（撮影　泉本）……21
大門図版３－１　築地状遺構に伴う暗渠（北東より）（撮影　泉本）……22
大門図版３－２　石散布状況（北東より）（撮影　泉本）……22

大門図版４－１　条里制溝（撮影　泉本）……23
大門図版４－２，３　出土遺物（撮影　泉本）……23

挿　図　目　次

挿図１　香登平野における条里制……58
挿図２　層 位 図（作成　泉本）……60

雄　町　遺　跡

図　目　次

第 1 図　雄町周辺の古地形（作成　高橋・正岡，製図　正岡）……1
第２図１　第１調査区Ｂ区東西土層断面図（実測　正岡，製図　正岡）……2
第２図２　第２調査区南北土層断面図（実測　正岡，製図　正岡）……2
第３図１　第２調査区東西土層断面図（実測　正岡，製図　樋口）……3
第３図２　第２調査区南北土層断面図（実測　正岡，製図　正岡）……3
第３図３　第４調査区南北土層断面図（実測　泉本，製図　樋口）……3
第 4 図　第１調査区Ｂ区平面図（実測　正岡，製図　正岡）……挿頁８
第 5 図　第１調査区１，２号住居址（実測　中力昭・葛原・正岡・伊藤晃，製図　正岡）……挿頁９
第６図１　第１調査区土壙３実測図（実測　葛原，製図　正岡）……4
第６図２　第１調査区土壙４実測図（実測　葛原，製図　樋口）……4
第６図３　第１調査区土壙７，８実測図（実測　葛原，製図　正岡）……4
第７図１　第１調査区土壙９実測図（実測　正岡，製図　正岡）……5
第７図２　第１調査区土壙10実測図（実測　正岡，製図　正岡）……5
第８図１　第１調査区土壙13実測図（実測　正岡，製図　樋口）……6
第８図２　溝１断面図（実測　正岡，製図　正岡）……6
第８図３　溝２断面図（実測　正岡，製図　正岡）……6
第９図１　第１調査区甕棺出土状況実測図（実測　葛原，製図　正岡）……7
第９図２　第１調査区甕棺実測図（実測　葛原，製図　正岡）……7
第 10 図　第３調査区，同東トレンチ平面図……
……（実測　中力，正岡，伊藤，井上，新東，アジア航測，製図　正岡）……挿頁10
第 11 図　第３調査区１号住居址実測図（実測　正岡，製図　正岡）……挿頁11
第 12 図　第３調査区２号住居址実測図（保存未調査）（実測　正岡，製図　正岡）……8
第 13 図　第３調査区３号住居址（実測　正岡・新東，製図　正岡）……挿頁12
第 14 図　第３調査区４号住居址実測図（実測　正岡・新東，製図　正岡）……9
第 15 図　第３調査区５号住居址実測図（実測　伊藤，製図　伊藤）……挿頁13

第 16 図　第 3 調査区 6 号住居址実測図　(実測　中力・伊藤，製図　樋口)……挿頁14
第 17 図　第 3 調査区 7 号住居址実測図　(実測　中力・正岡，製図　正岡)……10
第 18 図　第 3 調査区 8 号住居址実測図　(実測　正岡・井上，製図　正岡)……挿頁15
第 19 図　第 3 調査区 9 号住居址実測図　(実測　正岡，製図　正岡)……11
第20図 1　第 3 調査区長方形土壙 1 実測図 (実測　正岡・福田正則，製図　樋口)……12
第20図 2　第 3 調査区長方形土壙 2 実測図　(実測　正岡，製図　樋口)……12
第21図 1　第 3 調査区土壙 6 実測図　(実測　正岡，製図　正岡)……13
第21図 2　第 3 調査区土壙 7 実測図　(実測　正岡，製図　正岡)……13
第22図 1　第 3 調査区土壙14実測図　(実測　正岡，製図　正岡)……14
第22図 2　第 3 調査区土壙15実測図　(実測　高橋護，製図　正岡)……14
第 23 図　第 3 調査区土壙16実測図　(実測　正岡，製図　正岡)……15
第 24 図　第 3 調査区土壙17，18実測図　(実測　正岡，製図　正岡)……16
第 25 図　1 第 3 調査区土壙22実測図　(実測　正岡，製図　正岡)……17
第25図 2　第 3 調査区土壙25実測図　(実測　正岡・井上，製図　正岡)……17
第25図 3　第 3 調査区土壙28実測図　(実測　中力，製図　樋口)……17
第26図 1　第 3 調査区土壙26実測図　(実測　中力，製図　正岡)……18
第26図 2　第 3 調査区土壙27実測図　(実測　中力，製図　正岡)……18
第27図 1　第 3 調査区土壙31実測図　(実測　正岡，製図　正岡)……19
第27図 2　溝 1 断面図19第27図 3 溝 2 断面図　(実測　福田，製図　樋口)……19
第 28 図　第 4 調査区 1 号住居址実測図　(実測　正岡，製図　樋口)……20
第 29 図　第 4 調査区 2 号住居址実測図　(実測　葛原，製図　正岡)……挿頁16
第 30 図　第 4 調査区 4 号住居址実測図 (実測　泉本，製図　正岡)……21
第 31 図　第 4 調査区 5 号住居址実測図　(実測　栗野・泉本，製図　正岡)……22
第 32 図　第 4 調査区 6 号住居址実測図　(実測　枝川陽・正岡，製図　正岡)……23
第 33 図　第 4 調査区 7 号住居址実測図　(実測　泉本，製図　正岡)……24
第 34 図　第 4 調査区 8 号住居址実測図　(実測　栗野・泉本，製図　正岡)……25
第 35 図　第 4 調査区 9 号住居址実測図　(実測　泉本，製図　正岡)……26
第 36 図　第 4 調査区10号住居址実測図　(実測　中力，製図　樋口)……27
第37図 1　第 4 調査区11号住居址実測図　(実測　中力，製図　樋口)……28
第37図 2　第 4 調査区12号住居址実測図　(実測　中力，製図　樋口)……28
第 38 図　第 4 調査区井戸実測図　(実測　中力，製図　樋口)……29
第 39 図　土壙墓A群，D群，E群，F群　(実測　葛原，製図　葛原)……30
第 40 図　土壙墓C群，J群　(実測　泉本，製図　泉本)……31
第 41 図　土壙墓G群，O群　(実測　伊藤・泉本，製図　葛原・泉本)……32
第 42 図　土壙墓K群，N群　(実測　葛原，製図　葛原)……33
第 43 図　土壙墓B群，L群，M群　(実測　泉本，製図　泉本)……34

第 44 図　土壙墓Ⅱ群，Ⅰ群（実測　正岡・葛原，製図　葛原）……35
第 45 図　土壙墓101号墓，102号墓（実測　葛原，製図　葛原）……36
第 46 図　土壙墓 106 号墓（実測　高橋，製図　葛原）……37
第 47 図　土壙墓125号木棺墓（実測　泉本，製図　泉本）……38
第 48 図　第 4 調査区107号墓（実測　正岡，製図　正岡）……39
第 49 図　第 4 調査区壺棺129号墓（実測　葛原，製図　葛原）……40
第 50 図　第 4 調査区溝12平面図（実測　葛原，製図　葛原）……41
第 51 図　第 4 調査区溝14平面図（実測　葛原，製図　葛原）……42
第52図 1　第 4 調査区溝12断面図（実測　葛原，製図　樋口）……挿頁17
第52図 2　第 4 調査区溝12断面図（実測　葛原，製図　樋口）……挿頁17
第52図 3　第 4 調査区溝12～14断面実測図（実測　池畑，山磨康平，製図　樋口）……挿頁17
第53図 1　第 4 調査区溝14断面図（実測　葛原，製図　樋口）……挿頁18
第53図 2　第 4 調査区溝12～13断面図（実測　泉本，製図　樋口）……挿頁18
第53図 3　第 4 調査区溝17断面図（実測　正岡，製図　樋口）……挿頁18
第 54 図　第 4 調査区溝28～33断面図（実測　河本・正岡・泉本，製図　葛原）……挿頁16
第 55 図　縄文式土器拓影（拓影　正岡・樋口）……43
第 56 図　土器実測図（雄町 2 類～ 3 類）（実測　正岡，製図　正岡）……44
第 57 図　土器実測図（船山 5 類・弧池・雄町 4，雄町 5 類）（実測　正岡，製図　正岡）……45
第 58 図　土器実測図（雄町 5 類～ 6 類）（実測　正岡，製図　正岡）……46
第 59 図　土器実測図（雄町 5 類～ 6 類）（実測　正岡，製図　正岡）……47
第 60 図　土器実測図（雄町 5 類～ 7 類）（実測　正岡，製図　正岡）……48
第 61 図　土器実測図（雄町 7 類）（実測　正岡，製図　正岡）……49
第 62 図　土器実測図（雄町 7 類～10類）（実測　正岡，製図　正岡）……50
第 63 図　土器実測図（雄町10類～12類）（実測　正岡，製図　正岡）……51
第 64 図　土器実測図（雄町11類～14類）（実測　正岡，製図　正岡）……52
第 65 図　土器実測図（雄町13類～15類）（実測　正岡，製図　正岡）……53
第 66 図　土器文様（弥生前期，中期）（拓影　樋口）……54
第 67 図　土器文様（弥生中期）（拓影　樋口）……55
第 68 図　土器文様（弥生中期）（拓影　樋口）……56
第 69 図　土器文様（弥生後期）（拓影　樋口）……57
第70図 1　土器文様（弥生後期，土師器）（拓影　樋口）……58
第70図 2　須恵器，緑釉，灰釉実測図（実測　伊藤・井上・山磨，製図　伊藤）……58
第 71 図　分銅形土製品拓影（拓影　正岡）……59
第 72 図　土錘実測図（実測　正岡，製図　正岡）……60
第 73 図　石錘実測図（実測　正岡，製図　正岡）……61
第 74 図　石庖丁・石槍・磨製石斧・扁平片刃石斧実測図（実測　栗野，製図　栗野）……62

第 75 図　打製石斧・太型蛤刃石斧・石鏃実測図（実測　栗野，製図　栗野）……63
第 76 図　叩石実測図（実測　栗野，製図　栗野）……64
第 77 図　砥石実測図（実測　栗野，製図　栗野）……65
第78図 1　紡錘車実測図（実測　正岡，製図　正岡）……66
第78図 2　鉄器実測図（実測　正岡，製図　正岡）……66
第79図 1　玉類実測図（実測　正岡，製図　樋口）……67
第79図 2　火きり臼実測図（実測　正岡，製図　正岡）……67

図 版 目 次

雄町図版 1 — 1　第 1 調査区発掘前（東より）（撮影　河本）……24
雄町図版 1 — 2　第 1 調査区 1 号住居址（南より）（撮影　葛原）……24
雄町図版 2 — 1　1 号住居址（南より）（撮影　葛原）……25
雄町図版 2 — 2　2 号住居址（南より）（撮影　葛原）……25
雄町図版 3 — 1　甕　棺（北より）（撮影　葛原）……26
雄町図版 3 — 2　甕　棺（西より）（撮影　葛原）……26
雄町図版 4 — 1　土 壙 3（撮影　葛原）……27
雄町図版 4 — 2　土 壙 8（撮影　葛原）……27
雄町図版 5 — 1　第 2 調査区土層断面（東より）（撮影　正岡）……28
雄町図版 5 — 2　遺物包含層（撮影　河本）……28
雄町図版 6 — 1　石　敷（南西より）（撮影　正岡）……29
雄町図版 6 — 2　井　戸（西より）（撮影　正岡）……29
雄町図版 7 — 1　第 3 調査区 1 号住居址（北より）（撮影　正岡）……30
雄町図版 7 — 2　2 号住居址（南より）（撮影　正岡）……30
雄町図版 8 — 1　3 号住居址（東より）（撮影　正岡）……31
雄町図版 8 — 2　3 号住居址（南より）（撮影　正岡）……31
雄町図版 9 — 1　4 号住居址（南東より）（撮影　正岡）……32
雄町図版 9 — 2　6 号住居址（西より）（撮影　中力）……32
雄町図版10— 1　5 号住居址遺物出土状況（南より）（撮影　中力）……33
雄町図版11— 1　7 号住居址（南より）（撮影　中力）……34
雄町図版11— 2　7 号住居址（南より）（撮影　中力）……34
雄町図版12— 1　8 号住居址（南より）（撮影　中力）……35
雄町図版12— 2　9 号住居址（南より）（撮影　中力）……35
雄町図版13— 1　10号住居址（撮影　アジア航測）……36
雄町図版13— 2　1 号住居址周辺（撮影　正岡）……36
雄町図版14— 1　1 号住居址敷石（撮影　正岡）……37
雄町図版14— 2　5 号住居址遺物出土状況（撮影　中力）……37

雄町図版14—3　5号住居址遺物出土状況（撮影　中力）……37
雄町図版14—4　7号住居址礎板（撮影　中力）……37
雄町図版14—5　7号住居址礎板（撮影　中力）……37
雄町図版14—6　8号住居址側板（撮影　中力）……37
雄町図版15—1　長方形土壙1（撮影　正岡）……38
雄町図版15—2　長方形土壙2（撮影　中力）……38
雄町図版16—1　土壙7（撮影　正岡）……39
雄町図版16—2　土壙15（撮影　高橋）……39
雄町図版16—3　土壙18（撮影　正岡）……39
雄町図版16—4　土壙19と溝2（撮影　正岡）……39
雄町図版16—5　土壙22（撮影　正岡）……39
雄町図版16—6　土壙26，27（撮影　中力）……39
雄町図版17—1　第4調査区軌道敷全景（東より）（撮影　葛原）……40
雄町図版17—2　第4調査区側道敷住居址群（東より）（撮影　中力）……40
雄町図版18—1　1号住居址（南より）（撮影　葛原）……41
雄町図版18—2　5号住居址（北より）（撮影　河本）……41
雄町図版19—1　8号住居址（東より）（撮影　河本）……42
雄町図版19—2　6，7，8号住居址（北より）（撮影　河本）……42
雄町図版20—1　9，10号住居址（南より）（撮影　中力）……43
雄町図版20—2　建物2，柵列2（南より）（撮影　中力）……43
雄町図版21—1　建物1（北より）（撮影　葛原）……44
雄町図版21—2　建物1，柱穴5断面（南より）（撮影　葛原）……44
雄町図版22—1　柵列1（東より）（撮影　正岡）……45
雄町図版22—2　条里制遺構部分（東より）（撮影　河本）……45
雄町図版23—1　井戸1（西より）（撮影　葛原）……46
雄町図版23—2　井戸3（西南より）（撮影　葛原）……46
雄町図版24—1　井戸4断面（南より）（撮影　葛原）……47
雄町図版24—2　井戸4底面の土器（撮影　葛原）……47
雄町図版24—3　井戸4竪櫛出土状況（撮影　葛原）……47
雄町図版25—1　土壙墓C群（西南より）（撮影　中力）……48
雄町図版25—2　土壙墓E，F（東より）（撮影　葛原）……48
雄町図版26—1　土壙墓H群（東より）（撮影　井上）……49
雄町図版26—2　土壙墓I群（西より）（撮影　葛原）……49
雄町図版27—1　土壙墓J群（北より）（撮影　葛原）……50
雄町図版27—2　土壙墓M群（南より）（撮影　葛原）……50
雄町図版28—1　229号墓壺棺墓（撮影　葛原）……51

雄町図版28—2　土壙墓L—2号石鏃（撮影　泉本）……51
雄町図版28—3　107号壺棺墓（撮影　正岡）……51
雄町図版29—1　土壙墓群H—1号（東より）（撮影　井上）……52
雄町図版29—2　101号土壙墓（東より）（撮影　葛原）……52
雄町図版30—1　106号木棺墓（東北より）（撮影　高橋）……53
雄町図版30—2　125号木棺墓（西より）（撮影　泉本）……53
雄町図版31—1　溝　14（北西より）（撮影　葛原）……54
雄町図版31—2　溝14，井堰（南より）（撮影　葛原）……54
雄町図版32—1　溝　12（南より）（撮影　葛原）……55
雄町図版32—2　溝12，溝14（東より）（撮影　中力）……55
雄町図版33—1　溝18～溝23（南より）（撮影　中力）……56
雄町図版33—2　溝28～溝33（北より）（撮影　河本）……56
雄町図版34　弥生式土器（前期，中期）（撮影　青淵均）……57
雄町図版35　弥生式土器（中期）（撮影　青淵）……58
雄町図版36　弥生式土器（中期，後期）（撮影　青淵）……59
雄町図版37　弥生式土器（後期）（撮影　青淵）……60
雄町図版38　弥生式土器（後期）（撮影　青淵）……61
雄町図版39　弥生式土器（後期）（撮影　青淵）……62
雄町図版40　弥生式土器（後期）（撮影　青淵）……63
雄町図版41　土師器（撮影　青淵）……64
雄町図版42　土師器（撮影　青淵）……65
雄町図版43　須恵器（撮影　青淵）……66
雄町図版44—1　分銅形土製品（撮影　青淵）……67
雄町図版44—2　紡錘車（撮影　青淵）……67
雄町図版45—1　土　錘（撮影　青淵）……68
雄町図版45—2　石　錘（撮影　青淵）……68
雄町図版46—1　土壙墓群L—3号出土石鏃（撮影　青淵）……69
雄町図版46—2　砥石，その他（撮影　青淵）……69
雄町図版47—1　鉄製品（撮影　青淵）……70
雄町図版47—2　玉　類（撮影　青淵）……70
雄町図版47—3　鏡　片（撮影　青淵）……70
雄町図版48—1　櫛（撮影　青淵）……71
雄町図版48—2　火きり臼（撮影　青淵）……71
雄町図版49　木製品（撮影　青淵）……72
雄町図版50　土製品（撮影　青淵）……73

挿 図 目 次

挿図1　雄町遺跡周辺地形図……70
挿図2　第2調査区平面図（実測　正岡，製図　正岡）……74
挿図3　第1調査区A地区平面図（実測　正岡，製図　樋口）……77
挿図4　第2調査区井戸実測図（実測　正岡，製図　正岡）……79
挿図6　第4調査区建物平面実測図（実測　正岡，製図　正岡）……88
挿図7　第4調査区建物柱穴断面図（実測　葛原・泉本，製図　葛原）……89
挿図8　112，121号墓実測図（実測　葛原，製図　葛原）……98
挿図9　113号墓実測図（実測　正岡，製図　葛原）……98
挿図10　溝2断面図……108
挿図11　土器に描かれた絵画（拓影　正岡）……113
挿図12　鏡片断面図（実測　正岡，製図　正岡）……121

表　目　次

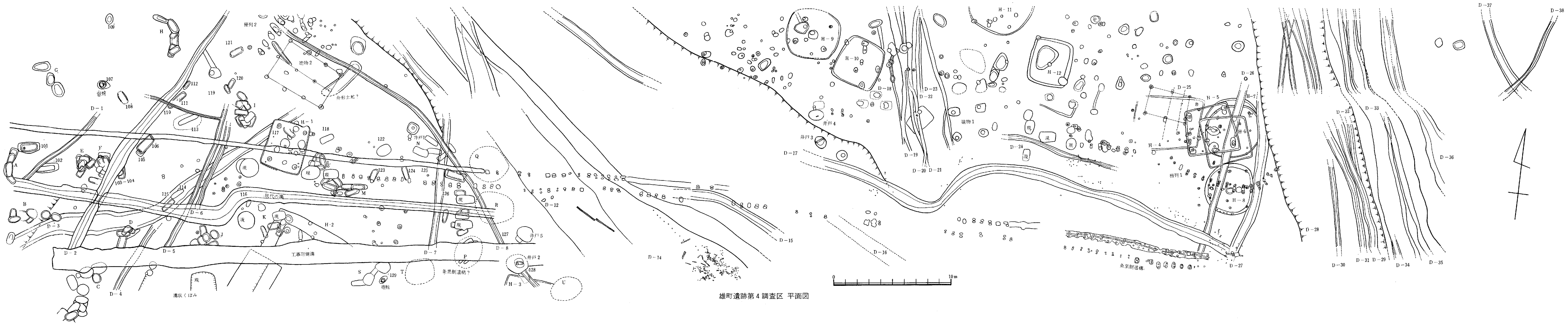
表(1)　第1調査区住居址一覧表……78
表(2)　第1調査区土壙一覧表……78
表(3)　第3調査区住居址一覧表……82
表(4)　第3調査区土壙一覧表……83
表(5)　第4調査区住居址一覧表……86
表(6)　埋葬遺構一覧表……99
表(7)　溝および水路一覧表……107
表(8)　備前西南部弥生・土師器編年表……110
表(9)　分銅形土製品分類表……115
表(10)　紡錘車一覧表……116
表(11)　石錘一覧表……117
表(12)　土錘一覧表……117
表(13)　雄町遺跡出土石器一覧表……119
表(14)　石器計測表……120
表(15)　玉類一覧表……121
表(16)　種子一覧表……122
表(17)　種子一覧表……123

高島新屋敷調査区

挿 図 目 次

挿図1　土層断面図（実測　河本・葛原，製図　葛原）……131
挿図2　高島新屋敷平面図（実測　河本・葛原，製図　葛原）……132

不老山古備前窯址



雄町遺跡第４調査区 平面図

第1章　調　査　の　経　過

不老山東口古備前窯址は，岡山県備前町伊部下り松に所在し，同西口古備前窯址は同町伊部上田に位置する窯址で，山陽新幹線の建設に伴う発掘調査の対象となったものである。まず，不老山東口における調査の経緯を概括的に記すこととする。（当時の備前町は現在備前市となっている）

不老山東口窯址の発掘調査は昭和42年12月16日にはじまり昭和43年8月12日に終了した。延総日数239日間におよぶ長期間，まさに備前焼き擂鉢と苦闘した発掘調査であった。

発掘調査実施に先だって，山陽新幹線建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会（以下対策委員会という）を開催し，上記調査開始日からの調査について承諾をえるとともに，不老山東口窯址発掘調査員（以下調査員という）の推薦を岡山県遺跡保護調査団へ依頼し，県内研究者の参加を求めた。

発掘調査は，山陽新幹線建設用地内とはいえ，用地未買収の時期であったので，発掘調査の承諾を県教育委員会ならびに町教育委員会とが，地権者との直接折衝の上で進めなくてはならないという矛盾を含みながら開始したのである。だから，調査当初において，さまざまな点において問題が生じた。例えば，地形測量の段階では立木一本たりとも切れない状態であった。また立木伐採の承諾をとりつけても補償費の問題，その処理の問題等々である。

こういったことは，発掘調査作業そのものも遅延させるばかりでなく，現地調査員に大きな負担を与えずにはおかなかった。発掘調査は，用地内全域に，4×4mのグリッドを設定し，グリッド発掘による調査方法をとった。このグリッドは崖上と崖下に大別し，崖上グリッドは斜面下方東南部を始点として，1～37番を，崖下には01～031番を付した。

灰原発掘においてはグリッドごとに掘り下げ，出土陶片のすべてを採集した。リンゴ箱1,000個に近い出土物のほとんどはこの灰原から採集したものである。われわれが，灰原出土のすべてを採集する方法をとったのは，決して学術的な問題意識をもって取りくんだ発掘でなく，開発に伴う調査である場合，再び発掘が行なわれることはないので，限定的な地域内において完璧を期したいと考えたからに他ならない。しかし同時に灰原そのもののもつ意味から，窯業生産において考えなくてはならない操業の時期と量および破損率などの問題を，追求するてがかりをつかむことができないかとも考えたからである。灰原は最終段階において，窯体内主軸及びこれに直交する幅各50cmの畦畔を残して，用地内のすべてを発掘した。また，これら畦畔の取り払いにおいては，層序ごとに遺物をとり上げた。

窯体の調査は対策委員会から「行政調査においてはケースバイケースもあるが，今回は破壊される部分のみの調査に限定すべきである。」との強い指摘があり，この指摘を受けて用地内にかぎっての発掘調査を実施した。このため後日学術調査が行なわれる場合を考慮し，発掘調査部分と現状保存部分とが結合できるように，三本のセメント柱を用地外の主軸線上に埋め込んだ。

以上，本調査における経過を簡単に要約した。終りに対策委員，調査員の諸先生，前備前町公民館長日幡光顕氏には，調査中において種々のご教示とご協力をいただいた，記して謝意を表したい。　（河本）

ついで，不老山西口古備前窯址の発掘調査を日誌にもとづき書きとどめておこう。

発　掘　調　査　日　誌

昭和43年10月17日（木）　晴れ

- 本庁事務，測量機械，発掘調査の道具類，文具類等を点検し，すでに一部送付した物品を確認する。作業員名簿を作成する。

同　　年10月18日（金）　晴れ

- 発掘調査開始，午前10時より関係者があいよって調査区域を決定する。立合者―土地所有者品川耐火煉瓦工場代表責任者，国鉄用地課員，県教委社会教育課課長補佐ならびに河本，葛原両主事。午後より立木の伐採。午後6時以降，岡山市栄町「美松」において，山陽新幹線埋蔵文化財保護対策委員会開催。出席者―岡山理科大学教授鎌木義昌，岡山大学助教授近藤義郎，甲浦郵便局長三杉兼行の各委員，桐野文化係係長，河本，葛原両主事。特に今回の議題としては，不老山西口古窯址の発掘調査について，県側からその経緯と具体的な調査範囲などが示されたのち，各委員から土地買収の進展についての質問が出され，遺構等の取り扱いに関しては発掘の進行をみて，他日を期すこととなった。

同　　年10月19日（土）　晴れ

- 路線内外をはっきり画すため縄張り作業を行なう。そのための杭打ち及び伐採作業継続。

同　　年10月21日（月）　曇り

- 立木伐採。
- 午後より国鉄，品川煉瓦会社とともに用地外5m部分の借り上げについて話す。

同　　年10月22日（火）　曇り

- 立木伐採。
- 地形の平板測量開始。コンターラインを入れる。

同　　年10月23日（水）　曇り時々雨

- 立木伐採。
- 平板測量。

同　　年10月24日（木）　曇りのち晴れ

- 立木伐採。
- 不老山東口の土器片多数が同地小字下り松の吉田氏宅および不老山隧道付近に置いてあったが，工事に着手したので他へ運ぶ必要を生じた。吉田定久氏の車で備前中学校旧校舎へ運搬，約240袋。

同　　年10月25日（金）　雨のち晴れ

- 地形の平板測量続行。午後から強風のため困難をきわめ中断。

同　　年10月26日（土）　晴れ

- 平板測量図の修正。

同　　年10月28日（月）　晴れ

- 測量は墓地より東の部分に入る。
- 立木伐採の整理。

昭和43年10月29日（火）　晴れ一時曇り

- 浅野氏所有の土地（建設用地外，南へ約２ｍの段状下）にテント補助ひもを結ぶための杭１本を打ちこんだことから問題が生じた。土地買収が終了していない時点であるだけに，地権者浅野氏との間では解決がつかず，町教委を合わせ三者で話す予定をたて，一時発掘作業を中断せざるをえなくなった。一本の杭が大問題の発端になった，気をつけたい問題である。
- 同夜，直ちに同地山陽新幹線対策委員長安藤氏，小字部落長矢部氏，部落区長若林氏，同副区長山本氏等を訪れて処置の仕方を相談する。我々の配慮のたりなかったことを強く反省する。

同　　年10月30日（水）

- 前日の話に基づき，区長に対しては正式文書をもって次のような依頼を出すこととなった。

社　会　教　育　課　長　名

① 道路用辺の立ち入りおよび発掘期間中，器材等の物品が通行に支障ないようにする。

② その期間は11月いっぱいまでとする。

③ 路幅を狭めないよう配慮し，土置き場周辺に物品を置く。

- 庁内での事務手続きが完了し，さっそく文書を届ける。他方，山陽新幹線備前町伊部工事事務所において，浅野氏，地教委，県教委とで話をつめたが，浅野氏の希望がどの辺にあるのか不明で，明日に持ち越すこととなった。

同　　年10月31日（木）　晴れ

- 安藤氏宅を訪問し，さらに善後策をねる。対策委員長（安藤），町教委（延里課長），町企画室（佐藤），県教委（河本，葛原），地権者（浅野）。　　—敬称略—

結局，県が浅野氏に対して頭を下げるという形で決着がつく。その間，文化財調査は山陽新幹線工事とは一応別途の事業であり，したがって用地買収の価格を左右することなどありえない。この点は了解事項としてもちかえることができた。

同　　年11月１日（金）　快晴

- 実測継続。
- コンターライン４本を入れ，機械高の点検を行なう。

同　　年11月２日（土）

- 午前中，県庁で事件が一応落着したことを報告したのち，浅野材木店に立ち寄り必要な板等を注文。
- 午後，測量開始。

同　　年11月４日（月）　晴れ

- 西窯（後にいう２号窯）の断面の清掃。崖状を呈し，下部は削られ消滅。
- テントを上に移動。
- 全景写真を写す。
- 材木の運搬。タルキ50本，板49枚。

同　　年11月５日（火）　曇時々雨

- 東側グリット発掘。
- 東窯（後にいう１号窯）の発掘。
- 杭打ち。

昭和43年11月6日（水） 晴れ，風強し

- 2号窯の表土はがし開始。

同　年11月7日（木） 晴れ好天

- 2号窯の表土はがし続行。
- 1号窯の表土はがし開始。2号窯の上面を露呈する。

同　年11月8日（金） 晴れ

- 排土作業，ベルコン運搬，情況変化なし。

同　年11月9日（土） 晴れ

- 社会教育課課長補佐が，備前地区山陽新幹線対策委員長宅及び問題の地権者宅へ参り最終的な落着をみた。
- 1号窯，2号窯とも排土作業継続。

同　年11月10日（日） 晴れ

- 1号窯排土作業。
- 2号窯，天井部とおもわれる焼土塊を掘りとる。すでに床面に近づく。幅に長短。

同　年11月11日（月） 曇り

- 1号窯，ベルコン整備後下半部の排土を完了し，一部窯の床面をさぐる。
- 2号窯，煙道を除く窯体の排土作業はほぼ終了。側壁に列石がみられる。

同　年11月12日（火）

- 1号窯，窯体の上半部にかかり，煙道部の西よりにへんなクセを発見。
- 2号窯，窯体の残存長がほぼ明らかとなり，側壁は石組みであることが判明。

同　年11月13日（水） 晴れ

- 午前中，本庁にて事務手続きをとる。①対策委員会開催の通知。②熱残留磁気の測定依頼。
- 午後から課長と共に現場へ行き継続作業，結果，2本の窯の全貌がみえはじめる。

同　年11月14日（木） 晴れ

- 1号窯，窯体内の上部よりを清掃。
- 2号窯，窯体外の周辺部排土作業に入る。

同　年11月15日（金） 晴れ

- 1号窯，中央から下半の床面を検出。
- 2号窯，地山の加工と共に側壁の根石面が地山加工線上にあることに気づく。

同　年11月16日（土） 晴れ

- 現地にて山陽新幹線埋蔵文化財保護対策委員会開催。出席者は，鎌木，渡辺，和島の3委員及び河本，葛原両主事。議題としては，「2号窯の用地外へのびる部分についてどう対処するか」が用意され，状況報告後，大要次のような結論となった。発掘調査区は，先の対策委員会の結論に基づき，用地内に限定しているが，踏み荒しのため用地外北側5mまで借地し立木の伐採をおこなっている。問題の第2号窯はほとんど用地内にあるが，煙道の一部が若干北へ伸びそうである。そうであっても，地形等から判断して踏み荒しの範囲，北5mの線内にとどまろうから，このさい全掘すべきであるという結論に達した。（不老山東口で討議されたケースバイケースによる）

昭和43年11月17日（日） 晴れ

- 1号窯精査。
- 2号窯，用地外煙道部を掘り始める。

（池葉須藤樹，岡本明郎，小野一臣，出宮徳尚，ら各氏来訪）

同　年11月18日（月） 晴れ

- 1号窯内部継続。
- 2号窯煙道部，特に山端の土量が多いため困難をきわめる。

同　年11月19日（火） 晴れ

- 1号窯継続。
- 2号窯煙道部の周辺はかなり大幅に拡げる。排土量は窯体部をうわまわる。

同　年11月20日（水） 晴れ

- 2号窯は上部に集中して作業継続。

同　年11月21日（木） 晴れ

- 昨日のとおり第2号窯煙道部およびその周辺に集中して作業する。

同　年11月22日（金） 晴れ

- 1号窯精査ほぼ完了する。
- 2号窯煙道部周辺は掘り取り作業および排土作業が終了したが，煙道先端部の構造のみ若干追求の余地あり。

同　年11月23日（土） 晴れ

- 1号窯実測のための割りつけ開始。
- 2号窯煙道部の追求も完了し，特に上部はロック（岩盤）まで露出させた。その結果，ロック自体が火を被り，ロックもまた煙道の一部を構成していたことが明らかになった。したがって，煙道が別に筒状のものとして造られたとは考えられない。
- 写真のためのやぐらを作る。

（池葉須，小野一臣両氏および玉島高校生6名来訪）

同　年11月24日（日） 晴れ

- 1号窯割りつけ続行。
- 2号窯精査清掃割りつけ準備。

同　年11月25日（月） 晴れ

- 1号窯平面実測面。
- 2号窯割りつけ完了。

同　年11月26日（火） 曇りのち晴れ

- 熱残留磁気測定（2号窯）。
- 1号窯プラン作成に入る。

同　年11月27日（水） 曇りのち雨

- 熱残留磁気測定（1号窯と不老山東口古窯）
- 1号窯プラン。

（午後3時より雨のため実測作業等不能）

昭和43年11月28日（木）

∘ 1 号窯断面図。

同　　年11月29日（金）

∘ 1 号窯平面図完了。2 号窯も平面図完了。

∘ 1 号～2 号窯の中間地点にある穴を実測。

同　　年11月30日（土）　曇り

∘ 1 号窯断面図。

同　　年12月 1 日（日）　晴れ

∘ 1 号窯の東測にトレンチ設定，窯体外の施設の有無，他の窯の存在などを点検。

同　　年12月 2 日（月）　晴れ

∘ セクション（N，S）

同　　年12月 3 日（火）　晴れ

∘ 1 号窯横断セクション（A～B）

∘ 2 号窯長軸セクション，側壁（東壁）の割りつけ。

同　　年12月 4 日（水）　晴れ

∘ 1 号窯A～Bセクション完了。

C～Dセクション完了。

E～Fセクション切断。

G～Hセクション切断。

写　真　完　了。

∘ 2 号窯，平面及び断面実測完了に近づく。

同　　年12月 5 日（木）　雨のち曇り

∘ 給水管撤去。

立会人（品川耐火煉瓦ＫＫ吉村氏，国鉄新谷氏，中国土木）

同　　年12月 6 月（金）　晴れ

∘ 1 号窯E～Fセクション実測。

G～Hセクション実測。

∘ 2 号窯主軸線上床面カット。

地形実測図（S＝1/200）に 2 号窯の外形を入れる。

同　　年12月 7 日（土）　曇り

∘ 2 号窯給水管復原。主軸線断面図完了。直交セクション割り（2，5，8 m）

∘ 1 号窯直交セクションの水糸高に絶対高をひく。1 号窯外形を地形実測図（S＝1/200）に記入。

同　　年12月 9 日（月）　雨

∘ 作業中止。

同　　年12月10日（火）

∘ 2 号窯直交セクション（2，5，8 m地点）

昭和43年12月11日（水）

◦ 2号窯床面に残存する遺物の高さを念のため入れる。

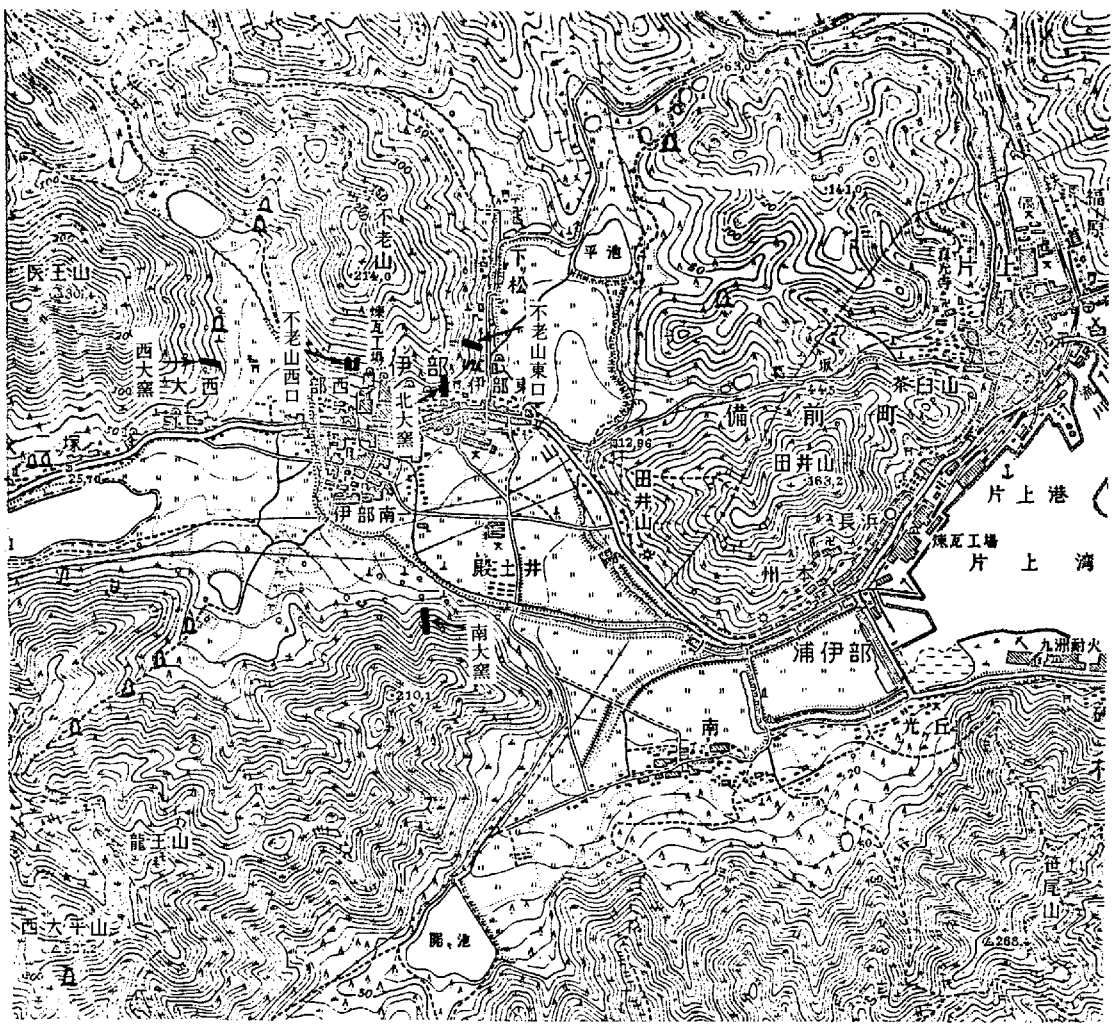
同　　年12月12日（木）　雨

◦ 報償費集計。クーラー（高島新屋敷分）返還。図面類総点検。江田機械店へポンプのホース，ハンドル，シールテープ等注文。完了。　　（葛　原）

第2章　遺跡の位置と環境

I　地理的景観

ここ備前市伊部（いんべ）の地は，備前焼き，または伊部焼きの呼称で知られるとおり，窯業の煙の絶えることがない。伊部の街並は，広義にいう岡山平野の東限にちかく，平野の乏しい一帯で，山裾に接して東西に長くの



挿図1　不老山東口古窯址周辺図

びている。北には標高214mの不老山を負い，西には医王山がそびえ，東には田井山を配し，そして南東には片上港が湾入している。備前市の屋根ともいえるこれらの山塊は，ほぼ東西の走向をさして連なり，その間，断層節理によって規制された無数の峡谷が南北に走っている。これら山塊は，津山構造線や中部高原がそうであるように，長期間の侵蝕をうけているが，岩質は県北の花崗岩と相異した流紋岩を基盤となし，あるいはその風化土を山林表土となしている(1)。こうした土壌構造に根ざす植生は広域にわたって落葉広葉樹林のアカマツ帯であるほか，一部片上湾西岸に常緑広葉樹林のクロマツが繁茂する構成となっている(2)。おそらく，養分の乏しい土壌構造に起因した樹林帯でありながら，実は窯業や塩業の生産行程で尨大に消費される重要な燃料源であったと思われる(3)。また，瀬戸内海の海岸線は潮流によってえぐられた海窪がいたるところにできあがり(4)，これが漁船や機帆船にとって格好な泊としての役割を果している。なかでも片上湾や久々井湾の歴史は古くわけても古代末期から中世にかけて，これらは，備前焼はもとより備前長船の名刀として著名な福岡荘の刀剣類を含め，商品経済の門戸としてはかりしれない流通機能を果し，現代に生きている。

備前市を含む瀬戸内沿岸の気象は，いわゆる瀬戸内型の代表としてひろく知られる。年平均気温は15～16℃で0℃以下のことはなく，総じて温暖であり，風速は年平均2～3m/S以下で暴風日数も年間10日以下である。湿度は年平均70～80%で，他地域に比べて低く，日照時間は長い(5)。このような気象条件は，窯業生産を助けて余りある外的要因であったに違いない。温和な気温は陶工による作陶活動の全期間を通じて，湿度が低く長期の日射時間が得られることは半製品の乾燥工程にとって，ほぼ一定の風向きと風速が保てることは窯焚の終了段階において，それぞれ有利に作用したことはいなめないであろう。一方，岡山県の降水量は，年平均1,100㎜前後で降水日数は1㎜以上の日が年間100日，30㎜以上は10日程度の，全国有数の寡雨地帯である(6)。したがって，集水地域が狭小な集落にとっては，いきおい治水利水事業を放置できず，渇水期においてなお一定の水量を保持するために溜池の構築とその管理が生産活動を支える大切な課題となる。だから不老山と医王山にはさまれ南北に走向する谷は谷頭から平地部まで約1.5㎞，谷幅150mで，その峡谷内の山端に一本の山道を通すだけで谷幅いっぱいに昭和池と新昭和池とが築堤されている。いまその集水量を問わないにせよ，両者の表面積は約25,000㎡以上であるから，用水獲保のために異常な苦心がはらわれたことは想像に余りある。これら溜池で流水を受けられながら谷頭から南流する一本の河道は幅約2mで平常の流量はきわめて少ない。一方，不老山東口古窯址が所在する立地をみるならば，東には南北へ走向する谷筋があり，そこには一本の水路が南下し，また表面積30,000㎡の平池をはじめ5個所に小溜池が存在する。平池に接してその南方あるいは北方に小水田が展開している。このように流量の調整時期とともに河道および溜池の管理が歴史的に集団的規制に基づくことを物語っている。農業集団内部においてあるいは窯業の生産集団に対しても，水利にかかるこうした関係は規定的であったと考えられ，細谷川の水の流れは生産活動の要であった，といっても過言ではない。

これから報告する不老山東口古備前窯址は不老山の東斜面に位置する大窯にちかいもので，また不老山西口古備前窯跡は，さきにふれた不老山の西南斜面に位置する2本の窖窯をさす。とくに後者の場合，旧来の山裾は耐火煉瓦工場の敷地造成によって削平され，工場敷地面から比高約15m以上におよぶ急な崖の上面にある。それればかりでなく，さらに崖の上方にも2～3段の加工面があって，それぞれ墓地や給水施設などが作られ，かなり複雑な地形と化している。このあたりでの等高線は山道や小溝によってしばしば切断されな

がらほぼ東西方向をさしている。調査は山林部分約1,700㎡を対象になされ，各段階状崖面の垂直切断作業に着手したところ容易に2基の窯体を検出しえた。われわれは，東よりの窯址を不老山西口古備前窯址第1号窯，西よりのものを同2号窯と呼称することとした。順次窯体の説明に入りたいと思う。なお，不老山東口古窯址の立地については，第3章で補うこととする。（葛　原）

注(1)　光野千春，大森尚泰「岡山県地質図説明書」岡山県　昭和38年　流紋岩類は「岩屑凝灰岩，結晶凝灰岩または灰凝灰岩に分けられる」という。

(2)　文化庁編「天然記念物緊急調査―植生図・主要動物植物地図―岡山県」植生図について資料をまとめ解説した佐藤清明は「自然の姿は失われがちで，マツ―常緑広葉林に移行して殊にアカマツ―アラカシ林が著しい。そしてアカマツが失なわれてアラカシが優占種になる傾向が強い。」と指摘している。

(3)　岡本明郎「山部と製鉄―その系譜と文化をめぐって―」，近藤義郎・上田正昭編『古代の日本』4　この中で岡本は「品質を決定する重要な原料である木炭に」着目し，重松義則の研究を紹介しつつ「出土炭は概ね軟質の木炭であり，尚，その中でも樹種として針葉樹が特に多い」としている。製鉄のみならず窯業生産においても，熱エネルギーの開拓方向としては，同様の歴史的発展をたどるであろう。

(4)　西村嘉助「中国・四国の風土」『日本文化風土記』河出書房。宮本常一他編集『風土記日本』第2巻　中国・四国篇。

(5)　中国・四国農政局計画部編「岡山平野における農業発展と土地改良」

(6)　前掲書

II　歴史的景観

備前町伊部地方を中心として，表面が赤褐色できわめて堅牢な器が作られ始めたのは，平安末期から鎌倉時代前半の頃と考えられている(1)。前代の須恵器にみられる窯業技術を継承し，壺・甕・摺鉢のセット関係(2)をもっていわゆる備前焼が成立して以来，やがて中世六古窯の一つに数えられ，その器が全国的に利用された背景には，仲買商人の巧みさより器自体の破損率と器形自体の中に原因があった，といってよい。「備前すりばち投げても破れぬ」(3)といわれたように破損率が小さく管理が容易で，器形も農民の日常生活に欠かせないものが大量を占めたことは，窯業技術の高度な結晶としての観点とともに社会的需給関係とも深く関わってきた，備前焼の歴史的展開を示している。こうした備前焼の成立も一拠にしてなったのではなく，大陸および朝鮮半島から先進的技術をたずさえた専門工人集団の定着による須恵器窯の構築をもって始まり，地方豪族の動向と不可分の関係をもって発展しつつ，奈良時代後半頃には，窯業生産地が一方では特定地域への大集中，他方では著るしい衰退という対照性をもって中世的世界の中へ傾斜して行くのである。政治的にも距離的にもこの備前町ともっとも近接した地域の，古窯址としては，南方に山一つ隔てた邑久郡邑久町寒風をおいて他にない。寒風に大群集している古窯址について，西川宏は寒風一式あるいは同三式などに分類し，前者は飛鳥時代，後者は白鳳時代としてそれぞれ比定している(4)。これらから出土する須恵器のうち蓋杯にかぎっていえば，ぎぼし形ないし碁石形のつまみが出現する時期で，個々の窯体構造がなお十分明らかでないにせよ，灰原と想定される場所からは，しばしば甕胴部破片などを多量に採集しうる。一般的にいって，7世紀後半頃の須恵器は，土味の光沢がとぼしく気泡が肌にあらわれ器形もきわめていびつになり，灰原では，重ね焼きのまま密着したもの，焼きひずみのひどいものなどがひときわ増量する。こうした傾向は，窯業体系のひずみを間接的に物語るもので，窯業技術史の観点にかぎっていえば，熱量をかぎりなく高める燃料，極限に達した火力にたえうる土質，絶えざる成形技術の進展，効率にみあう窯構造の推

移，これら生産性を保障する諸要素の関係が均衡をくずし，量産の中で破損率をたかめた反映であるにちがいない。そうした窯業の推移の過程で，一方においては，寒風古窯址の出土遺物が示すように，一寸のくるいも許されない瓦，あるいは高度の成形技術を伴う大型の陶棺や鴟尾[5]などが須恵器とともに焼成された事実を，見落すわけにはいかないのである。そこには，古代豪族の強い要求が貫徹されているといってよい。『延喜式』（主計）に，陶器を調貢する限定された六国の一つとして，備前国があげられている記載の片隣をみる思いである。

先学が指摘しているように，われわれもまた備前焼きの母体としてはこの寒風や亀ケ原を含む邑久郡一帯に求めざるをえない。やがて，還元焼成の須恵器から酸化焼成の備前焼きへと一変しつつ，邑久の山陵から**より**北方の備前町へと古窯址の大移動が開始されるのである。その原因は，おそらく主要には燃料源の問題において，海辺部での製塩のそれと競合関係を避けながら，より北方の備前一帯へ展開したのではなかろうか。そして，まず備前焼きは，熊山山塊に定着したと考えられ，桂又三郎はつぎのような編年をうちたてている。つまり，①熊山窯（鎌倉時代・13～14世紀初頭），②浦伊部窯（室町時代初頭・14～15世紀），③山麓窯（室町末期～桃山初期・15世紀終末頃），④大窯期（桃山末期～江戸初期・17世紀）[6]と。採集の土器片をもって確立した年代観は，きわめて労多き作業でわれわれの出発点を示すものである。しかしながら，はたして窯業の発展過程をこうした段階規定をもって概念的にとらえうるかどうか，なお検討の余地はある。最近の諸論考[7]も，窯址の正確な分布調査に基づく個々の遺物の検討を通して，考古学的方法による編年観の確立とともに窯址群の推移の傾向を社会経済史的視角から，深められつつある。これから報告する3基の窯址も，かつては山麓窯とよばれた窯に包摂されるものであるが，できるだけ忠実に記録することによって，その内容を把握しておきたいと思う。

いま一つふれておかなければならないのは，奈良時代・律令体制のなかで当備前町伊部地方は，和気郡香止（かがと）郷に属している点である。古代寺院址が集中するこの一帯は，後の堀河院の香々登庄の比定地と重複する。備前焼きは古く「カガツ」ともよばれているが，おそらく香々登庄で作られる陶品に対して与えられた呼称で，備前焼きの成立は「香々登庄」の立庄と深い関連をもつものと思われる。律令体制の崩壊にともないかつての須恵器工人が，新らしい庄園領主のもとに集中・再統合されたことは充分予想できるところである。

とりあえず，備前焼き成立ないし定着の時期については以上の見通しをたて，発展期ともいえる第2期の山麓窯の形態を検討する素材として，以下3基の窯について記述し，一応の責をふさぎたい。

（河本，葛原）

注（1） 西川　宏「須恵器から備前焼きへ―その研究の歩み―」『陶説』 1966年12月号
「奈良時代須恵器から推してきて，せいぜい平安初期まで下げてきても『初期備前焼』のもっとも古い様相をもつものとの間には，形式的にどうしても継絶がみられる」

（2） 間壁忠彦「中世の備前焼」『陶説』 同　上
瓦を共伴する古備前窯址の例をあげ，瓦は「平安末から鎌倉初頭と思われる」としている。

（3） 日幡光顕「備前焼」備前町教育委員会

（4） 鎌木義昌・西川　宏・間壁忠彦「古代・中世窯業の地域的特質―（5）瀬戸内―」『日本の考古学』 第Ⅵ巻　歴史時代（上）

（5） 吉備考古館保管

（6） 桂　又三郎「新説備前焼入門」

（7） 間壁忠彦・間壁葭子「備前焼研究ノート」『倉敷考古館研究集報』 第1，2，5号。 備前焼の成立から発展まで体系化した労作で，教示される点が多い。

第 3 章　不老山東口古備前窯址

I　窯 体 の 構 造（第2図，図版5，6，7）

窯体を構造上区分すれば，ふつう前庭部，焚口部，燃焼部と焼成部，煙道部[1] に分けられる。今回の発掘調査は，先に記したように新幹線建設用地内にかぎる区域内であったこと，および調査前における旧地形は，江戸時代頃宅地化されその後畑地となったところで，燃焼部から焼成部にかかる数メートルが崖状を呈し，そのためかならずしも窯体構造の全貌を明らかにしえたものではない。以下調査範囲内での窯体構造の説明を加えたい。

前庭部，焚口部，燃焼部　焚口は床面幅約3.4mを計る。焚口部から約2.4m奥に入った燃焼部での床面幅約3.2mを計り，この幅は大きく変わらなくて 焼成部に移るいわゆる「ずん胴型」の窖窯である。燃焼部と焼成部の区分は特別の施設はなく，床面の傾斜角度の相違によって区分される。燃焼部床面傾斜角度約15～20度である。

窯壁は保存状態が悪くわずかに残存していたのみである。北壁での観察では，4層に区分できる。この4層は灰黒色に堅く還元された面と，それに続く赤色に酸化した部分を層区分したものである。しかしこれは機械的な区分であって還元面と酸化面を一窯壁と考えなくてはなるまい。したがって，北壁は大きくは2層に区分される。これら壁体にはスサ等の混入はみられなかった。ただ焚口の部分において，角礫をもちいて壁体を固めたようで窯体内に角礫を埋め込んだ状態の礫がみられた。礫は20×30cm大のものでこの付近に限定的に認められるばかりでなく，下方の前庭部にあたるところにも同大の数個の礫を看取しえた。これらの礫はもっとも火力の高まる焚口部において焚口の壁体をより強固にする役割を荷ったことも考えられる。

燃焼部床面の縦断面切断での観察では，部分的に 床面の貼り付けがみられるが，大きく 4層に区分される。これらの面は 白灰色に堅く還元され，セメント状をなしていた。これらの面の厚さは，焚口部近くで6 cm～10cm前後で粘土に粗砂を混入した土質である。この床面と床面の間には灰層が混入している。しかしこの灰層は燃焼部から焼成部にかかる付近においては認められない。焚口部の端部について平面的に観察するならば，前面には 両窯壁間を，半円形に結ぶように 幅約1 mの低い黄色粘土の高まりが ベルト状にみられ，焚口部床面から続く赤褐色に焼けた面は，このベルト状高まりの下端を境として，それより内側に火力をうけたことが 看取できた。ベルト状高まりは，焚口の端部を示すものといえる。この高まりの奥の部分は，浅く窪んでいるが比較的浅いところから須恵器窯でいう舟底遺構とはいえない。しかも，この浅い窪みは初期の段階で埋められたようで燃焼部床面の2次的補修面として，赤褐色の層がすでに窪みをおおっている。したがって，焚口部は平坦に近い面として常にととのえられ作業面として活用していたと思われる。

これら焚口部にはほぼ主軸線上に等間隔で3個の柱穴状のピットがみられた。東からピット1，2，3とすれば，ピット1は上部径約16cm，下部径約6 cm，深さ約42cm を計り，杭状のものが打ち込まれた 遺構であ

る。

ピット2は深さ約20cm，ピット3は深さ約10cmを計る。これらについては，天井部を支えた柱穴であることが，全体的な窯の規模からして想定されるが，また焚口部に集中しているところから，閉鎖施設の一部であるかもしれない。

前庭部には厚さ約60cmの粗砂を混入した黄色粘土の広がりがみられた。この粘土の広がりは焚口の前面に展開して，東に向って緩斜面を保ちながら低くなっている。まさに作業面としての形状を良くとどめている。

焼　成　部　焚口から奥へ約14m付近のもっとも保存状態が良い部分の観察を中心に記述する。

焼成部の床面幅は約2.5m～2.7mを計る。床面は縦断面で6層に区分されるが，横断面の両窯壁に近い所では5層に区分される。床面傾斜角度は約15°～17°である。

床面は地山を浅く掘りくぼめた上に粗砂混入の粘土を貼りつけて形成されている。この貼り付け状態は，セメントを塗ったようなあり方ではなく，約40cm前後の粘土塊を貼り付け，さらにそれを平坦化した状態のものである。貼り付け床の上面は灰色に還元され堅く焼けしまっているが，下方は赤褐色に酸化している。床面と床面の間層をなす部分には灰黒色の砂層で埋められている。

窯壁はかなり保存度がよく，両壁ともその立上り約70cm～90cmちかくまで残存していた。両壁とも壁体部は底部幅約3m，残存上部幅約90cmの土手状の厚い壁を作り，さらに窯体内に厚さ約8cm～15cm前後の粘土塊を貼り付けた大規模な構築をなしている。貼り付け壁は，灰色またはコバルトブルー色に還元され堅く焼けてしまっている。この貼り付け壁は部分的に補修をなした面もみられたが大きくは3層に区分される。窯壁にはスサ等の混入物はないが一部陶片が混入している部分もみられた。窯壁は中心に向ってゆくカーブをなしており，天井部はおそらくカマボコ状に結ばれたものであろう。天井部の推定高約1.7m。いわゆる「ずん胴型」の焼成部である。

焼成部の埋没状況は，最終床面から約40cm上部までは，コバルトブルー色のガラス状に還元された，竹状のものでスサを組んだ天井部窯体片，窯壁片，角礫，陶片等で埋まり，さらにこの上部は褐色粘質土で埋められていた。

以上，限定的な窯体下半部の調査結果にもとづき，また，調査後の路線外主軸線上に埋めこんだ標示柱の掘り方にみられた状況からすれば，そこに数層からなる床がみられる知見によって，窯体の推定全長は約40mにおよぶものと考えられる。机上で推定した規模をかなりうわまわる窯体であったと考えてよい。そして，地山および旧表土との関係においては，半地下式と呼称するよりも，地山層を若干掘り窪めて整形したのち床底部となしたものである。　（河　本）

II　灰原および外部施設　（第3図，図版2，3，4）

灰　　原　灰原は焚口部から丘陵斜面に向って，ほぼ扇状の開がりをもって堆積していたが，焚口部から東約13m付近では，現在居住している宅地の造成時点で切断を受けていたので，その末端の詳細は不明である。灰原は南北に広く扇状に広がり，主軸直交方位（南北）での最大幅は約28m前後で，焚口部から前面（東）へ約13m以上と推定される。われわれは今回の調査でもっとも重点を置いたのは，この灰原の発掘調査である。調査の初期の段階では全面に4m×4mのグリッドを設定し，一定の深さごとに遺物を取り上げ

ていったが，最終段階においては，窯体主軸線上とこれに直交する畦畔をのこして断面観察を行なった。以下この断面の観察を中心にして記述したい。

主軸断面　焚口から末端方向約11m付近まではプライマリーな層序が確認され，末端は切断されて不明である。焚口付近の灰原の厚さ約50cm，焚口から11m付近での厚さは約２mにもおよぶ。

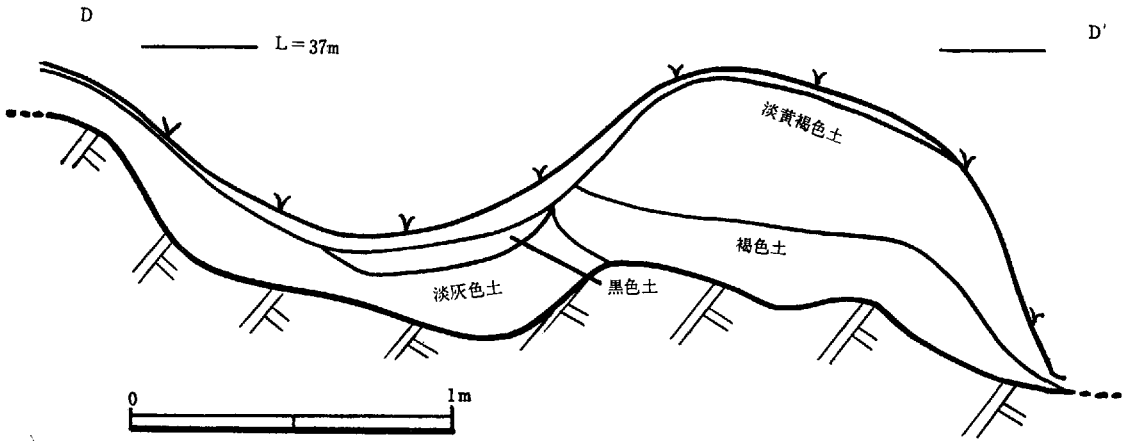
地山は旧地形に制約されながらも若干整形されたようで緩傾斜をなして下方に延びている。地山直上には黄色粘土塊がみられるが，この粘土塊は前庭部ならびに焚口部を形成し，さらに燃焼部から焼成部につづき地山直上の窯体床面を作っているものと考えられる。前庭部におけるこの粘土塊中には，斜め方向に３条の灰層が間層としてあたかも粘土塊を切る状態でみられるが，この意味については，窯構築後かあるいは構築中においての空ら焚の回数を示すものと考える以外にない。だから，斜めの灰の間層は陶片を含むことなく木炭灰または焼土に限定されて約５cm～10cmの薄い層となっている。さらにこの前庭部を形成する粘土塊の末端部を被覆している焼土や窯壁片を含む暗褐色砂質土は，本格的操業の第１段階を示す操業後の排土であろう。当然この被覆土は次の作業における安定した前庭部作業面として使用されたであろう。以後灰原は基本的には，灰層と陶器を含む焼土層を大きく１層として区分できる。すなわち灰層と陶器を含む焼土層を１層として区分したのは，プライマリーな部位においての灰原の断面は，15層以上からなっているが，そのうちで主要には炭および木炭が堆積している，いわゆる灰層は確実に５層認められる。この灰層に着眼しその上にのる他の焼土陶片混入層などを，仮りに１層として把握した場合，15層の層序は６層の層位にまとめることが可能である。このことは本窯址における本格的操業が６回以上なされたことを示していると考えられる。これらの層は，堆積の幅に若干差があるにせよ勾配約23～24度と一定の斜面を形づくって堆積している。その上，灰原上面はほぼ水平の面を保っている事が示すように，前庭部の前面は常に作業面を意識して排土作業を行なったと考えられる。

主軸直交横断面　焚口から約４m下方（東）の断面である。主軸接点から北側断面は大きく４層に区分され，基本的層序は主軸断面と一致するが，かならずしも灰層が５層みとめられるとはかぎらない。南側断面においては灰を基準にするならば，大きく２層に区分できたのみである。この部分での地山は，窯前面では平坦に整形されているが，南側部分は浅い窪みがみられる。この窪みは東に向って浅い溜池状の窪地につながる。排水を考慮した窪地か自然地形かについて速断できない。前庭部最下層は，窯壁片を含んだ焼土の堆積がみられる。この堆積状況は中央部では薄く左右に厚い堆積をなすものである。この焼土層の上面には薄い灰層をはさんで粘土塊が置かれている。この粘土塊で形成された前庭部は低い台形状をなしている。灰原堆積の厚さは，中央部で約１m。両端部の最深部で約1.5mを計る。

なお北側の末端部においては別の窯の堆積物が混入したかのように，全体の灰層の状況はきわめて厚く北側に別の窯の存在を想定させ，末端部では，両窯の灰原が接合して検出されている。

外部施設（挿図２，図版３，４）

溝及び土塁　窯上方海抜37m付近の斜面に窯体を囲む状態で溝及び土塁がみられる。土塁の断面底部幅約1.2m，高さ約70cm前後を計る。土塁外側には幅約70cm前後の浅い溝を付設している。この溝および土塁の南側端は，窯体から約28mを計る付近で斜面下方に曲折している。この部分の土手は，わずかに痕跡をとどめるにすぎないが，溝は深くなっている。さらに端部の状態は地形が切断されているため不明である。さきにふれたように，本窯址の北には同規模の窯址が存在し，この溝および土塁はさらに北に延長して，こ



挿図２　溝及び土塁断面図

の北窯をも囲む状態である事を確認している。したがってこの溝および土塁は，２本の窯を囲み，窯体内に雨水などの流入を防ぐ機能をもって築かれたことは確実で，同時に，一つの作業範囲ないし生産単位を暗示するものとして可能性も強い。

円形遺構　窯体南側の斜面および焚口付近に円形の掘り込みを検出したが，これらの遺構のもつ意味についてはよくわからない。

ピット I　崖上斜面にあり，径約２m，深さ約0.9m を計る。掘り込まれた穴の内には，著しい角礫と若干の備前焼破片とがつまっていた。

ピット II　焚口付近の南にあり，径約1.1m深さ約0.5mを計るものである。

ピット III　ピットⅡ東約２mの地点にあり，径約1.5m，深さ約１mを計り，これに切られた小孔も存在する。

石敷遺構　上記の円形ピットⅡ，Ⅲの南に接して，幅約２m，長さ約８mの東西に長い石敷面が検出されている。溝状の浅い掘り方の中に，こぶし大の角礫が敷かれていて，上面はほぼ平坦である。さらにこの遺構の東には，不定形な平面をなす約５m×６m の浅い溜池状の窪地があり，それに接続するようである。

その他遺構　窯体の北側の一部を切る状態で推定径約３mの浅い窪地があり，さらにこの窪地から東に向って排水暗渠があった。この暗渠は焼石，陶片を使用しているうえ，暗渠内は耕土で埋まっており，この窪地は窯と直接関係しないものと判断しうる。暗渠排水施設についても窯と伴うかどうか断定しがたい。

（河　本）

III 出土遺物（第４図，図版12）

出土遺物の大部分は，灰原から採集されたもので，その総数はリンゴ箱1,000個ちかくある。器形は，一応，甕，壺，擂鉢の３点をセットとしているが，その他小皿，片口付小壺等がみられる。しかし出土遺物の大部分を擂鉢がしめているのが特徴的である。以下，図示した遺物を中心にその説明を加えたい。

甕　口頸部は太くて短かく，肩の張り出しがきわめて強い大甕である。この口頸部はほぼ直立するものと，内傾するものと二種類みられる。口縁部は外側，下方に大きく折り返した帯状の玉縁がつく。この帯状

玉縁の部分は，わずかに稜をもつものと，浅い窪みをなすものとがある。裏面の肩上方から下方にかけて，幅約3㎝前後の「めかき板」状工具によって，なで仕上をしたものもみられる。胎土中に砂粒を含み，焼成は堅牢によく焼きしまっている。茶褐色を呈する。

壺　口部の立ち上りはあまり長くなく，わずかに外に開きぎみの径約13～15㎝前後のものが多い。しかもこの部分が素直に立ち上るものと，中ほどが外にふくらむものとがある。口縁端部は外に折り返して小さい玉縁ををつくる。肩部には，無文で大きな耳が3ヶ所に付くものと，4ヶ所に付くものとがある。また肩部に「めかき板」状工具により，断絶的に波状沈線文を有するもの，数条の平行沈線文と波状沈線文を組み合せたもの等の文様を施こしている。

口頸部の短い壺は，口縁端がわずかに玉縁状をなすものと，斜めに切って端部をつくるものとがある。肩部には，「めかき板」状工具によって波状沈線文を施こしたものと上方から下方に向って数条の沈線文を施こしているものとがみられる。これらの陶器は土中に砂粒を含み，よく焼けてしまって，口頸部から肩にかけて自然釉の付着したものが多い。赤褐色または淡赤色を呈する。

擂　　鉢　器形の大きさ，口縁部の拡張の変化等にさまざまな違いがみられる。一般的に器形は，口径約30㎝前後，高さ約10㎝前後のものが多く，平面は楕円形に近い状態で一方の端に片口が付くものである。口縁端部は上方に垂直に近く拡張している。この拡張部の数値は約2㎝～2.5㎝を計る。口縁部外面は，下端部が下方にたれ下ったものと，横に突起状をなすものとがある。器裏面は口縁部と胴部の境をわずかに窪めて，その境をつくっている。摺目は，6～9条を1単位とする幅約3㎝前後の「めかき板」状の工具によって，胴下端から上方の口縁部下端に向って，放射状に動的に画かれている。成形技法は粘土紐の輪積み成形によるものである。器膚は備前焼特有の荒っぽさがあるが，強力さを感じさせるものである。よく焼きしまり，赤褐色を基調としている。

小　　皿　口径約10㎝前後，高さ約4.5㎝前後のものが多い。胎土は精選されたもので，砂粒はほとんど含まない。橙色を呈し，堅く焼きしまっている。底部は糸切底である。小皿の内面底部には，細いヘラ状工具による窯印がかなりみられる。

分　焔　柱　灰原から発見されたもので，中空になっている楕円形に近い土柱状の破片である。現存の外径約20㎝×17㎝，高さ約22㎝，中の孔の径約9㎝×7.5㎝を計る。中空部を木芯として，その周囲を粘土と荒縄とで固め，土柱を作ったものと考える。分焔柱としての機能をもったものであろう。

以上，出土遺物の概要を述べた。これら遺物の示す特徴的な点から時期を考察すれば，備前焼が後の大窯として定着する直前の，山麓窯として集中化する傾向を見せる室町後半期に属するものと考えられる(2)。

（河　本）

注(1)　これらの用語については，「陶邑古窯址群Ⅰ」，1966年を参考とした。

(2)　不老山東口古備前窯址の熱残留磁気の測定年代と土器形式による相対年代との間には，別表のとおりかなりの開きがある。この点については，広岡公夫氏による磁気測定を行なった時期が発掘調査終了後，数カ月を経過した後に実施したことに原因すると思われる。われわれは，他に故和島誠一先生の指導により発掘調査時に磁気測定の資料を採集し，渡辺直径先生に測定を依頼している。いずれその結果をまって，磁気測定と土器形式との差の検討を加えたいと考えている。

第 4 章　不老山西口古備前窯址

I　第 1 号窯の構造　(第 6 図, 図版 9, 10)

本窯址は等高線と直交する方位に築造されN15°Wに主軸をおく審窯[1] である。現存する窯体幅は 1.6～1.7mで，長軸は約 7 mをはかる。あらかじめ，通常みられる窯の構造について上部から順次述べておこう。まず，煙と炎をひきだす「煙道部」，ついで，作陶後の陶品を詰めたり，並べたりする部屋としての「焼成室」，ひきつづき，燃料を焚く「燃焼室」とに連続しつつ機能的に分離する。さらに一般的には，焚口の前面に作業面としての「前庭部」があり，その下方には燃焼後の木炭や欠損品を投棄した「灰原」ができあがるのを常とする。

本窯址についての現況を逆に下方から記すならば，まず灰原が予想される部位はすでにふれたとおり工場敷地造成によって完全に消滅している。そして前庭部あたりは，山林から墓地として切り開かれた時点で削平をうけているばかりでなく，骨蔵器に転用された備前大甕とその掘り方が部分的には窯体内にくいこむほど窯址への二次的破壊が進行したため，全体的把握をますます困難にしている。窯址に対して無意識のうちになされたこれら人為的破壊とともに，少なくとも不老山南西斜面自体が著しい自然侵蝕をうけ崩潰していて，そのため窯体のほとんどが流出し基底の一部がかろうじて現表土層内に文字どおり残存する状態であったのである。したがって若干の側壁と床面を除外すれば内部空間の構成を想定する何らの遺構も認められず，むろん窯体の面的構成すら慎重に検討しなければならない。そこで，現況をできるだけ忠実にたどりつつ窯体の構造を復原的に記述しよう。

煙　　道　窯体幅は平均 1.7mで上方へ漸次せまりながら隅丸の状況となって終わっている。それより上方には火力をうけた痕跡はない。こうしたあり方は，他の窯址例と比較して焼成室床面の上端にちかい部位と考えられる。しかしながら，かつて煙道を構成したと思われる壁体は窯体内またはその周辺にいっさい認められない。そして現存する窯址床面の周囲には約20cm幅の赤褐色ヘマタイト帯[2] がめぐっている。これは火力によって酸化した側壁の最下部であろうことは，ヘマタイト外周線をもって地山面と明瞭に区別できること，および部分的にはヘマタイト内周線を結節部としてわずかに側壁のたちあがりが認められることなどによって想定しうる。周囲をめぐるヘマタイト帯は上部で40～60cmと幅を増し，当然床面と平行して隅丸状に終わるが，主軸線上でゆるい谷状のクセをもっている。別な表現をとれば，ヘマタイト外周線，したがって両側壁の内外面とともに上方へすすむにつれ徐々に内曲線を描き，両隅が一定度突起して中央で接合する。煙道直下の床面を暗示するこうした状態は，主軸線に沿う断面によっていっそう明白となる。つまり，上端部から下方へ約 1.5mまでの範囲は，床面から地山までかなりの間隔があって，最深部では約60cmにしてはじめて地山（黄褐地山面）に達する。このあたりの地山傾斜角は15度で，床面勾配45度に対してゆるやか勾配となり，地山が人工的加工面であることを看取しうる。地山と床面間にできた三角形状の人工的空間部分は，60×40cm～30×20cm大の凝灰岩などとともに木炭混入土層によって充塡されている。上端から下方へ水平距離にして約 1 mの部位の床面には，主軸に直交する方位で傾斜変換線がみられ，床面下と地山との間隔を埋めた岩礫はとくに顕著である。このことは床面の傾斜をみるかぎり，残存窯床の最下部付近若干を除外して平均30度の傾斜角を保つあり方と比較して，意識的に煙道の勾配角度を強制した反映とみなし

うるであろう。上端の側壁幅はわずかに盛り上がって幅も広く，煙道基底部と考えられるばかりでなく，さらに注目すべき現象として，明らかに火力をうけてできた淡赤褐色土層，つまり加熱層が色調と土質の点で上下層から区分でき，かつ傾斜した床面に平行して走るところから，煙道は垂直方向でなく，旧来の山斜面の方向に規定された一定の角度をもって，おそらく筒状に構築されたものであったに違いない。そうであれば，煙道直下の上部床面にあって表面のみ色調が赤褐色に酸化した20×20cm大の礫などは，火力の影響をうけながら本来還元されない場所の間接的な，いわば加熱範囲にあったこと，したがって位置関係からして煙道外側で煙道の壁体を補強したものと想定され，それが落下した状態で検出されたのではなかろうか。とはいえ，かならずしも長大な煙道でなかったことは，炎の引きを考慮して焼成室の床が急傾斜に仕上げられている点から想定される。

焼　成　室

煙道直下の床部と側壁などについて，さきの状況にもとづく想定が許されるならば，上端から下方1mのところの傾斜変換線を起点とした下方の床面は明らかに焼成室のそれである。窯体の内法が約1.7mであることは，床面幅によってうかがわれ，幅にほとんど長短はなく，またすでにふれたとおり床面外側をつつむように約20cm幅のヘマタイト帯がめぐっている。床面は，おおむね灰黒色に還元した貼り床上面が不定形な地図状に残存しており，それらの表面を検討し集合的にとらえるなら安定した床の傾斜角をおしはかることができる。床面の保存がきわめて劣悪不良であることは，少なくとも不老山南西斜面の自然流出作用の深度とともに燃焼度の違いから生ずる床の剝奪作用が原因した結果であろうと想定される。自然侵蝕の進行は，たとえば還元面をのぞく下部の赤褐色酸化面が，毛根などによってさらに二次的侵蝕をうけ凸凹の激しい面に変形していることによっていっそう明白である。還元面に限っていえばとくに最下部に近づくほど色調に青味を帯びかつガラス質に変化しており，強い火力をうけたことを物語り，燃焼室にきわめて近接した部位にあたることを暗示している。いうまでもなく，還元層と酸化層とで構成される床の傾斜角はその上表と下面の勾配から平均30度とかなり急角度の数値がえられ，床の両側は壁体あるいはそのように想定される部分との結接部でやや上向いてゆるやかなU字状をなしている。下方の，なかんずく端部ちかい床面は緩傾斜になり，地山加工面はほぼ水平にちかく，他の場所ではみられない地山自体への加熱現象がみられる。窯体幅も上方から漸次内方へつまる傾向をもつ。しかしながら，床面はいぜんとして一定度傾斜しているが，ふつう船底とよばれる穴状の落ち込みはない[3]。このことは，単なる事実認識にとどまらず，燃焼室と焼成室を分離する重要な指標であって，擂鉢状床面の存在を確認できないところから，現存する窯址は，すべて焼成室の，しかも一部側壁をふくむ床面であるといえよう。ついで，主軸断面から逆に構築方法を想定した場合，まず地山の一部または全部に対して一定の角度をもつ加工面となし，ついで5～10cmあるいはそれ以上に黄褐色土を敷きつめ，きわめて堅牢なたたき面となし，さらにその上に約10cm幅の床面を塗り固めたことがわかる。第1工程および第2工程では，はかりしれない労働力が吸収されるばかりか，鉄製工具類の大量導入なくしてはとうていなしえない作業量であることだけは確実である。第3工程においても，床の地すべり現象をおしとどめるには傾斜角が急であればあるほど慎重な配慮と技術が必要である。たとえば，側壁のみならず床粘土へのスサの混入とか，固着度をますための触媒投入とかがなされた可能性をまったく削殺しさるわけにはいかないであろう。床上面の貼り付け部が窯の築成時に用意されたか，二次的に添加したものか断定しがたいにせよ，器の安定性を配慮した手法であるという想定にまず誤りはない。窯構造をみるかぎ

り，伝統的な窯業技術の継続と新たな科学性の導入とがたえず物化されていることに気づくのである。安定した床の上面には，粘土塊をはりつけた不均等な面あるいは箇所が約10cmをはかる厚さで床上面の還元層と同様の色調および土質をもって部分的に存在する。だから他の窯址調査例ではしばしば床の補修面と考察される状況にきわめて酷似しているのである。本窯址の場合，なるほど貼り付け部分であることは，衝撃を加えるなら安定した床上面と完全に剝離することによって肯首しうるが，均一的な面でなく，またその存在が点在的であるところから焼台用ブロックではないかと思われる(4)。一方では，瓦窯の有段式床面がすでに普遍的である事実を想起する(5)ならば，30度をはかる急な床面に対して器の安定性が考慮されないかぎり窯の機能は麻痺したであろう。また，のちにふれるとおり出土遺物の希少性に原因するにせよ，むろん焼台は一例も発見されず，本来，粘土塊を多用して，焼台自体を必要としなかったのではなかろうか。

燃　焼　室

燃焼室と断定しうる確定的な遺構はなく，上記の特徴点を要約的に記して推定するほかない。まず第一に窯体幅が下方において内曲することは，一般的には燃焼室と焼成室との接続部分の曲線にみられるところであり，かつては再び外婉して終わっていた可能性を暗示する。第2は下部の床上面が非常に強大な火力をうけ還元しているばかりでなく，加熱範囲が限定的にたたき面をこえ地山までおよんでいること，つまり最も火力の高まる燃焼室にきわめて近接していたことを物語る。第3には下端部の傾斜がほぼ平坦で，これは燃焼室と焼成室との結接部をおもわせる。以上の理由によって，焼成室の位置は残存窯址と接続した直下，現況の墓穴あたりと思われる。燃焼室の長さ，したがって焚口部の部位をより確かなものとして把むには，すでに公にされたこの種遺構にかかる報告から，焼成室と燃焼室との長軸の比を求める以外にない。すると，原則的に$\frac{2}{8}$～$\frac{3}{8}$の範囲にある(6)ので，本窯址の場合，焼成室7mに対して燃焼室の長さ約2m以内と考えるのが妥当であろう。したがって，燃焼室および焼成室をふくむ窯体の長径は9mをこえるものではなく，普遍的にみられる須恵器窯などと比べ，傾斜角が急であることをのぞき，大差ない規模であったと考えられる。

（葛　原）

注(1)　田辺昭三「窯の構造とその変遷一須恵器9一」『日本美術工芸』 396号
「須恵器窯を登窯とよんでいる場合がかなり多いが，登窯とは，傾斜地を利用し，下から上へ連続して幾つかの独立した焼成室をもつ構造に対する呼称に限定すべきである。この，連房式登窯が，はじめてわが国に現われたのは，16世紀後半のことであり」という見解に従って記述する。

(2)　横山浩一氏の教示による。昭和38年度に大阪府下にある「陶邑古窯址」のMT21号を発掘調査中，当時学生であった私は，窯体の切断面にあらわれる青灰色部分と赤褐色部分との奇妙な差異に驚き，そのことについて素朴な質問をしたところ，同氏からMnとFeの凝集差であることを教えられた。思えば10余年前のことであるが，その印象はいまなお鮮明である。

(3)　楢崎彰一「猿投山須恵器の編年」『世界陶磁全集』第1巻によると，10世紀末葉から12世紀初頭頃までの窯の構造については，一般的に「前代に焚口においてみられた『舟底』は，この時期にしだいに消滅の過程をたどり，後半期にはなくなっている。」という。こうした重要な指摘があるが，本窯址の場合，残存した最下付近に燃焼室をおもわせる遺構はない。

(4)　楢崎彰一「猿打窯」『陶器全集』 31
「床面に，『スサ』を混ぜた粘土塊をおき，そのうえに碗・皿類を10数枚も積み重ねて，生産単位をいちじるしく高めている。」という例が報告されている。

(5)　小野一臣「郡窪郡山手村福山城址窯跡」『古代吉備』 第7集，
伊藤　晃「賞田廃寺に付設の『窯址』」岡山市教育委員会編『賞田廃寺発掘調査報告』

葛原克人・池畑耕一「二子窯址」『岡山県埋蔵文化財報告』 第2集
これらは，すべて不老山古窯跡より先行する時期の瓦窯址で，概ね有段式の窖窯である。

（6） 田辺昭三「陶邑古窯址群Ⅰ」によっても，焼成室と燃焼室との長軸の比率は⅜～⅝の中にある。焼成室のやや長いと思われるものは，高丘7号窯址（兵庫県教育委員会編「明石高丘地区埋蔵文化財調査略報」）。短かい例としては，大浦2号窯址（福岡県教育委員会編「野添・大浦窯跡群」）などがみられる。

II 第2号窯の構造 （第7図，図版8，9，11）

不老山西口第2号窯址は，田面からの比高約15mの部位にあり，1号窯址から西方へ約50m離れたところに所在する窖窯である。1号窯の立地と同様2号窯南端もまた工場の給水施設および田面拡張によって，崖状に変貌している。そのため，通常みられる「灰原」「前庭部」「燃焼室」などは完全に消滅しており，下半部以下の構造を立体的に復元する手がかりはなく，平面的に推定することさえできない。残存する窯体は，走向東西の等高線と直交する方位に主軸があってN8°Wに位置し，残存長は約6mをはかれるにすぎない。残存した窯体の保存状態は調査以前に人為的破壊がなかったなら，ほとんど窯の全構造を看取しえたものと惜しまれるほど良好である。

煙　　道　平面構成でいう上半部が残存する本窯址のうち，とくに煙道部は構造的，機能的にあれこれの特色がみられる。まず煙道の構造については，後世つくられた山道とその側溝がたまたまかつての煙道上部をほぼ東西に走向したため削平後消滅しているが，山道の下部にあって現存しえた煙道基底部とわずかな側壁の立ちあがりによって，ほぼ一定の推定が可能である。煙道基底部の下端は，平面構成ひとつとりあげても，焼成室の両側壁が急につまる形状を呈することによって，明瞭に看取できる。その部位における煙道の幅は84cmでそのまま斜面をはって約70cmのびている。これが煙道基底部であり，20°の傾斜角を計測しうる。煙道の基底部長が70cmにすぎないという事実は，煙道破壊後現存しえた実長というのではなく，むしろ本来の長さであり，そのことがまた直ちに煙道の機能的範囲を限定的に示すのではない。とにかく煙道の平面的構成をまず確かなものとし，さらに立体的構造を考えてみよう。そこで，煙道はもとより本窯址の全体の構築は岩盤を二段掘りの隅丸方形状に大加工し，ついでその中へすっぽり側壁をはめこむよう工夫した構造的特徴がある。煙道の上端をつかむため，この二段掘りの肩，いいかえれば，ロック加工線の上段と下段の位置について主軸線上でとられた場合，焼成室と煙道との結接部から，上方へ約1.8mと約1.3mのところにみとめられる。焼成室の側壁にみられるように，下段のロック加工線内に壁体がおさまるとすれば，さきの数値1.3m以内に煙道上端もおさまる想定も故なきことではない。これが一つ。もう一つには，これまた後に詳述するとおり，上部構造をのぞくすべての側壁が主要には人頭大の礫によって，石室状に構築された特異な構造をなしているが，礫の検出範囲が上方70cmを限度とし，けっしてそれ以上伸びないこと。これらの事実から，煙道の基底部は80×70cmと考えてまず誤りないといえよう。こうした基底部のうえにたつ煙道の上部構造については，一般的には筒状のそれを想定しうるのであるが，この窯体の場合，垂直にちかい煙道はまったく考えられない。いま少し情況を記すならば，さきにふれた二段掘りの痕跡からさらに上方約2mのところまで，流紋岩の整形ベースが約10度のゆるい傾斜角をもって，なめらかな面に仕上げられ，この面は煙道上方2mを起点として急にきつい勾配となって平均65度の立ちあがりを示し，それが徐々に現在の山林表土の斜面に接続している。だから，周辺の立地をながめながら，地形測量などを開始した時点では，山林自体の自然浸蝕の進行情況と照らしあわせ，この場所でも小さな地滑り現象があって，崖状になったと

考えていたところである。煙道の前面にまるで屏風岩をたてたようなこの形状が，まさか人為的な加工によるものであるとは，ロックの一部に赤褐色の酸化現象を認めるまで，まったく気づかなかったのである。ところが，煙道上部の斜面は，いわゆる「たかしこぞう」などと称される鉄分の沈着作用によりできる例の色調でなく，炎をうけて酸化した赤褐色で，手鍬で殴打すると黒色を帯びるばかりでなく，その広がりが，ちょうど窯体幅に等しいかあるはいやや広い範囲に限定される。しかも，さきにみた崖状の基底線は，平面的にみるかぎり窯体の主軸線上を起点として，煙道をかこむようにほぼ弧状に掘撰されている。このことは，窯体を構築する当初の段階において周到な計画にのっとった加工範囲を示すとともに，窯の操業時には，上部のロック自体もまた煙道機能の一部を荷っていたことを物語っている。

したがって，焼成室と接続し焼成室と同様の側壁を構成した煙道部分は，わずかに約80×70cmであったにしても，その上方の岩盤は荒削りながら，高温に耐える安定した煙道機能の一部を果したもので，焼成室をおおって煙道に続く天井の形態はおそらく亀甲型にちかいものではなかったか，と考える。炎はいきおい斜面をはいのぼって人為的崖面にまで達したであろう。

焼　成　室　あらかじめ本窯体は基盤層の流紋岩を掘り取ってベースとなし築窯した事実にふれたので，構築過程を考えつつ詳述したい。草木を伐採して地上物件をとりはらい，一定の傾斜角を決定して，地山面を整形したとき，およそ窯体の全長と幅は確定的となる。前項でふれた煙道前面の崖状の加工を含め，さらにロックの地山ベースを部分的には二段に掘りとったのち，掘り方内に側壁と床をつくる半地下式の窖窯を構築している。ただし，地山自体が南方および西方においてやや緩斜面であったため，逆に窯体の上半部（北方）と東半部において顕著な切り込みがみられる。仮りに，二段掘りの外周と内周とを，それぞれ第1次，第2次掘り方と呼称するならば，第1次の掘り方は，窯体の主軸線を基軸とした東半部において，主軸線から平均1.7mあたりを主軸線とほぼ平行して走り，それが上部では煙道をつつみこむようにめぐっている。また第2次掘り方は，窯体の上半部においてみられ，1次の掘り方から約20cm低いところの内側を平均2.8mの幅でやはり隅丸方形状にめぐっている。

煙道を除く窯体の残存長は約6.5mで，最下の幅2.7mのものがしだいに幅を狭ばめながら煙道部に接続し，その部位での幅1.6mをはかる。その間，床面および側壁に何らの隔壁も認められず，焼成室を構成する内部空間は，第1号窯の傾斜角に対する加工方法と相違して，窯体幅を絞ることによって炎の引きを高めた配慮がうかがわれる。両側壁は，30×30cm～10×10cm大の礫を横積みにした石室にみまう様相を呈するが，ほとんど控え積みはみられず，礫を一段積むたびに粘土を敷いて漆喰いのごとく固着したらしい。側壁の核ともいえる石組みの礫は，内側の第2次掘り方の肩に面をそろえて，ほぼ垂直に重ねられるが，たとえば，主軸直交セクションでみられるとおり，かならず礫と焼土との互層となって観察される。一般的には礫および焼土の厚さがそれぞれ10cm前後で，いくぶん焼土部分が薄い。これら礫と焼土によって構成される部分が側壁のもっとも内側を占め，その外方つまり裏ごめにあたるところは，黄褐色粘質微砂層をもって補強している。部分的にはそこまで加熱侵透範囲となり，赤褐色のより堅牢な壁となっている。換言すれば，外側の第1次掘り方から内側の第2次掘り方までの範囲は，実は0.9～1.0mにおよぶきわめて部厚い側壁であったことがわかる。内面する礫の一部または全部が自然釉に酷似した緑色あるいは藍色に変化し，各礫間の粘土もまた赤褐色に酸化していることが示すように，石組みを骨格とした側壁構造は，限りなく高まる火力に対して，破損率を考慮し長期の操業にそなえ，構築されたものであったに違いない。こうした構造の側壁

は焼成室の床面から約20～60cmの高さまで残存しているが，これがすべての側壁を構成するか否かについては高さの点においてなお検討されなければならないであろう。そこで，この点については，天井部が文字どおりずり落ちて検出された状況が一つの手がかりになると考えられる。その落下した天井部の厚さは約26cmで，内面の５～６cmまでは青灰色のマグネタイトとなっており，およそ竹材を思わせる支柱痕跡が数条みとめられる。ともかく，落下した天井部の内部とその部位における床との間隔は20～40cmで，その間隔内には赤褐色の焼土塊と淡赤色の混土層とが充塡されている。そこには側石が倒れこんだり，焼けた礫が個別的に混入された形跡もなかったのである。むろん窯体内の他の場所にあっても排土作業の全期間を通じて上記の礫類を検出することはなかった。したがって，石組み状の礫混入壁は本来もっとも保存良好なところにみられる高さ，約60cmを若干うわまわる程度で，その上には通常のスサ入り粘土の側壁があって，天井部に接続していたと考える。一方，天井の構造はその焼土から復元できる。つまり，天井壁体の内面には，主軸と直交する方向に幅２～３cmの溝状の痕跡があることに注目したい。この小溝は３～４本の間隔をもって密接し，10cm余りの間をおいてふたたび数本がまとまるという，粗密の関係が観察できる。この小溝は竹その他の木質材が焼けた痕跡を示すものであろうから，粘土の天井を支えるために編まれた支柱で，粗密の関係をもってドーム状に組みあげることは，よく「土をつかむ」よう工夫した反映であるに違いない。そうであれば，おそらく陶品を焼成する以前に行なう窯の空焚き時点で，まず消滅した天井の支柱線または骨格部といえる。（葛原）

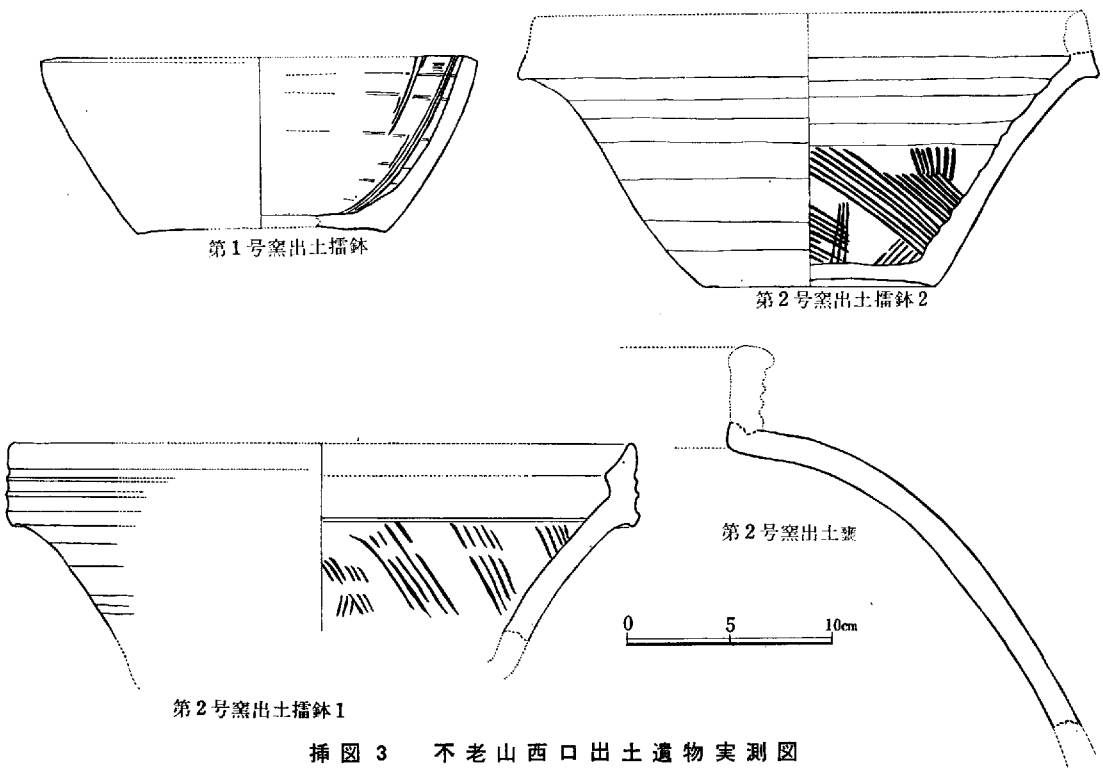
III 出土遺物（挿図３，図版13）

不老山西口第１号窯から出土したものは，甕胴部破片をはじめ擂鉢片を含むわずか５片にとどまる。

擂　　鉢　図上で復元できる唯一のもので，口径21.3cm，厚さ約１cm，底部径12cm，器高8.5cm，を計る。器面は灰黒色で，裏面まで貫通しない気泡がきわめて多く，口縁端部から約２cm下まで緑釉をおもわせる色調と光沢がみられる。底部は厚さ約0.7cmの平底で，やや開いて口縁部となるが，その間表裏とも，何らの作りまたはくせがない。口縁の外方直下に張り出しもみられない。口縁端はおよそ水平にちかく，わずかに外へ斜め仕上げとなっている。内面には，横ナデ調整の痕跡が５ないし６段あって，それらを切って，縦方向に４本の櫛状工具のあとがみとめられる。４本で一まとまりとなる条線は，約４cm間隔で口縁端部から底部いっぱいまで施されている。また，当地方の擂鉢にしばしば付く口縁の片口が，本来あったか否か確定することは困難である。

この窯跡の熱残留磁気測定(1)の結果によると，西暦1330年をあい前後する時期を示しているので，鎌倉時代から室町時代初期の所産であることは確かである。この枠内に入ることは，その整形技法ともけっして矛盾しないが，測定誤差をいっそう縮めるために，他の周辺窯址から出土したものと比較検討してみよう。合が淵窯址例のものは「鉢は口縁端を水平に平らにし，やや深目で片口になっている。口径約30cm，高さ15cm，灰白色」(2)で，鉢の場合，「一つ新しい擂鉢の形態に，そのまま移行し得る形だった」(3)と考えられている。また，グイビー谷窯址例では，「擂鉢は口径30cm強，高さ11～12cm位，厚さは１cm前後，口縁端は外へ斜めんでほぼ平坦，僅かに上下に張り出し気味のものもある。内面には６～７本目の櫛状工具で10～12ヶ所位に縦の条線が入っている。原則として片口になるらしい。」(4)と報告されている。そこで，擂鉢を手掛りとした場合，合ヶ淵例より後出的であることはいうまでもなく，この点については，熱残留磁気測定の

結果による両者の比較によっても，よく合致するのでまったく問題ない。しからば，グイビー谷例との先後関係について検討した場合，どうであろうか。両者の口径および器高を比較するならば，グイビー谷例のそれがひと回り大きい以外，器壁の仕上げおよび底部や口縁端部の作りなどきわめて酷似している。ただ，擂鉢に特有な内面の櫛状の条線をみた場合，本窯址例のそれは，口縁端部から底部いっぱいまで施されているのに対し，グイビー谷例では，口縁下１～２cmのところから条線がはじまっている。櫛状条線の，こうした仕上げは，むしろ室町～安土・桃山時代にかけて顕著にみられるところであり，本窯址例の仕上げがやや先行するのではなかろうか。



挿図３　不老山西口出土遺物実測図

とすれば，本窯址は，合ヶ淵期以降のグイビー谷期に近接したグイビー谷期以前，つまり鎌倉時代後半頃，14世紀前半のある一点に時期をおき，操業したものと考えられる。

次いで不老山西口第２号窯の出土遺物を検討してみよう。

擂　鉢　１　口径約30cm，深さ９cm以上の擂鉢で器壁は約1.2cmを計るが，底部は欠損している。色調は備前焼きに普遍的な暗赤褐色できわめて緻密な焼成となっている。口縁部は，約４cmの高さをもちほぼ垂直に立ちあがって，外面に３本の太い凹線がみられ，その内面もくの字状のくせをもっている。胴部の外面はシャープなヘラ削りの痕があり，内面には荒い櫛目が５本を単位として付けられている。

擂　鉢　２　口縁端部が欠損しているが，推定口径約27cm，深さ約13cmを計るものと思われる。口縁の立ちあがりは約３cm強で口縁の外方下端はやや下へ張り出している。器壁の内外表面はともに暗赤褐色に酸化しているが，器壁内は黒青色に還元している。きわめて堅牢な器壁となっている。そして内外面とも顕著な横ナデの整形痕跡があり，それが外に７段内に８段みられる。内面の櫛目は一定の方向をもたないで部分

的には重なりあって施されている。そうした櫛目条線は，擂鉢の全器高のうち下半約７cmから底部にかけて付けられている。

甕　口縁端部を欠き，口縁のおりかえし付近から下部約20cm弱の断片である。推定口径80cm以上におよぶと思われるが，器高その他を推定することは困難で，また重要な口縁端部の特徴を，残念ながら観察できない。色調はやはり普遍的な暗赤褐色で，器壁の厚さは約１cmの均一な仕上がりで堅く焼きしまり光沢もよい。

本窯址の出土遺物にみられる特徴は，擂鉢の作りが非常に部厚でかつ口縁部の作りなどにみられるハデな仕上げをしていること，器形を問わず，すべての胎土と焼成がしっかりしていること，などをあげることができる。一方ではすでに窯の構造の項でふれたとおり，備前市周辺では見られない石組み状の特異性など，全体的により後出的なあるいは進歩した段階として位置づけないわけにはいかない。熱残留磁気の測定によれば，1550年前後という数値が出ているので，戦国時代末から安土・桃山時代の初め頃に属す窯であったといえよう。　（葛　原）

注（1）　熱残留磁気測定はすべて大阪大学基礎工学部広岡公夫氏の手をわずらわした。記して感謝の意を表する。
（2）　間壁忠彦・間壁葭子「備前焼研究ノート（1）―備前焼の成立―」『倉敷考古館研究集報』第１号
（3）　間壁忠彦・間壁葭子　前掲書
（4）　間壁忠彦・間壁葭子　前掲書
（5）　広岡公夫氏による。

まとめにかえて

以上調査報告で述べたように不老山東口古備前窯址の構造等について要約すれば，床面幅約2.5m～３m，床面傾斜角度約15度，推定全長約40mを計る「ずん胴型」の長大な窖窯であることが判明した。また灰原から出土した分焔柱片は，遺構の痕跡はつかみえなかったが，窯の規模からみてもその築造を考えることができるであろう。さらに溝および土塁遺構は，本窯址と同規模と推定されるもう一本の北窯をとり囲む状態で構築されていることは，これら２基の窯址が一生産単位として存在し，操業したことを決定づけていると考えてよいであろう。

ところで，本文ではまったくふれることができなかったが，本窯址周辺の遺跡についてみれば，上方にある墓地付近の山林から平安末期の山坏，甕片の散布がみられる。規模等については不明であるが，平安末期の窯址を想定することができる。さらに斜面を下った南には，工事中に切断された二基の窯址がある。断面観察の状況では，床面幅約２m前後の規模の窖窯が合い接して北に開口している。さらに斜面を下った道路ぞいにある毘舎門様付近からも灰原がみられる。また，これらの窯址が存在する谷奥の各斜面においても，平安末期から室町期にかけての窯址が数基存在していることが知られている(1)。しかもこれらの窯址はすべて本窯址に先行するかまたは相接する時期のものである。すなわち，この伊部下り松付近の小範囲の中で，平安末期から一貫して窯業の継続性があって，これらの生産単位のものが，表面的には分離して存在しつつも幾くつかの生産単位に分けられていく方向を示しているものと考えられる。これがより一層明確に現われるのは「座」の統制などによる独占体制がしかれてくる中で，窯そのものも工人も集中化されてくるのではなかろうか。本窯址は先にみたように２基の窯址を一生産単位として存在しているだけでなく，出土遺物の

9割近くを擂鉢がしめる点を考えれば，大窯前期の様相をもった性格の窯として位置づけることができるであろう。

ひきつづき不老山西口古備前窯址について要約するならば，まず1号窯は，推定全長 9m，平均窯体幅 1.7mの窖窯で，傾斜角約30度をはかり，出土の擂鉢を手掛りとした操業時期と熱残留磁気の測定値は合致して，鎌倉後半期を示している。

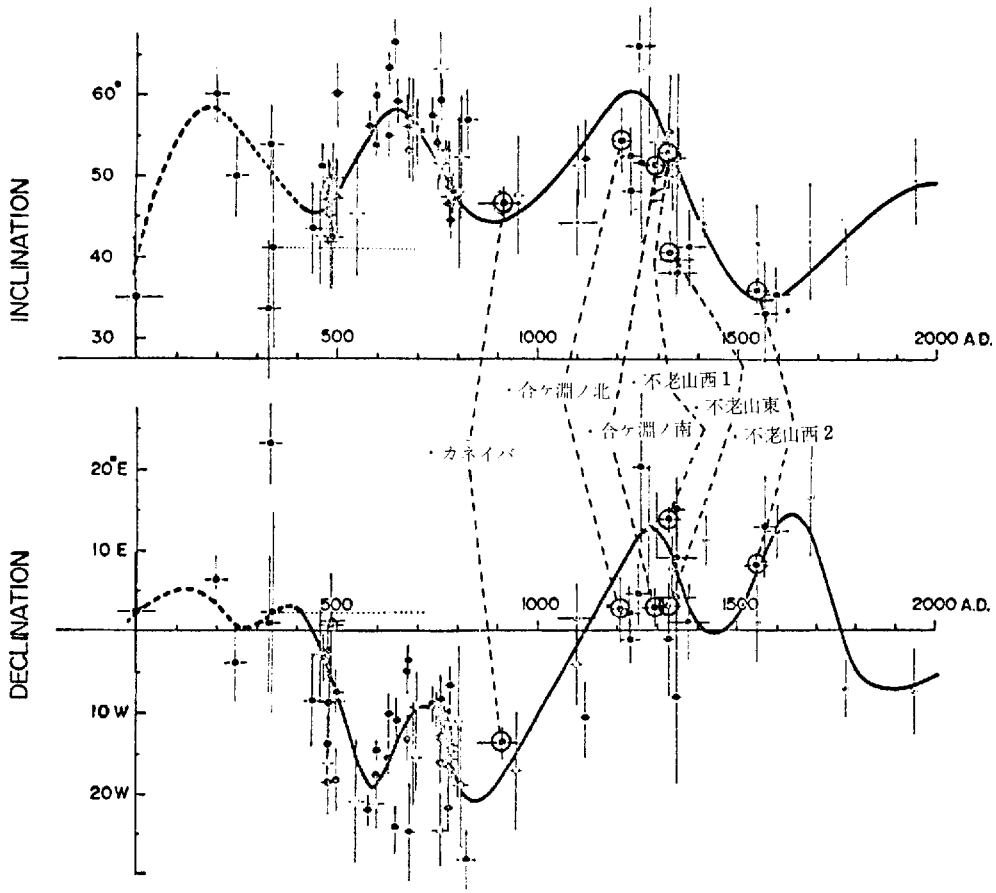
2号窯は，全長10m以内と推定され，15度の床面勾配を補うように，窯体幅は徐々に絞られ煙道に接続する窖窯で，側壁は石室状に構築された特異な構造をもつことが判明した。伴出遺物および熱残留磁気の測定結果から，戦国末期から桃山初期の窯と考えられる。

だから，一括して山麓窯と呼称される窯の中にも，実は鎌倉期に属するものから桃山初期に入る窯など各種のものがあって，個々の窯体は長期にわたる窯業の展開過程の中に位置づけられる。この西口地域には，発掘した窯体に近接して「備前北大窯」が所在するが，大窯期が桃山時代初期に付合することを想起するならば，ここにも不老山東口と同様の，別の窯業生産単位があったこと，したがって，谷筋や小平野によって峻別された生産単位は幾つかに分離して所在し，全体としては座の統制を形成する下地があって，やがて商品流通のいっそうの侵透と備前焼きに対する需要の増大とが相互作用して大量生産にみあう大窯期へと展開するのであろう。

遺物の検討を混じえながら，窯業の変遷についていま少しふれてみよう。不老山東口地域では山坏を出土する窯体，不老山西口地域においては発掘調査した第1号窯，これらは，従来しられる須恵器窯と比較した場合，それほど大差ない規模で，後出の窯より小規模なものである。

ついで，不老山東口古窯址，不老山西口第2号窯址などの段階が至来する。全体量の8割近くを占める遺物は，擂鉢で，その機能については，対象物に対してツブスあるいは磨耗させるにはかならずしも適さない，とみる見方がある(2)。たしかにほとんどの擂鉢は，内面に施された条線がまばらで，しかも条線の切り込みは浅く条線の山は鋭角的でない。ここにいう備前擂鉢は，厳密にいえば，コネ鉢としての機能が優先していたと考えられる。このことは，たとえば，陶邑ＴＫ23号窯出土の径10cm強，器高11～12cmの小型擂鉢(3)あるいは邑久郡寒風古窯址から出土し吉備考古館に保管されている小型擂鉢(4)など，コネ鉢としての先駆形態を見出すことによって，十分うなづくことができる。数条の浅い線刻を内面にもった鉢の中で，コネる対象物は一体なにか。それは端的にいって，まず柔質のおそらく植物質のものでなければならず，二毛作の結果，収穫された麦類ではなかろうか。そうだとすれば，農業生産の発展と不可分にかかわり，農家にとって重要な必要品の一つであったろうと思われる。それはまた，備前焼きがすばらしい焼成で完全な陶器，堅牢な器壁をもち破損率が小さかったことにより，ますます日常生活に不可欠のものとして商品市場をおし広げていったものと想定される。水甕にしても，同様の事情に基づくであろうが，一方では，戦国の動乱期において戦場での生死を分つ水の貯蔵器として，最適であったに相違ない。　　（河本，葛原）

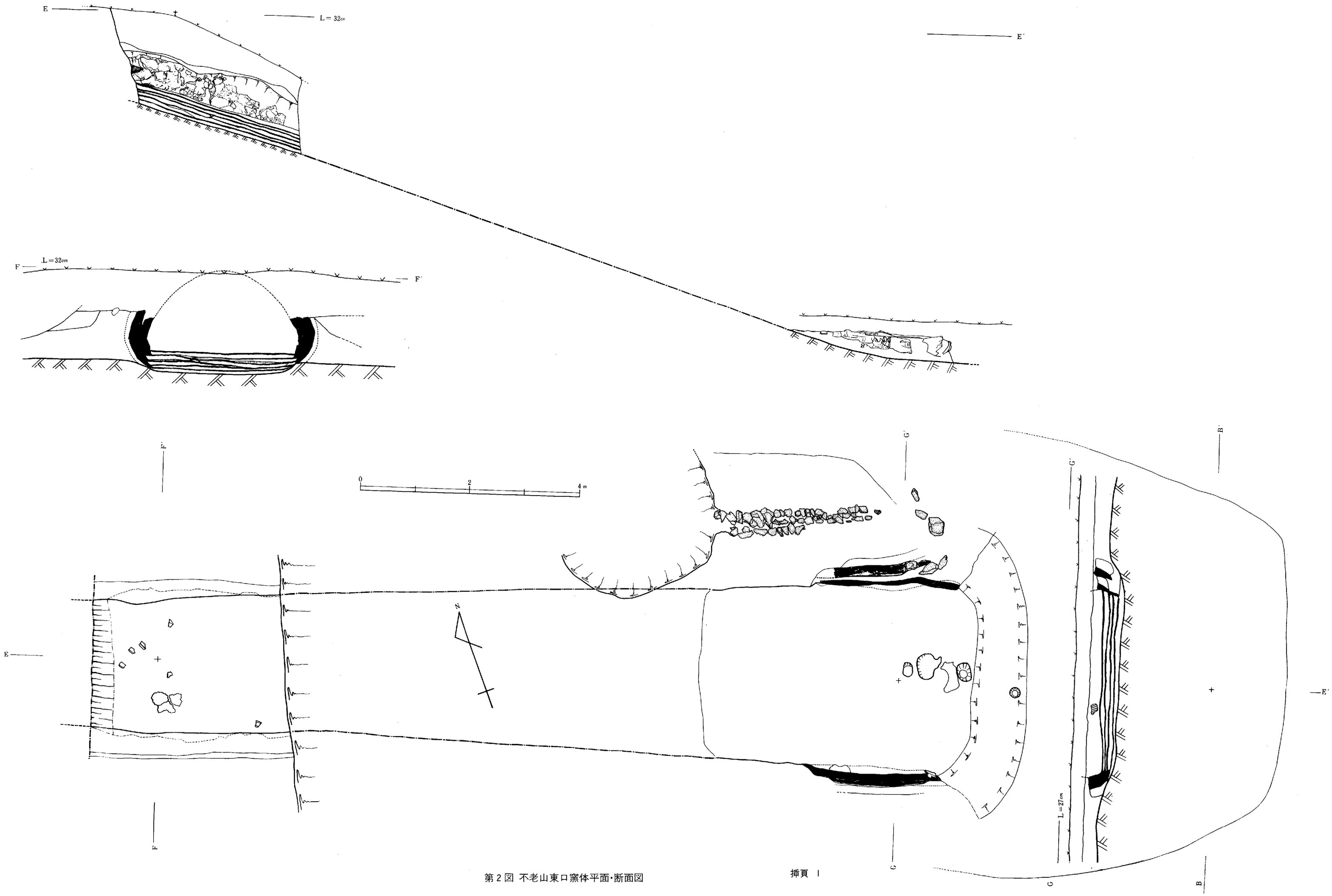
注(1)　間壁忠彦，間壁葭子「備前焼研究ノート(3)」倉敷考古館研究集報5号　1968年
(2)　近藤義郎氏の教示をうけた。
(3)　田辺昭三「陶邑古窯址Ⅰ」
(4)　近藤義郎氏の教示による。



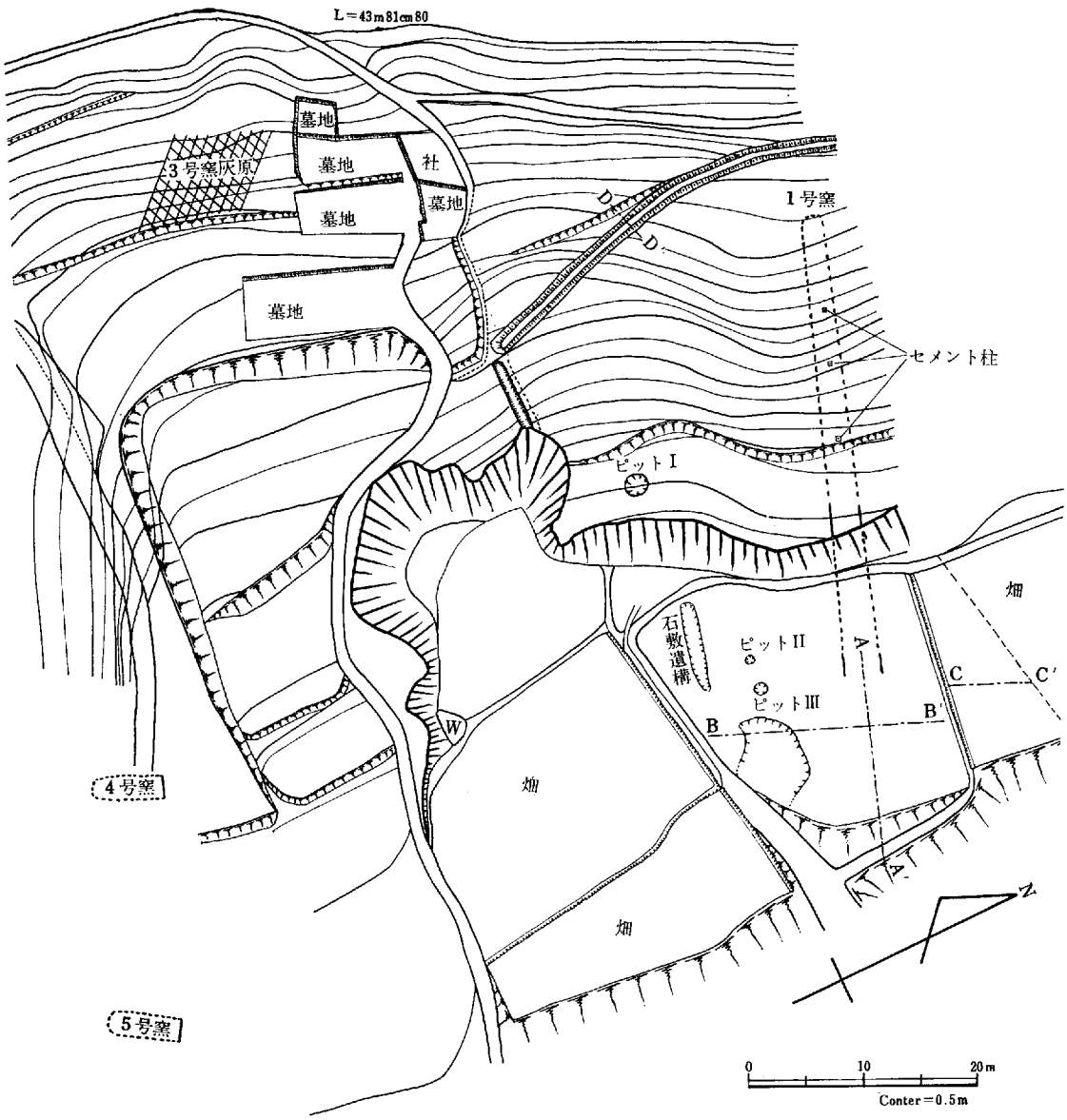
挿図4　熱残留磁気測定値

Site	N 試料個数	D 偏角	I 伏角	α 誤差	K 誤差	Age 年代
不老山西口第1号窯	27	13.6	52.7	1.6	301.6	1,330±30
不老山東口古窯	27	2.9	40.6	2.7	104.9	1,330±30
不老山西口第2号窯	32	8.1	36.0	1.6	239.4	1.550±30

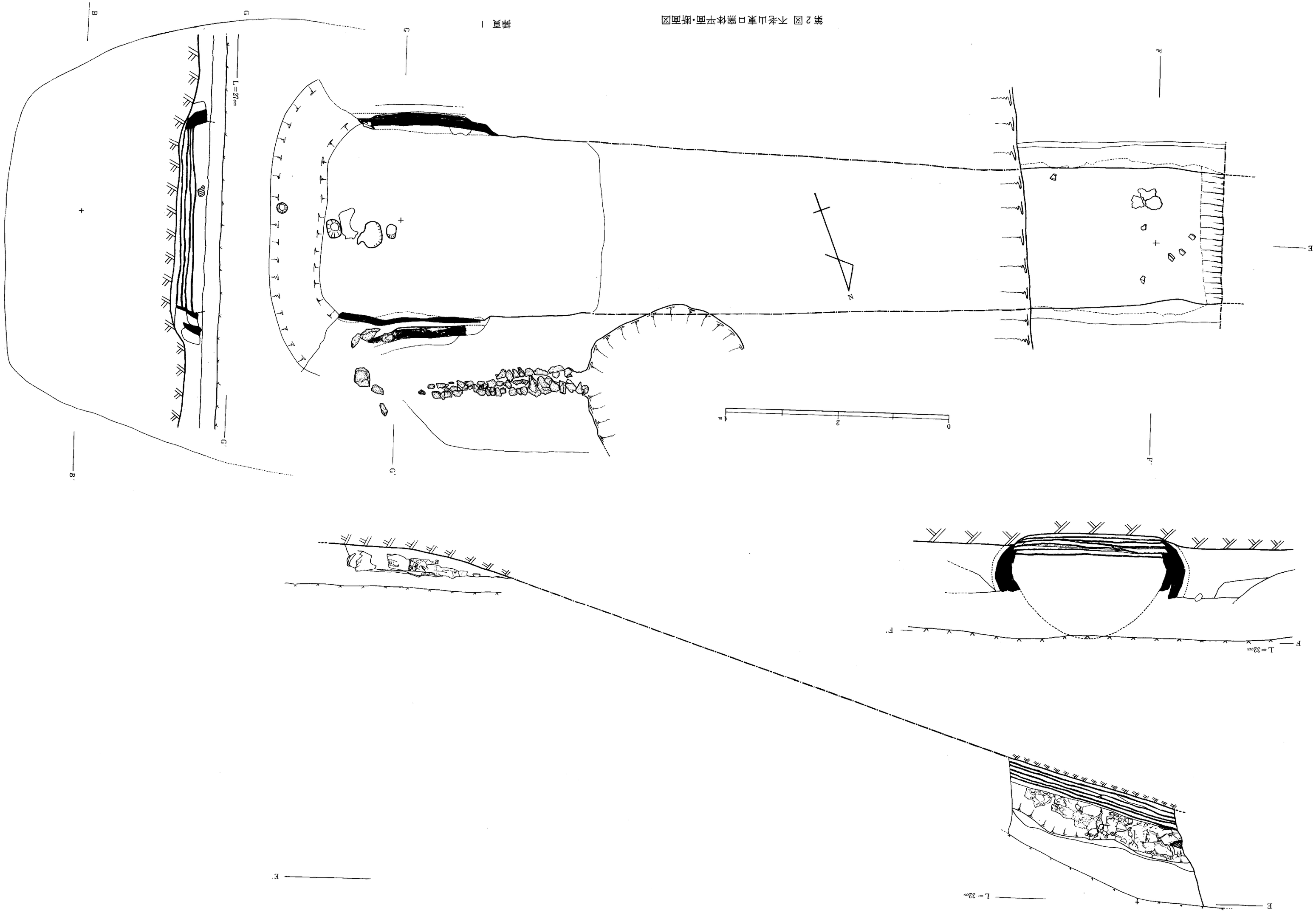
（大阪大学基礎工学部　広岡公夫氏による）



第2図 不老山東口窯体平面・断面図

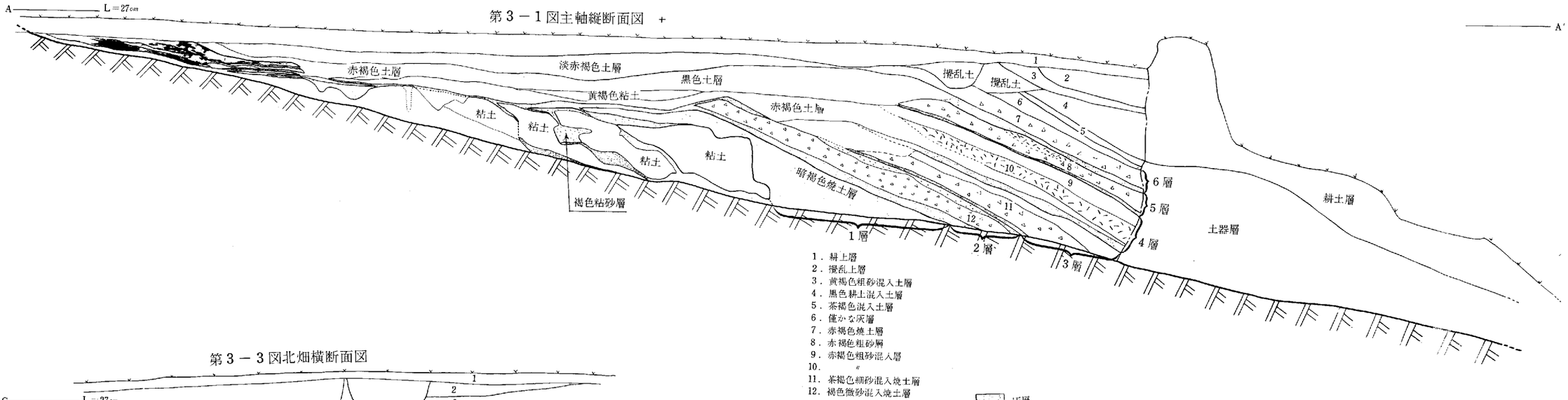


第 1 図　不老山東口古窯址地形実測図

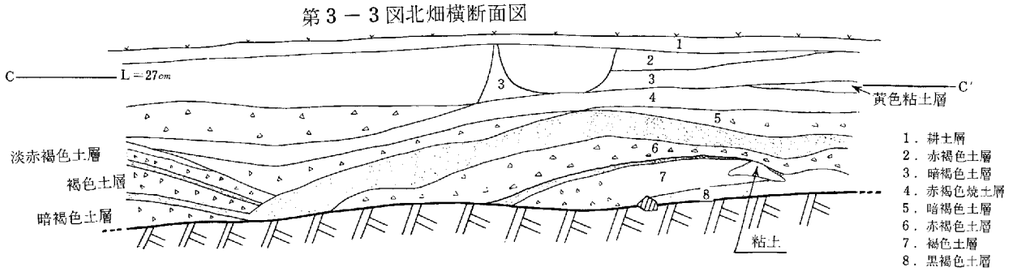


第２図　不老山東口窯体平面・断面図

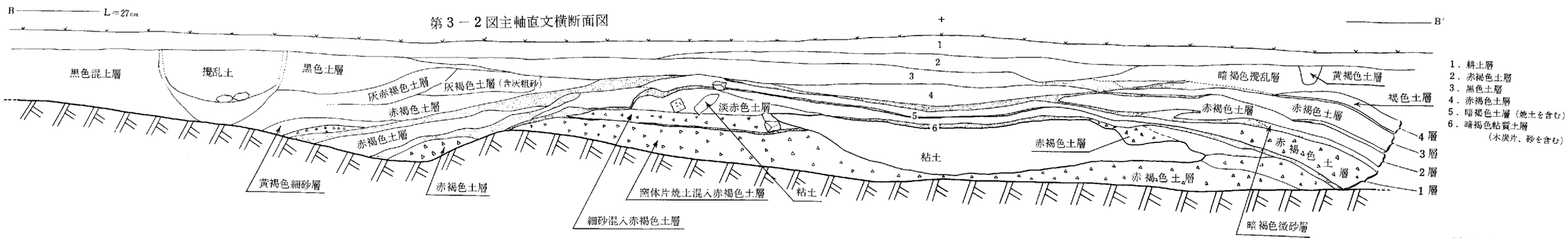
第３－１図主軸縦断面図



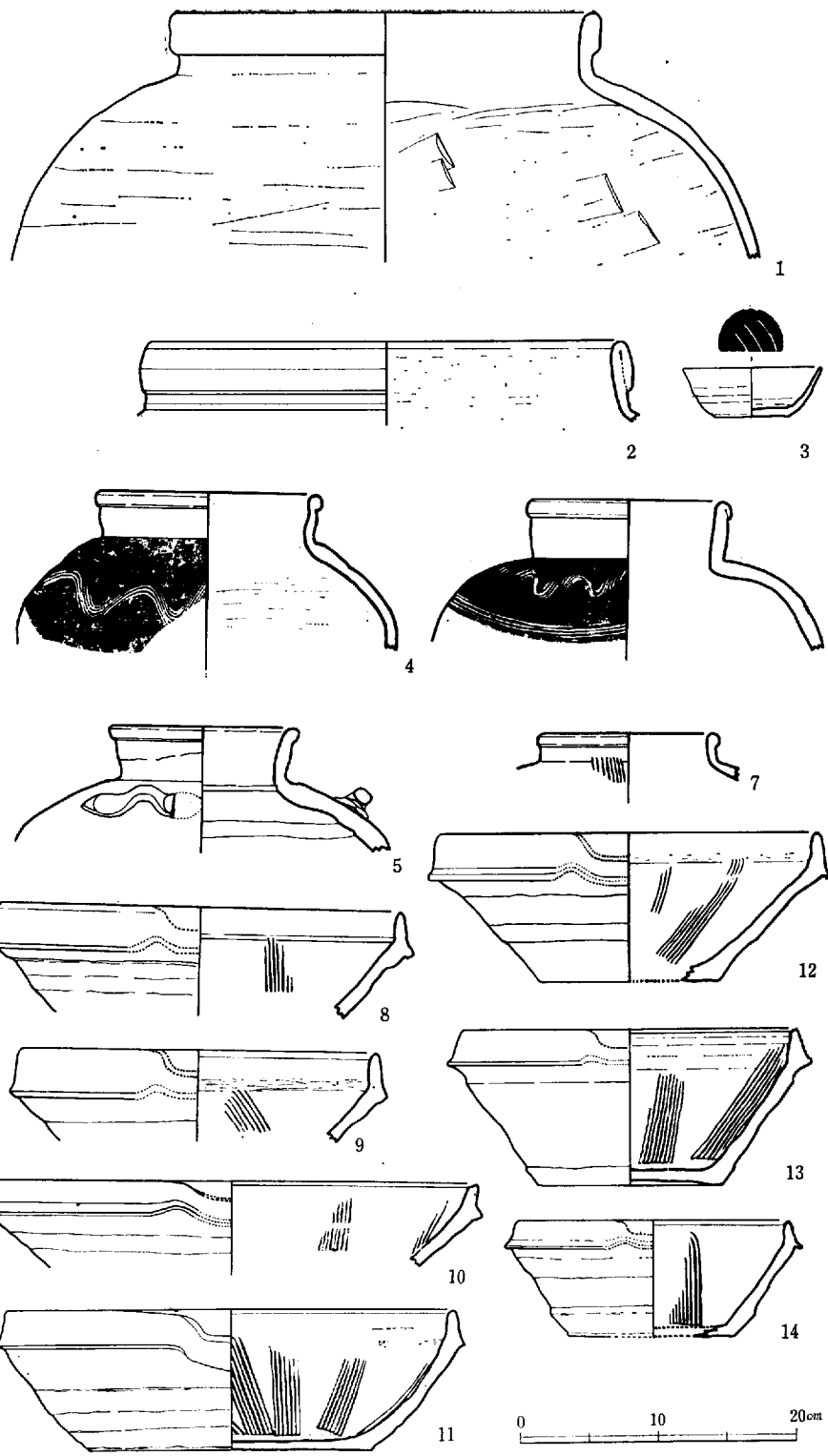
第３－３図北畑横断面図



第３－２図主軸直文横断面図

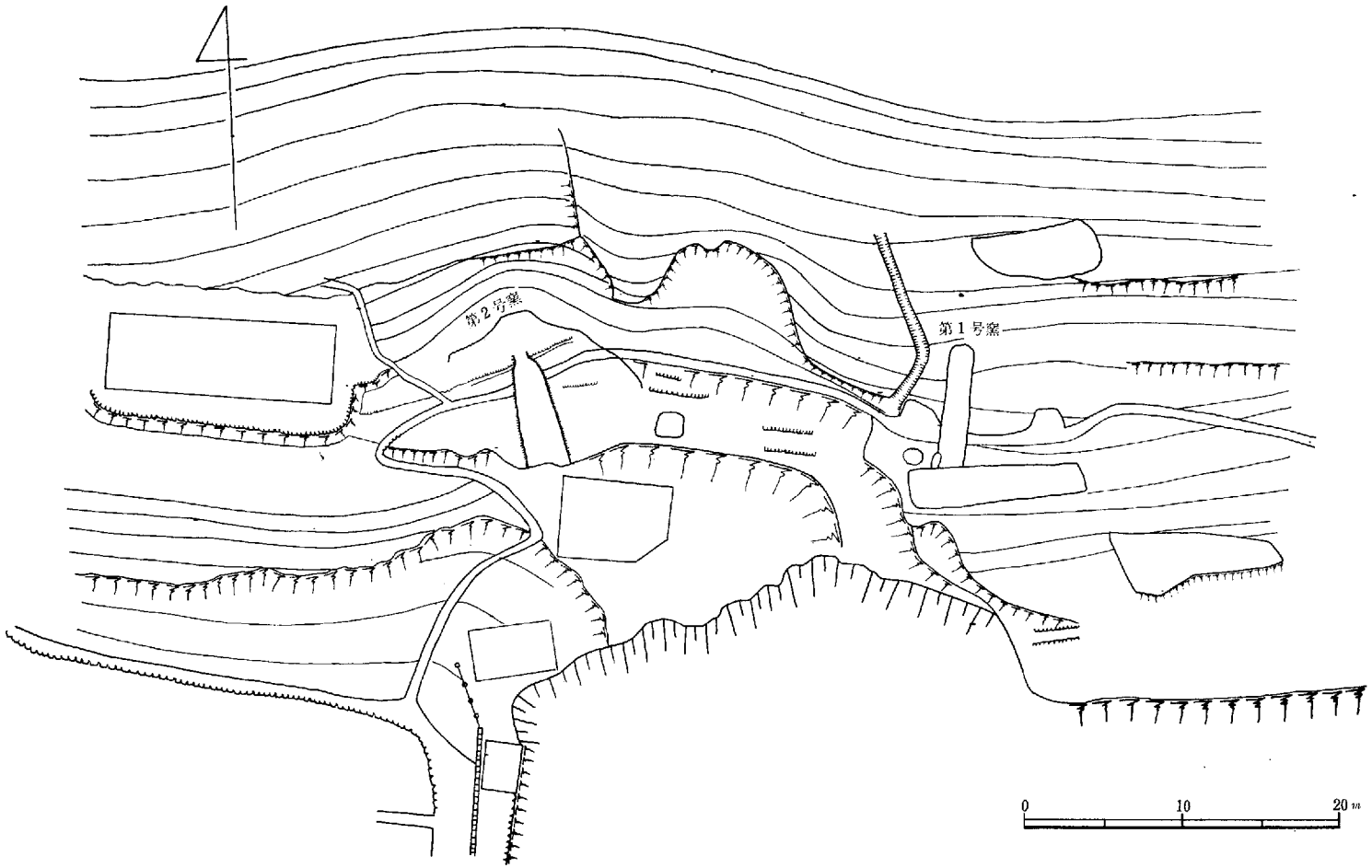


第３図　不老山東口灰原縦・横断面図

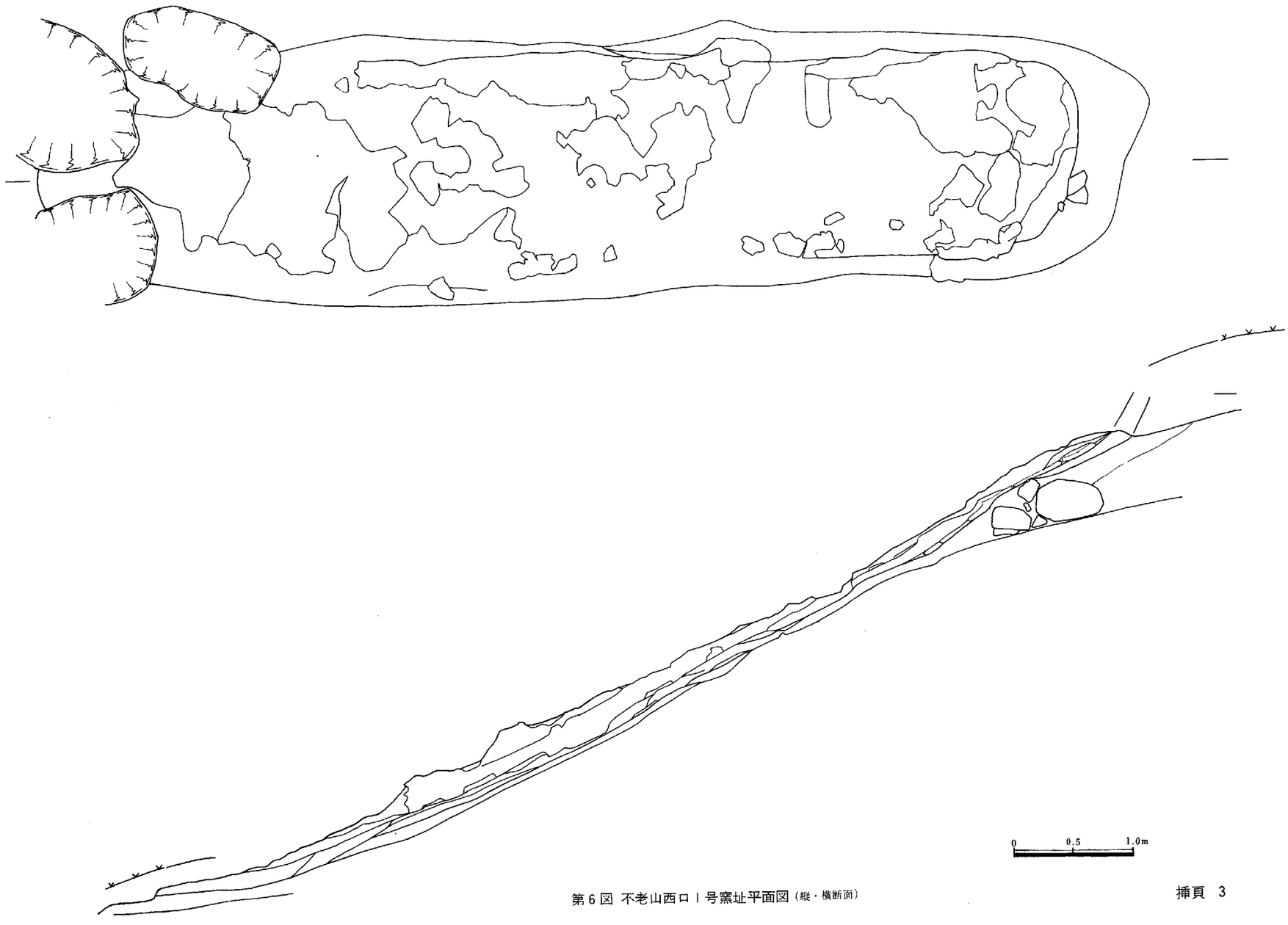


1層……2．6．7．13，　4層……3．10．12，　6層……1．11．14，　窯体内……8．9

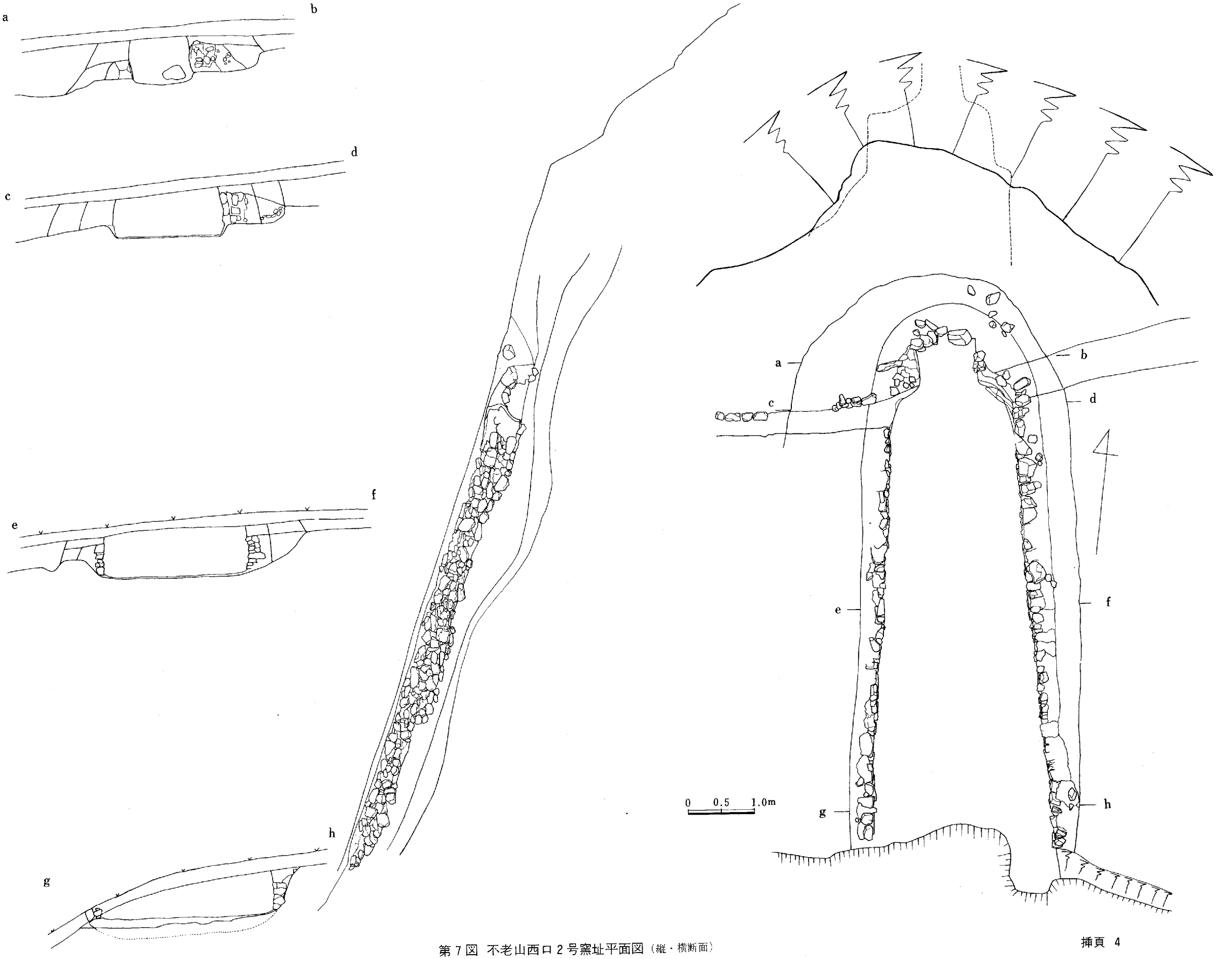
第 4 図　不老山東口遺物実測図



第 5 図　不老山西口古窯址地形実測図

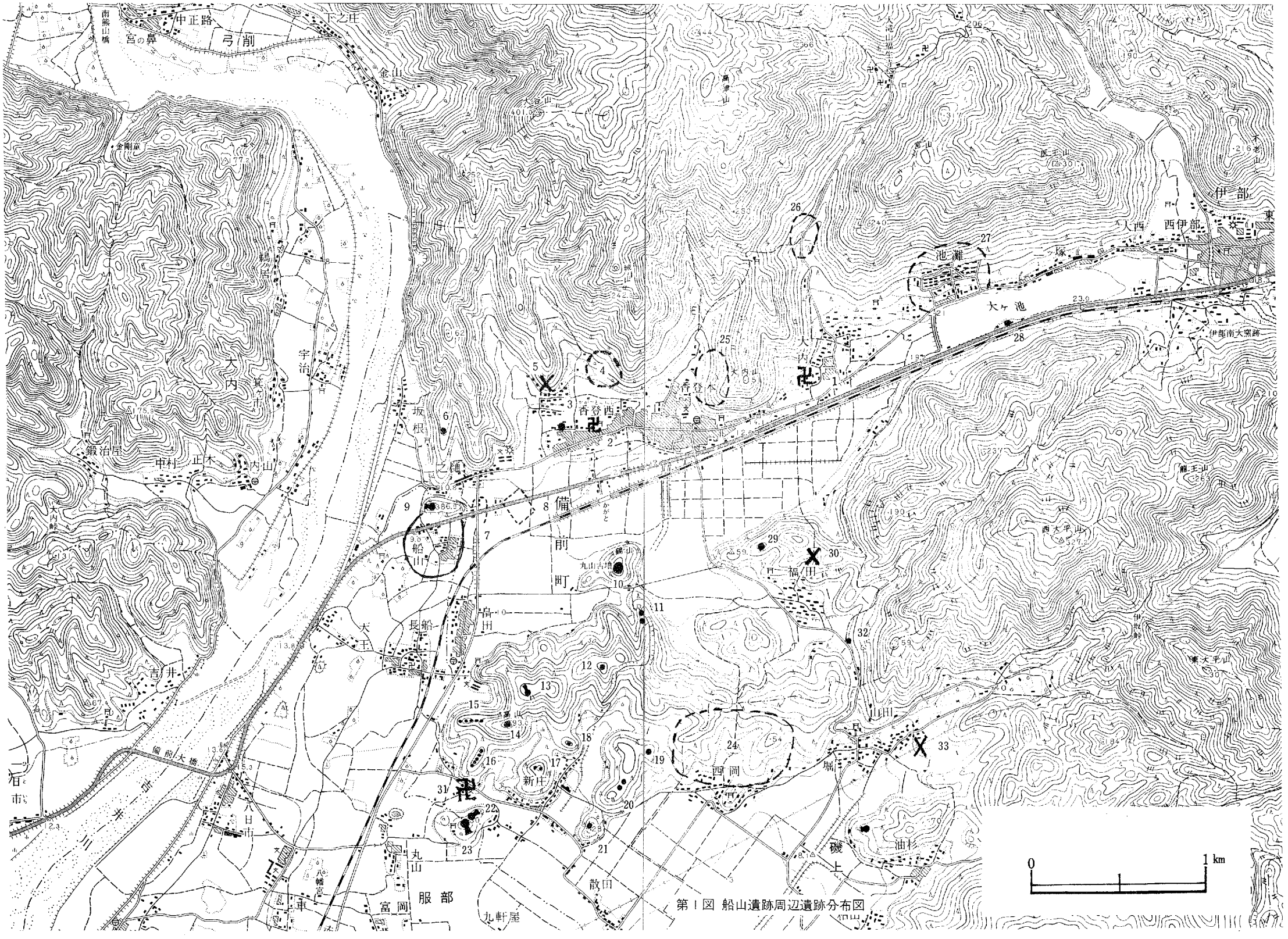


第6図 不老山西口Ⅰ号窯址平面図（縦・横断面）



第 7 図　不老山西口 2 号窯址平面図（縦・横断面）

船　山　遺　跡



第Ⅰ図 船山遺跡周辺遺跡分布図

はじめに

この小報告は山陽新幹線建設に伴う事前調査として，岡山県教育委員会が1969年12月20日から，1970年2月27日にわたり発掘調査した，備前市（発掘当時備前町，1971年4月1日市制施行）畠田243の1，243の3，245番地の地点約300㎡の発掘報告である。

船山という地名は発掘地点の西南約200～300mの地点に所在する集落で和気郡長船町に属する。この船山の地で以前に弥生式土器などが出土しており，全国遺跡地図（岡山県）にも散布地として記載されている。地形観察の結果，本発掘地点は船山遺跡とつながる可能性が大であり，遺跡の中心は船山の地にあると推察されるため，発掘時に大門遺跡第2地点と仮称していたのを改め，本遺跡を「船山遺跡」と呼称することにする。

第1章　歴史・地理的環境

備前東部地方は岡山県の東南端に位置し，吉井川が中国山地の山合いをぬって瀬戸内海へ流れ出んとする最下流流域一帯の中小の平野部を水稲耕作の基盤としている。そのなかでも吉井川東岸部（現在の備前市，長船町，邑久町，牛窓町，岡山市の一部）を中心とした地域は日本古代社会において邑久とよばれていた。この邑久地方には牛窓湾の古墳群などかなりの規模の古墳が相当量築造されている。それらの基盤はどのような歴史的背景をもっているのであろうか。邑久地方では先土器，縄文時代の遺跡も若干は発見されているが，ここでは省略し，弥生式時代から筆をおこすことにしたい。

【邑久地方平野部の弥生遺跡】 邑久地方における弥生遺跡では邑久郡邑久町所在の門田貝塚，潤徳遺跡がある程度内容が判明している。両遺跡とも弥生前期から古式土師器まで一貫した土器を出土しており注目されている(1)。この遺跡群以外は正式な報告例は少なく内容は十分つかまれていないようであるが，仁生田遺跡を南端とし堂免遺跡，水南遺跡，樋口前遺跡，国城遺跡，箕輪下遺跡，細工原遺跡など弥生式土器出土地点が点々とつらなっている(2)。これらは吉井川によって形成された自然堤防上のベルト地帯に立地していると考えられ，部分的にはとぎれているであろうが，直線距離で延々南北に8㎞に及んでいる。船山遺跡はこのベルト地帯の最北端に位置している。これら以外にも弥生時代遺物出土地点はいくつか所在するが，平野部に立地する弥生遺跡は前述の長大なベルト地帯に集約され，そこに形成された遺跡が邑久地方における中心的な弥生集落群であることはまず確実ではなかろうか。そしてこれらの遺跡群の分布は三つの平野部に立地するものとして大別でき，南部が邑久平野，中央部が長船平野，北部が香登平野に属している。

【香登（かがと），長船（おさふね）平野および周辺の前期古墳】 この地域における前方後円墳，大円墳を列記すると表1の如くである(3)。

これらの古墳は長船，香登平野の中に所在するものが多く，古墳時代の前期における一つの大きな政治的地域集団として系列的に把握できる。ただ築山古墳はこれらの地域において東南端に位置しており邑久平野との関連も考えられ，これらの集団として把握すべきものか否か，また両地域の統一的位置を示すのか否か検討される必要がある。邑久平野においては弥生集落は大規模なものが存在するにもかかわらず，表記した

古墳と同列の規模の前期古墳は現状では存在しない。未発見の可能性もあり，また牛窓湾の古墳群との関連も看過できないものである[4]。

表(1)　香登・長船平野の主要前期古墳

名　称	墳　形	規　模	時　期
長尾山	前方後円	約 65m	前Ⅱ期?
天神山	〃	約 120m	〃
花光寺山	〃	約 110m	〃
鶴山丸山	円	約 60m	前Ⅲ期
土師茶臼山	帆立貝	約 45m	前Ⅲ期
築山	前方後円	約 90m	前Ⅳ期
牛文茶臼山	帆立貝	約 50m	〃

【香登平野における後期古墳】 邑久地方では数百基におよぶ後期古墳が発見されているが，内容の明らかなものは少ない。全体的な記述は困難なので，ここでは香登平野における後期古墳についてのみ概観したい。内容は明らかでないが，ごく初頭のものとして船山古墳がある。この古墳は船山集落のすぐ北の比高約35mの小独立丘陵上に築造された前方後円墳で約60mの規模を有し前方部を西へ向けている[5]。香登平野ではこの船山古墳の築造を境にして前方後円墳はつくられていないようである[6]。後期古墳群は数ヵ所存在するが，現在確認できるのは各群で数基ずつであり，総計しても20基前後である[7]。いずれも小さな横穴式石室をもつ小円墳であるが，池灘古墳群中の一基の横穴式石室墳はこの地域では大きいものであり，盟主的な位置をしめしている[8]。（図1，表2参照）

表(2)　分布図対照表

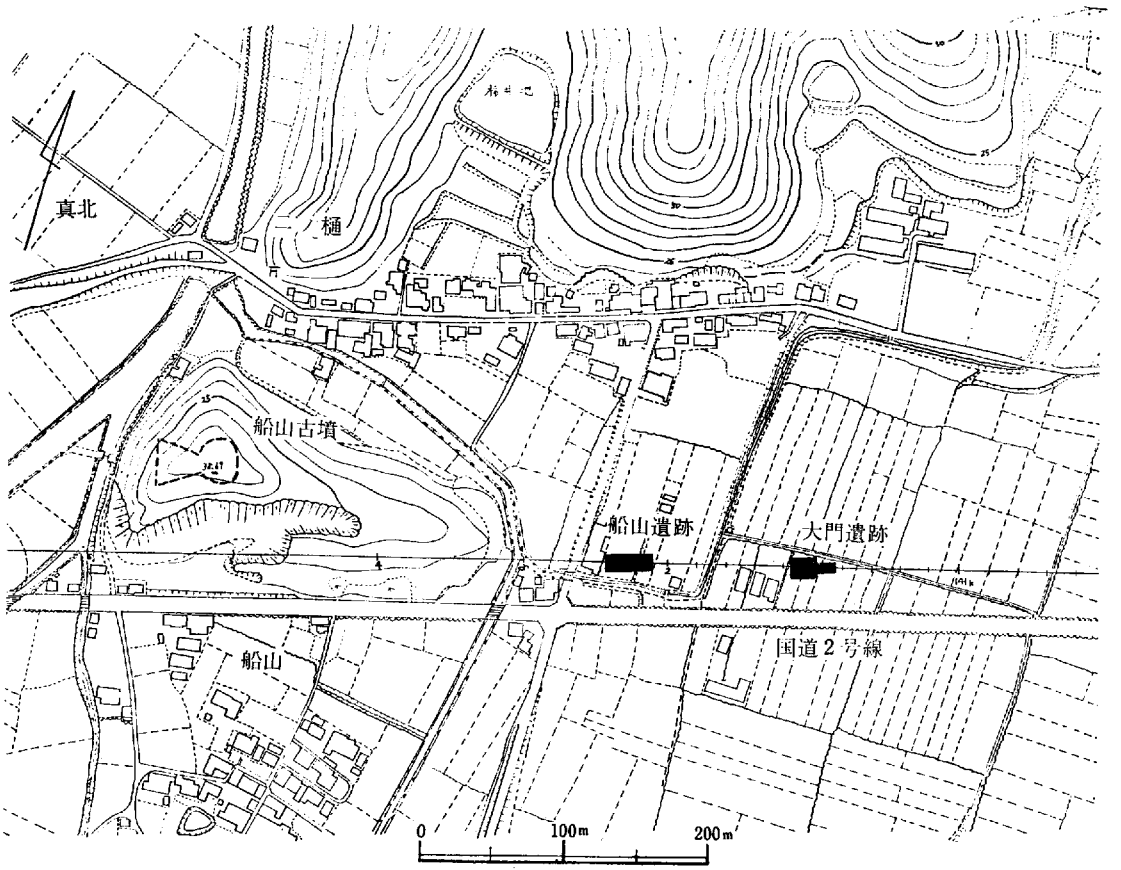
1	大内廃寺	12	円墳	23	花光寺山古墳
2	香登西廃寺	13	長尾山古墳	24	古墳群
3	城山稲荷古墳	14	高山古墳	25	奥谷古墳群
4	山根古墳群	15	古墳群	26	大滝道古墳群
5	中世墓地	16	〃	27	池灘古墳群
6	シスト	17	円墳（2基）	28	古墳
7	船山遺跡	18	円墳	29	新羅山古墳
8	大門遺跡	19	〃	30	小屋谷遺跡
9	船山古墳	20	円墳（2基）	31	服部廃寺
10	丸山古墳	21	円墳	32	横穴石室墳
11	宝万坂古墳	22	天神山古墳	33	窯跡?

【立　地】 船山遺跡の立地については香登平野の細密なボーリング・データをもっていないので，発掘による所見，および発掘調査中の分布調査ならびにその後の踏査の所見から概述したい。発掘地点の東端から東へ約50mにわたる地点ではボーリングによると包含層は存在しない。その東には現在使用されている小川をはさんで，後述する大門遺跡があり別の微高地が存在する。発掘地点から北へは30m前後微高地が続いているようである。その北は二ノ樋地区から東西方向に旧河道の痕跡が認められ，それは調査地点東端部から大門遺跡の微高地との間を通りぬけ東南方向へぬけているようである。そしてこの旧河道の北方は山裾までの約200m近くの間まで，水田遺構の存在の可能性はあるとしても弥生集落の立地する微高地はまず存在しないようである。発掘地点の西方には人家と道路があり発掘できなかったが，その30m西は船山古墳が築造された小独立丘陵の東裾にあたり，現在小川が南北方向にぬけている。以上で発掘した船山遺跡の北，西，東の限界については一応把握できるのではなかろうか。南方向へはどれだけのびるのか推測は困難である。船山遺跡の微高地の範囲は南側の拡がりが不明なため断定はできないが，発掘地点の微高地自身はそれほど大規模なものではないと考えられる。なおこの微高地は黄色粘土層を基盤としており，その海抜の最高値は8.36mである。

周辺に目をうつすと，船山古墳の存在する小独立丘陵の南裾から船山集落（長船町に属する）にかけて弥

生以降各時期の土器の散布がみられ，南端は長船神社周辺までのびる微高地が観察される。長船神社付近では古墳時代前期の土師器が若干出土している。この微高地は東西，南北とも200mをこえるものであり，これが船山遺跡の本体であると考えられる。この微高地も黄色粘土層を基盤としており，吉井川の河川活動により形成された自然堤防かもしれない。

香登平野内ではこの船山遺跡，大門遺跡以外には現在のところ大規模な弥生集落が立地する微高地は発見されていない。石器の出土した地点は3ヵ所あり，1ヵ所は香登西集落内で石鏃が採集されており，他の1ヵ所では大内で太型蛤刃石斧が採集されている。残りの1ヵ所は福田字小屋谷で石庖丁などが発見されてい



挿図1　船山遺跡付近地形図

る(9)。なお丸山古墳の近くから，天神山，花光寺山古墳近くにいたる香登平野南端部は現在でも大雨のときには水田が水没する低湿地帯である。この周辺は弥生時代においては耕作不可能な地域であったと考えられる。

注(1)　鎌木義昌「門田貝塚の文化遺物について」『吉備考古』84号，1947年，和島誠一編『日本の考古学』Ⅲ　357頁，1966年，邑久町教育委員会発行『邑久考古館』1971年，なおこれらの資料は故長瀬薫氏の長年の努力が大きいものである。

(2)　文化財保護委員会『全国遺跡地図』（岡山県）1967年。

(3)　長尾山古墳は発掘調査期間内に分布調査をした際，踏査したものである。

梅原末治「岡山県下の古墳調査記録（一）」『瀬戸内海研究』８号，1956年，中に天神山，築山，牛文茶臼山の３古墳について報告されている。
梅原末治「備前行幸村花光寺山古墳」『日本古文化研究所報告』４，1937年。
梅原末治「備前和気郡鶴山丸山古墳」『日本古文化研究所報告』９，1938年。

（4） 近藤義郎「牛窓湾をめぐる古墳と古墳群」『私たちの考古学』10，1951年。
小野山節「五世紀における古墳の規制」『考古学研究』63号，1970年。

（5） 船山古墳の現地踏査で埴輪片，須恵器片を少量採集している。周辺にはシストも存在する。

（6） 周辺では長船平野に油杉山古墳という横穴式石室をもつ前方後円墳があり，邑久平野周辺でも１，２基存在するようである。

（7） 1930年，永山卯三郎編集の『岡山県通史』には約60基記載されているが発掘調査中，古老に聞いた話でもほぼ同数あったということである。またこの10年間でも10基以上破壊されたことが確認されている。故に少なくとも倍数は存在した可能性が強い。それらの一部には陶棺を使用した古墳もあったとのことである。

（8） 池灘大塚は1971年４月１日付けで備前市指定文化財となっている。石室全長10.5m，玄室長６m，の規模である。（角川書店『古代の日本』４，中，四国，1970年，199頁による）

（9） 石原秀吉氏，楠原清馬氏の教示，および『岡山県通史』139頁による。

第２章　遺　跡　の　概　要

第１節　調　査　経　過

船山遺跡は後述する大門遺跡の近くで須恵器が数片出土していたのを高橋　護が採集したこと，大門という地名が存在すること，船山散布地で各種の土器片が出土していたということで約200ｍの区間を要調査地域として，岡山県教育委員会と日本国有鉄道との間で覚書がかわされていた。工事もおしつまったため，1969年８月12日，岡山県教委，高橋　護，泉本知秀の２名の立会いで，伊部工事区請負，梅林建設の援助でユンボによる試掘を行ない大門遺跡と後に船山遺跡と改称した２つの地点で遺構の存在が確認された。

岡山市雄町遺跡第４調査区の発掘が長びいたため，この遺跡の発掘にとりかかったのは1969年11月25日からで，雄町遺跡第４調査区発掘調査終了の翌々日であった。当初大門遺跡の発掘に着手し，大門遺跡の見通しがついた時点で船山遺跡の表土はぎにとりかかった次第である。

調査に当り事務所として香登公民館（備前町公民館分館）の借用を心よく引き受け下さった武用謙一分館長，同館主事友光登志子女史，作業員雇用にあたりお世話になった行吉豊町会議員，国次輝夫氏，また楠原清馬氏，守時桂太氏，藤原謹一氏，石原秀吉氏には種々の御教示をうけた。特に備前公民館長，日幡光顕氏には一方ならぬお世話になった。その他地元の方々の援助も大きかった。物品は現地調達だったため香登農協の方々にお世話戴いた。また伊部工事区の方々，梅林建設の方々にも種々お世話になった。記して感謝の意を表したい。

日　　誌

12月20日（1969年）　表土はぎ開始，弥生前期らしき土器片出土

12月21日　ベルコン移動，休憩小屋建設，４ｍグリッドによる割りつけ。中央部東西方向にセンターを設定。西端より1,2,3とし北を４ｍごとにN－１，N－２，南を４ｍごとにS－１，S－２とする。

12月23日　神野主幹，花房課長補佐，葛原主事視察にくる。

12月24日　器材小屋建設

12月25日　弥生中期壺，高杯片出土，12月30日まで表土除去。

1月4日（1970年）　作業再開

1月12日　正岡睦夫主事参加

1月13日　西南端で溝1のプラン検出

1月14日　桐野係長見学

1月15日　発掘地点西端部で大きい溝のプラン検出，20㎝掘り下げ（溝2）

1月17日　溝2を中層まで掘り下げる。土師器片少量出土する。

1月19日　大溝より古式土師器出土，西端部の東西中央壁をはずす。舟形土壙発見

1月21日　対策委員会の準備，起案作成後連絡をとる。

1月22日　No.2,3の中央壁除去，舟形土壙1を掘り始める。

1月23日　西半部削り出し作業

1月24日　発掘区東半部削り出し開始，5-N-1の溝状遺構内より太型蛤刃石斧の頭半分出土，舟形土壙1より甕形土器出土，写真撮影

1月26日　大溝より石庖丁片出土

1月27日　大溝掘り下げ続行，午後対策委員会，和島誠一，（春成秀爾），鎌木義昌，三杉兼行の諸先生，岡田課長，桐野係長出席，途中，篠井県教育長一行視察

1月28日　溝2を底近くまで掘り下げる。木片出土

1月29日　東南部で住居址らしきプラン検出。（H-4）

1月31日　4号住居址検出，埋土中に完形の土器あり。

2月2日　発掘進行計画の再検討

2月4日　発掘区西半部写真撮影，1号住居址プラン検出，7-S-2でピット判明，西端部，東端部の2カ所に基準高設定

2月5日　5-N-1で3号住居址南半部検出，1号住居址掘り下げ開始

2月6日　3号住居址周辺を拡張，1号住居址の東北隅で楕円形土壙（土壙1）発見

2月7日　2号住居址発掘開始，溝2断面実測終了

2月9日　1号住居址，写真撮影，実測，土壙1掘り下げ開始

2月12日　3号住居址平，断面実測，写真撮影，4号住居址掘り下げ

2月15日　4号住居址断面実測，写真撮影

2月16日　4号住居址西北隅ピット内で大型壺発見

2月18日　4号住居址ならびに周辺の遺構の平面実測，土壙15断面実測

2月19日　4号住居址東北隅でピット（土壙14）発見，6-N-1の長方形土壙掘り下げ。

2月20日　舟形土壙3を掘り上げ，断面実測後写真撮影，南東部ピット群掘り上げ

2月21日　遺構全景写真撮影，香登小学校児童約150人見学

2月22日　柱穴切断確認，土器等の荷作り。

2月24日　町役場，地元関係者に挨拶まわり。

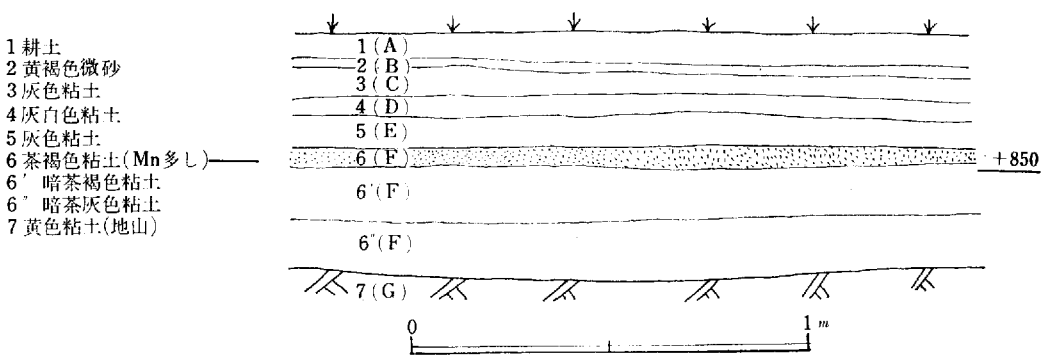
2月27日　器材引き上げ。

3月2日　伊部工事区，梅林建設へ挨拶まわり。

第2節　遺　　構

船山遺跡発掘により発見された遺構は300㎡という面積にもかかわらず，住居址4，舟形土壙3，土壙17，溝2が確実なものとして存在する。一番古い遺構は弥生式時代前期最終末，あるいは，中期最初頭のもので一番新しい遺構は古墳時代前期前半に属する。各遺構の記述を行なう前に層位について若干ふれておきたい。

層　　位　発掘調査地点は，発掘調査を行なう一年前までは水田ならびに畑として耕作されていたが，調査時には雑草が枯れて荒廃地化していた。発掘地点西端部では弥生式時代包含層は存在せず，近世層をはがすとすぐ地山となり，中央部，東端部には弥生式時代包含層としての茶褐色粘土層が存在する。耕土層から茶褐色粘土層ならびに黄色粘土層地山までの土層厚さは30cm～40cmを測る。耕土層から弥生式時代遺構の発見される茶褐色粘土層までの間には4層の堆積がみられた。そのため，耕土層をA層とし，茶褐色粘土層をF層と呼ぶことにした。B，C，D層は近世に属する土層と考えられ，その面には何ら遺構は存在しない。またE層と仮称した土層は灰白色粘土層であるが，西半部にわずか5cm前後の厚さで存在するのみで全体には存在しない。このE層では縄目叩きの平瓦片1片と須恵器の細片が少量出土しているのであり年代を確定することはむずかしいけれども，後述する大門遺跡でもこの種の灰白色粘土層が存在し，その土層は平安時代から中世におよぶ土層であることが判明しているのでその土層との関連から考えて同時期の可能性をもつものとして把握しても大過ないであろう。この土層を切りこんだ遺構も存在しない。問題となるのはF層である。このF層の厚さは中央部で約20cm，東端部で40cmあり，その差と同様東端部では地山面が中央部より20cm低くなっている。このF層の最上面はマンガン分の結核が多く5cmほど削りこまないと遺構の検出は行なえなかった。このF層は当初小トレンチで断面を観察したが明瞭に分離できる線は見い出されなかったので約5cmずつ掘り下げて調査を行なった。その結果F層の中間部で確認された遺構と，黄色粘土層（G層）まで掘り下げて発見された遺構との二通りのケースが存在する。



挿図2　層　　位　　図

1 住　居　址

1 号 住 居 址 （第2図1，図版1－2）

平面は方形と推定されるが西半部は大溝によって切られており，存在しない。柱穴は綿密に追求したが竪穴内では検出されず，掘りこんだものは存在しない。埋土中には少量の炭が混入していた。床面には貼り床がある。出土遺物は数片の土器片のみであるが，甕形土器の口縁部があり，船山8類土器より若干後出の様相をもつもので，雄町14類併行期の可能性が強い。（年代の類別は後述の本章第3節ならびに雄町遺跡の遺物の項参照。以下同様。）

2 号 住 居 址 （第2図2，図版2－1）

平面形態は隅丸方形である。竪穴内には柱穴は存在しない。付属施設としては中央より少しずれた位置に炉が存在する。この炉は赤色の焼土が固まっている。その厚さは約3cmある。竪穴内に周溝はなく，通有の周溝部分に地山を掘り残したと考えられる幅15～20cm，高さ約3cmのベルト状のものが存在し，南辺部はかなり大きな高い掘り残しが2カ所存在する。断面観察によるとこれは本来一つのもので新しいピットに切断されているようである。出土遺物は床面にはなく，埋土中に土器が数片，鉄製品？が一片（北半埋土下層）混入していた。土器は少量であるが小さな甕の口縁部片，底部片内面へら削りを有する甕腹片によれば，船山7類に属する可能性が強い。

3 号 住 居 址 （第3図）

平面形態は方形で床面には貼り床痕跡が存在する。床面で確認される柱穴は2コであり，伴うか否か不明である。西北部は未発掘であるが方形住居址の対角線上の2本柱の竪穴式住居とするにも根拠はない。1号，4号住居址との関連で柱穴が竪穴内に存在しない可能性もある。床面の中央部南より，やや南寄りに長方形の浅い凹みが設けられている。その埋土中には炭，灰が多く，火どころと考えられるが底面は全く焼けていない。出土遺物は床面で甕形土器（第10図30），鉄片があり，火どころの可能性をもつ凹み底面から高杯（第10図27）と甕形土器口縁部破片1点が検出された。埋土中からは高杯，鼓形土器（第10図28，29，31）などが出土している。この中には破片であるが丹塗りされた高杯脚部が1点存在する。床面の土器は船山8類に属する。

4 号 住 居 址 （第4図1，図版2－2）

南半部は用地外のため未発掘であるが，平面形態は方形に近いと考えられる。床面に貼り床があるが，これにも柱穴は存在しない。中央部に火どころの可能性をもつピットが設けられており，北西コーナーには楕円形ピット（60×50×56cm）がある。前者には炭灰が混入し，後者の埋土中には大・小の壺形土器2個が（第5図-1図版2－2）が埋まっていた。床面で少量の土器片が検出されたが実測，年代決定はできない小片である。埋土中には高杯，鉢形土器（第10図32～35）などがある。その中に丹塗りの高杯杯部破片が1点存在する。いずれも船山8類に属すると考えている。

2 舟 形 土 壙

舟 形 土 壙 1 （第5図2，図版3－1）

発掘区西端部において発見された遺構で，立ち退き交渉のこじれている民家の石垣および小道が存在するため，全長はつかめていない。東西方向に長軸をもち，東端部床面には浅い凹みが存する。その直上に甕形

土器（第10図1）が埋没してこわれていたが底部は存在しない。凹みより西の底面で壺底部破片（第10図3）も検出された。埋土下層には焼土，炭などが混入している。埋土中から土器片数点と石鏃1本（図版5のa）が出土している。船山2類に属する時期の遺構である。

舟形土壙 2

1号住居址を掘りあげた後で確認された南北方向に長軸を有する遺構である。舟形土壙3により中央部を切断され，南端部は瓦土採取壙によりこわされている。北端部も未発掘のため全長は不明である。底面には遺物は存在せず，埋土中からも甕形土器破片1点（第11図20）が出土しているのみである。焼土などの混入も認められないが舟形土壙状のものである。

舟形土壙 3（第6図1）

東西方向に長軸をもち舟形土壙2より後の時点で掘りこまれた遺構である。発掘当初における小トレンチで西端部を，瓦土採取壙により中央部を切断されているが，長軸は約5mを測る(1)。底面東端部には浅い凹みがつくられているが底面では遺物は検出されていない。埋土中には焼土，炭が少量混入している。埋土中から鉢形土器（第10図2），数片の甕形土器（第11図25～30）が出土している。船山2類，3類の両土器が混在するが船山3類に属すると考えられる唯一の遺構である。

3 土　　壙

土　　壙 1（第6図2，図版3－2）

1号住居址により西半肩部の一部がとばされているが，楕円形の土壙である。埋土中には下層に灰，焼土が混入し，中層には土器，角礫が混入している。断面は鉢状のカーブをなす。土器は壺下半部（第10図15）と甕形土器口縁部があり，船山5類に属する。

土　　壙 2（第7図1）

平面形態は隅丸長方形に近い。底面は平坦で変化を有しない。埋土中上層には炭，灰が混入しているが，中・下層ではほとんど見られない。出土遺物は底面近くで壺形あるいは甕形土器底部（第10図4～6）を検出し，上層では甕形土器破片（第11図7～19）が出土している。船山2類に属する。

土　　壙 3～9

発掘区東半部の西半部に存在するこれらの土壙群はその大半が，一部欠失しており，全体の平面形態を把握できるものは少ない。大半が隅丸長方形であるが土壙8は長方形である。しかしいずれも底面は曲線的なカーブをなしている。いずれにも出土遺物は存在せず埋土中にも炭，灰は含んでいない。年代は他の遺構との関連から弥生中期前葉，中葉に属するのではないかと推定できるのみである。各遺構の規模は第3表の数値，所在位置は第9図参照。

土　　壙 10～15（第7図2）

平面形態はいずれも楕円形で断面も全て鉢状のカーブをなしている。土壙13と土壙15の埋土には炭，灰，焼土が混入している。土壙10，14では遺物は出土していないが土壙11，12，13，15では土器片が出土している。土壙11では9片の土器が出土しており，その中には無頸壺の破片（第11図31，32）がある。土壙12では10数片出土しているが決め手になる破片は存在しない。土壙13では数片出土したのみであるが壺の口縁部があり，船山4類に属する可能性をもつ。土壙15では他の土壙の量に比してかなりの量の土器が出土してい

る。底面から甕，高杯（第10図11，12）が，埋土中より壺，甕（第10図7～9）などの破片が出土している。土壙11，13は船山4類に属し，土壙15は船山5類に属する。

土　　壙　16～17（第8図1，図版4－1）

2つの土壙とも平面形態は長方形である。底面は平坦で立ちあがりは直角的である。埋土中には焼土，灰は見られない。土壙16の出土遺物は底面近くの蓋形土器（第10図14）と埋土中で数片の土器が出土している。土壙17には遺物はかなりの量みられるが完形品はなく細片が多い。無頸壺片は土壙11出土の土器（第11図31，32）と同じ文様構成であり，船山4類に属する。

4　溝（第8図2，図版4－2）

溝は2本発見された。溝1は小規模で掘った長さも短かく年代も不明である。

溝2は非常に大規模であり本来の幅も3mをこし，残存する深さも1.7mをこえている。発掘した東肩上面最北部にはテラス状のものが存在するが，一部分検出しているだけである。溝2最下層には粘土が埋没し砂の堆積は認められない。木片が少量出土したが土器は一片もみられない。中層には少量の土器細片が混入していた。上層では磨製石庖丁（半欠，図版5のC）が出土し，土器細片もみられた。これは古式土師器であることは確かであるが細かい年代の決め手を欠くものであった。1号住居址を切って掘られていること，ならびに出土土器から推して船山8類よりも少し後の時期に埋没したと考えられる。

遺構番号を付加していないが1号住居址の南半部下層周辺から土壙16の上層という東西方向に約5cm大の角礫，弥生中期土器片を多量に含む溝状の凹みが存在する。西半部では1号住居址の影響によるのか明瞭な線を見い出すことができなかったが，東半部では断面で落ちこみ線を確認し，平面も一部つかむことができた。埋土は茶褐色粘土層でF層と近似していたがやや黒っぽい土であった。この溝状凹み出土の土器はリンゴ箱3箱分あり，船山遺跡の全出土土器量リンゴ箱5箱からみて最も多量であった。角礫は土器の量と同程度混入していた。その中で太型蛤刃石斧の上半部（図版5のd）1点が検出された。出土土器は船山6，7類の両者が混在して量では圧倒的に多かった（第10図　図10，16～26）が，船山1類（第11図1，2，6）など古式のものも少量混入していた。埋没状況から氾濫の可能性も考えられるが決定できない。一番新しい土器は船山7類に属し，その時期に埋没したものと考えられる。

注(1)　舟形土壙は津島遺跡でも検出されており，ほぼ同規模の遺構であるが前期前半に属する。岡山県教育委員会『津島遺跡発掘調査概報』1970年

第3節　遺　　物

1　土　　器

船山遺跡出土の土器は細分すれば8つの小期にわけられる可能性が大である。その全てが型式名を与えられるほどのものではないので記述にあたり便宜上船山1，2類と順序をつけて船山8類まで概述したい。

船山1類

第11図1～6の土器は小破片ではあるが，いずれもヘラ描き文を施している。1～5は甕形土器の破片である。2の土器は口縁部が逆L字型をなしているが断面は三角形にちかい。その部分に縦方向に刻みめ文が施されている。胎土中には径1～2mmの石英粒をかなり含んでいる。いずれも，包含層，および遺構の年代

決定に直接関連しない溝状凹みへの混入物であり，同時期の遺構は発見されていない。壺形土器に関しては不明である。

船　山　2　類

第10図1～6，第11図7～25の土器がこれにあたる。ほとんどが甕形土器の破片であるが，甕形土器口縁部は船山1類と同様逆L字形で断面三角形をなすものが多い。しかし口縁下部の文様は平行櫛描き文となっている。口縁下部の最大径を有し，これらを最大の特徴とする。その単位は4本から6本のものが多く，数段施されており，その幅は約5cmある。その櫛描き文の下部に，刺突文を有するものと有しないもの，口縁部に刻みめ文，あるいは円形竹管文などの文様を有するものと有しないもの，全く無文のものもある。第10図1の甕は底部を欠くが，形態の判明する唯一の土器である。これは4本単位の櫛を5段にわたって施文しているが，その下部，口縁部への刺突文，刻みめ文はない。壺形土器は底部（第10図3～6）のみで，あとは不明である。第11図23，24はあるいは壺形土器の破片かもしれない。第10図6の土器底部は上げ底となっており，甕形土器の底部の可能性が強い。舟形土壙1，ならびに土壙2出土の土器を標式とする。

舟　山　3　類

舟形土壙3出土の土器の一部（第11図27～30）で他には包含層中で2，3片出土しているが，遺構に伴う他の資料は存在しない。少量であり壺形土器に関してはこれまた不明であるが，甕形土器の口縁部ならびに胴部最大径の位置に特徴を有する。船山1類，2類にみられる逆L字形断面三角形の口縁とは大いに異なり，口縁部は弧状のカーブをなし外方に開いている。胴部最大径は上端ではなく中央部近くに位置すると考えられる。口縁下部には船山2類と同様の平行櫛描き文が施されており，その下端に列点文を施したものもある。

船　山　4　類

土壙11ならびに土壙17出土の土器（第11図31，32）を標式とする。2点とも無頸壺片であるが，5本単位よりなる櫛描き波状文を数段施しその下部に一段のみ平行櫛描き文を施し，そのすぐ下部に櫛状施文具による列点文を施している。小片ではあるが甕形土器の口縁部も出土している。甕形土器には平行櫛描き文は施されていない。

船　山　5　類

土壙15出土の土器（第10図7～9，11～13）を標式とする。壺形土器ならびに高杯の形態の全容は不明であるが，甕形土器は器形の判明するものが1点存在する。非常にうすい器壁の甕である。口縁部は船山4類の甕口縁部に近似しているが端部に少し角ばったクセを有し，内外面とも横ナデ調整が行なわれている。胴上半は内外面とも縦方向の細かいハケナデ調整を行ない，下半部も内外面共に縦方向にヘラ磨き調整が行なわれている。胴部最大径は胴中央部に存在し，外面の一部に刺突文が施されている。

船　山　6　類

溝状凹みの出土の土器を標式とする。（第10図16～20）壺形土器には頸部に粘土紐をはりつけたものが多い。粘土紐には刻みめ文をつけるものとつけないものとの両方が存在する。口縁部内面に斜格子文などを施した壺破片（図版6の8）もある。甕形土器は口縁部に特徴を有する。船山5類に比し口縁部の厚さが肥大化し，端部に立ち上がり状のクセを有する。高杯は7類との識別ができていない。

船　山　7　類

溝状凹み出土の土器を標式とする。（第10図21～23）壺形土器は不明であるが，甕，高杯，器台のいずれにも凹線文が施されている。実測していないものに鉢形土器片などもある。

船　山　8　類

3号住居址，4号住居址出土の土器を標式とする。（第10図27～35）高杯の脚端部には全て4個の円形透し孔が施されている。脚部の短いものと長いものの二様が存在する。壺形土器は平底である。第10図31は船山8類より後出の可能性もある。3号住居址埋立中のもので，特殊品でもあり，小片である。

2　その他の遺物

本遺跡では石器の出土量は少なく，数点しかない。磨製の太型蛤刃石斧の上半部1点と半欠の磨製石庖丁1点，ならびに石鏃2点があるだけである。サヌカイト片も小片が10数点出土しているのみである。2号住居址埋土中出土の鉄片は断片であり，用途は不明である。3号住居址床面直上出土の鉄細片はそれが鉄であると判断できるだけであり，形態の推定できるようなものではない。

第 4 節　終わりにあたって

全体的なまとめを行なうことはむずかしいので，断片的に気づいたことだけふれておきたい。遺構について述べる前に土器の編年的問題を若干記述し，その後で2，3の問題にふれたいと思う。

土　　器

船山1類土器は断片的資料で，存在することを指摘できるのみであるが，これと同型式の土器は，岡山県南部では報告のなされている資料として，門田貝塚[1]，津島遺跡出土[2]の土器などが存在する。弥生前期後半に属する。船山2類土器は門田上層[3]と呼ぶ数片の土器片の出土が門田貝塚，南方遺跡で報告されていただけで今回その量は増加し，甕形土器の形態も1点だけではあるが大体把握できる。広島県の中山遺跡のⅢ式土器および亀山遺跡のⅡ式土器，兵庫県千代田遺跡のⅡ式土器にほぼ併行する時期のものである[4]。櫛描き文が誕生しているとはいえ畿内との関連が明らかでない今日，これを前期末とするか，中期初頭とするか，決め手を欠くものである。櫛描文発生地がどこであるか今後の究明をまち，検討しなければならないであろう[5]。船山3類と呼ぶ資料も断片的である。船山2類土器と混在しており，船山2類と同時期に使用されていた可能性は強いが土器の変化する傾向としては新しく出現するものと考えられる。同型式の土器は高田式土器[6]といわれているものにあたり，中期初頭に属する。船山4類土器も断片資料である。同型式の土器は南方Ⅱ式[7]，雄町3類土器があてられる。これは畿内第Ⅱ様式最終末併行期と考えている。船山5類土器は岡山県下では出土資料はほとんど存在しない。器形からつかめる資料としては，倉敷市戸津田遺跡出土の甕形土器1点が報告されているのみである。畿内第Ⅲ様式（古）に併行すると考えられる[8]。船山6類と呼ぶ土器は菰池式土器併行期のものである。この段階には凹線文は存在しない。船山4～6類のそれぞれの土器が混在出土しているものに備中新邸貝塚がある[9]。船山7類土器は凹線文手法が出現しているが，前山Ⅱ式併行か，雄町4類に併行するのか資料が少ないため決定しがたい。いずれにしても弥生中期中葉すぎのものであろう。また船山8類土器と船山7類土器との間には大きな年代差があるが，船山8類土器は雄町12類併行ないし直後の時期ではなかろうか。この船山8類土器を弥生最終末の時期とするか，土師器初頭の

時期とするかについては定見をもたないので今後の解明にまちたいと思う。

住　居　址

弥生式時代中期の住居址（2号）は1個だけ発見され，他の2個の住居址（3，4号）は船山8類に属すると考えられるが床面レベルもまちまちで，歴史的概念としての同時性をもつものか否かについては不明である。1号住居址は船山8類より若干新しい時期のものと考えられるが断定はさけたい。住居址の上部構造，入口についても推定できる根拠は何ら存在しない。

土　壙　群

舟形土壙は用途については不明であり，長方形土壙も同様である。土壙2は形態のみでいえば同時期の同様の遺構として岡山市南方遺跡で灰穴と呼称した遺構[10]に類似している。船山遺跡では一例しか存在しない。しかし埋土中に炭，灰，焼土を少量含んでいるのみである。南方遺跡で灰穴と呼ぶ遺構では灰が層をなしており，船山例とは相当様相を異にする。これも用途は不明である。その他の楕円形土壙についても用途は不明である。土壙3～9に関しても積極的根拠は何ら存在しないが，雄町遺跡第四調査区における土壙墓群の掘り方と類似している点で土壙墓としての機能をもっている可能性もありうるのではないかと考えている。

溝

溝1については灌漑用か否か決め手はないが，溝2は灌漑用の幹線水路として使用されたにちがいない。取水は吉井川の可能性が大きく，二の樋地区付近からのびてくるものであろう。人為的に掘削されたことに疑問の余地はなく溝というよりも川の感を与える。大溝と呼ぶにふさわしいものである。後述する大門遺跡のほぼ同時期の幅約1.8mの溝との関連性も十分考えられる。投加労働量は相当量のものであると推定される。

遺構番号を付加していない遺構も存在する。柱穴は多数存在するが建物としてのまとまりはみられない。柱穴以外のピットも若干存在する。2号住居址の周辺のピット群はそのようなものであると考えられる。1号住居址と2号住居址の中間部には住居址の周溝状のものがある。

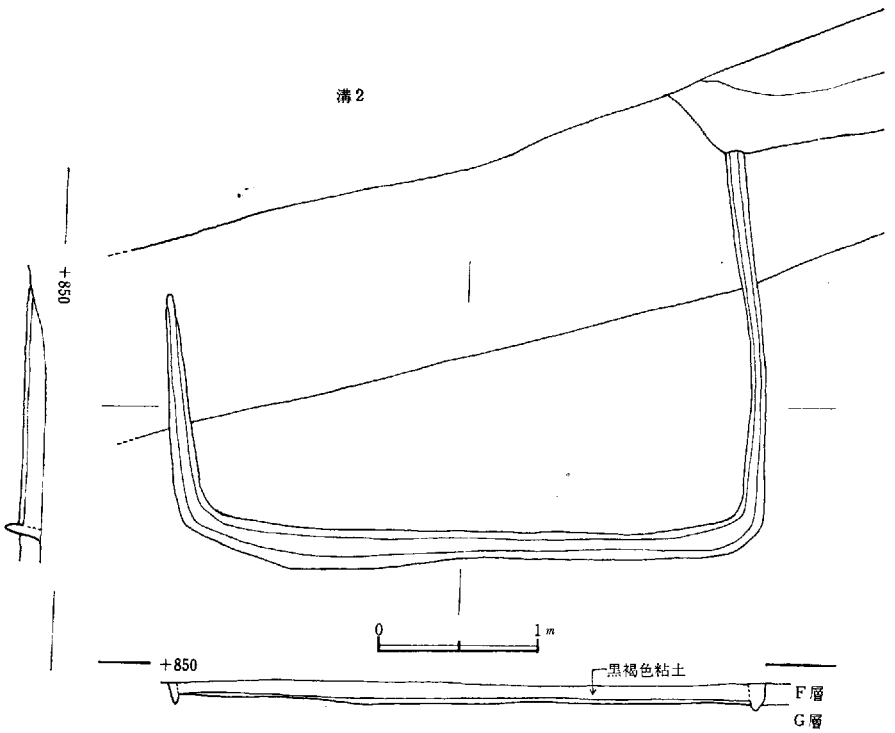
以上は土器および各遺構に関する若干の所見でしかない。遺跡全体の把握は船山集落周辺の微高地に存在するであろう同時代集落群，および吉井川下流地域における他の同時代遺跡群との関連，ならびに中部瀬戸内地域における比較検討が必要であるが，資料も断片的であり今後に期したいと思う。

船山遺跡発掘地点では弥生前期末から中期中葉までは継続的に生活が営まれていたと考えられる。しかし中期末葉から後期末までの土器は一片も出土しておらず，遺構も存在しないようである。従って相当長期間，生活の痕跡が絶たれたと考えられる。この原因は溝状凹みからうかがわれる地形変化に起因するのか，その他の理由によるのか不明である。

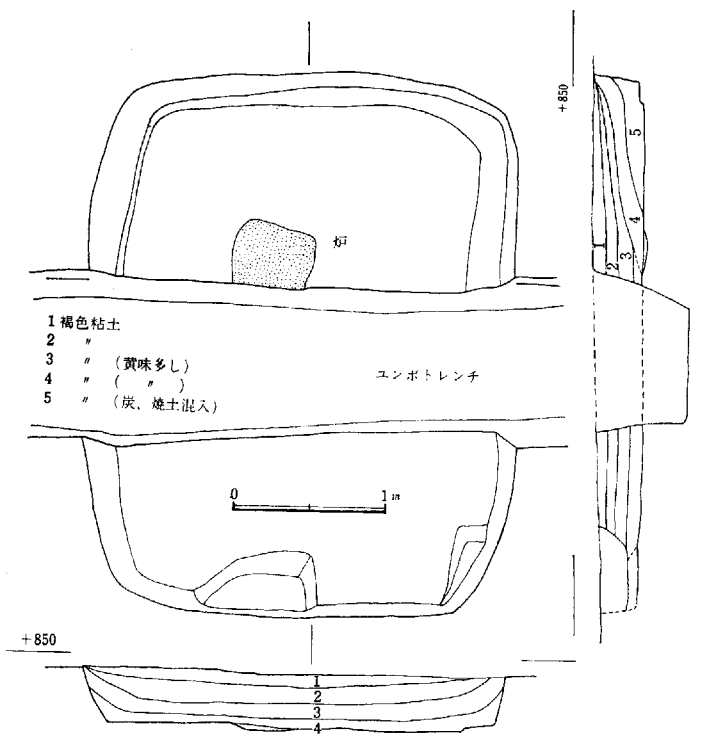
本地点では船山8類の段階に至り，再び住居群が営まれる。しかしこれも短期間（100年以内？）存続した後，大溝が掘削され，住居地区としての機能を失ったようである。この大溝の掘削は周辺に分布する前期古墳の築造と密接な関連をもつであろう。それは，近年やっと緒についた日本古代社会における農業生産力および技術の発展を解明する上で一つの示唆を与えるものと考える。　（泉　本）

注（1）小林行雄・杉原荘介編『弥生式土器集成』本篇1　山陽地方2
（2）同　上

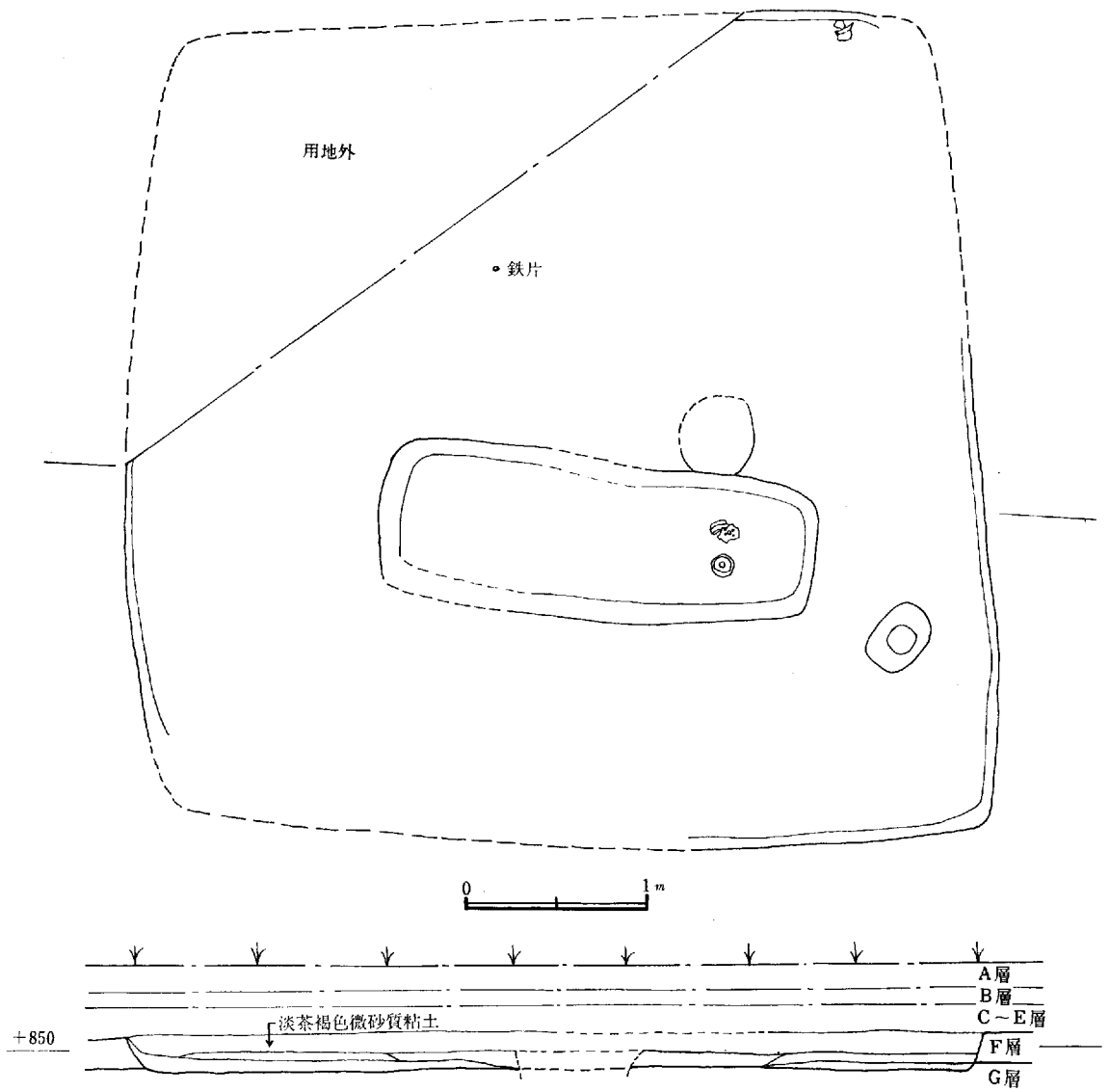
（3） 鎌木義昌「門田貝塚の文化遺物について」『吉備考古』 84号　1947年
（4） 日本考古学協会編『日本農耕文化の生成』 1961年
（5） 今里幾次「播磨弥生式土器の動態(一)」『考古学研究』 60号　1969年
（6） 注(4)に同じ
（7） 岡山市教育委員会『南方遺跡発掘調査概報』 1971年
（8） 倉敷考古館研究部『遺跡』 26号　1957年
（9） 近藤義郎「備中新邸貝塚」『古代学研究』 8号　1953年
(10) 南方遺跡では弥生前期末から中期後葉までのものが検出されており，後述する雄町遺跡では中期後半から後期初頭の同種遺構が存在する。



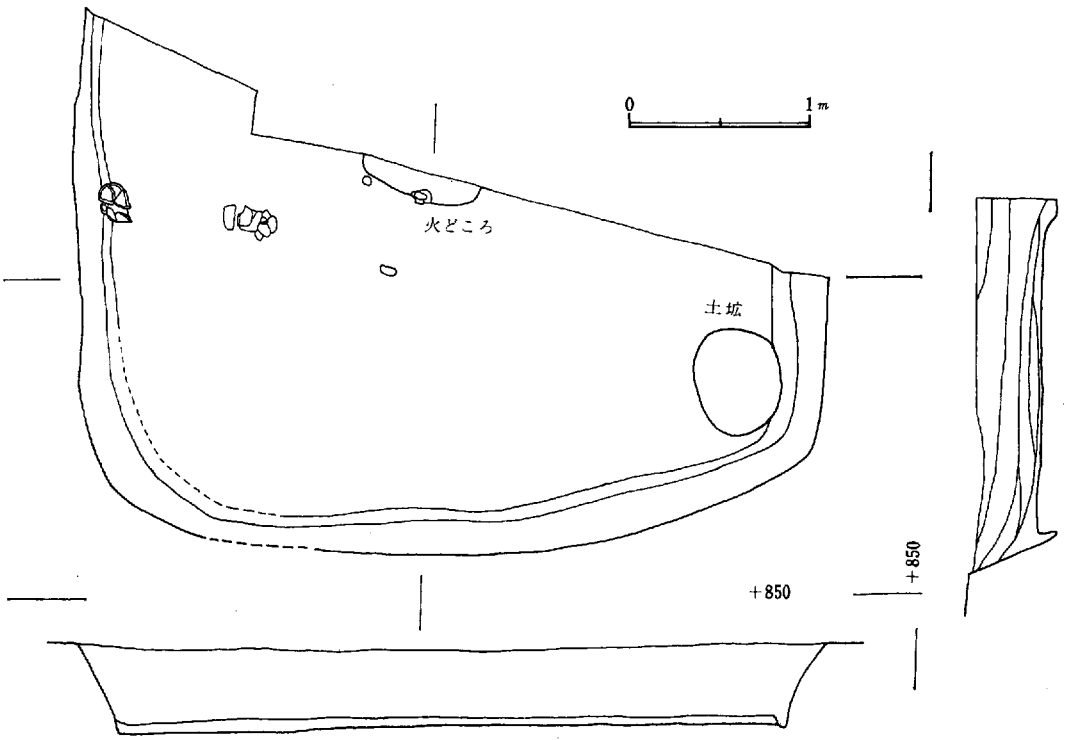
第2図1　1号住居址平面，断面図



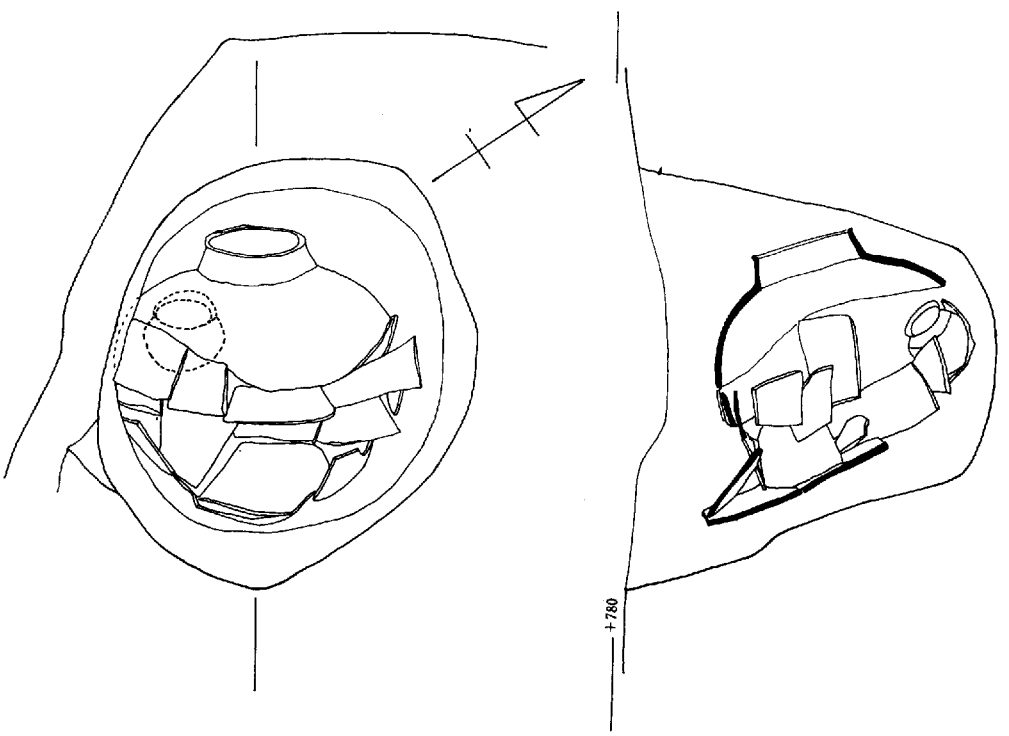
第2図2　2号住居址平面，断面図



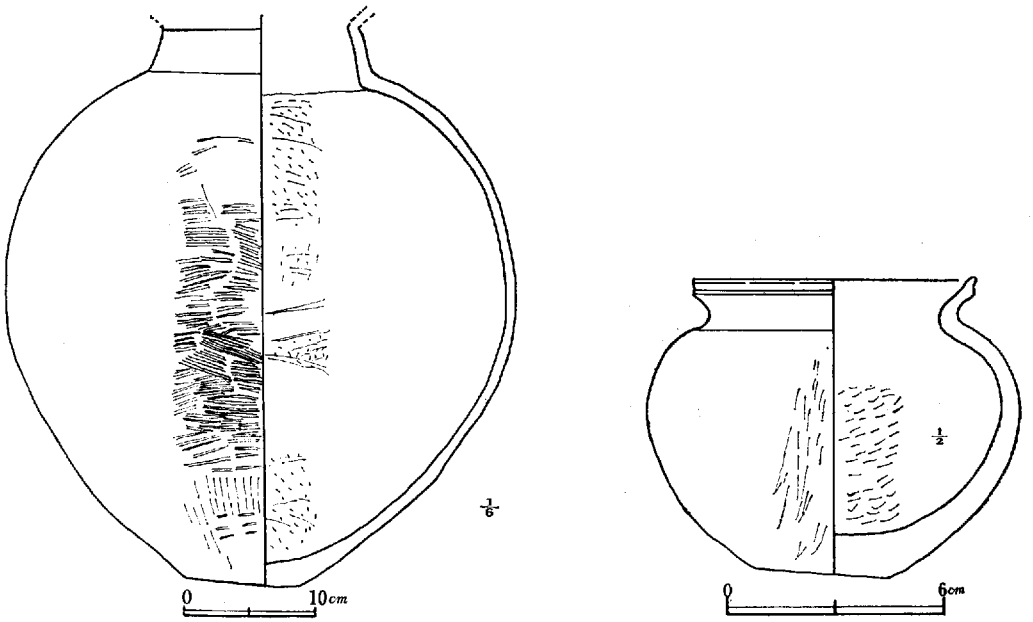
第 3 図　3 号住居址平面，断面図



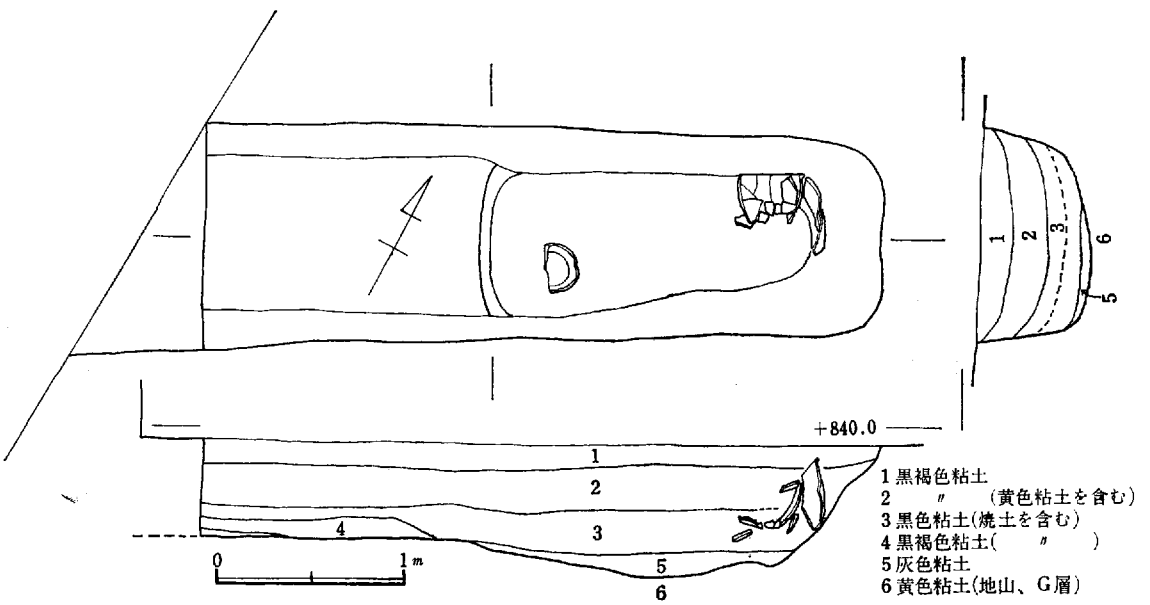
第4図1　4号住居址平面，断面図



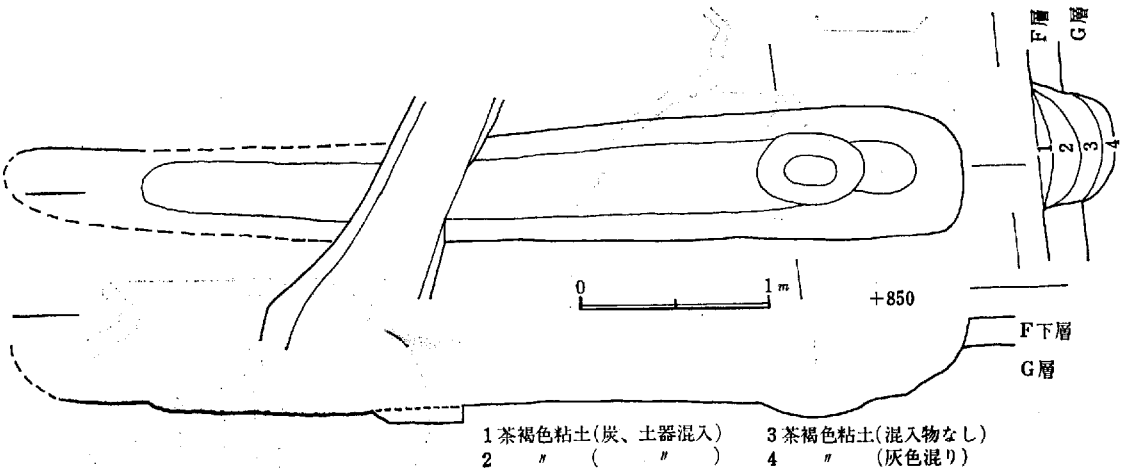
第4図2　4号住居址内土壙平面，断面図



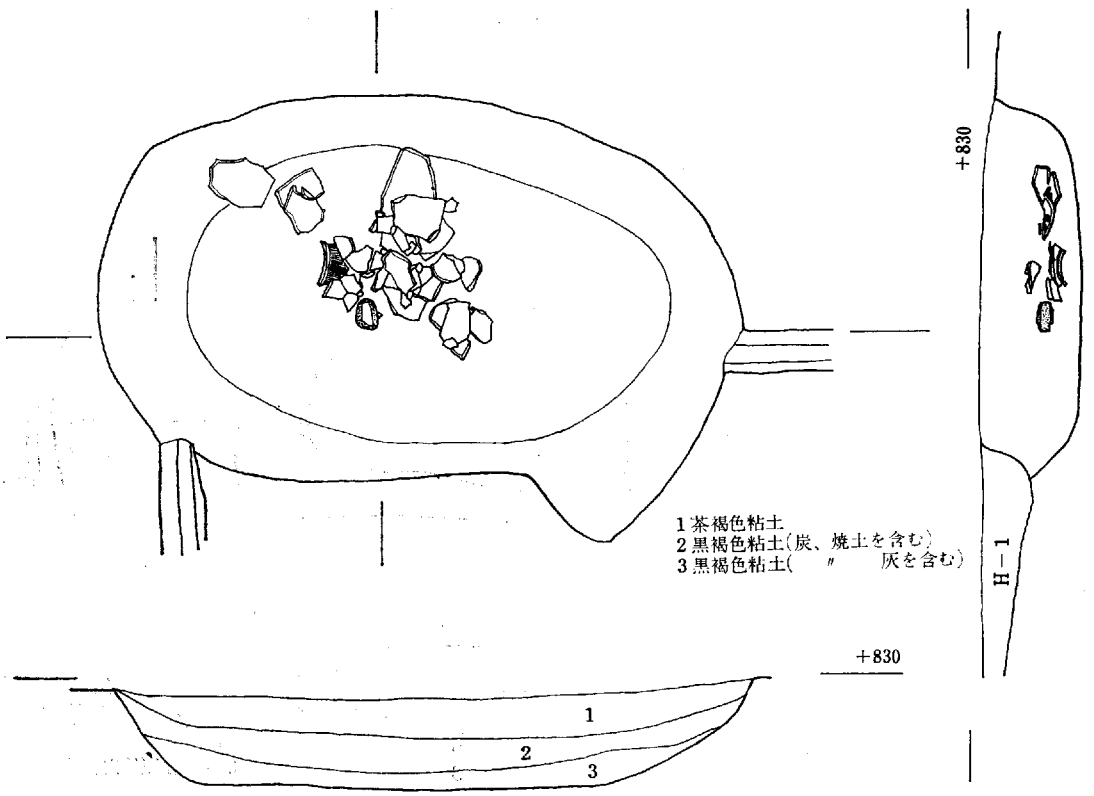
第5図1　4号住居址内土壙出土土器実測図



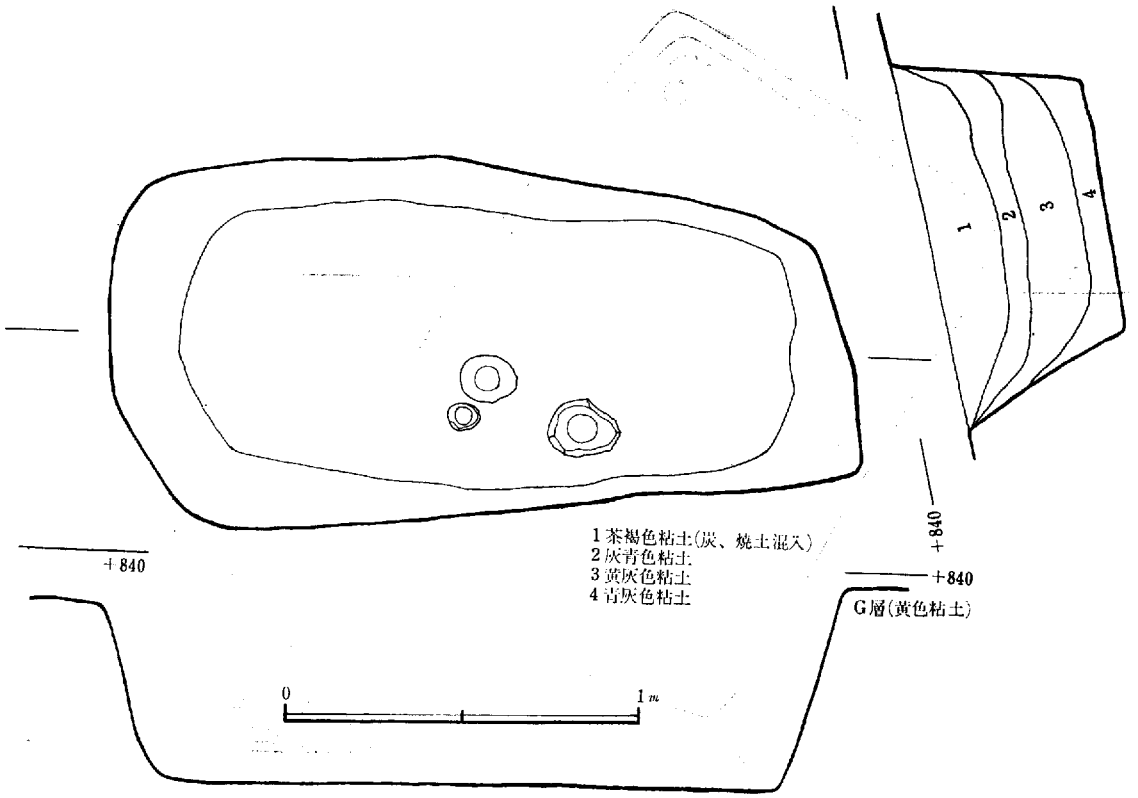
第5図2　舟形土壙1　平面，断面図



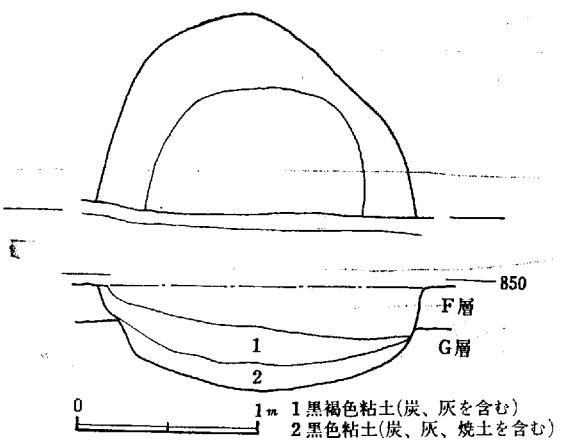
第6図1　舟形土壙3　平面，断面図



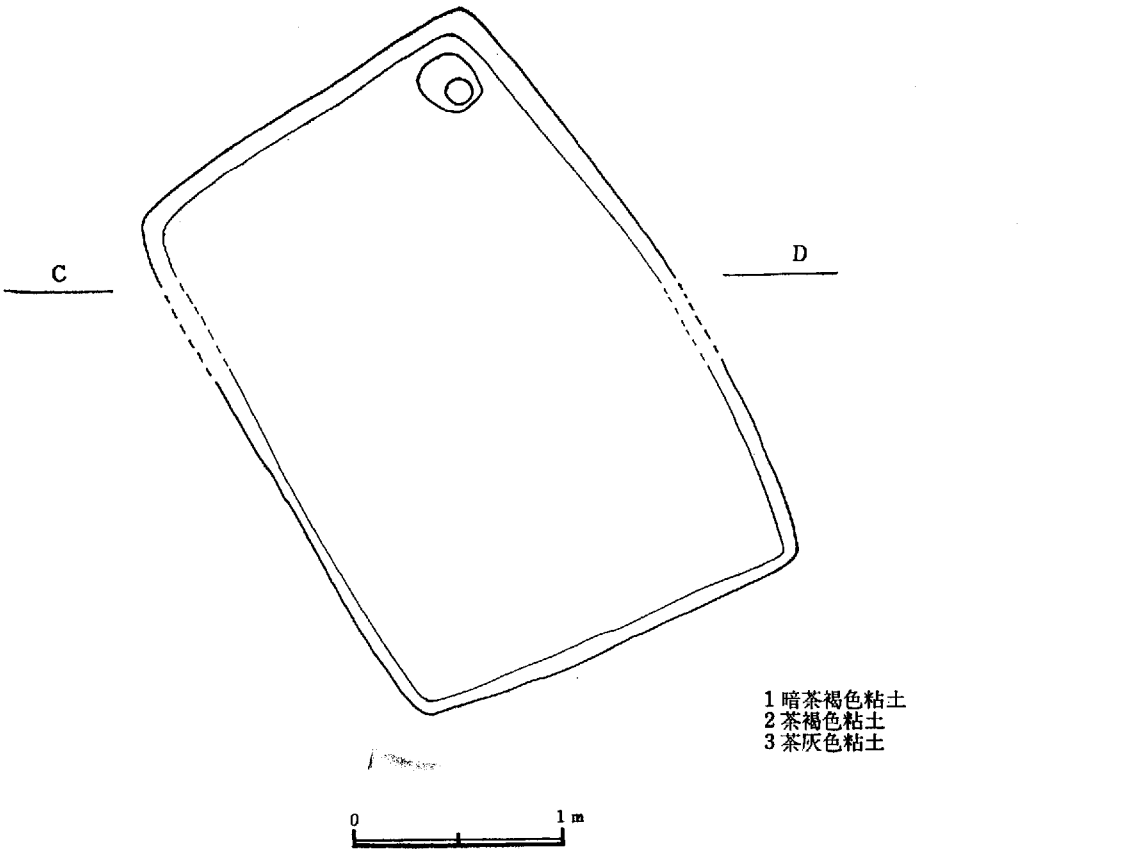
第6図2　土壙1　平面，断面図



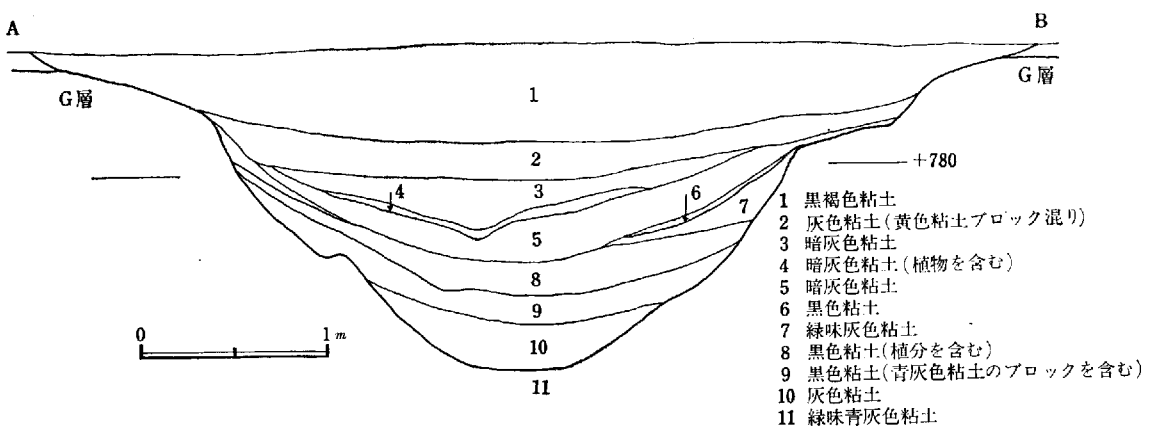
第7図1　土壙2平面，断面図



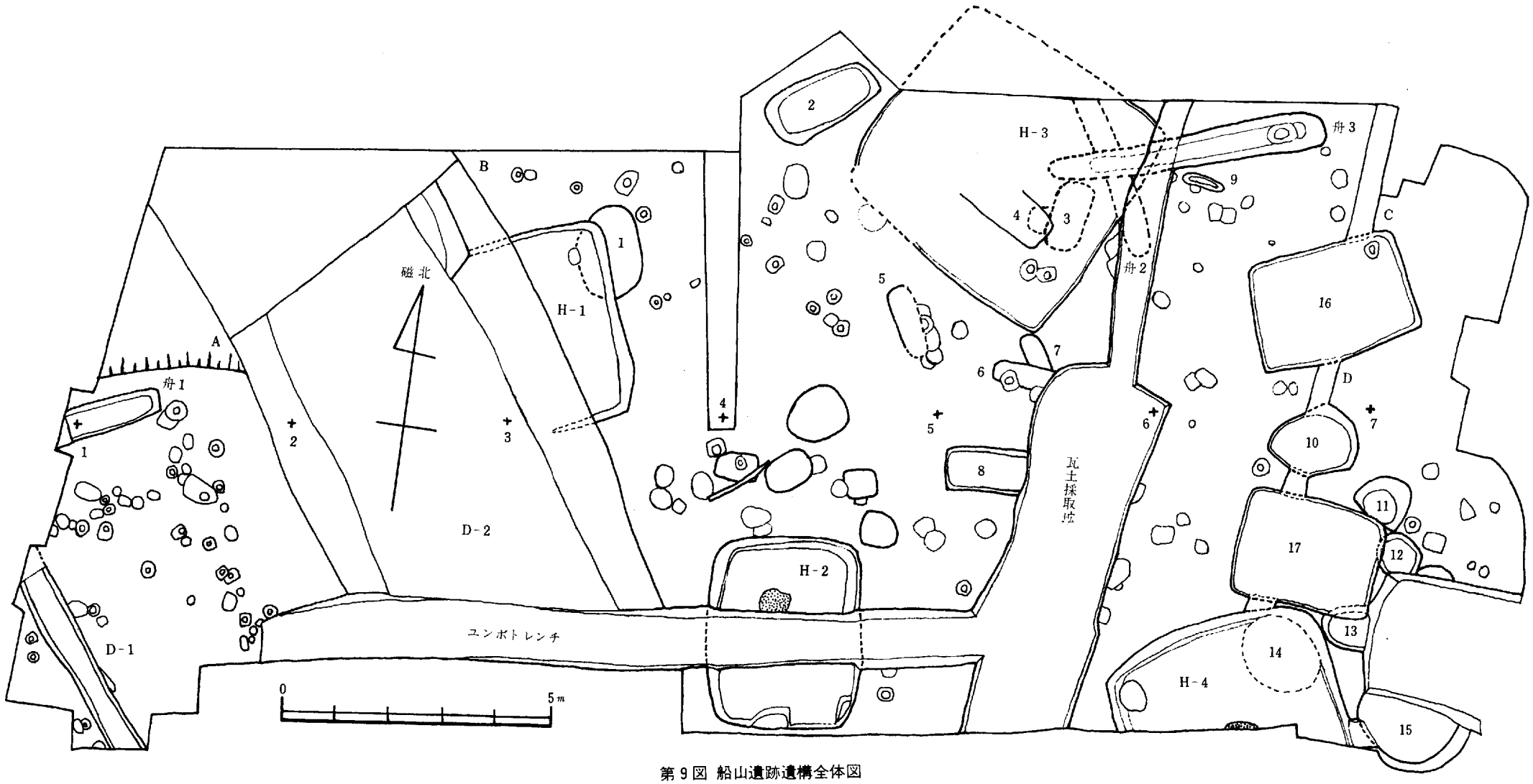
第7図2　土壙15　平面，断面図



第8図1　土壙16 溝状凹み平面，断面図



第8図2　溝 2　横断面図



第9図 船山遺跡遺構全体図

表（3）　船山遺跡発見遺構一覧表

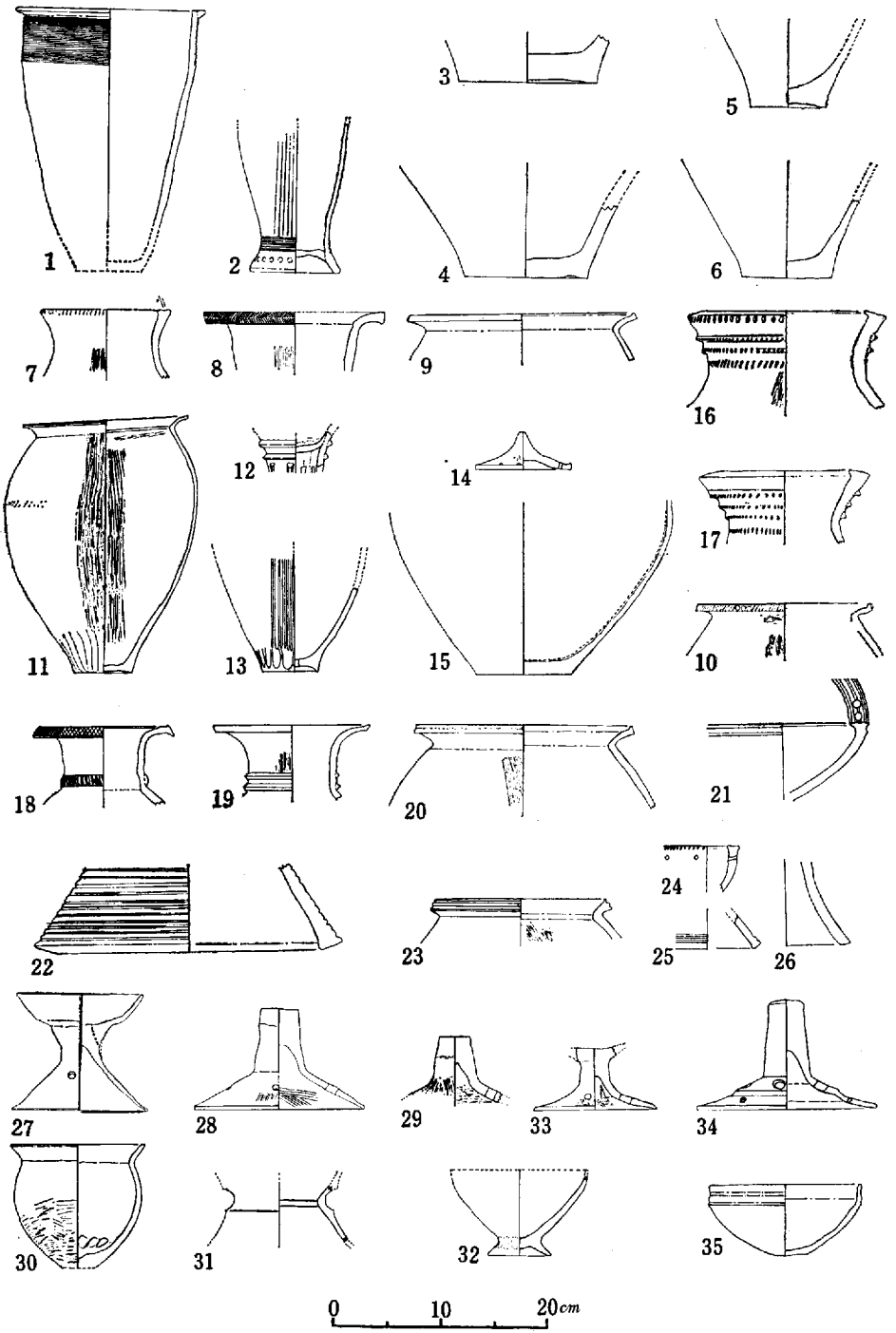
番号	平面形態	長さ×幅 cm	深さ	遺物	備考	時期
1号住居址	方形	？×373	14	甕片数点	柱穴なし，半欠	船山8？
2号住居址	隅丸方形	356×280	38	甕片数点，鉄片	中央近くに炉	船山7
3号住居址	方形	460×475	18	甕，高杯，鉄片	長方形火どころ	船山8
4号住居址	方形	？×410	37	高杯，鉢，壺，甕	中央部に火どころ　北西コーナーにピット	船山8
舟形土壙1	舟底形	216？×56	25	甕，壺底部，石鏃	東端部に凹み	船山2
〃2	〃	230？×51	20	甕片	両端不明	船山2？
〃3	〃	484？×73	40	甕，鉢，壺片	東端部に凹み	船山3
土壙1	楕円形	171×100	28	壺，甕片	H－1と切り合い（古）	船山5
〃2	隅丸長方形	210×105	51	甕，壺底部	灰穴状遺構	船山2
〃3	長方形	100？×70	8	——		
〃4	？	？×46	5	——		
〃5	隅丸長方形	135×48	11	——		
〃6	〃	103？×42	10	——		船山7以前か？
〃7	〃	85？×40	8	——		
〃8	長方形	142？×80	17	——		
〃9	舟底形	81×22	6	——		
〃10	楕円形	170×130	10	——		？
〃11	〃	104×87	20	無頸壺，壺，甕片	半欠　土壙17より古	船山4
〃12	〃	90×70	19	——	土壙17より新	？
〃13	〃	85？×90	29	壺，甕片（少量）	半欠　土壙17より古	船山4？
〃14	〃	158×130	12	甕腹片（〃）	H－4より古	？
〃15	楕円？	108？×175	57	壺，高杯，甕	半欠	船山5
〃16	長方形	300×210	35	甕，フタ		船山4～5
〃17	〃	265×200	22	無頸壺，甕片		船山4
溝1	直線	？×60	29	——		？
溝2	〃	？×310	174	土師片		船山8以後
溝状遺構	直線？	？×400？	30	壺，甕，高杯，石斧	5cm前後の角礫多し	船山7

（表4）　第10図の土器対照表

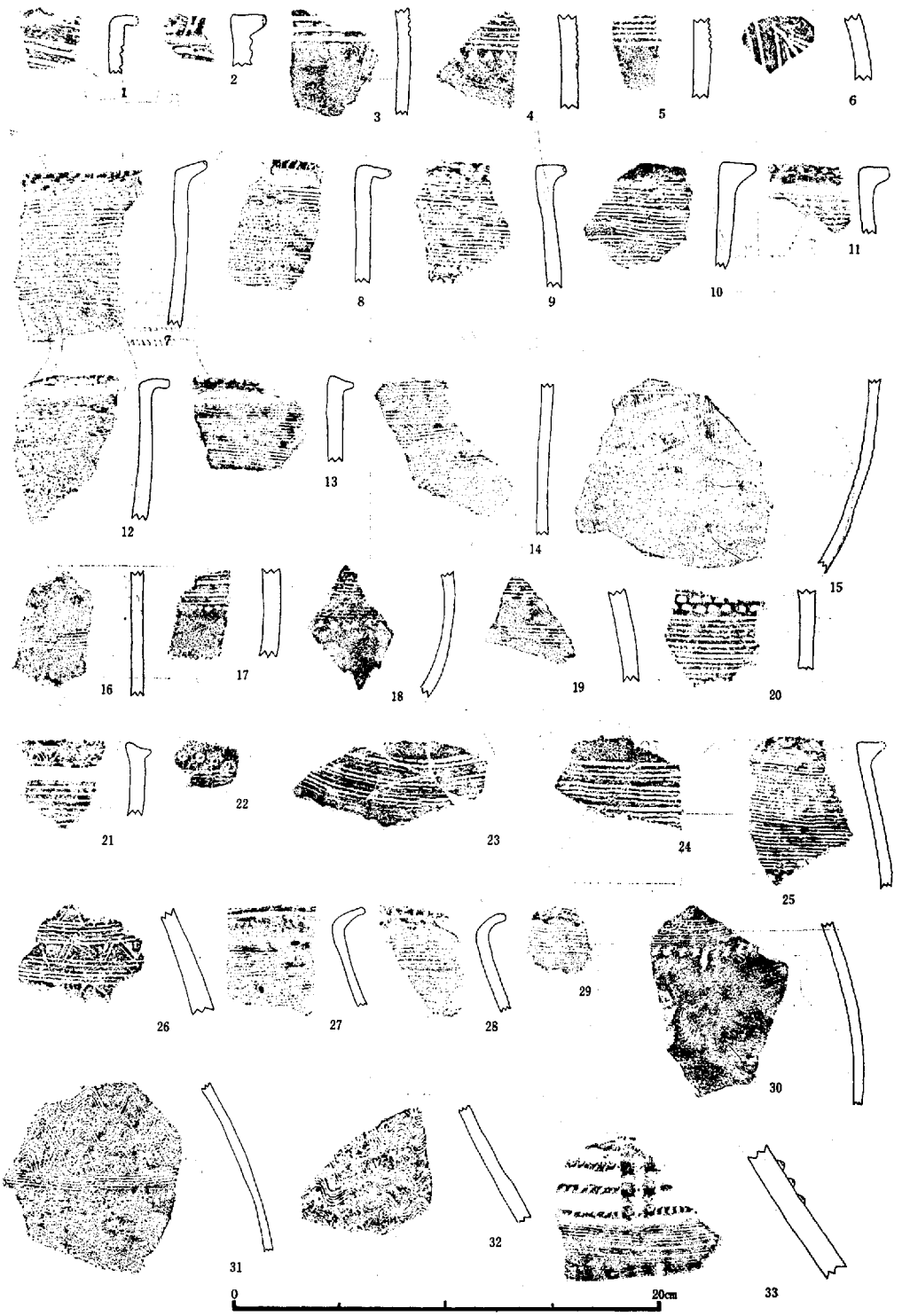
1．3　舟形土壙1内
2　舟形土壙3内
4～6　土壙2内
7～9．11～13　土壙16内
15　土壙1内
10．16～26　溝状凹み内
27～32　3号住居址内（27．30床面）
33～35　4号住居址埋土内

（表5）　第11図の拓影対照表

1．2．6．21．24．33　溝状凹み内
7～19　土壙2内
20　舟形土壙2内
25～30　舟形土壙3内
31．32　土壙11内
3．4．5．22．23　包含層内



第 10 図　船山遺跡出土土器実測図



第 11 図　船山遺跡出土土器拓影

大　門　遺　跡

はじめに

この小報告は山陽新幹線建設に伴う事前調査として，岡山県教育委員会が1969年11月25日より1970年1月28日まで発掘調査をした備前市（発掘当時和気郡備前町）畠田3の2，4の2，5の2，6の2番地の地点約350㎡の発掘報告である。発掘地点は畠田という地名であるが，発見された築地状遺構と関連をもつ可能性のある大門という地名をとって「大門遺跡」と呼称したい。

第1章　歴史的環境

香登地区が日本古代社会，律令体制下における備前国和気郡香登（かがと）郷であることはまず相違ないであろう。とするならば香登郷が律令制下において当初邑久郡に属し，のち和気郡に編入されたことは重要である。その間の変遷を記すと下表のごとくである。

表（1）　文献にみえる香登の変遷

養　老　5年	721	邑久（坂長，藤野，新田）赤坂（益原，石生）郡の一部をさいて藤原郡を新設
神　亀　3年	726	藤原郡を改め藤野郡とす
天平神護　2年	766	邑久郡香登，赤坂郡可磨，佐伯，上道郡物理，肩脊，沙石の6郷を藤野郡に編入
神護景雲　3年	769	藤野郡を改め和気郡とす
延　暦　7年	788	吉井川をはさんでおり種々不便なため河西を磐梨郡とし，河東を和気郡とす ここに坂長，藤野，益原，新田，香止の5郷からなる和気郡成立
文　武　2年	698	侏儒備前国人秦大兄に香登臣の姓を賜う

『続日本紀』延暦7年6月条の記載によれば和気郡衙は藤野郷に所在したと考えられる。この藤野郷は和気清麻呂を代表とする和気氏の本貫地である。

古墳時代前期における長船平野との関連，律令体制下当初邑久郡に所属していたにもかかわらず奈良時代後半期にのちの和気郡に配属されたことは和気氏との関連をぬきにしては考えられない。

なお『続日本紀』文武2年4月条に「侏儒備前国人，秦大兄に賜姓香登臣」という記載があり，文献にあらわれる香登としては最初のものである。

熊山遺跡　赤磐郡熊山町熊山山頂（標高約500m）には，三段の石積み基壇からなり正方形プランを有する遺構が多数存在する。大きいものは一辺約8mある。その中に小石室状の遺構が設けられ，中から須恵質の筒形容器および三彩小壺が出土し，奈良時代に属すると考えられている(1)。付近には瓦も散布している。この遺構に関して2，3の提言が行なわれているが，特殊なものであり遺構の性格は不明である。

寺院址　香登平野では従来大字大内に所在する寺院址を「香登廃寺」とよんでいた。この寺院址は未調査のまま用地造成が行なわれて破壊されたため，伽藍配置など詳しいことは不明である。現在備前市公民館に保管されている採集品によれば，奈良時代前期の創建と考えられるのみである。ところが，大門・船

山両遺跡の調査中，香登在住の楠原清馬，石原秀吉両氏の教示により，香登西の万長姫神社にほぼ同時期の創建になる寺院址が発見された。それ故に，前者を「大内廃寺」とし，後者を「香登西廃寺」と呼称することにした次第である(2)。なお，花光寺山，天神山古墳所在地近くの服部地区にも奈良時代前期創建の寺院址の存在が推定されている(3)。

条　里　制　香登平野の条里地割りについては南地方向の地割り線が推定されている(4)。その起源に関しては不明であるが，この中に大門，大領田という地名も存在する。この香登平野に隣接する長船平野，旧国府村周辺の条里地割り線は南北線にはのらず，約N 30° 東の方向と推定されている(5)。後者の条里線とほぼ同一線になる地割りは邑久平野，尾張付近にも存在する(6)。邑久地方におけるこのような相違の原因については郡の帰属変遷に関連するのか否か不明である。

挿図1　香登平野における条里制

窯　　址　香登平野地区では須恵器窯址は確認されていない。しかし備前焼窯址は存在する。中世において香登は備前焼製品の積み出し地区として大きな役割りを果たし，備前焼は「カガツ」と呼ばれるほどであった。『延喜式』にみえる須恵器朝貢国としての備前の製品は邑久古窯址群がその生産の主体的役割りを荷っていたと推定されている(7)。しかし邑久古窯址群の全貌に関しては未だ十分なる解明は行なわれていない。また備前焼への移行過程も同様の状況である(8)。なお長船地区は「備前刀」という日本刀の製作地として有名であり，「福岡の市」との関連は無視できないものである。当面の叙述とは関連が薄いのでここでは省略したい。

注(1)　梅原末治「備前熊山上の遺跡」『吉備考古』 86号　1953年
(2)　岡山県教育委員会『岡山県埋蔵文化財報告』 1971年3月発行
(3)　永山卯三郎編『岡山県通史』上篇　1930年，間壁葭子「官寺と私寺」『古代の日本』 4　1970年
(4)　永山卯三郎編『岡山県史跡名勝天然記念物調査報告』 第七　1928年
(5)　注(4)に同じ
(6)　注(4)に同じ
(7)　西川　宏，間壁忠彦他『日本の考古学』第Ⅵ巻　(5)瀬戸内，1967年，西川　宏，間壁忠彦『古代の日本』 4中国・四国「備前の古窯」 1970年
(8)　注(7)に同じ

第2章　遺　跡　の　概　要

第1節　調　査　経　過

大門遺跡発掘にいたる経過は，船山遺跡の項で述べた事項と同じなのでここでは省略する。

調査にあたって，種々お世話になった方々も船山遺跡の項で記した方々と同じである。

日　　誌

1969年11月24日　武用分館長の案内で地元関係者へ作業員の雇用依頼を兼ねて挨拶まわりを行なう。香登農協へ器材購入を依頼。梅林建設伊部工事区へ挨拶。

11月25日　4mグリッドを設定。以後月末まで耕土及び堆積層上層の排土。基本的には8層に分離されることをつかむ。

12月2日　グリッド別に掘り上げを開始。

12月8日　神野主幹，光嶋主幹来訪。

12月9日　備前町教育長一行視察。

12月10日　写真用ヤグラの組み立て。1-S-1のF層除去，河原石の散布がみえ始める。

12月11日　2-S-1F層より瓦片，土錘等出土。1-N-1F層上面より銅銭出土。

12月12日　3-N-1より銅銭出土。「元」という一字のみ判読でき，他は不明。

12月13日　発掘区西半部のG層上面削り出し作業。1～3N-1で条里溝発見。

12月15日　船山遺跡の坪掘り実施，桂又三郎氏来訪。

12月21日　排土作業にめどがついたため，船山遺跡の割りつけを行ない表土除去にとりかかる。条里制溝は発掘地点全域に存在することが判明する。

12月22日　河原石散布の状況を検出。条里溝の写真撮影。

12月23日　河原石散布状況の写真撮影。神野主幹，花房課長補佐，葛原主事視察。

12月27日～12月31日　発掘区域全面の平板実測。第1，第2トレンチ断面実測，河原石散布区域の1m区画の割りつけ。実測開始。

1月4日～1月8日　河原石散布区域の平面実測。

1月10，11日　第4，第5，第6トレンチ発掘。東端部で窯槨塚的遺構判明。

1月12日～17日　窯槨塚発掘続行，写真撮影，平面実測。第7～第10トレンチ発掘，断面実測。溝状遺構の群集は築地状遺構の痕跡の可能性を示す。

1月18日～24日　第1トレンチの古墳時代前期溝，写真撮影，断面実測，発掘区西南端部で暗渠発見。写真撮影，平，断面実測。

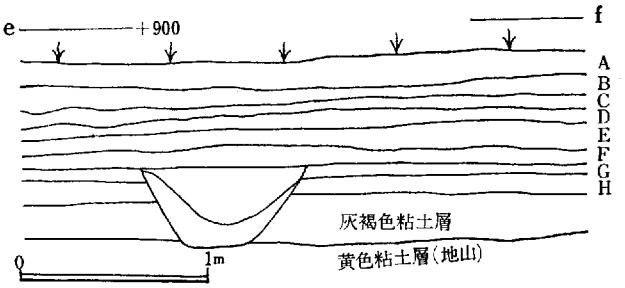
1月25日～28日　発掘区全体の仕上げ作業を行ない，28日をもって終了，船山遺跡へ移動する。

第2節　遺構および遺物

大門遺跡の発掘で発見された遺構は4つに大別される。年代順に記すと，古墳時代前期に属する溝1本，窯槨塚的遺構，年代不明の築地状遺構およびそれに付属する暗渠遺構，ならびに条里制溝1本という内容で

ある。遺構の記述を行なう前に層位について概述しておきたい。

層　　位　大門遺跡の層位は基本的には8層に分離される。その中でA・B・C層は近世の堆積層である。D・E層には鎌倉，室町期の備前焼破片，青磁片，土錘などが混入しているが遺構は存在しない。F層には平安末から鎌倉期に属すると推定される遺物が少量混入しており，このF層上面より中国製青白磁，貨銭2枚などが出土している。D・E・Fの3層は白色にちかい粘土層を主体としているがG層にいたると様相は一変する。G層は暗灰色粘土層を基本とし，条里制溝はこのG層を切りこんでつくられている。しかるに築地状遺構および暗渠にはこのG層が上面をおおっているという相違がみられる。G層への混入遺物はほとんどみられない。H層では遺物は皆無であった。なお発掘地点における耕土上面のレベルは海抜絶対高で8.8m～9mをはかり，地山面は8mであった。



挿図2　層　位　図

（1）溝（第1図－1，第3図）

発掘地点西南端部に存在する溝で，北西方向から東南方向へ流路をもつと考えられる。幅1.8m，深さ60cmを測る。人為的に掘削された溝である。出土遺物は古式土師器破片が少量存在するが細片であり，細かい年代決定はむずかしいが，古墳時代前期前半の終末期前後に位置する時期に埋没したと考えて大過ないのではなかろうか。

（2）窯　榔　塚？

発掘地点東端部で検出された遺構である。長さ3m，幅2.3m，深さ32cmを有する長方形掘り方内で炭化材，鉄金具，石などが検出された。条里制溝を掘り上げた時点で確認されたものである。炭化材は長方形掘り方西辺線から，東方向に倒れこんだ状態のものが大半をしめる。その中には加工木片も存在し，縦横に組みあわせていたと考えられる。（第2図，図版2－1）

掘り方埋土中には前記の遺物以外では古式土師器破片が数点混入していただけである。

この遺構に関して住居址の可能性と共に，「カマド塚」と俗称されている窯榔塚の可能性を考慮して調査を進めたが，炭化材取りあげ中に人骨らしきものは検出されなかった。また炭化材を取りあげた段階で壁際，底面の削り出しを行なったが柱穴，杭痕跡は皆無であった。ただ，掘り方中央部付近で径約30cmの浅いくぼみが2個近接して検出されただけである。

周辺部を削り出すと長方形掘り方中心部より西へ3.5m，南へ5m前後の範囲に明るい黄色粘土が方形にちかい平面をもって存在し，その外側の土と分離されることが判明した。この黄色粘土中には弥生中期に属する土器片が3点混入していたのみで他には何も認められなかった。これが墳丘を示すものか否か断定はさけたいが可能性は大であると考えている。年代は不明であるが条里制溝よりは確実に古く，後述する築地状遺構よりも古いと考えられる。ゆえに相対年代は西暦600年をさほど前後しない時期に属するであろうと指摘できる。

（3） 築地状遺構および暗渠

発掘区中央部において，南西から北東に走行をもつ溝状遺構が切り合って群集するかのような状態の遺構が検出された。これは断面では第4図のごとく溝が数本切り合っているかのような状況を示している。中には灰白色砂質粘土や暗茶褐色粘土などがつまっている。混入遺物は西暦7世紀代前半に比定できる須恵器が数点存在する。これを築地状遺構とする決め手となったのは発掘区西南端部で発見された暗渠による。この暗渠は前述の築地状遺構の主軸線に直行してつくられ，板材がわずかに残存している溝状掘りこみである。この板材は暗渠の蓋と推定されるが，その西北端には棧状のものが板材に直行して付設されている。横断面では東隣りに別の溝が存在する。新旧の差と考えられる。これらの埋土には遺物は存しない。

この暗渠の主軸線で方位を割り出すと，築地状遺構は真北—45°—東という方向をもつことになる。

なお，西南端部で検出された河原石群（第3図，図版3－2）は敷石ではなく，暗渠と関連をもって構築された遺構が削平により壊され散布しているものと推定される。

（4） 条 里 制 溝

今回の発掘で最初に発見された遺構である。真北に直行して東西方向に約30m検出されたが，その両端は不明である。幅約80cm，深さ約40cmが残存していた。出土遺物は少量であるが，平安時代後半期と推定される糸切り手法を有する底部が存在する。したがってほぼその時期に埋没，削平されたと考えられる。方位および年代から条里制と関連をもつ溝であると推定されるが，機能は不明である。

（5） 出 土 遺 物

大門遺跡での土器の出土量は少ない。リンゴ箱1箱分程度で，完形品は存在しない。奈良時代およびそれ以前の時期の土器片は全体量の10%にもみたない。弥生式土器片は窯槨塚封土？中より数片出土しているだけである。古式土師器は窯槨塚？掘り方の埋土中で数片，古墳時代前期溝から少量出土している。5～6世紀代に比定される遺物は皆無である。7世紀代に比定される遺物は築地状遺構埋土中から少量出土している。いずれも須恵器であり，甕の胴部破片，杯身の破片である。杯は古墳副葬品の通例にみられるもので，口唇部がわずかに立ちあがりをもっている。高台出現以前のものである。奈良時代に属するものは須恵器杯の小破片が数点あるのみで土師器は出土していない。

平安時代の遺物も少量出土している。その中で銅銭が2個ある。F層中から出土し，いずれも表面がはげたり，縁が割れたりしている。グリッド1-N-1出土のものは径2.4cmをはかり，上部に「元」の字が読みとれ，「元豊通宝」（1078年）と考えられ，グリッド3-N-1出土のものは復元径2.3cmをはかり，文字は明瞭でないが「祥符通宝」（1008年）と推定される。図版4の両者とも北宋銭である。同一層で平安末期に属すると推定される中国製青磁，白磁も数片出土している。

鎌倉，室町期の遺物は今回の発掘出土量の大半をしめ，備前焼破片が多い。壺，甕の破片だけで擂鉢は存在しない。その他に瓦器片，カナエの脚部，小形の土錘，青滋，白滋の破片などが出土している。

なお，瓦は平瓦，丸瓦の小破片が数点出土したのみである。またD，E，F層からそれぞれカナクソが少量ずつ出土している。

第 3 節　終りにあたって

最後に若干の問題点を年代順に述べておきたい。大門遺跡では弥生式時代の遺構は検出されなかった。大門遺跡の現存する地山最高値は海抜８ｍを測り，船山遺跡と大差はない。もともと存在しなかったのか，大々的な削平により消滅したかのいずれかであろう。

古墳時代前期に属する溝は微高地上を人為的に掘削しており，農業用の水路と考えられる。年代的には船山遺跡の大型水路とほぼ同時期であり，その関連性も考慮されなければならないであろう。

発掘区東端部発見の遺構に関して「窯槨塚」の可能性が強いと考えている。この種の遺構は大阪，滋賀，兵庫，岐阜，静岡，香川，九州などで20例前後発見されているが(1)，本遺跡例には滋賀県小御門古墳群(2)，大阪府上寺山古墳など(3) に存する側壁材を埋めた痕跡が認められなかったことが気がかりである。

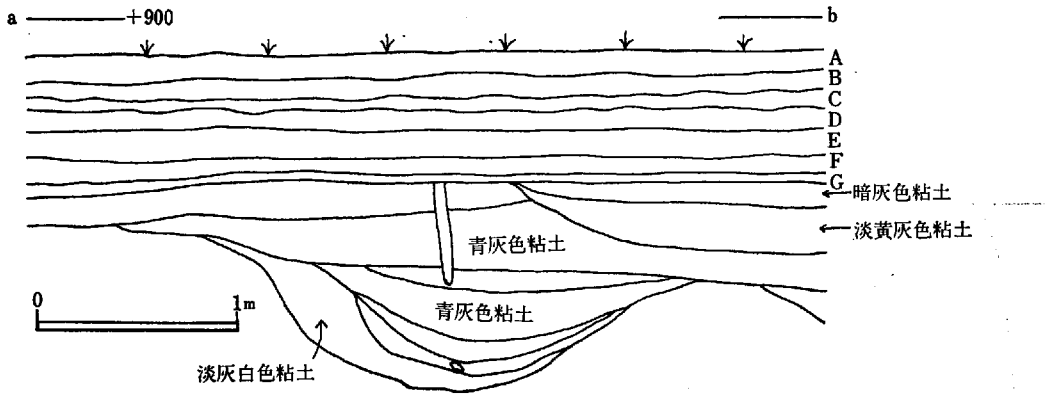
築地状遺構に関しては，これが築地であるのか，土塁であるのかはっきりしないこと，また上限が７世紀で，下限が平安時代というおおまかなもので明確なる年代決定ができないなど問題点は残っている。しかし，方位，層位から条里制施行前であることは確実といえる。そこで当然のこととして築地状遺構の本体となる遺構が問題となる。築地状遺構はその規模は不明としても，おそらく直角に曲がっており，山陽新幹線工事区内，発掘地点より東部で再び痕跡をあらわしたはずである。けれども既に工事が行なわれた後であり追求できなかった。発掘地点の東南部，国道２号線をこえたところが，「大門」の中心部にあたる。そこにはおそらく，かなりの規模を有する建築遺構が存在すると推定される。そしてそれは近くに２つの寺院が存在する事実から考慮するならば，寺院址よりもむしろ，それ以外の機能をもった遺構であると考えるのがより妥当であると思われる。

条里制溝に関して言及できるのは１点だけである。それは条里制溝が発見された地点が「鍬１本」（挿図１）の北端部にあたるということである。

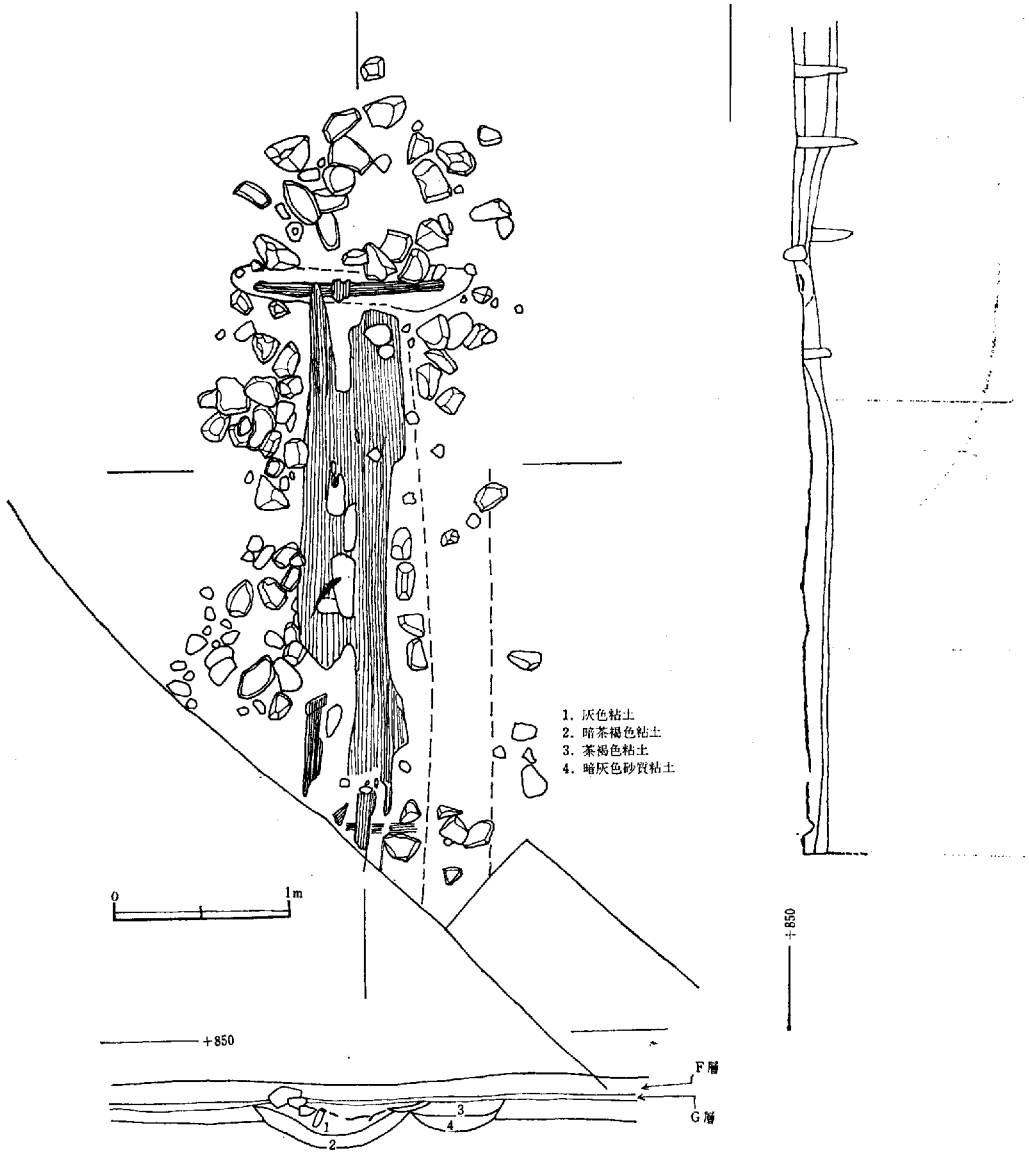
大門遺跡では平安末期以降に属する遺構は発見されていない。しかし出土遺物からみるならば，それ以後もかなりの長い期間にわたって生活が営まれたことがうかがわれる。２個の北宋銭および中国製青，白磁は平安末期に我国に輸入され，使用されたものと推定される。それはこの種の遺物を使用した遺跡が存在した可能性を示すものである。また鎌倉期，室町期の備前焼破片がカナエの脚部，瓦器などの日常雑器類と共伴出土していることは，備前焼生産地の中心たる地域において，その生産品を使用した集落が存在したことを物語るものである。

（泉　本）

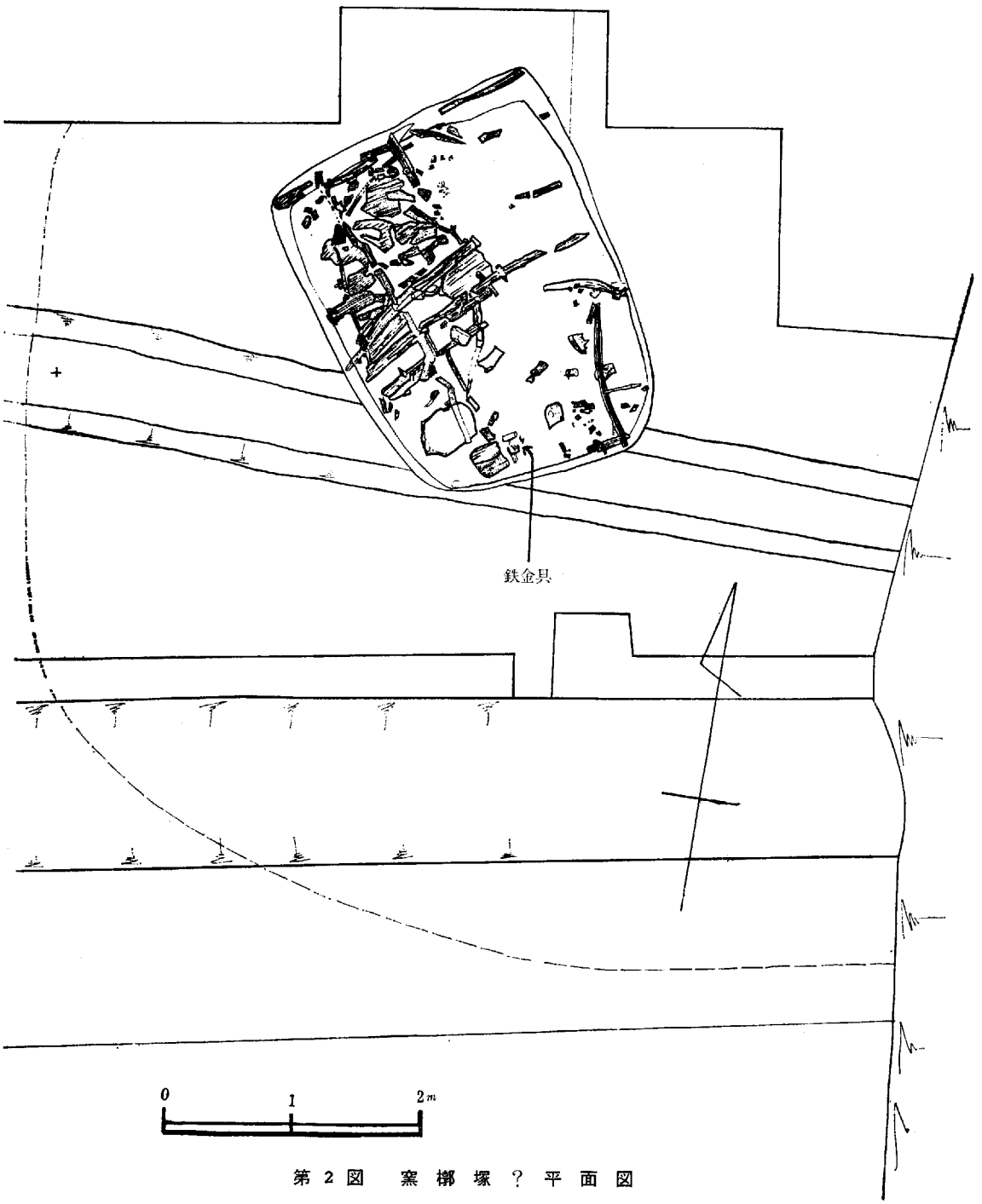
注（1）　三上次男，楢崎彰一編『日本の考古学』　第Ⅶ巻　1967年
（2）　滋賀県教育委員会『蒲生郡日野町小御門古墳群調査概要』　1966年
（3）　田代克己「大阪府茨木市上寺山古墳」『日本考古学年報』　14　1966年



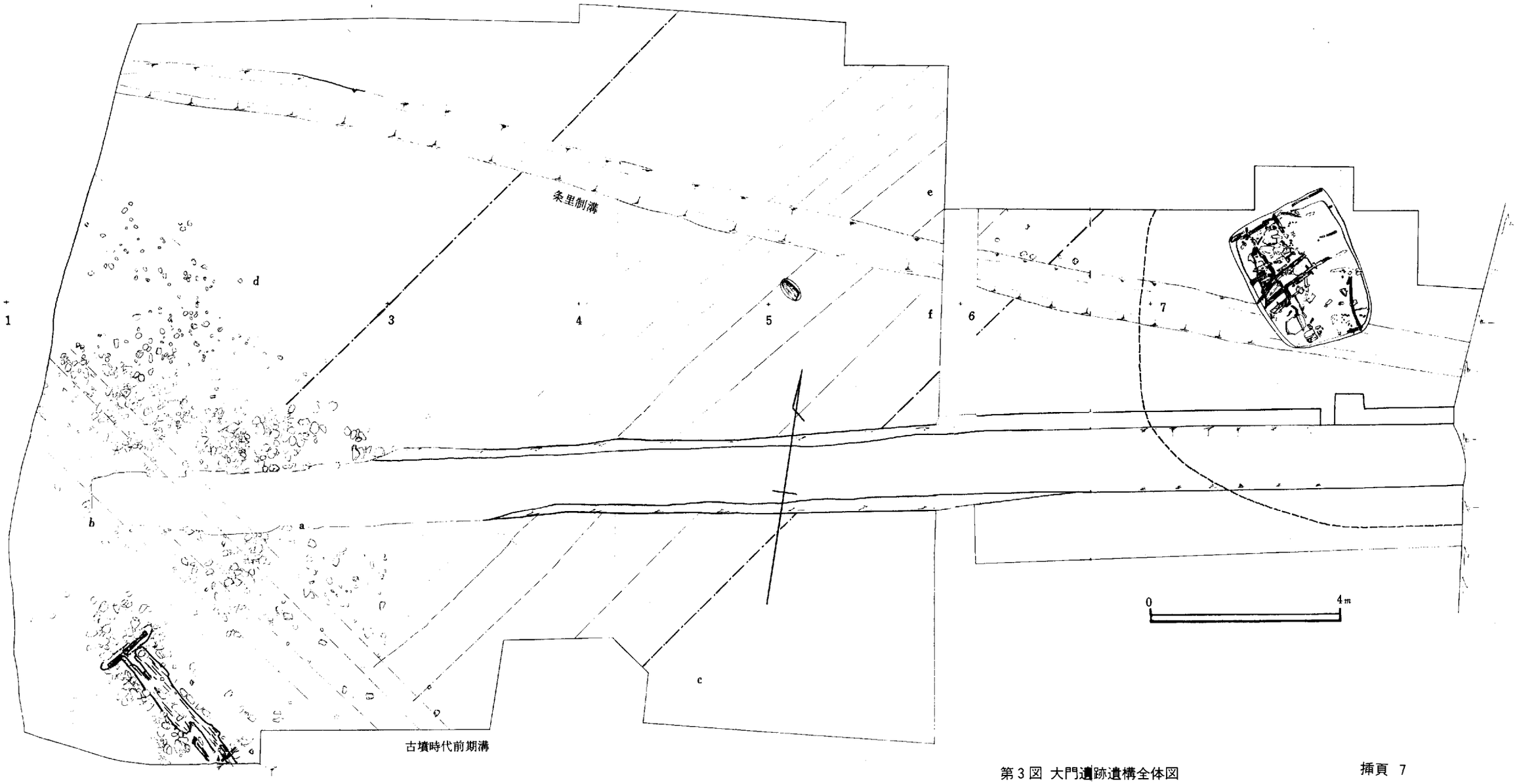
第1図1　古墳時代前期溝横断面図



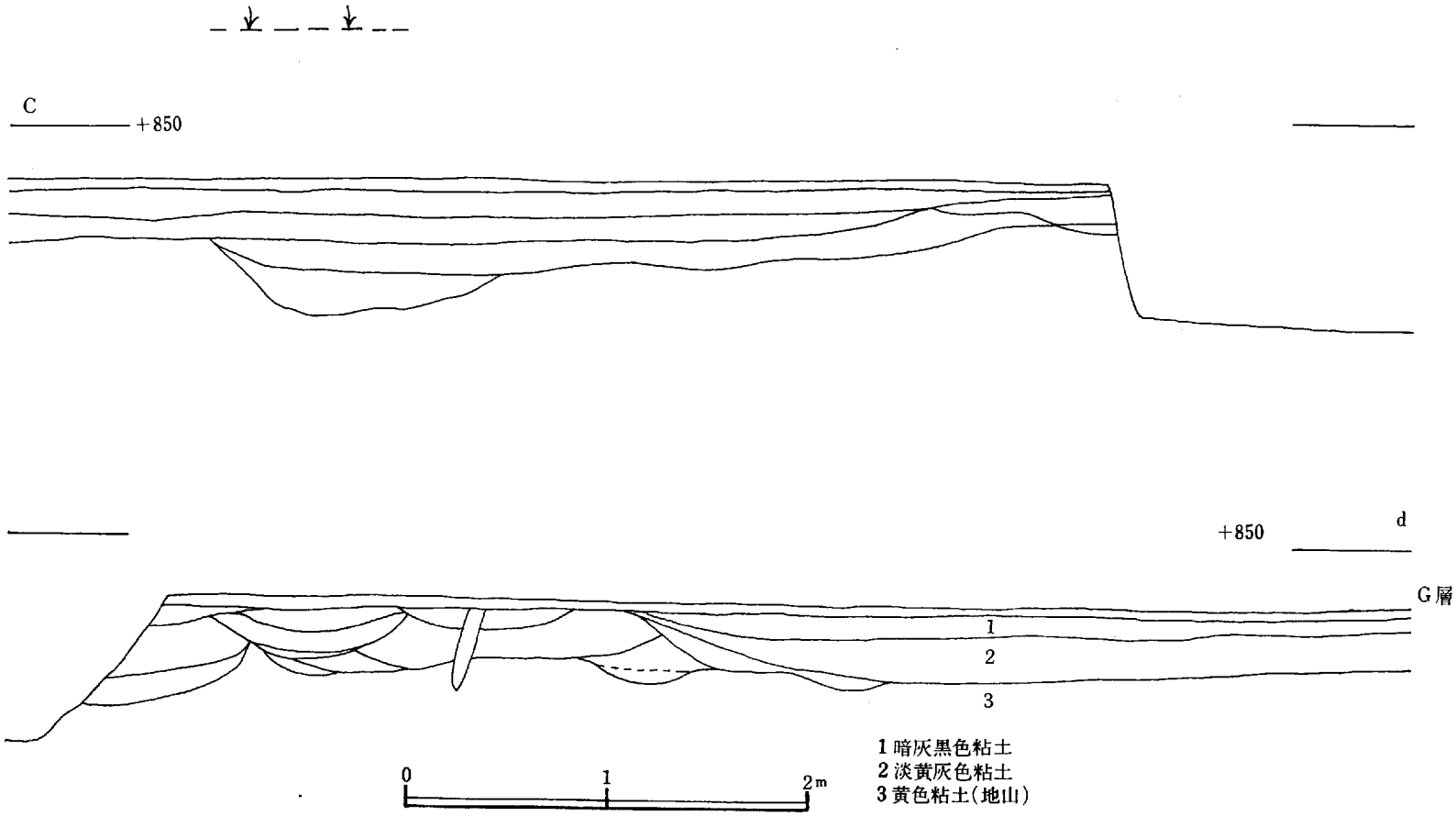
第1図2　暗渠平面，断面図



第 2 図　窯 榔 塚 ？ 平 面 図



第３図 大門遺跡遺構全体図



第 4 図　築 地 状 遺 構 横 断 面 図

雄　町　遺　跡

第1章　歴史・地理的環境

雄町遺跡は岡山市雄町(おまち)に所在する。現在，この一帯は，雄町米の産地として周知され，肥沃な水田が展開している。

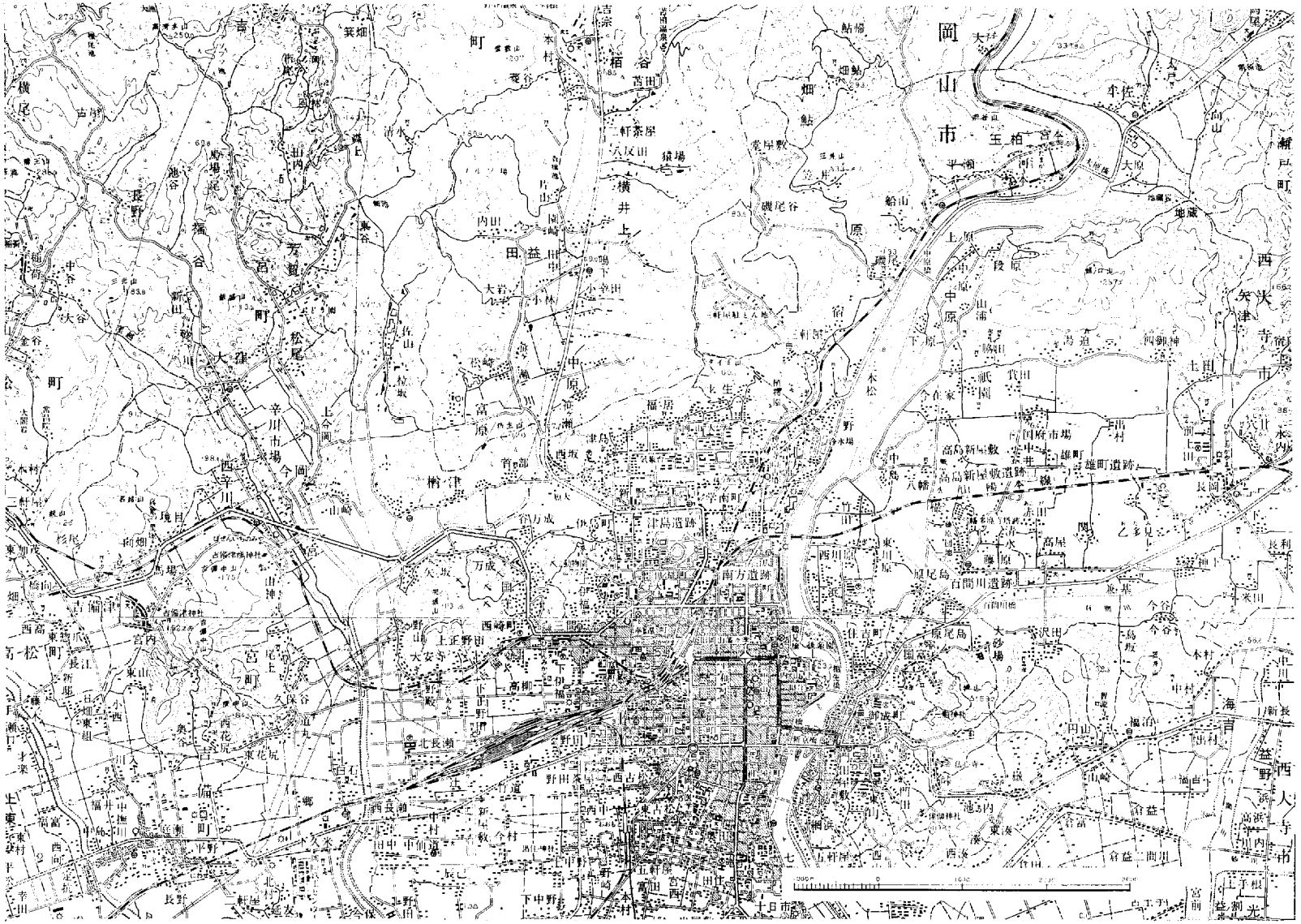
岡山平野は旭川によってつくられた沖積平野である。現在の旭川は南に向かって1本にまとめられているが，かつては多数の分流をなしていた。東側では北西から南東にのびる自然堤防上に弥生時代の遺跡がある。西側も同様に北東から南西方向にのびている。自然堤防は旧河道の両岸に微高地となってつらなっている。

縄文晩期の遺跡は津島遺跡，原尾島百間川遺跡，雄町遺跡等が確認されているだけで，極めて少くない。縄文時代晩期の遺跡は，弥生時代前期に継続され，中期前半には周辺の微高地に拡大し，中期後半にはほとんどの微高地に拡大している。その状況は古墳時代前半期まで継承し，その後も全域で遺物が検出される。南方の丘陵中腹にある兼基(かねもと)遺跡で銅鐸を3個出土している(1)。古墳はほとんど丘陵上につくられているが，平野部には全長150mの神宮寺山古墳(2)（前方後円墳）がある。岡山平野周辺部の丘陵上にある古墳は北側の竜の口山系と南の操山山系に集中している。竜の口山の一支丘上に備前車塚古墳(3)がある。この古墳は13面の舶載鏡を出土した全長約50mの前方後方墳である。操山山系には全長90mの網浜茶臼山古墳，全長160mの湊茶臼山古墳，全長165mの金蔵山古墳(4)等の前方後円墳がある。東の山王山の丘陵には全長65mの山王山古墳をはじめとする古墳群が形成されている。後期古墳は竜の口山系には55基以上の古墳群があって，東側丘陵端にあるのが唐人塚古墳である。大きさは石室現長13.6mで玄室中央に長さ2.21m，幅1.20m，高さ0.40mの凝灰岩製刳抜家形石棺の身が残っている(4)。南側丘陵には発掘調査された四御神(しのごぜ)古墳がある。天井石は残っていなかったが石室内には粘土に置換された木棺痕跡が3基検出された。それぞれに数体の埋葬が確認されている(5)。南の操山山系には95基以上の古墳群がある。ほとんど横穴式石室を内部主体としている。平野に面した北側に沢田大塚がある。これは比較的大きな横穴式石室である。

寺院址は賞田廃寺(6)，幡多廃寺，井寺廃寺，網浜義冢院(7)がある。平野の北に寄った国府市場付近に備前国府跡が推定されている。条里制の遺構は旧河道の北東部と南側に条里制地割がよく残っている。

（正　岡）

注(1)　鎌木義昌「兼基遺跡」日本農耕文化の生成
(2)　鎌木義昌「古墳時代」『岡山市史　古代編』岡山市役所　1962年
(3)　注2に同じ
(4)　西谷真治，鎌木義昌「金蔵山古墳」倉敷考古館　1959年
(5)　岡山県教育委員会によって，1968年に緊急調査された。
(6)　「賞田廃寺発掘調査報告」岡山市教育委員会　1971年
(7)　注5に同じ。
(8)　巌津政右衛門「奈良時代」『岡山市史』前掲書　411頁



挿図1　雄町遺跡周辺地形図

第2章　発掘調査の経過

軌道敷第1調査区～第4調査区

第1調査区は昭和43年12月16日からボーリング調査をはじめた。20m間隔にボーリングを行なって土層の観察と遺構の広がりを確認することにした。その後トレンチ調査で西側に湿地帯が広がり東側は旧河道であることから，その間150mの範囲に遺構の広がりがあるのを確認した。昭和44年1月に第4調査区で遺跡が確認されて，それに集中せざるをえなくなったため一時中止した。昭和44年11月5日から調査を再開した。はじめに側道にそって100mのトレンチを設けて土層観察を行なった。その外に5本のトレンチを設定した。その結果かつて集落のあった微高地が流水でかなり削平されていることがわかった。旧河道をはぶいて西側の微高地をA区，東側の微高地をB区とした。A区は中央に壁を残して広げた。流水で削平されてかろうじて残った甕棺を一基確認した。微高地の東と西に傾斜面があって，雄町5類以降の遺物堆積層がみられる。上面に1本の溝の底部を確認した以外なにも検出できなかった。B区は細い微高地が残っていて，住居址2軒と土壙13を確認した。東側はゆるやかな傾斜面で弥生中期後半以降の堆積層がある。植物堆積層が上を覆っている。西側は砂礫を含む堆積層がある。昭和45年1月6日に整理をおこなって完了した。

第2調査区は昭和43年12月にボーリング調査を行なった。昭和44年1月に2本のトレンチを設定して旧河道と傾斜面堆積層を確認した。第4調査区と併行して昭和44年5月6日から調査を再開した。傾斜面の堆積層で弥生中期後半以降の土器，石器，木器を多量に出土した。河道は弥生時代中期には流れていて砂礫の中に土器を多く含んでいる。傾斜面にかかるところで板枠の井戸を1基確認した。調査は泥と水になやまされて昭和44年8月31日まで行なった。

第3調査区は昭和44年1月に3本のトレンチを設定して住居址を確認した。7月後半から8月中旬まで岡山理科大学と順正短期大学の学生によって表土はぎと2号住居址，長方形土壙1を調査した。第2調査区を完了して9月1日から調査を再開した。地形は西側が高く，東に向かってゆるやかに傾斜している。傾斜面の包含層を掘り下げると住居址，土壙が多いことがわかった。工事との調整が困難をきわめ夜間作業もやむをえなかった。2号住居址は火災にあって炭化材が残り保存状態はきわめてよい。そのため設計変更して橋梁下に残すことにした。床面まで掘り下げないで川砂を入れて保存した。軌道敷からはずれる部分については遺構を確認しただけで砂を入れて埋めもどした。10月28日に埋めもどしを完了した。

第4調査区は1969年1月10日工事中に不時発見し，11月22日まで約11カ月間にわたり調査を行なった。

1月段階は東西約140mの区間内に南北トレンチ5本を設定し，遺構存否の確認を行なった。その結果，ほぼ全域にわたり遺構および遺物が存在することが確定的となった。そのため1月末から4mグリッドの割りつけを行ない，全面にわたる表土はぎを開始した。2月段階は表土はぎ作業と併行してトレンチ断面実測などを行なう。2月下旬には発掘区中間地点より少し西の工事用南側溝部分で古式土師器などを出土する大溝，杭が残存している弥生中期の溝などが切り合って群集しているのを発見した。それらの溝中に縄文晩期土器片が混入している事実もつかんだ。

3月段階は東端部の工事が切迫したため，東端部に集中，溝の群集地域を発見，それらの掘り上げと併行して住居址群の検出を行なった。この住居址群の発掘過程で微高地上に存在する弥生前期溝が確認された。

4月段階は住居址群の実測と併行して条里制遺構の検出を行なう。溝，住居址，条里制遺構東端部の調査を終え5月段階では残る全域の遺構配置の確認を急ぐ。井戸，溝，住居址等が全域に存在することが判明した。

6月段階では大型水路のすぐ西の部分で土壙墓群の存在を確認する。相当量の遺構が判明したため，調査員は現場事務所に泊りこみ調査を続行する。梅雨期に入り調査は進行せず，緊迫感を抱く。7月段階では大型水路部分の分層発掘を行ない，溝が数本切り合っている事実をつかみ，図面を作成。8月段階では気球測量に備えて，調査区全域の遺構の部分的掘り下げ，清掃を行ない中旬に気球測量を行なう。その段階で現場事務所泊りこみを中止する。

9月段階で大型水路より東部分の仕上げにとりかかる。倉庫群，井戸，溝などの発掘を行なう。この時期に大型水路，土壙墓群の一部の保存が最終決定される。

10月に入り，保存区域外の土壙墓群，溝，住居址などの発掘を続行する。工事期限との関連が急をつげ，再び泊りこみを開始し夜間作業を続行する。土壙墓中より歯，人骨などが発見される。11月段階は土壙墓の残りの発掘，実測と併行し，土層断面などの補足を行ない11月22日調査を終える。

側道敷第1調査区，第3，4調査区

山陽新幹線建設に伴い，緊急調査は軌道部分の調査にひきつづき，側道部分幅8mについて調査を行なうこととなった。側道敷は工事用道路として造成を完了しており，調査を実施するためには砕石をはじめ，盛土等約1mの部分を除去しなければならなかった。そのため，ブルドーザを入れて表土層まで掘り下げる方法を実施した。

国鉄の工事と併行して調査を実施したため工程を調整し第1調査区（長さ20m，幅8m）の調査にはいったのはやっと昭和45年10月にはいってからであった。第1調査区は出水が激しく，発掘作業は困難をきわめたが，約2週間で住居址等の検出，記録などの作業を終了した。

1号住居址は軌道敷で半分調査していたものであるが，北側が工事用道路のため追加調査したところ北西部分が古墳時代の2号住居址によって切られていた。1号住居址は直径10m余もあってやっと側道敷におさまったが，2号住居址は半分が用地外のため残り半分を調査した。弥生後期後半の土壙を1個検出し，1号住居址を切った溝2のつづきを調査した。

つづいて，第3調査区は国鉄の工事のため12月中旬まで調査を実施せず，中旬にやっと作業にはいった。第3調査区は幅8m×長さ120mの面積で，厳冬のため雪と氷に悩まされ昭和46年2月末にやっと作業を完了した。

その間，第3調査区の東限確認の調査を実施した結果，第3調査区東方50m付近に遺跡の存在が確認されたが，この部分の調査については年度末をひかえ計画外であったため，後日の調査にまつこととなった。

第3調査区の側道敷では，軌道敷で一部調査したものも含めて5個の竪穴式住居址を調査した。弥生中期後半1，弥生後期前半1，古墳時代前半3の住居址で平面形は不整円形，6角形，方形と多様である。軌道敷で一部調査を実施した5号住居址は火災にあったため遺物が多く残存していた。6角形の住居址は岡山県下においては現在までに確認されていない。この住居址ではベッド状施設があり，柱穴の下部には中央に凹みをもうけた厚い礎板が残存していた。南側は軌道敷工事のためすでに消滅していて，北半分を調査したにとどまった。弥生後期前半の不整円形住居址では側板の痕跡が壁体にめぐっているのを確認した。この住居址

には，東と南に長方形の浅い凹みが設けられているのを確認した。9号住居址は半分が用地外になるため南半分を調査した，直角に曲がる溝が側道敷でも確認された。軌道敷で直角に曲がる古墳時代前半の溝に対応する位置にあって方形に住居を囲む溝らしい。

土壙では弥生中期前半に属するものを1個確認した。溝で中央部を切られて形はよくわからないが，壺，甕，高杯の破片を含んでいた。軌道敷では確認されていない時期のものである。そのほかに弥生中期後半，弥生後期前半に属するものを確認した。

第4調査区は幅8m×160mの広い面積で，しかも期間も3月末までという厳しい条件のもとで作業を実施し，日曜祭日なしという苦しい毎日だった。遺構は第1調査区，第3調査区とは性格が違い，土壙墓群，土器のぎっしりつまった溝などきわめて貴重な遺構の検出を行なった。

住居址は溝14の東側でのみ検出され西側では確認されなかった。住居址は底部のみしか残っていなかったが，9号住居址では側板も確認された。土壙墓は軌道敷で検出したよりは少ないが，土壙墓の群集が2群みられるほか単独墓も検出された。土壙墓からは壺，甕，小壺等が出土した。溝は軌道敷で検出された続きを調査して，年代の確定に努力した。溝12～14については軌道敷で橋脚幅をひろげて保存したが，側道敷は道路になるため断面図を作成した。断面の観察によって弥生中期中葉に溝が掘られたことを確認した。溝のなかには大量の土器片が流入していて，下層の弥生中期中葉の土器にまじって縄文晩期の土器片も確認された。

第4調査区においても遺構の広がりをさらに詳しく確認するため，軌道敷で調査した範囲よりもさらに広く表土を除去した。西側は低位面にかかりゆるやかに傾斜していてほとんど遺物を含んでいなかった。東側は基盤層の上に粘土の堆積が進行して高みが拡大していて土師器片のはいった溝2本と，不整円形の土壙を1個確認した。さらに東は低くなっている。（中力，正岡，泉本）

第3章　遺　跡　の　概　要

雄町遺跡は，付近一帯にひろがる微高地群上に展開する遺跡群の一部をなすものであり，縄文時代の遺物を出土し，また弥生時代においても前期から中期前半にわたる墓地群が存在するなど，歴史的にもこれら遺跡群中の主要なものの一つであることを示している。

雄町遺跡の立地する微高地の多くは，現地表からもわずかにうかがうことが出来る。しかし現状における微高地と低地の比高は数十cmの範囲にあり，後世における変化のためその実態を逐一地上から観取することは難しい。

今回，山陽新幹線建設工事に伴って発掘調査の実施された雄町遺跡は，その微高地のひろがりと遺物散布の状況からみて，明治初年における旧雄町村のほぼ全域にわたるもので，多くの微高地にわたる複雑な地形上に展開している。

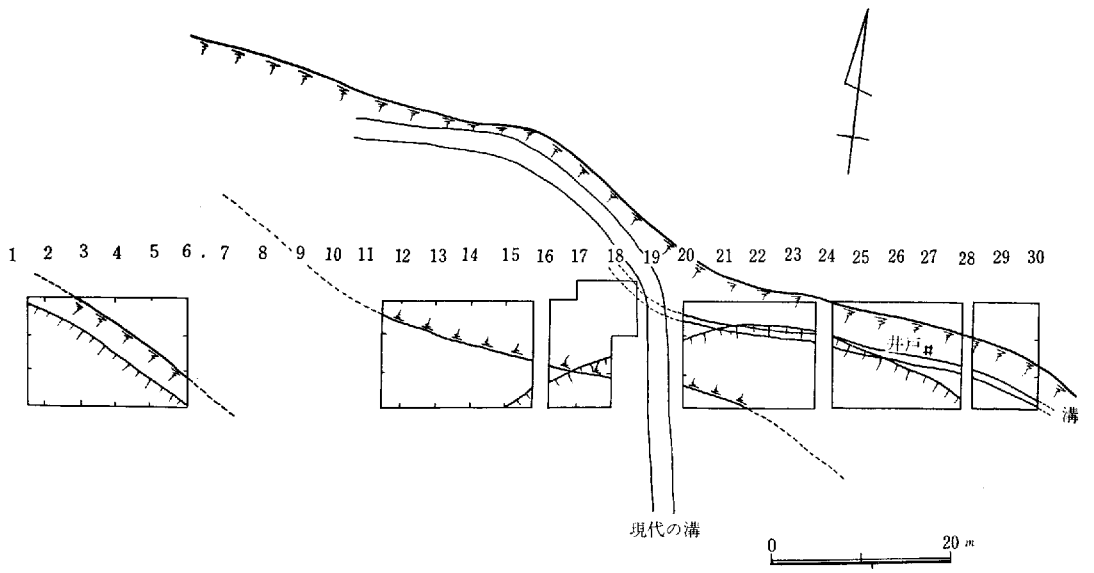
この付近の微高地地形は，旭川旧河道に形成された自然堤防として，砂礫層を基盤とする微高地をなしている。この砂礫層は，国府市場部落の南方，雄町第2調査区北側などで，ほぼ現地表に露出している。砂礫層の堆積後，微高地堆積物はしだいに粒径を減じ，主として細砂，微砂よりなる砂質堆積層で覆われてい

る。第4調査区では，この微高地堆積のほぼ最終時期と考えられる堆積層中に，縄文晩期の遺物が出土するので，この頃までに微高地の堆積がほぼ完了したものと考えられる。

雄町遺跡の南側には，雄町部落の南側から，乙多見部落の北を通って長岡の南に至る幅員約100mの旧河道の凹地が残っており，賞田付近からこれに流入する旭川の分流と，雄町部落付近で湧出する伏流水，および北側の湯迫，四御神一帯にひろがる沼地よりの溢流を流している。

このために，微高地は複雑に解析をうけて，多くの小微高地を形成している。旧河道の凹地は，弥生時代中期以降，流量を減じてしだいに滞水状態に変わり，5世紀後半から7世紀前半にかけては，厚い泥炭状の植物堆積を残しているが，歴史時代においても粘土層の堆積する沼地として永く残っている。

今回発掘調査により確認された遺跡は，第1調査区A地区からB地区にわたる第1微高地，第2調査区から



挿図2　第2調査区平面図

ら第3調査区にわたる第2微高地，第3調査区東方の第3微高地，第4調査区の第4微高地にわたるものであるが，第4微高地は，大型水路により2分されている。第1微高地の西方，および第4微高地の東方は大きな低湿地となっているが，ことに第4微高地東方の低湿地は深く大きなものであり，北側一帯にひろがる後背湿地に属するものと考えられる。

第1微高地A地区

遺構の遺存する微高地上面は，極めてわずかの面積を残すのみで，東側および南側を大きく侵蝕されている。微高地上面の侵蝕も大きく，一部の遺構がわずかに残っていたにすぎない。微高地西側の斜面はなだらかに傾斜した青灰色粘土層に覆われ，暗青灰色のうすい遺物包含層がみられる。この包含層は下部に5類，上部に13類ないし14類の遺物が検出されるほか，少数の上東式の土器片を検出することが出来る。（年代の類別は遺物の項参照，以下同様）

第1微高地B地区

微高地の東側，および南側はなだらかに傾斜した粘土質の堆積層よりなる遺物包含層に覆われている。下

層に５類，６類の包含層（第２図1,13層）があり，上層の11層，12層からは，11類あるいは13類，14類が出土する。西側の斜面は，後世に流水により侵蝕されており，粗砂の堆積がみられ，微高地上面をせばめているが，旧微高地斜面の下部は遺っており，６類および10類の土器を多量に包含している。

第１微高地Ａ地区と，Ｂ地区の間に介在する低地部は，後世の侵蝕をうけるまでは，現状の半分程度の幅であったと推定されるが，この低地に面した斜面に５類の包含層が認められないことからみて，この時期では更にせばまりＡ地区とＢ地区は，ほとんど一帯の微高地をなしていたものと推定される。

第２微高地

第２微高地は，旧河道の岸辺に形成された砂州を含み，第２調査区から第３調査区にわたる部分である。第２調査区の東部では，微高地が成形を終えたのち，旧河道の中に形成された細砂，微砂よりなる砂州がある。旧河道の河床砂礫層では５類が純粋に検出されるが，砂礫層中であるにもかかわらずほとんど流水による磨滅がみとめられない。砂州上面の中央部は削平されて遺っていないが，旧河岸に面した窪地の堆積層は５類の包含層から始まっている。

これらの事実から，砂州の形成はほぼ５類の時期までに終了し，それ以後は，この旧河道の凹地は滞水状態にあったものと考えられる。砂州から旧河道に面した斜面は，大量の遺物を包含した堆積があるが，比較的急な斜面堆積層であるため，くずれ込みによる混入が多く，整然とした層位は得られなかった。（第２図２）さきにも述べたように，最底面の河床礫層は，５類の土器を包含している。砂州の岸から傾斜面を覆って淡灰色粘土層からなる包含層（14層～20層）が堆積し，この中からは，８類，９類を中心とした遺物が検出される。植物堆積の顕著となる13層以上の堆積過程では，灰色粘土層に覆われて比較的安定した岸のあったことが知られる。この地形面上には12類を中心とした遺物が検出される。12層を中心として13類，14類が出土するが混入が多い。９層から11層にかけて厚い植物堆積層となっており５世紀末の須恵器が検出された。７層は多量の加工木片を出土する植物堆積層で７世紀前半の須恵器，土師器が出土した。６層以上は，現代の水田層までの間，ほとんど無遺物の粘土層である。

第２調査区中央部では，砂州と微高地の間に生じたやや低い面の上に８類を主とする遺物を包含した暗灰色微砂混り粘土層がうすくひろがっている。この包含層には８類のほか，５類，９類，13類等の土器が包含されている。この上を覆う黒色粘土層からは古墳時代の須恵器が検出される。これらの包含層上面に17—N1付近を中心として微高地の基盤砂礫層を敷き均した整地層がみられ(第３図１，４層)，奈良時代から平安時代にわたる遺物が顕著に出土した。この遺物は，円面硯，風字硯，瓦などをふくみ，緑釉陶器片，灰釉陶器片を相当数まじえるものである。

第２調査区東部では，微高地上面は後世の削平をうけて遺跡をとどめていなかった。南側の砂州に面した低位面には暗灰色粘土層よりなる遺物包含層がみられ，主として８類，９類を出土したが，少量の土師器を混じている。この上には，５世紀末の須恵器片を検出したうすい植物堆積を含む黒色粘土層が堆積している。上層の暗灰色粘土層は，奈良時代，平安時代の遺物を包含している。（第３図２）

第２微高地は，第２調査区北側で最も高く，東へ向ってしだいに低くなっていたものと推定される。奈良時代以後に削平され第２調査区では弥生時代の遺構をほとんど遺していない。第３調査区は，この微高地の東南部にあたり，南側および東側に極めてゆるやかに傾斜している。地盤の高い西よりの部分では表土下に地山が露出しており，東よりの部分では黒色の遺物包含層がみられた。この包含層は，上面に各時代の須恵

器片を散布させているだけでなく，5類，6類，13類，14類の混じりあった状況を示しており，層位的には分離することはできなかった。

第 3 微 高 地

第3微高地は，第2微高地と低位面でつながった地形的には一体の微高地である。この微高地は上面を削平されていたため，当初の時点で発見されず，建設工事施工後，側道敷の調査に際してトレンチにより確認されたものである。

第 4 微 高 地

第4微高地と第3微高地の間には，現在，祇園古用水の河道となっている谷が介在する。第4微高地の西側は，この河道に向けてゆるやかに傾斜し；灰色ないし青灰色の微砂混り粘土層が堆積している。この傾斜面には遺物包含層はみられない。

第4微高地基盤上層では縄文晩期の遺物が出土した。この微高地は，大型水路で2分されてあり，東側の微高地は，さらに北側の高位面と南側の低位面に分かれる。西側の微高地は，東側の微高地面に比較すると，やや低いが，ほぼ高位面に相当する。高位面の上面は削平されて竪穴住居址がわずかに検出される状況であった。東側高位面の南辺には，ほぼ7世紀頃と推定される柵列がめぐっており，高位面から低位面におりた斜面下端には4類に属する溝がみとめられた。この東側高位面が主として居住区として利用されていたのに対して，西側の微高地上面は，弥生時代前期から中期中葉にわたり墓域として利用されており，古墳時代になってから住居が営まれるようになった。低位面は極めて平坦で，下層の青灰色微砂層より4類の遺物が出土し，上部の黒色粘土層より13類，14類が検出される。また包含層上面では古墳時代須恵器が少量検出される。中世以降の水田層である表土層の下部には，灰白色ないし灰黒色の粘土層がうすくひろがっており，この中には奈良期から平安期にかけての遺物が，わずかに包含されていた。

第4微高地の東側は極めてゆるやかに傾斜し，淡褐色ないし灰色の粘土層が堆積するが，遺跡から約100m東方で黒色粘土層の堆積する更に深い低湿地に入る。

今回の調査では，弥生時代前期前半期に遡る遺構遺物は検出することができなかった。これは主要には調査範囲が限定されていることによるものと考えられる。しかし，その他にも第3調査区，第4調査区等でわずかに柱穴下部をとどめた竪穴住居址が多数存在していたと考えられることなどから，微高地上面は遺跡の存在期間中にも，堆積と侵蝕をくりかえしていたことを示している。したがって，これらの結果が，直ちに存在した遺跡の実体を示すものと考えることはできない。　　（高　橋）

第４章　遺　　構

第１節　第１調査区

現在は低湿地になっている部分で２つの微高地が確認された。形成期には１つの微高地であった可能性も強いが，弥生時代中期後半以降には２つに分かれている。西側の微高地をＡ地区，東側の微高地をＢ地区とした。Ａ地区では上面を削平されていて，甕棺１基と溝が確認された。東側と西側にそれぞれ包含層がある。Ｂ地区では，弥生時代後期の住居址１個と古墳時代前半の住居址１個を確認した。柱穴がまとまらないで検出されていることから，これ以外にすでに削平されてしまった住居址があるらしい。土壙は13個確認された。形は隅丸長方形のものと円形，楕円形になったものがある。東側と西側にそれぞれ遺物堆積層が形成されている。

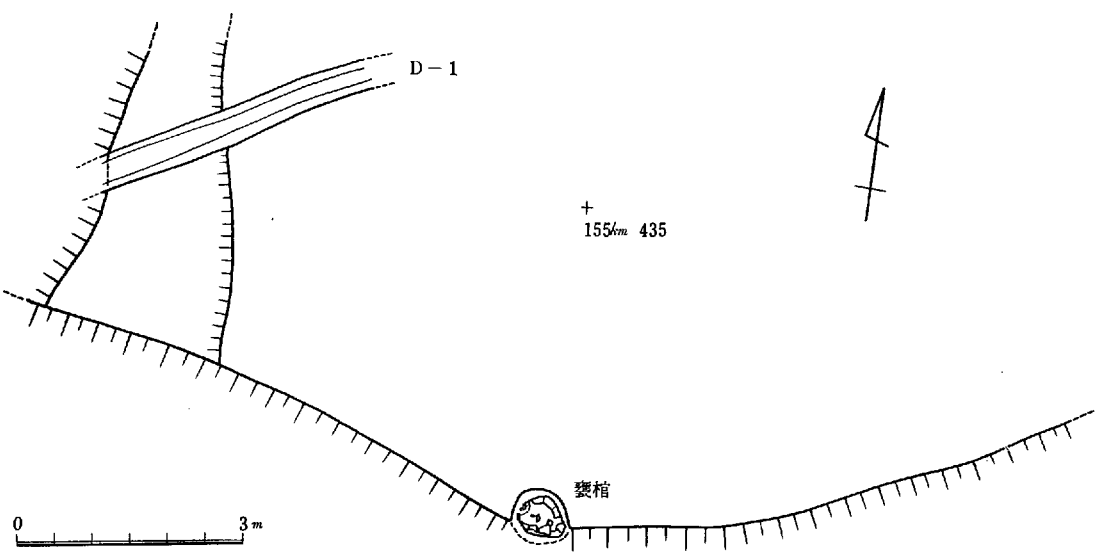
（1）住　居　址

１号住居址（第５図　挿頁９　図版１－２，２－１）

狭い微高地上につくられた大型の竪穴住居址である。火災にあって炭化材が多く残っている。放射状に木材があって萱状の炭化物も多い。柱は４本である。柱穴断面などは出水がはげしく詳細には調査できなかった。西端に正目の長さ34cm，幅30cmの板の炭化したものがある。その横に上面が平らな40cm×34cmの台石が１個ある。床面の遺物には，甕，高杯，大高杯，杯，器台，砥石がある。２号住居址によって北西部が切られ，中央部を溝２によって切られている。

２号住居址（第５図 挿頁９　図版２－２）

北側は用地外で半分調査した。方形の竪穴住居址である。柱は４本で，ベッド状施設と壁体の溝がある。内側の一段低くなった部分には炭と灰が散らばっていて中央に凹地がある。１号住居址を切っている。埋土中には古墳時代雄町13の甕，高杯の破片を含んでいる。湧水が激しくて，柱穴の断面観察はできなかった。



挿図３　第１調査区Ａ地区平面図

（2） 土　　壙（第6，7，8-1図　図版4）

A地区は上部を削平されて残っていないが，B地区では13個を確認した。形は円形，楕円形，隅丸長方形などさまざまで，年代も雄町5類から雄町11類まであって性格はわからない。土壙12を切っている土壙13は断面観察によると何度も掘りなおしていて最終期の断面形はU字形を呈しており，井戸の可能性もある。埋土中には杯の完形品が3個入っていた。

（3） 溝

溝　1（第8図2）

上面が削平されてわずかに残っている。現状で幅50cm，深さ10cmである。西側にのび低地で消えている。

溝　2（第8図3）

第1調査区の東端で台地上につくられて1号住居址を切っている。断面の観察から2回以上の改修をしている。現状で幅173cm，深さ50cmで埋土中には雄町10類の土器片を多く含んでいるが雄町11類の甕，高杯の破片を含んでいる。調査区域が小さいのでどちらに流れたか断定できない。

（4） 埋 葬 遺 構

甕　棺（第9図　図版3-1，3-2）

A地区の南に寄った地点で甕棺が1基確認された。微高地が自然の削平をうけているが上面と南側を一部削られた状況で残っていた。大型の壺に高杯で蓋をしている。掘り方の大きさは，現状で172cm×135cm，深さは57cmである。上部を北西に向けている。内部には何も検出されなかった。甕は雄町5類に属し，高さ57.8cm，胴の直径45cm，口径23cmである。脚部をわって杯部がちょうど甕の口縁部内に入るようにしている。その他の埋葬遺構は検出されなかった。自然の削平で浅い部分につくられたものはすべて消滅したものと推定される。

表 1　第1調査区住居址一覧表

番号	平面形	長辺(径)×短辺(径) cm	柱穴	深さ cm	溝	付属施設	出土品	備考	時期
1	円形	1,020×990	4	10		台石	大高杯，高杯，壺，かめ，杯，砥石，木材，炭化物	火災 D-2で切られている	弥生時代後期(雄町10)
2	方形	550×470	4	10	有	ベッド状施設	(埋土中　かめ，高杯)	半分調査	古墳時代(雄町13)

表 2　第1調査区土壙一覧表

番号	形態	長さ×幅 cm	深さ cm	遺物(埋土)	備考	時期
1	楕円形	73× 56	10	(甕，高杯)		弥生時代(雄町11)
2	隅丸長方形	112× 48	18	(甕)		弥生時代後期(雄町11)
3	隅丸長方形	101× 60	13			?
4	隅丸長方形	135× 49	13			弥生時代後期(雄町11)
5	不整楕円形	90× 60				?
6	楕円形	60× 50				?
7	隅丸長方形	146× 53	11	(甕，高杯)		弥生時代後期(雄町10)

番号	形　態	長さ×幅 cm	深さ cm	遺　物（埋土）	備　考	時　期
8	楕円形？	88× 60以上	25		灰が多い	？
9	楕　円　形	100以上× 90	20	（甕）	北側が流水で流されている	弥生時代後期（雄町10）
10	円　　形	105× 92	43			弥生時代中期（雄町５）
11	楕　円　形	約120× 66		（甕）	灰が入っている	弥生時代中期（雄町５）
12	楕　円　形	215×130	40	（壺，甕，高杯，器台）	土壙13に切られている	弥生時代後期（雄町10）
13	円　　形	180×161	52	（壺，杯３）	土壙12を切っている	弥生時代後期（雄町11）

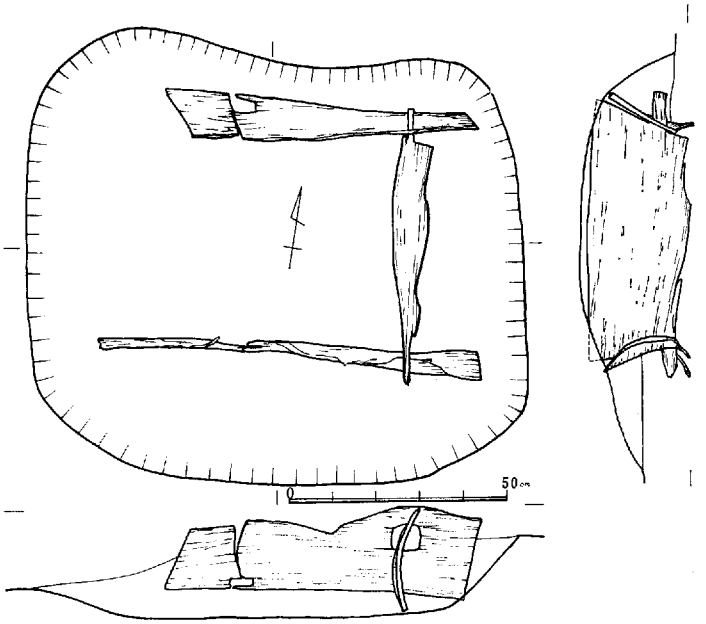
（正　岡）

第２節　第２調査区

第２調査区は第３調査区までつづく微高地の傾斜面である。旧河川の岸に接していて，斜面に遺物包含層を形成している。弥生時代中期後半に土砂が堆積して中州が形成された後，中州と微高地の間に弥生時代後期の溝が１本掘られている。中州の南側にも遺物の厚い堆積層があることから，中州にも生活面があったらしい。現在の水路のあるところでゆるやかな傾斜面に５～10cmの砂利が一面に広がるところがある。この中には，緑釉，灰釉，須恵器，土師器の破片を含んでいる。東によった傾斜面のところで歴史時代の井戸が確認された。

（１）井　戸（挿図第４図　図版６－２）

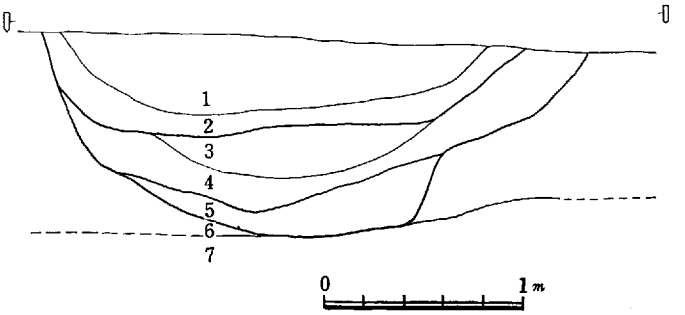
微高地の南側傾斜面につくられている。上部は削平されて下部のみが残っている。掘り方は現状で１m14cm×96cm，深さ25cmである。井戸枠は板材を組み合せているが，西側の一板は残っていない。大きさは約50cm角である。掘り方内の埋土は暗灰色粘土まじり細砂で円礫，木片，植物遺体を含んでいる。内部の埋め土は縞状に粘土と砂が入っている。植物遺体が多く，加工木片１を出土した。基盤層は青灰色砂礫層である。層位の状況から奈良時代以降のものである。



挿図４　第２調査区井戸実測図

（２）溝（挿図第５図）

微高地の南端にそって溝がある。も



1 淡灰色微砂
2 灰色微砂
3 帯緑淡灰色微砂
4 ややうすい黒色微砂
5 灰色微砂
6 帯灰緑色微砂
7 淡灰色粘土質微砂

挿図５　第２調査区溝断面図

ともと円礫層から湧きでる水が流れる小川があったところに掘られている。南の方では円礫層を切りこんでいるため何度も崩壊している。断面はU字形で幅140cm，深さ65cmである。埋土には雄町8類の器台片を含んでいる。埋没したあと上面を細砂がうすく覆っている。（正　岡）

第3節　第3調査区

微高地の上面からゆるやかに傾斜した部分に住居址が12個確認された。西側は上部が削平されているが，東側ではうすい包含層をかぶっていて遺構の残りがよい。住居址の年代は，弥生時代中期後半1個，後期前半3個，古墳時代前半5個，年代不明1個である。2号住居址と3号住居址，8号住居址は雄町7類の遺物を含んでいるので同一時期のものである可能性が強い。平面形は円形と方形のものがあって，円形と方形の中間の形もある。弥生時代中期後半の溝が調査区を西から東にのびている。古墳時代前半の溝は，直角にまがっているものが向かいあって2本ある。調査区からはずれる部分があるが，埋土中の遺物と土層の状況から同一の溝である可能性がつよい。大きさは約22m×20mの方形にめぐつているらしく，その中で溝の埋土中の遺物の年代と同じものは4号と9号住居址がある。9号住居址はやや新しい遺物を含んでおり，2個の住居址は同時に存在しないがそれぞれ，溝と併存する。長方形土壙は2つあって，2つとも弥生時代後期前半のものである。土壙には，円形と隅丸長方形のものが32個確認されている。工事中に直接かからないところは上面を確認しただけで掘り下げないで18個調査を行なった。7，15，22，26，27では下部に多量の灰を含んでいて，焼土面のあるものがある。年代は32が弥生前半から古墳時代前半までにわかれる。大部分は弥生中期後半のものである。西側によった部分で歴史時代の柱穴だけが確認された。柱のぬきとり穴に須恵器，土師器の破片を含んでいる。東側でゆるやかに傾斜していた部分は，約1m位低くなってその東に幅の狭い微高地がある。基本的には同一の微高地らしいが低くなった部分には遺構も遺物堆積層も確認されていない。東の微高地は道路の北側に幅2mのトレンチを設定して，遺構の確認を行った。ここでは溝2本と柱のぬきとり穴，住居址らしい落ち込みを確認した。

(1) 住　居　址

1号住居址（第11図　挿頁11　図版7-1）

隅をまるくした方形住居址である。柱は4本でぬきとっていない。土層断面から直径20cmと推定されるものを使用している。南東の柱穴はつめ石を使用している。ベッド状施設が4方向にあって，床面と7cmの差がある。東側には径1～2cmの小砂利が敷いてあって入口と推定される。壁体の溝の中には砂利は入っていない。炉は中央よりやや北西によって，床面に炭と灰がひろがっている。円形の土壙が北東部隅と南西部隅に1個ずつある。南西隅の土壙からは木片と甕の破片が出土した。埋土中には，弥生式土器，サヌカイトを含んでいるが雄町13類の高杯，甕，鉢の破片，鉄片を含んでいる。調査後砂を入れて保存する。

2号住居址（第12図　図版7-2）

隅丸方形の竪穴住居址である。火災のため炭化材が多く残っている。柱穴は4本らしい。壁体は火災によって焼けており，特に北西部の壁体がやけている。新幹線の橋脚を設計変更して高架の下に保存するため，下部まで発掘しないで砂を入れて埋める。埋土中の遺物には，弥生中期後半の遺物も入っているが，雄町7類の高杯，甕の破片が入っている。

3 号 住 居 址 （第13図　挿頁12　図版8－1，8－2）

円形の竪穴住居址である。南が古墳時代の溝によって切られている。壁体の溝をつくりなおしていることと，柱穴のたてかえから，3回たてなおしていることがわかる。内側は壁体の溝があり，柱は4本である。中は不整円形で壁体に側板の痕跡があり，柱は4本である。外側は円形で壁体の溝があり，柱は7本ある。壁体の溝には杭列がある。炉は中央部に深い円形の穴があって灰がつまっている。床面にはサヌカイトの細片が散らばっていて，特に炉のまわりに集中している。溝に切られた南側の部分が少し低くなっていて土器がおしつぶされた状態で残っている。土器には壺，甕，高杯，台付壺等がある。石製品には砥石5，石鏃15がある。埋土中には弥生中期後半の遺物が入っている。紡錘車1，分銅形土製品2も出土している。

4 号 住 居 址 （第14図　図版9－1）

半分は用水路のため調査できなかった不整円形の竪穴住居址である。柱は4本あって，ぬきとられているが，土層断面から直径20cmと推定される。ベッド状施設がある。柱と柱を結んだ内側が一段低くなった床面になっている。内部の床は方形になっていて，炉は中央よりやや南に寄ってつくられている。はじめは方形につくられていたものを楕円形に掘りなおしている。壁体には溝があって，この溝から高杯1，砥石1が出土した。埋土は焼土，炭，灰が多い。埋土中には甕，高杯の破片が入っている。

5 号 住 居 址 （第15図　挿頁13　図版10－1，10－2）

不整円形の竪穴住居址である。壁がかなりくずれているが，壁体の溝は方形に近い形をしている。柱は4本で3回の建てかえがみられる。東側部分では埋没してしまったあとで雄町6類の溝で切られている。中央に楕円形の穴があって，穴は深く，灰がつまっていて上に台付鉢，高杯が入っている。床面では，壺，高杯，甕，太形蛤刃片1，紡錘車1が出土した。埋土の上層には雄町5類の壺，甕，高杯，分銅形土製品3，砥石3，石鏃44，やりがんな2が出土している。

6 号 住 居 址 （第16図　挿頁14　図版9－2）

円形の竪穴住居址である。柱は4本で，ベッド状施設がある。柱と柱を結んで側板を入れていて，その内側が一段低くなった床面になっている。内側の床は方形になっており，中央部に炉があり，灰が散らばっている。炉の東南で床面に接して完形の杯が1点ある。埋土中の土器には甕，高杯，杯の破片がある。

7 号 住 居 址 （第17図　図版11－1，11－2）

6角形の住居址で半分を調査した。柱穴は3個調査したが，いずれも角材を使用した礎板が残っている。北西部の柱はくさってはいるが下部の芯は残っている。柱は直径16cm位のものを使っている。柱と柱を結んで外側がベッド状施設になっている。壁体には溝があって，杭の痕跡がみられる。埋土中には雄町13類の壺，甕，高杯の破片が入っている。

8 号 住 居 址 （第18図　挿頁15　図版12－1）

不整円形の竪穴住居址である。柱は4本でぬきとっている。壁体は1列に側板の痕跡が粘土の色のちがいから認められる。中央に土壙があって袋状になっている。中には灰が多量に入っていて，土壙のまわりには火どころがみられる。東と南の2ヵ所にそれぞれ1m84cm×1m16cmの浅い凹地がつくられている。東側の方では床面にサヌカイトの小片と石庖丁がある。埋土中には雄町5の土器片が多く含まれているが，雄町7の壺，甕，高杯の破片がある。他に石鏃83，砥石8，土錘2，石錘1，水晶玉1がある。雄町5類の土壙28を切っている。

9 号 住 居 址 （第19図　図版12-2）

一部用地外になるので3分の2を調査した。方形の竪穴住居址である。床面で弥生中期の土壙を切っている。壁には杭穴が並んでいる。柱穴は中央より南に1個検出されているので2本柱らしい。中央部には炉があって床面に灰が散らばっている。床面の遺物は東側によった部分で壺，甕，鉢，杯の破片がまとまっている。埋土中には雄町5類の遺物を多く含んでいる。雄町14類の壺，甕，高杯の破片と石鏃1，やりがんな1が検出された。

10 号 住 居 址 （図版13-1）

2号住居址の西に楕円形の細い溝がある。西側は削平されて残っていないが，直径8m位の住居址である。壁体の溝も浅くしか残っていないので住居址の年代は確定できない。

表 3　第 3 調 査 区 住 居 跡 一 覧 表

番号	平面形	長辺(径)×短辺(径) cm	柱穴	深さ cm	溝	付属施設	出土品	備考	時期
1	方形	542×540	4	6	有	炉，ベッド状施設，入口石敷，ピット2	(埋土　甕，鉢，高杯)	発掘後保存	古墳時代(雄町13)
2	隅丸方形	520×468	4？				(埋土　甕，高杯，壺)	未発掘保存	弥生時代後期(雄町7)
3	円形	887×874	4+7	30	有	炉，壁体に杭列	壺，甕，高杯，台付壺，砥石	3回建てかえ	弥生時代後期(雄町7)
4	不整円形	540×	4	30	有	炉，ベッド状施設	砥石，高杯	半分調査	古墳時代(雄町13)
5	不整円形	650×630	4	30	有	炉	壺，高杯，甕，石斧台付鉢(埋土，やりがんな)	建てかえD-Iに切られている	弥生中期(雄町5)
6	円形	560×540	4	10		炉，ベッド状施設，側板	杯		古墳時代(雄町13)
7	6角形	700×	6	30	有	ベッド状施設	礎板(埋土　中高杯，甕)	半分調査	古墳時代(雄町13)
8	不整円形	664×654	4	40		側板，隅丸方形ピット，炉	石庖丁，高杯，甕，壺	建てかえ	弥生時代後期(雄町7)
9	方形	480×412	2？	30	無	炉	(埋土　やりがんな) 壺，甕，高杯	2/3調査	古墳時代(雄町14)
10	楕円形	約800×		0	有			壁体の溝のみ	？

(2) 長 方 形 土 壙

長方形土壙 1 （第20図1　図版15-1）

大きさは長辺3m44cm，短辺2m35cm，深さ60cmである。長辺を東西方向に向けている。壁体に溝があって，中央より西に寄ったところに凹地がある。埋土中には雄町5類の遺物を多く含むが雄町7類の高杯，甕の破片を含んでいる。

長方形土壙 2 （第20図2　図15-2）

大きさは長辺2m20cm，短辺83cm，深さ35cmである。長辺を東西に向けている。形はやや台形にゆがんでいる。掘り方の外に杭穴がみられるがともなうものか確定できない。全体がグライ化している。壁体の溝は

なく，中央の凹地もない。埋土中には雄町５類の遺物を多く含んでいるが，雄町７類の壺，甕，高杯の破片を含んでいる。

（３） 土　　壙（第21～27図，図版16，表４）

土壙は調査区の南によって多く検出された。柱のぬきとり穴に類するものをのぞいて32個を確認し，保存区域にしたところと，直接工事にかからない部分のものは，上面の形を調査して埋めもどした。形態は楕円形から隅丸長方形のものが多い。性格はよくわからない。土壙７，15，22，26，27では下部に多量の灰を含んでいて，焼土面のあるものがある。年代は弥生中期前葉から古墳時代前半まであるが，大部分は弥生中期後半のものである。土壙７からは灰のなかから米粒も検出された。

表　４　第３調査区土壙一覧表

番号	形　態	長さ×幅 cm	深さ cm	遺　物（埋土）	備　考	時　期
1	円　形	230×		（甕）	未発掘保存	古墳時代（雄町13）
2	円　形	100× 95		（甕）	未発掘保存	弥生時代中期（雄町５）
3	長　方　形	約180× 70		（甕）	未発掘保存	弥生時代中期（雄町５）
4	隅丸長方形	約180× 70		（壺，甕，高杯）	未発掘保存	弥生時代中期（雄町５）
5	楕円形？	100以上×約100			未発掘保存	弥生時代中期(雄町５)？
6	隅丸長方形	92× 71			調査	
7	楕　円　形	190× 92	74	（壺，甕，高杯，水さし形土器）	米粒，灰，炭が多い	弥生時代後期（雄町７）
8	隅丸長方形	145× 70		（甕，高杯）	未発掘保存	弥生時代中期（雄町５）
6	隅丸長方形	170× 56				弥生時代中期（雄町５）
10	隅丸長方形	130× 60			未発掘保存	弥生時代中期（雄町５）
11	隅丸長方形	156× 66		（甕，高杯）	未発掘保存	弥生時代中期（雄町５）
12	隅丸長方形	160× 90			未発掘保存	弥生時代中期（雄町６）
13	楕　円　形			（甕，高杯）	未発掘保存	弥生時代中期（雄町５）
14	楕　円　形	182×113	23	（甕，高杯）	炭，焼土が多い	弥生時代中期（雄町５）
15	楕　円　形	190×121	76	（甕，高杯，大高杯）	灰と土器が多い	弥生時代中期（雄町５）
16	楕　円　形	約160×134				弥生時代後期（雄町７）
17	隅丸長方形	80以上× 55	19	（壺，甕，高杯，器台，大高杯）		弥生時代中期（雄町５）
18	隅丸長方形	150× 67	25	（甕，高杯）	柱穴で切られる	弥生時代中期（雄町５）
19	隅丸長方形	245× 95	約60	水さし形土器，高杯	未発掘保存。D－２に切られる	弥生時代中期（雄町５）
20	隅丸長方形	130以上× 73		（甕）	未発掘保存	弥生時代中期（雄町５）
21	隅丸長方形	190以上× 109			未発掘保存。D－２に切られる	？
22	隅丸長方形	184× 56	71	（甕，高杯）	灰と土器が多い。底部に無頸壺	弥生時代中期（雄町５）
23	楕円形？	80以上× 83				弥生時代中期（雄町５）
24	楕　円　形	100× 82			H－６に切られる	弥生時代中期（雄町５）
25	楕　円　形	103× 58以上	41	（甕）	灰が多い。H－８に切られる	弥生時代中期（雄町５）
26	隅丸長方形	150× 70	70		灰が多い	弥生時代中期（雄町５）
27	隅丸長方形	120× 62	90		灰が多い	弥生時代中期（雄町５）
28	隅丸長方形	180× 72	24	（甕，高杯）		弥生時代中期（雄町５）
29	楕　円　形	100以上×			D－２に切られている	
30	円　形？	140× 55以上		（壺，甕，高杯）	H－９に切られる	弥生時代中期（雄町５）
31	楕　円　形	223× 95	70	（甕，高杯）	北側が袋状	弥生時代後期（雄町７）
32	長　方　形	約300×210	74	（壺，甕，高杯）	D－３に切られる	弥生時代中期（雄町３）

(4) 溝

溝　1

微高地の上面を蛇行しながら西から東方向に流れる。5号住居址を切って東のやや低くなった方向にのびている。幅45cm，深さ25cmで，埋土中には弥生時代中期（雄町6類）の甕，高杯の破片を含んでいる。

溝　2

直角にまがる溝で，3号住居址と溝1を切っている。断面はU字形で幅1m16cm，深さ62cmである。調査区内の底部の高さは，北側で海抜2m35cm，南東部端で2m24cmで11cmの高低差がある。埋土中には雄町5類，雄町7類の土器片を含んでいるが，古墳時代（雄町13，14類）の壺，甕，高杯の破片を含んでいる。

溝　3

溝2の東にあって直角に曲がる溝である。溝2と続いて方形に廻る可能性が強い。幅100cm，深さ60cmで埋土中には雄町5類，雄町7類の土器片を含んでいるが，雄町13，14類の甕，杯の破片が入っている。

溝　4

7号住居址の上面にあるが底部のみが残っている。北側では消えているが南側で幅90cmある。深さ5cm位の痕跡のため詳しいことはわからない。

溝　5

8号住居址の西にあって底部のみが残っている。現状では幅約60cmで西にまがって消える。深さ5cm位の痕跡のため詳しいことはわからない。

溝　6

土壙31の上面を通って北から南に流れ，両側に杭列がある。現状で幅60cm，深さ15cmである。埋土は灰白色粘土が入っているので奈良時代以降のものである。

溝　7

第3調査区，東トレンチで確認された。北西から南東方向で大きさは幅40cm，深さ10cm位である。

溝　8

溝7のさらに東にあって，北東から南西方向で幅50cm，深さ10cm位である。　（正　岡）

第4節　第4調査区

第4調査区は，旧旭川の氾濫原の中に形成された自然堤防の一つで，本来分離しえない安定した微高地であったと考えられるが，調査区中央付近に幹線水路が開削されて以来，西半部と東半部での土地利用はかなり様相を異にしていたようである。西半部微高地上には，弥生時代前期および中期にかけて集落が営まれた痕跡はまったくない。むしろ意識的に埋葬地区として活用されたといってよい。一方，東半部微高地においては，中期前半の時期から確実に集落が営なまれている。やがて古墳時代前期前半に至り，西側微高地上にも方形住居址の存在が認められるように，東西を含むすべての微高地上は集落地域として利用されている。

本調査区で発見された各種の遺構は，弥生時代前期から実に奈良時代にまでおよんでいる。特に顕著な遺構としては，住居址，溝ないし河道・埋葬遺構群・高床倉庫と想定される建物址を含む柱穴群・井戸址・柵列・条里制遺構など，生産，生活，埋葬とあらゆるジャンルにかかる多種多用のものが，層位的におり重な

って発見されている。

また，出土遺物としての土器類は，若干の縄文時代晩期土器からはじまり，弥生時代の全時期の土器，さらに古墳時代の土師器や須恵器，ひきつづいて奈良・平安時代の須恵器，緑釉陶器など豊富な器種と器形を検出している。ただし，量的には弥生中期および古墳時代前期前半の土器類が圧倒的に多く，他の時代に属する土器類は全体からすればきわめて少量である。土器以外の遺物としては，弥生時代の石庖丁・石斧・石鏃・管玉，古墳時代の鉄斧・青銅鏡破片・竪櫛・管玉・砥石などがある。

全体的に遺構配置の概要を記すと，住居址は12個分が確認され，そのうち4個は弥生中期に属し他は古墳時代前期前半（4世紀代）のものである。

溝または水路は，総計40本ちかく確認され，それらは弥生前期から古墳時代後期半ば頃までの長期間にわたる時期にそれぞれ属し，生活址と分ちがたく結合している。約半数の水路は，確実に農耕生産と密着して利用されたもので，その他に居住空間を隔する溝，機能の不明なものなど，規模や目的に較差が著しい。埋葬遺構は200基ちかく確認されたが，そのうち約130基の調査を行なっている。弥生前期に属する壺棺2個をのぞけば，およそ弥生中期前半と推定しうる土壙墓が普遍的で，中期末以降のものは発見されていない。建物址としては，4ないし6本で構成される高床倉庫址，9本でまとまる別の建物址などがみられる。ことに前者は，柱穴の掘り方が大規模で1m余りを計り，柱も20cm以上のものが使用されたと想定される。確実な建物としては一棟のみがまとまるにすぎないが，類似の柱痕あるいは掘り方は点在的に東微高地上の各所にみられ，これらはすべて弥生時代中期中葉に属している。井戸址は4個分を発掘し，いずれも古墳時代前期前半の土器ないし土器片を伴出している。柵列は2組存在し，そのうち1組は7世紀代に属し，蛇行しながら接続している。もう1組は真北から20度東の方位をもって南北に延びている。条里制遺構は真北とほぼ直角で東西方向に延々百数十mも存在する。その東限および西限は見極めえないが，安定した微高地上をかなりの範囲に延びていたものと推定される。（葛原，泉本）

（1） 住　居　址

1 号 住 居 址 （第28図　図版18—1）

平面は方形で4本柱である。中央に85×80cmの楕円形で深さ15cm前後の浅い凹みがあり，少量の炭が混入していたことから，火どころと考えられる。東と北の壁際にピットが1個ずつ掘られているが用途は不明である。床面直上で小型鏡の破片（挿図第10図　図版47-3）と刀子状鉄製品（第78図2　図版47-1）および高杯などの土師器片が少量出土している。土器は雄町14類に属すると考えられる。なお南西角に近い壁外には小さな板状のものが打ちこまれた痕跡が認められた。

2 号 住 居 址 （第29図　挿頁16）

平面は方形と考えられるが，工事用側溝および電柱埋設時点で切断されている。北西部分のみ約¼の面積を掘り上げただけであるが，ベッド状施設がつくられている。南半部は工事とは関係がないので平面を確認しただけで埋め戻した。土師器片が少量出土しているが実測はむずかしい。雄町14類ないしそれにちかい時期と考えられる。

3 号 住 居 址

北側⅓を確認しただけである。わずかに周溝が認められ，平面は方形と考えられる。両コーナーのそばで

柱穴が確認されており本来は4本柱と推定される。遺物は出土していないが，溝8との関係から考えて雄町14類，ないしそれに近い時期と考えられる。

4号住居址（第30図）

平面は長方形にちかいと推定される。柱は西半部とトレンチ調査の際掘りすぎたためか検出できず，東半部の2本を検出したのみである。周溝がわずかに残っていただけで，出土遺物もなく時期は不明である。

5号住居址（第31図　図版18－2）

平面は方形で4本柱を有する。この4本柱はほぼ同じ位置で建て直しのため再度柱穴が掘りこまれている。床面は2時期存在する。南の壁際には楕円形のピットが存在し，その中から甕形土器（346）1個と小形坩2個（379,382）杯（349）が出土している。床面直上に炭化材が少量残存していたことから，建て直した後に火事で消滅したと考えられる。雄町14類に属する。

6号住居址（第32図　図版19－2）

平面は方形である。5号住居址床面から5cm前後の下層で確認されたため周溝と柱穴が残存していたのみである。北西部に火どころと考えられるピットが存在する。これは壁に近いので同時期とするには疑問なところもあり，5号住居址の中央部に位置し，断面観察でも同様の傾向を示すので5号住居址の第一次の時期

表5　第4調査区住居跡一覧表

番号	平面形	長辺(径)×短辺(径) cm	柱穴	深さ cm	溝	付属施設	出土品	備考	時期
1	方形	412×347	4	10	あり	中央火どころ1，ピット2（壁際）	高杯，鏡片，刀子？	壁体外に矢板痕跡あり	雄町14
2	方形	720×685	4？	10		ベッド（高床部）	土師器片		？
3	方形？	450×？	4？		あり				？
4	方形？	410×400	4？		あり				？
5	方形	435×400	4	10	あり	ピット1（壁際）	甕，坩2杯	建てかえ（火事か？）	雄町14
6	方形	420×375	4		あり	ピット1（5号の一次か？）		5号と切り合い下層にある。（古）	？
7	円形	480×440(一次) 495×520(二次)	6		あり	火戸2	無頸壺2，甕1	建てかえ(拡張)	雄町3
8	円形	425×400(一次) 370×350(二次)	9	6～13		火どころ2（中央ピット）	石鏃3，石庖丁2 土器片，石	建てかえ(縮少)	雄町3
9	不整円形	460×420	4	4～8	あり	中央ピット，側板	壺，甕，高杯，分銅形土製品	炭化材が多い	雄町6？
10	方形	410×350	2	4～20	あり		杯		雄町14？
11	円形	520前後(？)	2＋？	2	あり		壺，甕，高杯	半分のみ調査	雄町4
12	方形	390×335	？	15	あり		壺，甕，石鏃1		雄町14？

に使用された可能性が強い。出土遺物は存在しないが，5号住居址より古いので雄町14類ないしその直前の時期と推定される。

7号住居址（第33図　図版19－2）

平面は円形に近い形態である。柱は6本存在する。周溝がなんとか検出できたのみで壁は存在しない。まっ赤な焼土の固まった炉が2個検出されたので周辺を調べると周溝の痕跡がわずかに見い出された。切り合い関係は確認できなかったが他の柱穴が存在しないことからみて拡張と考えられる。この7号住居址を確認する以前に弥生式土器を検出したが，ピット状のものが確認できなかったため，写真撮影，出土位置を記入して取り上げた。これらの土器は7号住居址に伴う遺物と考えられる。無頸壺2個（6，7）とほぼ完形の甕形土器の3点が出土しており，雄町3類に属する。

8号住居址（第34図　図版19－1，19－2）

平面はほぼ円形であり，9本柱で構成されていると考えられる。ほぼ中央にピットが2個あり，いずれも焼土，炭が混入していた。東側のピットを廃棄した後，西側のピットが使用されたと考えられる。この新しい時期のピットの周辺には焼土が小山状にかき出されていた。それらをはがすと，ピットの周辺は小山状に盛り上がった土手状のたたきしめられた土があり，北側床面ではサヌカイトのチップが数十点検出された。住居址の壁の部分には地山の黄色粘土と同じような土が約20cmの幅で固くたたきしめられている。これは縮少のためと考えられる。その土をはがすと，第一次壁に沿ってところどころに径5cm前後の丸太杭の痕跡が認められた。また住居址内西側の壁の近くには花崗岩質のかなり大きな石が置かれており，工作用のものと考えられる。出土遺物は，石器ではサヌカイト製打製石庖丁2個（第74図）と石鏃3本がある。土器は埋土中から少量の破片を検出しただけであるが，そのなかには雄町3類に属する刺突文を有する甕形土器片があり，石器の形態も古い様相を示しており，この住居址は雄町3類に属すると考えられる。

9号住居址（第35図　図版20－1）

住居址の床面部分だけが残存していたもので床面，壁体の溝，中央ピットを検出することによって住居址の確認をおこなった。焼土が多く柱状，茅状炭化物が散乱していた。出土遺物としては，分銅形土製品が出土した。出土状態は床面近くで炭化物をともなっていた。埋土中の土器片は少量で雄町4類と雄町6類に属するものである。

10号住居址（第36図　図版20－1）

方形であるが詳細については確認することができないほど削平されている。柱穴は2本だけ確認することができた。上部を削平されているため遺物を含んでいるのは壁体の溝中のものを主とする。埋土中の遺物には，土器片がある。時期は雄町4類の土器片を含んでいるが，雄町14類に属するらしい。

11号住居址（第37図1）

円形の住居址と思われるが調査が側道敷部分からはずれているため，約3分の1のみ調査を行なった。柱穴が2本検出され焼土が残存して床面に散乱しており焼け落ちたものと推定される。壁体の溝は明確である。柱穴らしいものが他に2本検出されたが，これはたてなおしかどうか不明確である。出土遺物には石器，雄町4類に属する壺，甕，高杯がある。

12号住居址（第37図2）

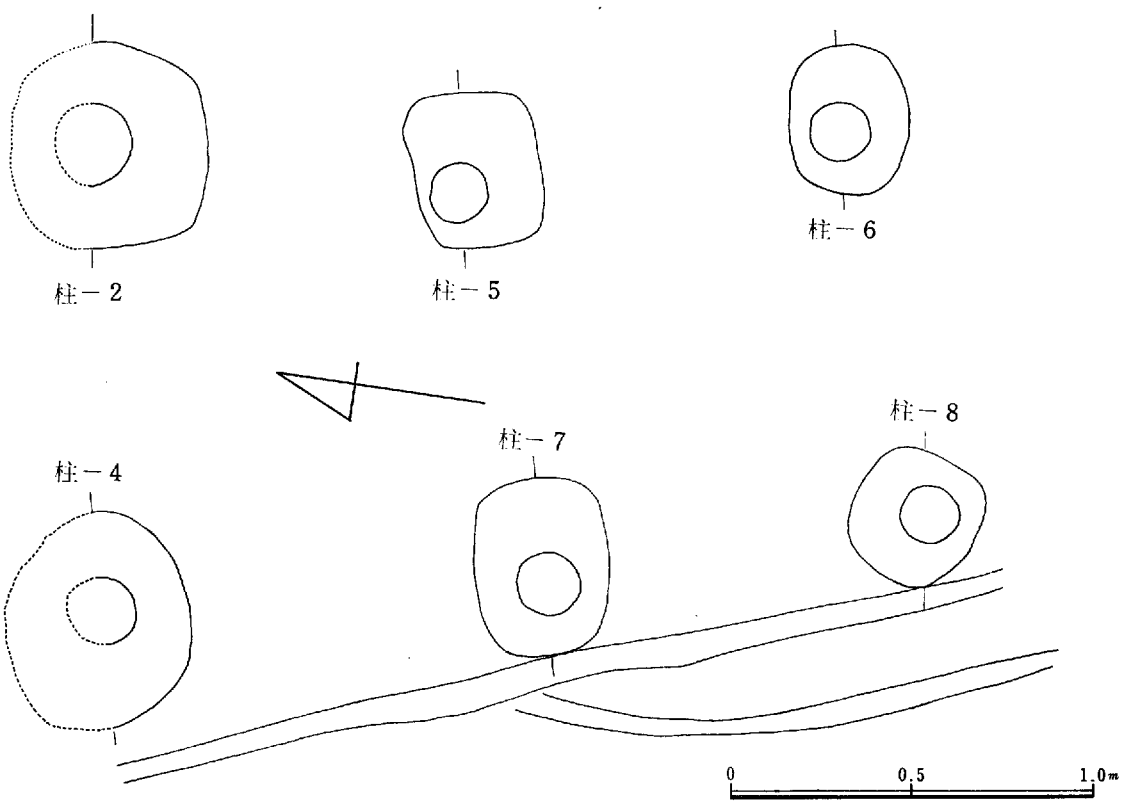
方形の住居址であるが削平が行なわれて柱穴付属施設の検出は困難であった。たてなおしと考えられる壁

体の溝の状態が確認された。埋土中の遺物には雄町４類と雄町13～14類に属する土器片を含んでいる。石鏃１も含まれていた。（泉本・中力）

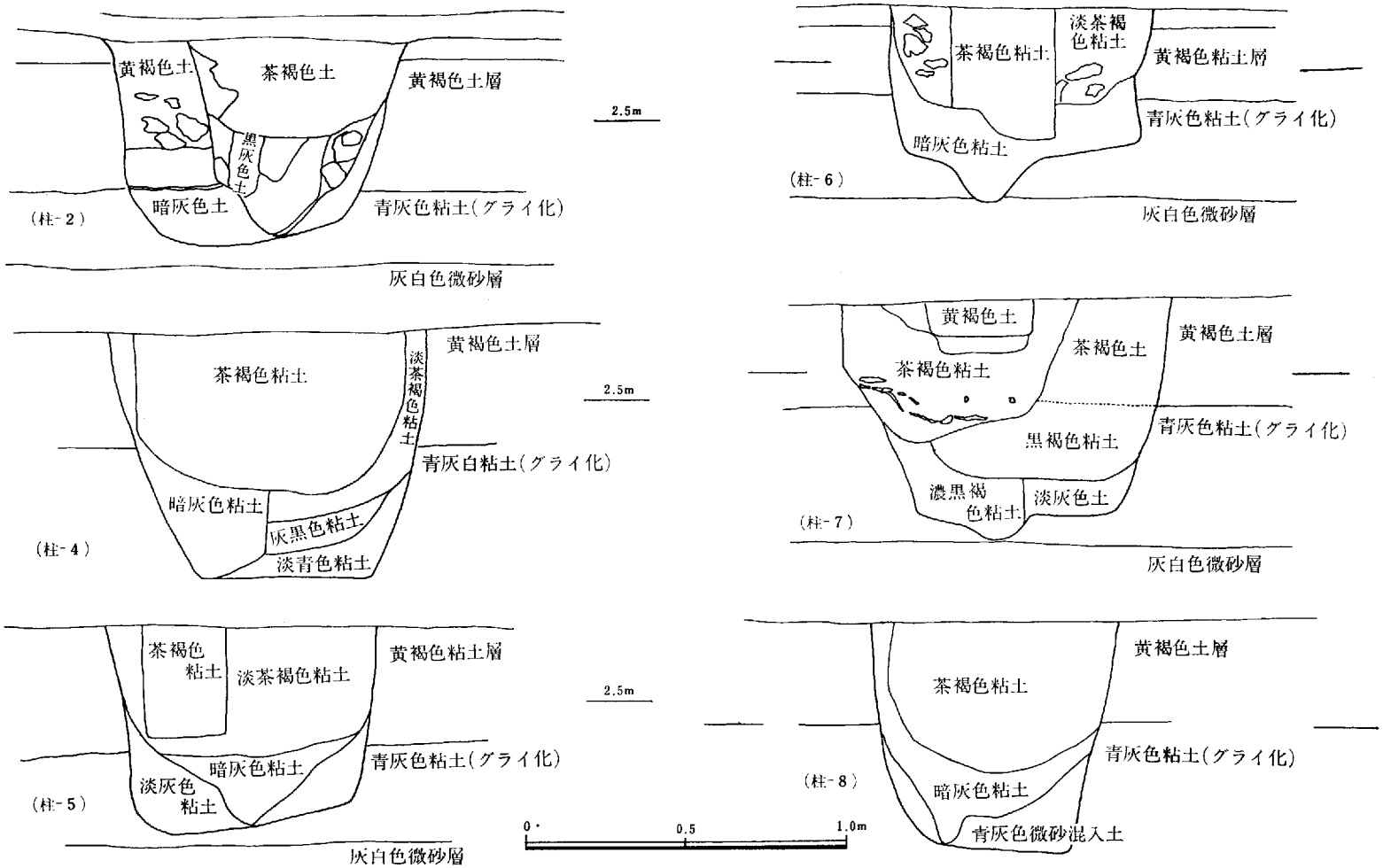
（2）建　物　址

建　物　1（高床倉庫）（挿図第６図，第７図　図版21）

黄褐色の基盤層を水平に削除すると，平均１m程度のほぼ円形の大きな穴が認められる。一般的にいって，その内部には茶褐色土が堆積しており，詳細に検討すると，さらに色調の異なる土壌が小円形を描く場合が多い。平面的な観察によるかぎり以上の記述を出ないのであるが，やや視野を広げるならば，同様の穴がおよそ等距離にあり，しかも４ないし６個のまとまりをもっている。これらの穴が実は掘り方を物語りその内に柱痕跡や抜き取り孔まであることに気づいたのは，切断作業に基づく断面観察によってであった。ついで断面の状況を記そう。例えば，柱―５は，はっきりと２度の建て直しを示し，上半部と下半部の土壌構造が異なる。上面から円形に観察しえた淡茶褐色粘土は径約85cm，深さ約40cmで，径約20cmの柱に対する掘り方である。柱痕は，木質をまったく遺すことなく茶褐色粘土におきかえられていて，掘り方の土の色調よりいっそう濃い。下半部においては，上半部の掘り方とほぼ同様の径で一部共通する肩が約20cm下がって底面を形成している。底部直上には両脇に淡灰色粘土が，中央には逆円錐形に晴灰色粘土が，それぞれ堆積している。中央の暗灰色粘土部分は第１次の柱を抜き取ったのち充塡され，その後第２次の掘り方底面として整えられたものと考えられる。他の大型柱痕穴もほぼ同様のあり方を示すが，特にこの柱―５にあって



挿図６　第４調査区建物１平面実測図



挿図7　第4調査区建物柱穴断面図

は，茶褐色粘土におきかえられた柱痕をつつみこんだ淡茶褐色粘土層から，その土層に限定され，弥生中期（雄町４類　49）の器台の破片多量と甕底部などが出土している。さらに，柱―５から出土した同一個体の器台の破片が柱―６，柱―７からも検出しえたことは，柱穴の同時性とともに，これら柱の機能が現実的に不可分の関係にあったことを示すものとして，注目される。以上３本の柱と柱―８とが一まとまりの建物であったことは，平面形態および土壌断面からしてまず誤りない。それらの芯心距離は等しく 2.2m を計るのである。そして，柱―２，柱―４もまたほぼ西辺および東辺の直線上にのるところから，１間×２間の建築物であった可能性も否定しがたい。いずれにせよ，規模の点において通常みられる竪穴住居とは異り，上部構造の竪牢さを暗示するばかりでなく，柱間 2.2m を計る規格性にもとづいて構築された建造物である。おそらくそれは高床倉庫址と想定してさしつかえないであろう。

建　　物　2　（図版20―２）

梁間3.6m，桁行き 5.3mをはかる２×３間の建物で，柱間はすべて 180cmである。中央柱列は，掘り方も柱の径も小さく，妻にあたる柱が小径である特異な建物となっている。残存状況が全体的に浅いこと，共伴遺物がないこと，などから時代を決定することは困難である。長辺はおよそ磁北に近い方位を示している。

（葛　原）

（３）　柵列・条里制遺構

柵　　列　（図版20-2，22-1）

第４調査区東半部の中央付近に，径15cm～30cm大の円形の柱穴が３～４個切り合って一単位をなし，それらの単位が70cm～80cmという一定の間隔で途中とぎれつつも約40mにわたり確認された。方向は直線ではなく，東半部は弧状をなして続いており西端部では直線に近くなっている。柱穴群は残存度が不良で深さはいずれも５～10cm前後である。これらの柱穴群からの出土遺物は皆無に近いが須恵器の細片が少量みられる。その中に杯蓋の破片があり，７世紀代に比定できそうである。柱穴の埋土はいずれも淡灰褐色粘土であり，層位的な観点でも灰白色粘土層（後述する条里制遺構の盤をなしており，奈良時代ないしそれ以前に形成されたと考えられる土層）より下部にあるので７世紀代につくられた遺構と考えられる。トレンチ調査の段階で取り上げた鉄斧（第76図２）もこれらの柱穴群内から出土したと考えられる。

発掘地点内では関連遺構は存在しない。単独的なものであり，この遺構は柵列であるとするより他には機能を見い出しがたいものである。

条里制遺構　（図版22-２）

第４調査区の東西中央線より，やや南よりの地点に東西方向（真北より92度西）に百数十メートルにわたってのびる二列の柵列状遺構が存在する。（図版22―２）西端は橋脚工事で破壊されており，東端も同様の状況である。西半部は残存状況が不良であったが東半部はかなり残存していた。その東半部の所見によれば，北側の列のものは溝状をなしており，その中に柱（杭）痕跡が多数存在する。それは基本的に 420cm ごとに主柱的な一辺約 30cm の角材？を配し，その角材と角材の間には径 10cm 前後の柱（杭）が南北の芯心で20cm～30cmの間隔をなし対となり，東西では芯心で約70cm間隔で検出された。故に角材と角材の間は６等分されている。そしてそれらをつなぐ如く地中梁ともいうべき材を埋めた痕跡が検出されている。

一方，南側の遺構は北側の遺構列と芯心距離で 120cm 隔たって北側の溝状遺構と並行して東西方向に連な

る50cm×30cm前後の大きさの楕円形ピットが点々と掘りこまれている。その楕円形ピットは芯心で70cm間隔で掘られている。そして各ピット内には前記の溝状遺構内の柱（杭）痕跡と同様の規模，間隔をもつ柱(杭)痕が2個ずつ存在している。このピット群は西方ではピットが残存せず柱（杭）痕だけとなり，やがてそれも痕跡がたどれなくなる。

この2列の並行する遺構は両方とも断面観察では柱（杭）痕跡の底面は水平にちかく，杭とするよりも柱と考えることが妥当であると思われる。柱痕跡の深さは残存度のよいところで，北側のものは約30cm，南側のものは約25cmあった。両遺構とも灰白色粘土層を切りこんでおり，柱痕部分も灰白色粘土ではあるがやや砂質の灰白色粘土であり，地中梁の部分には鉄分小斑点が混入していた。両遺構の掘方内から出土する遺物は非常に少量であったが，須恵器が10数片混入していた。実測するには断片すぎる少破片であるが，7世紀及び8世紀に比定できる杯などの破片がある。故に上限は8世紀に属すると推定される。しかし上面が削平されているため，両遺構の先後関係ならびに廃滅時期に関しては不明である。

なお第4調査区西半部の工事用南側溝の南辺近くに前述の遺構列とほぼ並行して東西方向にのびる灰白色粘土のつまった溝状遺構がこれまた2列並行して存在する。図面はとっていないが両遺構の間隔は大体8～9mである。機能に関しては当初柵列ではないかと考えていたが，道路としての機能も想定される。決定はできないが方向，規模，年代などの諸点から条里制と関連をもつ遺構であることは言及できるものである。

以上の条里制遺構との関連性は薄いが，第4調査区西南端部（工事用南側溝の南部分）に灰白色粘土の埋没した幅8m，深さ20cm前後の浅い溝状凹みが存在する。この凹みの方位は真北20度東の線で南北方向であるが約6m確認されたのみである。南限は不明で北限もしかりである。この凹みの西は地山となるが凹みの西端線から約9，6m西には白色粘土層が残存し，並行している。しかしその線に伴う西の肩は存在せず溝状凹みは存在しない。この灰白色粘土層の下層は黄色粘土層を基盤とする地山面が西方向へ進むに従って深くなっており，微高地傾斜面にあたる。この一つだけ存在する溝状凹みは人為的なものと考えられるが機能は不明である。出土遺物は存在せず，条里制遺構との切り合い関係も削平により確認の術もない。が，灰白色粘土層が埋没している事実は条里制遺構より古い時期に属することを示している。

その溝状凹みの西端を北に延長した部分に柵列が存在する（柵列2）。溝状凹みの方向と同じ線にのっているが検出部分はわずか4mしかない。これも柱穴は3本ずつ切り合って一単位をなしている。柱穴の径は約30cmを測り，深さは8cm前後残存していたのみである。各単位間の間隔は芯心距離で80cmである。

なお前述の溝状凹みより東よりの地区で緑・灰釉陶器が数片出土している。地山面と耕土との間には5cm程の耕土に似た土層があり，その中から出土したもので攪乱層であった。（泉　本）

（4）井　戸　址

河道および溝の項でふれたように，第4調査区の二つの微高地を貫流する農業用幹線水路は，弥生時代中期から少くとも古墳時代初頭までの約400年間，その後も継続的に維持管理されたのである。ちょうどこれら幹線水路をはさむ微高地の縁辺において井戸址4を検出するとともに，それらしい遺構1も発見されている。それぞれの井戸址の出土状況を記そう。

井　戸　1（第38図，図版23-1）

平面形はほぼ正方形に近い形状で，上端部での径約90cm強をはかり，徐々に狭まって下底部では約40cmの径となる。黄褐色基盤層を掘抔した素掘りの井戸で残存する深さは1m強である。井戸周辺に何らの柱穴痕

も認められない。最下底部にほぼ完形の土器（雄町14類の甕）1個体分が埋没しており，5層の堆積層とその間層とが認められる。

井　　戸　2　(第38図)

径1m強の円形の井戸である。底部に径60cm大の石のほか，カシワと思われる木の葉が層序的に認められ，下半部は黒灰色粘土が堆積し一部グライ化現象を呈している。上半部には褐色粘土がU字状に堆積している。

井　　戸　3　(図版23-2)

90×110cmの口径をもつが，あるいは方形プランであったかもしれない。深さは90cm強をはかり，側壁は垂直状に切り立っている。内に転落した一枚の板材は長さ約75cm，幅12.5～13.0cm，厚さ0.8cmで，両側にホゾ孔らしい小孔やU字状の切り込みが見られるので，井桁材の一枚ではないかと推定される。出土した高杯の脚を含む土器片はすべて土師器（雄町14類）に相当するものである。他に砥石が転入していた。

井　　戸　4　(図版24)

上端部径134×93cm，底部の径60cm，残存する深さ約120cmをそれぞれ計測する円形の井戸址で，青灰色細砂の基盤層を掘り抜いている。この井戸址からは種々の遺物を検出しているが，底部には，完形の土師器（雄町14類，351，352，384）3個，底から上方40cmの位置で完形の竪櫛（図版24—3）さらに上方20cmの部位でも完形の手づくね土器などを出土している。

井　　戸　5

径120×130cmの円形の井戸址と推定される。現状保存の観点に立って国鉄と数次にわたり協議を重ねたところ，この一帯は橋脚拡幅措置による保存区域に決定したので，発掘調査は行なっていない。

最後に特徴点を要約しておこう。まず，これらの井戸址あるいはそのように想定される遺構は，出土の土器およびその出土状況や層位関係などから古墳時代初頭の所産と考えてよい。そして最初にふれたとおり，井戸の築成個所は涸渇することのない農業用幹線水路に近接した地帯を占めるところから，井戸水は，自然の沈澱作用をうけた伏流水に依拠したもので飲料水として供されたに相異ない。まさに消費単位の視点において，同時の住居址の構成単位との関連が今後の課題となろう。　　(葛　原)

(5)　埋　葬　遺　構

第4調査区の農業用幹線水路によって，地形的に分離された西側の微高地のわずかな窪地一帯に，墳墓が200基ちかく検出されたが，そのうち約130基を発掘した。特記すべき壺棺2個・木棺墓4基以外はすべて掘削後ただちに遺体を葬るいわゆる土壙墓と考えられる。一般的な存在形態は，数基あるいは10数基が重複して群集するあり方を示すが，一方にはこれら群からとびだしたようないわば単独で存在するもの，この二様が認められる。上記の木棺墓などはそうしたあり方の一つである。平面形態については呼称に難があるにせよ，仮称として長方形，隋円形，隅丸長方形，小判形の4類型に大別して記述をすすめたい。群集するものはA群～S群とし，その中の個々についてはA—1号，A—2号と表示し，単独のものは101番から通し番号を付したので，以下その内容について概括的に記述する。

A　　群　(第39図)

長方形とは断言しえない5基の土壙墓が，ほぼ南北線上に連なるような構成をもって群を形成している。

これらはすべて水平関係における切り合いで，上下に重なることなく，土壙墓の周囲には約15cm幅の黒色土が巡っており，基盤層と明瞭に識別しえた。A—1号は，その南半をA—2号によって完全に切断されているので，一見長軸を求めがたいが，西辺はA—2に切断されないで一部その痕跡をとどめ，南へ内曲線を描いて終っているので，一定の規模を想定しうる。内部は暗灰色粘土によって充塡されている。A—2号は，A—1号を切って逆にA—3号に切られている。長軸は不明で短径は肩部で55cm，床面で約40cm，深さは約35cm強をとどめ，床部の両側には淡茶褐色粘土および黄白色粗砂混入粘土などが堆積している。A—3号は，A群中もっとも後に埋葬された土壙墓で，長径は1m強，短径は北端がやや広く40cm．南端では約30cmとつまっている。A—4号はA—3号に切られ，底面はA—3号の底面の直下3cmのところにある。A—5号は，A—4号およびA—3号に北端部を切られている。これらの土壙墓からは，何らの伴出遺物をみなかったのであるが，A群に接し群内に取り込むべきか否か判断しがたい土壙墓101号からは，弥生中期初頭(雄町3類　土器13）を検出しているので，これとほぼ同時期に築成されたものと考えられる。

B　　群　（第43図）

B群では9基確認された。平面形態も小判形と隅丸長方形の中間的形態を示している。いずれも残りがわるく深さも浅いものが多い。B—4号からは甕形土器の破片が出土している。その土器は胴中央部付近に刺突文をもちハケ目の手法，口縁部の厚さからみて雄町3類土器としてとらえられるものと同じである。B—7号，B—8号埋土中より縄文晩期の土器片が出土したが，このB群の周辺から縄文晩期土器片がかなりの量出土していたことから，混入物と考えられる。なおB—1号，B—9号は溝3をきっており，溝3より後の時期に掘りこまれたものであることを物語っている。埋土は大半が青灰色粘土であった。

C　　群　（第40図　図版25-1）

C群では12基確認された。平面形態は小判形のものが多い。この群も基底面がわずかしか残存していないようである。掘り上げたのはC—2号とC—11号の2つだけである。他は土をかぶせて埋め戻している。C—2号からは壺形土器が出土している（5）。雄町3類に属すると考えられる。C—1，C—5号は削り出しの際，土器片が出てきたのでとりあげている。器形，時期については分らない。C—11号からは甕形土器片，ならびに打製石斧が出土した。打製石斧は底面にあり副葬品と考えられるが，土器片はういた状態であった。この甕形土器も雄町3類に属すると考えられる。埋土はすべて茶褐色粘土である。C—1号，C—3号は工事用側溝により切断されており，その北にも存在した可能性があり，また南へものびるのでこのC群は2群にわけられる可能性もある。

D　　群　（第39図）

7基からなっている。当初，D—1号とD—2号の肩の線を水路（溝3の枝水路）の一部と考えた場所にあたり，途中で土壙墓の存在に気づいたため，かならずしも水平に削平して検出した例ではない。ただし，水路と想定した底面および断面で認められた上記の基数に誤りないと思われるが，不幸にして平面形については，D—7号が小判型に似ている点以外，はっきり把握することはできなかった。

E　　群　（第39図　図版25-2）

縦貫におり重なり切り合った8基の土壙墓からなり，しかも巨視的にいえば，上下2段に分かれる構成となっている。E—1号～E—4号までの4基はより上部にあって肩から床面までわずかに5～10cmの深さを遺

すにすぎない。すべて長方形にちかい形態で，切り合い関係から築成順序を考えるならば，E—1号，E—2号，E—3号，E—4号となるが，長軸の方位はかならずしも一致していない。

以上の4基はその長辺もしくは短辺がかならず基盤層を掘擠し基盤層と接しているばかりでなく，土壙墓の切り合う部位にあっては黄褐色微砂混入土がブロック状に並ぶところから，かなり明瞭に識別しえた。

他の4基はそれよりやや下方にあって，形態は隅丸長方形にちかく，いくぶん大型である。もっとも，下部に位置する土壙墓ほど2次的な土壙墓に切断されないかぎり，本来の形態をよくとどめること，したがって深さまたは径が比較的長大となることは，十分予想される。逆に，若干新しい土壙墓と重複した場合は，よほど偶発的な条件がないかぎり，遺存しえないことはいうまでもない。ともかく，ここに検出しえた4基は，E—6号，E—5号，E—7号，E—8号の順序で築成されたのではなかろうか。方位によって分類すると，北東から南西に主軸があるものは，E—1号，E—2号，E—4号で，北西から南東に主軸をもってE—5号，E—7号，E—8号，そしてE—6号もその傾向が強い。ただE—3号のみはまったく異なる東西方向に主軸をおいている。

F　　群（第39図　図版25-2）

この群はE群に接し，E群とほぼ同数の9基からなっているようである。基数を断定しえないことは，東部に水路（溝12　雄町14類）があって，水路の掘擠時点で消滅したものを予想するかぎり，9基以上といった方がより正確であるからである。平面的には，F—1号のみが南方へやや距離をおいて単独墓のように作られている以外，8基は複雑に切り合っている。その中で，F—7号とF—9号の2基はもっとも深い部位にあり，F—9号がF—7号を切っている。そうした上層に，残る6基は互に重複している。築成順位は，まずF—7号，F—9号，となり，F—6号，F—5号，F—2号，F—4号，F—3号とつづくのではないかと推定しうるが，F—8号とF—1号がどの段階に入るかまったく分らない。主軸方位は3方向にまとまるようであるが，果して意識的になされたものかどうか，これまた不明というほかない。伴出遺物は何ら認められなかった。

G　　群（第41図）

この群が位置する地帯は，調査区の北西部にあたる緩斜面にあたるので，繰り返えし侵蝕作用をうけたと想定され，3基を確認したにすぎない。いずれも，いくぶんいびつな小判型の平面形態を示している。G—1号からは，弥生中期(33)の甕が破片として検出されている。これらは，削平される以前にはさらに規模が大きく，またすでに消滅した数基とともに土壙墓群を構成していたものと想定される。

H　　群（第44図　図版26-1）

ほぼ南北線上に7基の土壙墓が連なるような構成を示し，A群のあり方と酷似している。個々の土壙墓の平面形態は隅丸長方形で，平均120×60cm程度の規模である。その中には，副葬されたと思われる土器1個あるいは数個を出土した土壙墓も含まれている。H—1号は，上部がかなり削平されているが，弥生中期（雄町3類　15）の甕1個を出土している。出土位置は，底面に密着しており，副葬遺物と考えられる。H—2号には，弥生中期の小壺（雄町3類　29，30）が2個と壺破片（3）が伴っていたが，H—1号と同様の意味をもつであろう。そして，H—5号にも弥生中期（3）が共伴している。

I　　群（第44図　図版26-2）

計13基からなる土壙墓群であるが，大きくはより上層にあるものと下層に位置する土壙墓との2つのあり

方によって構成される。Ⅰ—1号からⅠ—9号まではその上部に形成された土壙群で形態はすべて長方形をとりほぼ同規模とみてよい。長径の平均1m，短径約50cmの計数値を示す。ただ，Ⅰ—6号，Ⅰ—7号，Ⅰ—8号は，工事用側溝によって部分的に破壊されているが，残存形態からしても，上記のものと同大同形と推定される。ここでも切り合い関係に注目せざるをえなかったが，その場合，土壙境界線に黄褐色の斑文が帯状に散在すること，ならびに茶褐色の色調の中における明度の差異や土質のわずかな違いおよび硬度差などを手掛りとしたところである。すると，Ⅰ—1号，Ⅰ—2号，Ⅰ—3号，Ⅰ—4号，Ⅰ—5号の順に作られたことが分かる。そして，おそらくこの辺を境となし北半部の群にあっても同様のあり方をしたのではないかと考えるが，工事用側溝のため切断されており，Ⅰ—9号がⅠ—8号に切られたことが判明するにとどまり，Ⅰ—6号，Ⅰ—7号との先後関係はまったく判断できない。以上の土壙墓の下位には，不定形な隅丸長方形のⅠ—10号，Ⅰ—11号，Ⅰ—12号，Ⅰ—13号の4基があって，切り合い関係はⅠ—11号とⅠ—12号とにみられ，Ⅰ—12号が新しい。遺物は皆無であった。

J　　群（第40図　図版27-1）

この群中で土壙墓としてさしつかえないのはJ—4号だけであり，J—3号は柱穴の可能性が大であるが，発掘過程において半断面を残した位置がわるく抜取り痕跡は確認していない。J—1，J—2号は土壙墓の可能性がより大きいと思うが確証はない。J—1号からは甕形土器がわれた状態で出土したが，復元するとほぼ完形である。（8）雄町3類に属する。埋土はいずれも茶褐色粘土であった。

K　　群（第42図）

かつては4基以上から構成されていたと推定されるが，土壙墓形成面がやがて埋没したのち，土師器を共伴する住居址がその直上につくられたため，住居址の床面整形などによって，水平方向で削られた土壙が幾つかあったと考えざるをえない。K—1号は，わずかに8cmの深さを残すにすぎないので，そうした想定をいっそう強める。ともかく，K—1号からは骨片と歯の琺瑯質部が痕跡的に認められ，K—2号からは，弥生中期の壺（船山5類，36）を検出している。またK—3号は，北半部が削平されているが幅の長さを比較した場合，K—2号とほぼ同規模ではないかと推定され，墓壙内に玉砂利1個を看取しえた。これが意識的に埋納されたものかあるいは単なる転入か速断しがたい。K—4号は，90×35cmの隅丸型で著しく削平されている。この他，柱穴掘り方とも土壙墓とも判明しえない50×60cm大の穴2個を，近接したところで検出している。

L　　群（第43図）

この群中では10基確認されたが切り合い関係が複雑であり，検出がむずかしかった。南西部にのつぼ状の穴が掘られており，破壊されているものもある。平面形態は楕円形のもの1基（L—9）を除けばすべて隅丸長方形である。土器片は一片も出土していないが，L—3号からはサヌカイト製の石鏃が8個出土している。（図版46—1）この石鏃は底面より1～2cmういた状態であった。この8個の石鏃のうち一番大形の石鏃の先端が欠けているのはのつぼを掘った時点で起ったことと考えられる。なお発掘途中でとりあげた他の2個の石鏃もこの土壙に伴う可能性がある。石鏃の形態から考えて，雄町3類の時期という限定はできなくても，弥生中期前半の時期に属する可能性は大きいと考えられる。L—9号には骨が粘土化した状態で少量認められた。埋土はいずれも茶褐色粘土である。

M　　群（第43図　図版27-2）

この群では14基確認できた。これも一部はのつぼ状の穴によって破壊されている。平面形態は全体が不明なものを除きすべて隅丸長方形で規模もほぼ同じである。この群中ではM—3号，M—4号より粘土化した人骨が少量検出できた。M—12号では，こぶし大前後の大きさの河原石が30数個西半部に固まって，ういた状態で検出された。意味はよく分らない。M—13号の中央部の埋土中間部では鳥のハネ状の白い粉末が検出されている。この群中では埋土は茶褐色粘土が多かったが，M—10号，M—11号の埋土は他の埋土と異なりやや明るい茶褐色粘土であった。M—10号近辺から縄文晩期土器が数片出土しているが混入と考えられる。

N　　群（第42図）

総計5基でまとまると想定される一群である。ただし保存状況は劣悪で，1基のみがわずかに5㎝の壁体をとどめるにすぎない。他はすべて土質をみるかぎり基盤層と異なるところなく，マンガンの結核が集積している点が特徴的である。おそらく土壙墓の底部のみがかろうじて残存しえたものと考えられる。不定形であるが，計測値は平均120×50㎝大である。

O　　群（第41図）

この群では4基確認されている。O—1号には粘土化した人骨が底面よりういた状態で少量確認された。O—2号は2個の柱穴を切って掘りこまれているが，柱穴から口縁部に凹線文をもつ雄町4類と考えられる壺の破片が出土している。後述するR群に西接していることなどから，ほぼ同時期の土壙墓と考えられる。O—4号では西端部で4個の歯が検出されたが残存状態は不良であった。埋土はいずれも茶褐色粘土である。

P　　群

工事用側溝により切断された部分が多く，わずかに一部が残存していたのみである。土器片の出土もみられない。形態からみて土壙墓群と考えられる。

Q　　群

未調査（保存と決定したため）なので内容は不明確であるが数基の存在が考えられる。うち1基にはM—12号と同様の河原石のつまったものが存在する。

R　　群

この群は第4調査区における土壙墓群の発見の端緒をなしたものである。壺形土器が3個ほぼ完形で検出されたため，周囲を削り出し隅丸長方形のプランをもつ18基以上の土壙が確認された。この群は保存が決定したため，一番上面に出ていた壺形土器（32）を1個だけとりあげて他は埋め戻している。取り上げていない壺の中にも口縁に凹線文が施されたものがあり，雄町4類に属する時期につくられた土壙墓群である。

S　　群

未発掘で切り合い関係も完全には確認していないが，数基が群集していた土壙墓群と考えられる。T，U群も同様である。

101号墓（第45図　図版29-2）

A群に接した位置に占地する土壙墓で，ふつう群内にみられる土壙墓とは，規模や形態に著しい特徴点があるところから，単独墓の一つとして，把握しうるものである。主軸はほぼ東西方向にあって，平面形態は

上端において190×90cm，床部で125×50cmを計測する隅丸長方形で，明らかに2段掘りの掘削方法によっている。断面は，黄褐色粘土の基盤層を切り込んだ掘り方の線が，内方へ約20cmくいこむ部位で肩をつくりそこから再び下向して床面にたどる。逆にいえば，およそ水平な床面が急に立ち上って壁体となり上方20cmで段を作り，そこから外方20cmまでゆるやかに上向するのである。

西角中央付近から弥生中期（雄町3類　土器13）の壺を床面よりややういた状態で検出した。

102号墓（第45図）

101号の南東にあって溝1に切られている。推定長1.9m，幅75cmの掘り方をもつかなり大規模な土壙墓と思われる。内には灰褐色粘土が約8cm程度堆積していたが，遺物は認められなかった。

103～104号墓

どちらも，溝2によって切断され，規模は不明。104号，103号の後，重複して作られたことを示している。平面形態は隅丸長方形で，幅は約60cm，推定長110cmであり，F群の一部であるかもしれない。

105～106号墓（第46図　図版30-1）

105号は，掘り方の幅64cmをはかるが，長軸が106号によって切断されているため，規模を推定しがたい。

106号は，単独墓としての特徴を示す例の一つである。平面形は長方形で，長径約170cm，短径約70cmを計測し，深さ約25cmをとどめ，主軸方位は北東から南西にある，しっかりした木棺墓である。床面には，両端部において主軸と直交して小口板痕跡が幅約3cmの厚さをもって認められ，それをおさえる幅約10cmの掘り方が，床面下10cmまでたっしている。床の直上にも黒みの強い粘土が約8cm堆積しているが，その層位から両顎をとじた状態の，歯列が検出された。床面はかならずしも平坦でなく，歯の出土位置と反対側の端部付近は径約40cmぐらいゆるやかな窪みを呈している。

歯列を起点として頭骨の位置を想定した場合，残る床面の長さは100cmに満たない。

107号墓（第48図）

長隋円形の一方の端がつまる掘り方の中へ，壺を身とする埋葬施設が検出されている。掘り方の底部に接して，壺の底部がのり器形がほぼ直立にちかい状態で検出されたが，蓋は不明である。身の壺は，底部径10cm，残存器高約55cm，胴部径60cmで，保存状態は良好でない。弥生前期（雄町1類）に属する。

112号墓（挿図第8図）

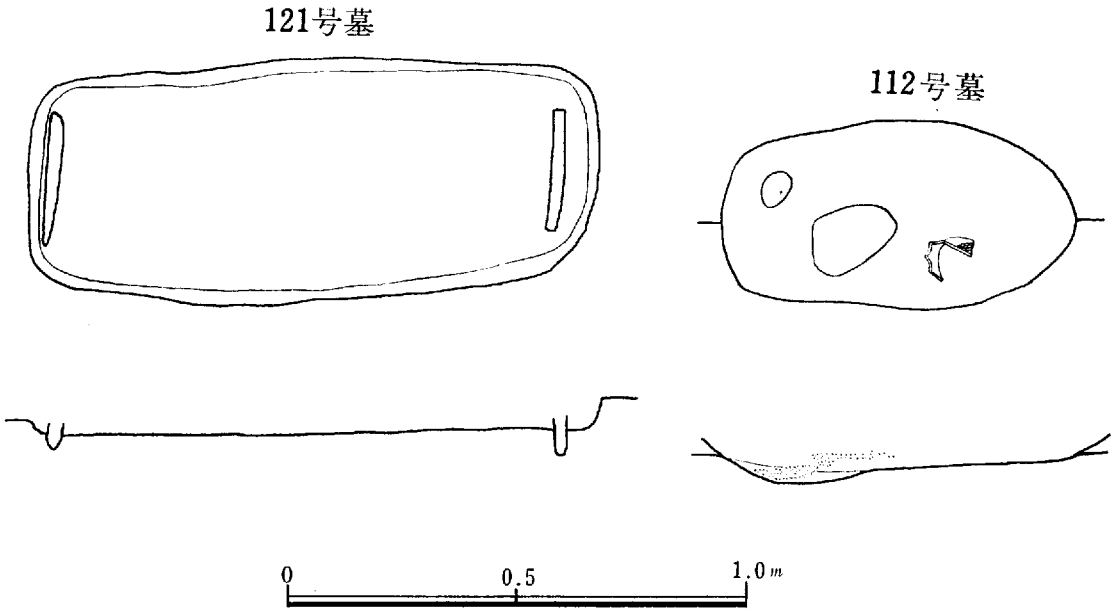
77×40cmの範囲が浅い窪地状に残りえた土壙墓の最下底部である。深さは，浅いところで4cm，深いところで7cmをとどめるにすぎないが，床面の一部には残存する土壙墓の厚さをもって，朱が検出された。弥生中期（雄町3類）の壺小片が共伴している。

121号墓（挿図第8図）

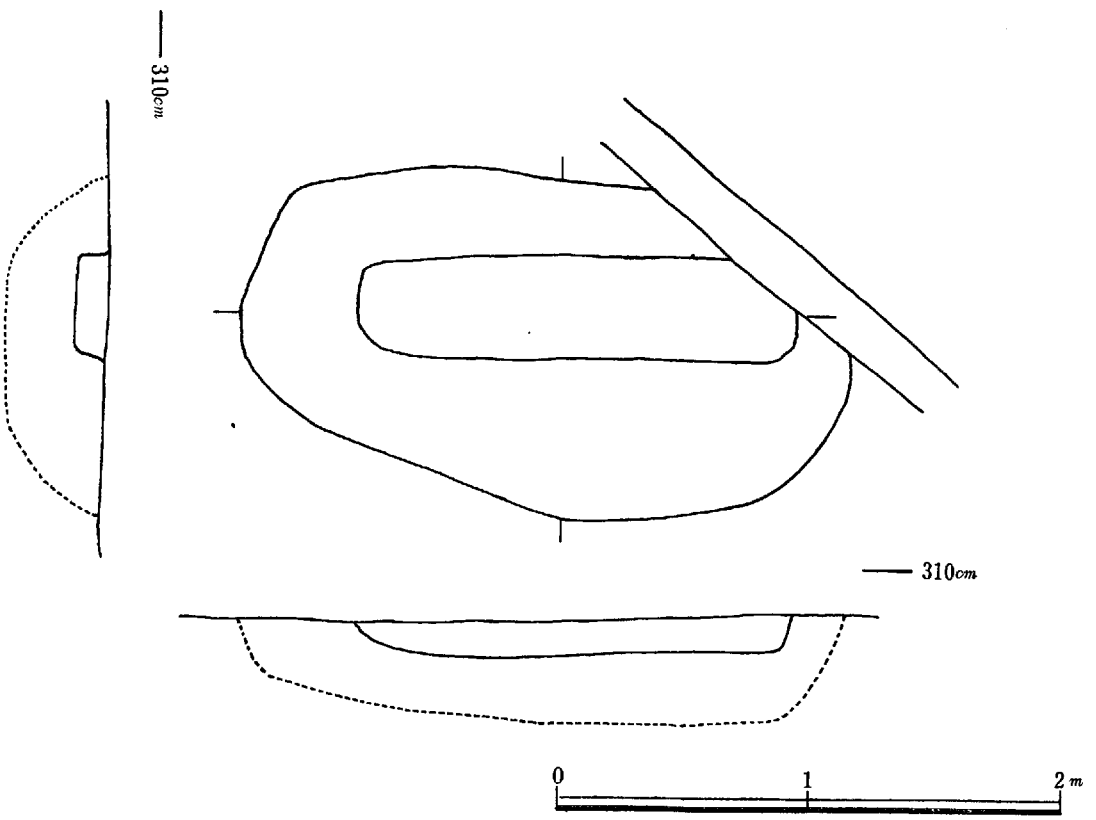
長径120cm，短径50cm強の，長方形の土壙墓で，両端に小口板痕跡が粘土におきかえられた状態で認められた。床面から残存する肩部までの立ち上りはわずか7cm程度で，多く観察しえなかった。

125号墓（木棺墓？）（第47図　図版30-2）

R群の西北部に単独で存在する。底面で側板，小口板痕跡が確認された。北側の側板痕跡は中間部でとぎれている。この部分だけ板が凹んでいたのか，あるいは2枚板であったのか，どちらともいえない。2つの側板にはさまれて小口板がそれぞれはめこまれていたと考えられる。北側の側板は墓壙掘り方に接近してい



挿図8　112, 121号墓実測図



挿図9　113号墓実測図

るが，南側の側板と墓壙掘り方との間隔は前者に比して広い。縦断壁を取り除くと東端部床面近くで歯を検出した。残存状況は不良であった。その周辺には上半身の骨と考えられる部分が粘土化した状態で確認された。

組み合わせ木棺墓と推定されるものである。この板材痕跡の内法は基底面で長さ145cm，幅40～45cmを測る。

129号墓（第49図）

長隋円の掘り方48×93cm内に，やや傾斜して検出された壺棺である。壺の身に対して，甕あるいは鉢と想定される土器を蓋にあてている。壺は，口径約23cm，推定器高約34cm，底部は約11cmの平底である。蓋の土器は，口径約30cmを計るが頸部以下は不明である。その口縁部には刻み目が施され，口縁直下には，刻み目を付した削り出し突帯がめぐり，その下には沈線一本がめぐっている。弥生時代前期（雄町1類）に属するものである。（A，D～I，K，N群および101～107，112，121，129号墓は葛原。その他は泉本。）

表6　埋葬遺構一覧表

番号	平面形	長さ×幅（cm）	深さ（cm）	遺物	人骨	年代等	備考
A－1	隅丸長方形	130？× 65	20			雄町3類？	
A－2	隅丸長方形	100？× 55	35			雄町3類？	
A－3	隅丸長方形	105 × 50	26			雄町3類？	
A－4	隅丸長方形	100？× 42	22			雄町3類？	
A－5	隅丸長方形	100？× 50	20			雄町3類？	
B－1	楕円形	80？× 60？	22				
B－2	円形	80 × 74	12				
B－3	？	？	？				
B－4	小判形	95？× 76	10	甕		雄町3類	
B－5	？	？	11				
B－6	小判形？	115？× 80	4				
B－7	小判形？	75？× 56	5				
B－8	小判形	105 × 50	10				
B－9	小判形？	78？× 56	14				
C－1	小判形	135？× 90？	？				未掘
C－2	楕円形	82 × 66	？				未掘
C－3	小判形	115 × 95？	？				未掘
C－4	小判形	127 × 75	？				未掘
C－5	楕円形	100 × 90	？				未掘
C－6	小判形	114 × 69	？				未掘
C－7	小判形？	？	？				未掘
C－8	小判形	135？× 68	？				未掘
C－9	小判形？	？ × 75	？				未掘
C－10	小判形	105？× 72	？				未掘
C－11	小判形	112 × 72	14	甕片，石斧		雄町3類	
C－12	小判形	？ × 60？	？				未掘

番号	平面形	長さ×幅 (cm)	深さ (cm)	遺物	人骨	年代等	備考
D－1	隅丸長方形?	? × 62	10				
D－2	隅丸長方形?	140? × 50	10				
D－3	隅丸長方形?	110 × 50	20				
D－4	隅丸長方形?	? × 40?	10				
D－5	隅丸長方形?	110? × 45?	10				
D－6	小判形?	? × 43	10				
D－7	小判形?	70 × 47	8				
E－1	隅丸長方形	97 × 55	6				
E－2	隅丸長方形	100 × 45	15				
E－3	隅丸長方形	85 × 45?	8				
E－4	隅丸長方形	96 × 50?	7				
E－5	隅丸長方形	85? × 30以上?	?				
E－6	隅丸長方形	? × 45	15				
E－7	隅丸長方形または楕円形	99 × 60	15				
E－8	楕円形	122 × 72	16				
F－1	隅丸長方形	? × 49	14				
F－2	隅丸長方形	2 × 30以上?	12				
F－3	隅丸長方形	100 × 35以上?	20				
F－4	隅丸長方形	? × 53	10				
F－5	隅丸長方形	80以上× 50	5				
F－6	隅丸長方形	107 × 46	2				
F－7	隅丸長方形	85以上? × 30以上?	19				
F－8	隅丸長方形	100 × 48	5				
F－9	隅丸長方形	100以上× 57	22				
G－1	小判形	76 × 50	13			雄町4類33	
G－2	小判形	60 × 40	14				
G－3	小判形	25以上× 42	16				
H－1	隅丸長方形	125 × 36	20				
H－2	隅丸長方形	124 × 65	18			雄町3類29.30.3	
H－3	隅丸長方形	88以上? × 51	9				
H－4	隅丸長方形	? × ?	?				
H－5	隅丸長方形	145 × 68	20			雄町4類9	
H－6	隅丸長方形	103 × 40	7				
H－7	隅丸長方形	97 × 45	9				
H－8	隅丸長方形						
I－1	隅丸長方形	100 × 52	5				
I－2	隅丸長方形	107 × 51	15				
I－3	隅丸長方形	104 × 54	13				
I－4	隅丸長方形	99 × 51	5				礫一個あり
I－5	隅丸長方形	115 × 44	11				
I－6	隅丸長方形	60以上× 44	10				
I－7	隅丸長方形	63以上? × 41	14				

番号	平面形	長さ×幅 (cm)	深さ (cm)	遺物	人骨	年代等	備考
I－8	隅丸長方形	104 × 40以上	5				
I－9	隅丸長方形	93 × 50	26				
I－10	隅丸長方形?	100 × 44	17				
I－11	隅丸長方形?	80以上× 49	10				
I－12	隅丸長方形?	98 × 50	16				
I－13	隅丸長方形または楕円形	87 × 40	4				
J－1	楕円形	74 × 65	19	甕		雄町3類	
J－2	楕円形	83 × 66?	24				
J－3	楕円形	84 × 64	30				柱穴?
J－4	長方形?	85? × 60	16				
K－1	隅丸長方形	108 × 38	10		骨片，歯		
K－2	隅丸長方形	114 × 58	8			船山5類	
K－3	隅丸長方形	65以上× 50	5				礫一個あり
K－4	隅丸長方形	86 × 33	?				礫一個あり
L－1	隅丸長方形	95? × 42	17				
L－2	隅丸長方形	124 × 47	17				
L－3	隅丸長方形	95? × 48?	9	石鏃8＋2?	骨粉?	中期前半?	
L－4	隅丸長方形?	80? × 60?	30				
L－5	隅丸長方形?	?	?				
L－6	隅丸長方形?	42? × 40?	20				
L－7	隅丸長方形?	?	?				
L－8	隅丸長方形?	?	?				
L－9	楕円形	80 × 67	27		あり		
L－10	楕円形?	70? × ?	?				
M－1	隅丸長方形	120 × 35	20				
M－2	隅丸長方形	82? × 46	15				
M－3	隅丸長方形	102? × 48	6		あり		
M－4	隅丸長方形	115? × 44?	6		あり		
M－5	隅丸長方形?	?	?				
M－6	隅丸長方形?	?	?				
M－7	隅丸長方形	105? × 38?	30				
M－8	隅丸長方形	62? × 50	30				
M－9	?	?	?				
M－10	隅丸長方形	124? × 43	19				
M－11	隅丸長方形	121? × 48	18				
M－12	隅丸長方形	100? × 42	17	石つめ			
M－13	隅丸長方形	111 × 48	17		骨粉?		
M－14	?	?	?				
N－1	隅丸長方形	83以上× 38	10				
N－2	楕円形	95 × 34	?				
N－3	楕円形	122 × 42	?				
N－4	楕円形	123 × 48	?				
N－5	楕円形	134 × 58	?				

番　号	平　面　形	長さ×幅　(cm)	深さ(cm)	遺　　物	人　骨	年　代　等	備　　考
O－1	隅丸長方形	95?× 41	20				古い柱穴より雄町4類土器出土
O－2	隅丸長方形	116　× 45	17				
O－3	?	35?× 46	?				
O－4	隅丸長方形	90　× 50	9		歯		
P－1	隅丸長方形?	76?× ?	?				
P－2	隅丸長方形?	?	?				
P－3	隅丸長方形?						
P－4	隅丸長方形?						
101	隅丸長方形	190　× 89	32	壺		雄町3類—13	二段掘り
102	隅丸長方形	200?× 75	9				長大土壙
103～104	隅丸長方形	120　× 60大	11				単独墓の様相
105～106	長　方　形	170　× 40	28		歯		木口板痕跡
107	楕　円　形	107　× 76	45	壺		雄町1類	壺棺
112	楕　円　形	77　× 40	7	壺小片		雄町3類	朱あり
113	隅丸長方形	243　×133	30?				長大土壙
115	隅丸長方形	128　× 39	9		歯		
117	隅丸長方形	119　× 50?	10				
121	隅丸長方形	125　× 53	7				木口板痕跡
125	長　方　形	178　× 73	35		歯．あり		木棺墓?
126	隅丸長方形	96　× 48	14				
127	長　方　形?	?　× 60					未掘(木棺墓?)
128	長　方　形?	105?× 62	32				小口板痕跡あり
129	楕　円　形	83　× 47	20	壺		雄町1類	壺棺

(6) 溝および河道

土壌構造の観察に基づく古代における水田の開田方向とまったく表裏の関係で，治水利水問題はとられなければならず，さらに集落立地との有機的関連において相関的位置づけが主要な課題となることはいうまでもない。弥生時代から古墳時代にかけて，この課題にこたえるにはそれなりに困難な条件が少くないが，とにかく集落遺跡の中の溝あるいは旧河道を検出することによって，その伴出遺物から溝等の使用時期を的確につかみ，また溝の機能を規定できるならば，水田耕地に対する集団的占有関係を裏づける作業となるであろう。むろん前近代を通じて，水田耕地に対してはあくまで共同体的規制あるいは集団間関係によって占有されながら，一方においては，農耕具の質的，量的発展，稲の品種改良などが進められ，他方の極としては，水稲耕作についての経験と創意の中から農業土木の技術的水準を高めていったことが，現象的には溝に伴う用排水施設や溝の掘削方法などに表われている。また，農業用水路は，幅の大小及び深さの相異などによって，幹線水路と枝水路とに分類しうる。さらに，河床の水田に対する比高関係から用水路または排水路に機能的に分離できる。その他水路は，居住空間を分離するもの，防禦的機能を有するものなど多種多用であることはいうまでもない。

溝　　1

水路幅の平均35cmを計る浅い溝で，その北半はぷっつりとぎれて底部の痕跡をつかむことさえできない。

おそらく北東から南西へ流れた溝で比高のより高い上流では底部まで削平されたのではなかろうか。微高地の上面を流れているが，灌漑用の水路であるかどうか速断しがたい。時期については，弥生時代中期の土壙墓102号を切っていること，および，埋土中の高坏脚部や壺の口縁部破片から雄町14類と考られる。

溝　　2

溝1とほぼ平行して走る溝で埋土に混入している著しい土器片とほぼ完形にちかい丸底の甕は，よく雄町14類の特徴をそなえている。褐色微砂混入土層の基盤をぬって流れるこの溝は，調査地区の南端において幅約65cm，深さ約30cmを計るが，溝の両脚には，ハの字状に太さ約6cm，長さ約30cmの杭をおもわせる痕跡が，暗灰色粘土におきかえられて検出され，溝の底部近くには木炭片や土器片が混入し，その上にはマンガンを含む灰色粘土が堆積している。

溝　　3

共伴遺物が皆無であるにもかかわらず，この調査区の中では，最も古い溝の一本と考えられる。水路の埋没後堆積した上層に，弥生中期と推定される土壙墓114，同115などが重複している。したがって，上記の遺構が形成される以前のかなり早い時期に，人工的掘削による水路であるかどうか確定できないにしろ，微高地上面の最も高位を流れている事実は，十分注目されなければならない。

溝　　4

あるいは溝6に接続するのではないかと思われる溝で溝の肩は溝3と共通する層位にあり，溝3と同時期，雄町14類に入ると考えられる。

溝　　5

走向方向は，溝1，溝2，溝4などと同様で，層位からも同時期と考えてよい。しかし平坦な底部や鋭く傾斜した溝内面などは，絶えず維持管理された痕跡を物語っている。そしてこの溝は，調査区のほぼ中央を起点として別の小溝と合流し，西から東へ流れる小溝との分岐点では約90度の角度をもって合流している。両溝は切り合い関係はなくまったく同時期である。

溝　　6

溝5と平行してその東側を走る溝で，これも肩の切り込む層位関係や埋土の状況などによって，雄町14類と思われる。埋土の中には，土師器の細片と共に弥生中期の土器片も混入している。

溝　　7

共伴遺物はまったくなかったが，この溝は，北端において後にふれる溝14（雄町4類）の河道によって切断されていること，ならびに土壙墓N群が，この溝の堆積後その上層に形成されていること，などから雄町4類以前の弥生時代中期初頭あるいは前期にまで遡りうるかと推定される。付近にみる溝遺構の中でこの溝だけが走向方位をまったく異にしている事も気がかりな点である。

溝　　8

この溝から以東の他の溝は走向が一変してほぼ南西から北東方向へ流水していたことを示している。他の遺構との切り合い関係からすれば，溝7より新しく，また土壙墓N群や他の弥生中期の土壙墓群を切って貫流しているので，まず雄町14類の時期，つまり古墳時代前期に機能した溝と考えられる。

溝　　9

溝12の東側を溝12と平行して走る河道幅約1.5mの水路で，器形が復原できる高杯脚部や壺など土器片多

数を含んでいる。土器の出土状況は，かならずしも一様に散在しているあり方でなく，10～11個所に集中しており，土器の集合した地点には特に木炭が多くみられた。溝の終末期に流れ込んでのであろう。これらの土器は，雄町15類にあたるから溝はそれ以前に属する。

溝　　10

溝12の上層にあって，溝12と流身の方位を一にする反面，河道幅は0.6～1.0mとかなり狭まくなっている。この河道は，溝12の埋土をベースとなし，河床は砂礫を含まない青灰色微砂層であったため，たえず局部洗掘をうけながら沈澱作用によっていっきょに埋没したらしい。埋没するまでは，両岸に近い河床部に無数に打ち込まれた杭の痕跡が，黒灰色の土におきかわって遺されている。これらの杭は，河床を補強するためか，あるいは護岸用としての役割を果したものであろう。

溝　　11

溝10とほとんど同様の機能をもつ水路であったことは，埋土の状況や杭の痕跡などの類似性から推定しうる。巨視的にいえば，溝12の埋没過程における安定した一時期を示すといえるかもしれない。

溝　　12

ほぼ北西から南東へ貫流する農業用幹線水路と考えられる。まず河道幅についていえば，調査区の南限において約5mをはかるが，かならずしも東側の肩が明確に把握できない。これは，繰り返し二次的な侵蝕・堆積作用を交互に受けたことによるであろう。それでもなお，河道の長期化は，たとえば河床から上部約50cmに安定した別の河床がのっている事実にも示されている。ともかく，西の肩は侵蝕作用を比較的受けることなくゆるやかなカーブを描いて立ちあがっており，その肩から河床まで計測すると約1mとなっているが，むろん全体としては水平方向での削平を受けているので，本来の河道の深さを推定する根拠を欠き，したがって堤防の有無についても推定しがたい。その河幅は下流に行くにつれ次第に狭まり，4m下流の部位にあっては河道幅の平均2.3mをはかり，かつ河床幅は1m弱という数値をえることができる。そして，ほぼ同様の規模と形態をもって調査区南限まで続いている。この辺では，東の肩が溝9の西肩とほとんど共有するぐらい接近している。この河床の一部または全部には雄町12類および同13類などの完形品を含む夥しい土器片が堆積していて，まさに土器のお花畑という形容にぴったりの状況で，10cm前後のこの堆積層は圧倒的な土器片と暗青灰色粗砂とからなっている。河道のほぼ中央やや下流には，23×40cm大，19×24cm大など4個の石が流身に対して直交する方向で飛び石状に配されている。河道への偶発的な転落でないことは，石の基底部が土器包含層を貫いて下層の黒色微砂混入層下底に密着している事実，ならびに石の並び方がほぼ直線的で両側石の間隔が1.2mにわたることなどによって判断しうる。いうまでもなく，土器層が堆積しつつあった段階においても，粗砂を流す程度の流量が一定度保持された河道であったと考えられるが，主要にはその直下の層，つまり数片の土器砕片を混入する黒色微砂混入層の堆積する以前に，機能した河道であるとすれば，わずか4個の石のもつ意味は意外に大きい。そればかりではない。石列のさらに下流には，きわめて腐朽の度合が激しいにもかかわらず，長さ約1m，幅10cmの，同様の板材2枚があって，その南端と中央付近には2～3本の木質を残す杭が検出されている。これら径約2cmの杭はあたかも板材を固定したかのようで，板材は単なる流木でないことを示している。いずれにせよ，この板材の示す方位をたどるかぎり，上記石列のもっとも東側の石に接近することだけは，確実である。だから，少なくとも4個の石とともに，大胆に推測することが許されるならば，板材などを含めて構成された構造物は，まず水制施設と考える以外

にない。おそらく，それは堰であるに相異ない。自然遺体としては，桃の実，瓜の種などもみられた。

溝　　13

現存する状況で河道幅約３ｍとかなり広く，また河床まで約60cmをはかる比較的深い水路で，最下層には弥生時代（雄町４類）を包含し，中位には幅４～10cmの黄色砂層を堆積させている。溝12に先行した幹線水路であることは，共伴の土器類のほか，河床底面を比較した場合，ほぼ同様の等高位置において溝12より約20cm低位にあること，溝12の東側を平行して走向するところから明らかである。

溝　　14

弥生時代中期（雄町４類）土器を包含する河道で，雄町第４調査区中では規模の点において他を完全に凌駕し，微高地間の最も深い位置を貫流する幹線水路である。調査区の南端では河道幅約 9.3m におよぶ数値を計測し，両肩もかなりしっかりしていて，肩から河床まで 1.2m 以上をはかる。河床はこの辺の基盤層である青灰色粗砂混入土層（粘質が強い）の上にあって，断面観察によると，肩は上記基盤層の中にしばしば間層として認められる数cmの帯状黒色有機質混入土層を完全に切って貫流している。調査区の南端よりにおける土層断面からすれば，河道幅約 5.7m となり，うち４ｍの部位はいっそう深い。河道の東側肩部をみた場合，最上の肩は次第に傾斜して 1.5m 内へくると，急に勾配をもって河床部へ結接するように傾斜している。そして，さらに最深部１ｍ余りの範囲を除く両側には，250本 以上におよぶ半截の丸太材を含む無数の杭および矢板などが打ちこまれて，これらの状況を平面的に述べるならば，河道の両側に平行的に沿いつつ最深部の河床に対して打ちこまれながら，下流に行くにつれ徐々に狭まり，またひらくという形状を呈している。一番狭まる部位では，流身に対して直交する方向にいちだんと頑強な太く大きな木材が配されている。特に西側のこれら杭材の中には，中央をU字形にえぐったような厚い板材まで打ちこまれている。だからこの部位において，他の板材を利用して遮断すればただちに流量を調整しうる源緒的な水制施設，おそらく，樋門ないし堰といってよい構造を示している。一般的にいってこうした水利施設は，開田の歴史的段階と不可避的にかかわるばかりでなく稲作技術の全体系と関連してくるので，共同体の存在を前提とする水利用主体と別個の問題ではありえない。したがって，配水方法の貫行がいかに定着していたかについて，この幹線水路と他の枝水路との関係を究明しなければならないであろう。そこで，近辺においてより幅の狭い同期の水路をみた場合，台地縁辺に沿ってほぼ東流する溝17あるいは溝15があげられるが，いずれも河床底部の位置を比較するならば，幹線水路との比高が著しく配水を受けた枝水路として断定しがたい。だからこの枝水路としてもっとも可能性の高い溝は，水制施設の南西に起点をもち発掘調査区域外の南西方向へ延びていたものがあって，それが当たるのではなかろうか。分岐点と思われる幹線水路の土壌断面には，その付近だけ多量の黒色粘土が堆積している。

溝　　15

水路中約70cmで，雄町４類の土器を共伴しているが，幹線水路との接続関係は不明である。

溝　　16

わずかに底部若干をとどめた水路で，１ｍ弱の水路幅と想定される。

溝　　17

水路中は一様ではなく１ｍ前後の幅をもって，台地の縁辺に沿って北西から南東方向へ流れている。弥生時代中期（雄町４類）を河床底部から伴出した水路で，殊に注目すべき現象として，この水路によって分か

たれた北半部と南半部との比高は約50cmをはかり，北半部が高く竪穴住居や高床倉庫など日常生活址そのものが存在するのに対し，南半部は一段土地が低く若干の杭の痕跡をとどめるにすぎない，こうしたあり方を示している。南半は生産の場としての水田址と想定され，したがって，田面へ直接水量を流入する農業用枝水路の一本と考えられる。

溝18～溝23　これら6～7本の溝は，約5mの範囲の中にあって，それぞれ10～20cmの溝幅で深さも20cm以内にとどまる。切り合い関係がみられるところから，同時性は否定されるが，余り隔たらない時期に4～5本が流れ，ついで一部流路を変えたものといえる。走向方位を大きく変えた形跡はなく，微高地上の雨水などを集めて排水した溝ではなかろうか。伴出の土器片は，弥生時代中期（雄町4類）であり，その時期に，束の如く存在する溝が占める範囲5m内は，完全に溝のために意識されていたといえよう。

溝　　24

微高地の縁辺を，溝17と平行して流れる形状を呈するが，一部その底部をとどめるだけである。溝17と同様，灰黒色土におきかわった杭の痕跡が，溝の両脇に点々と認められる。

溝　　25

溝26，溝27などと走向を等しくして流れた水路で，同時期である可能性もあるが，底部を根跡的にとどめるにすぎず，多くの観察事項もない。

溝　　26

幅は50～75cmで，埋没後，弥生時代中期（雄町4類）の住居址が作られているので，伴出遺物は皆無であるにせよ，溝27と同様にかなり古い水路といえそうである。

溝　　27

北半は溝28の西肩によって切断されているが，堆積層の中から弥生時代前期（雄町2類）に属する壺頸部を検出している。土器は河床に密着していたし，溝25，溝26などと走向方位が一致する水路であるところから，弥生時代前期に微高地上面を貫流したものと思われる。

溝　　28

5～6mと，本調査区中もっとも広い河道幅を示すが，東側の肩はかならずしも鮮明に検出しえない。深さは約30cmで，河床は平坦面に近い，河道内堆積層は上層が土師器（雄町14類）包含層によっておおわれ，下層約5cmは特に黒色が強いので，土師器が堆積するより若干古い時期に機能したものといえる。調査員の一部には，本来水路として機能したのではなく，苗床として整えられたのではないかという意見もあるが，積極的な証拠はない。

溝　　29

幅平均50cm，深さ25cm，断面U字型の小水路である。水路は木炭の細片を点々と混入した暗灰色粘土によって埋められている。水路内の層位関係は認められず，いっきょに埋まったことを物語っている。堆積層内から伴出した土器片は，弥生中期の甕底部をはじめ甕口縁部胴部破片などで，周辺の層位関係からしても，水路の時期は弥生中期のものかと思われる。なお，この水路の直上にも別の水路が検出されたが，平面で追求することはできなかった。

溝　　30

上半部は溝28の底部に削平され，幅45cm，深さ10cmをとどめるにすぎない。内部には木炭片を含む暗灰色

表 7　溝および水路一覧表

名　称	走向方位	水路幅（cm）	深さ（cm）	伴出遺物
溝 — 1	c	35	10～15	甕（雄町14類）
溝 — 2	c	65～130	38	甕，高杯，鼓形器台，雄町14類　353，388，389，348
溝 — 3	c — d	88～196	25	
溝 — 4	c	50	18	
溝 — 5	c	40	10	土器細片（雄町14類）
溝 — 6	c	35～40	15	甕口縁（雄町14類）
溝 — 7	b	53～75	33	
溝 — 8	a	38～43	12	
溝 — 9	a	110～150	15	高杯脚・壺（雄町15類）
溝 — 10	a	70～95	10	高杯脚（雄町15類）
溝 — 11	a	150	15	
溝 — 12	a	230～500	50	雄町{12類　316，317，319，320，322，347 13類　372，375，378，383，385，386，390，391
溝 — 13	a	300	35	（雄町4類）　埋没は雄町5類か？　38，
溝 — 14	a	170～330	50	（雄町4類）　46，47，48
溝 — 15	a	70		（雄町4類）
溝 — 16	a	100	25	
溝 — 17	a	67～125	10～20	（雄町4類）
溝 — 18	b	10	10	
溝 — 19	b	30	14	
溝 — 20	b	20～25	11～20	
溝 — 21	b	23～28	20	
溝 — 22	b	20	13	
溝 — 23	b	15～18		
溝 — 24	a	16～35	10	
溝 — 25	b — c	130		
溝 — 26	b — c	50～75		
溝 — 27	b — c	90		（雄町2類）　1
溝 — 28	b	560	30	
溝 — 29	b	44～59	25	
溝 — 30	b	45	10	
溝 — 31	b	65	20	
溝 — 32	b	45～70	20	
溝 — 33	b	315～360	60	
溝 — 34	b	48	20	
溝 — 35	b	47～55	15	
溝 — 36	b	124～140	35	
溝 — 37	b	70～90	30	雄町15類？
溝 — 38	d	40～50	17	雄町15類？

〔付記〕　溝の走向方位についてはa—(W45°N)，b—(N45°W)，C—(N45°E)，d—(E45°N) と4方向でまとめ断定しがたい走向方位は，例えばa—bの如く表示した。

粘土が入っている。伴出遺物はまったくないが，層位関係から溝29とほぼ同時期か，やや新しいと思われる。

溝　　31

幅約65cm，深さ約20cmをはかる小水路で，溝29，溝30などと規模・形態ともきわめて酷似し，時期もそれほど隔たらないと思われる。内には，暗灰色粘土がつまり，全体的にグライ化現象が進行している。

溝　　32

溝31のほぼ直上にあって，前三者とよく似ているが，その上層に土師器（雄町14類）層がのこっているので，古墳時代前の，弥生中期以降という幅の中で機能した小水路である。

溝　　33

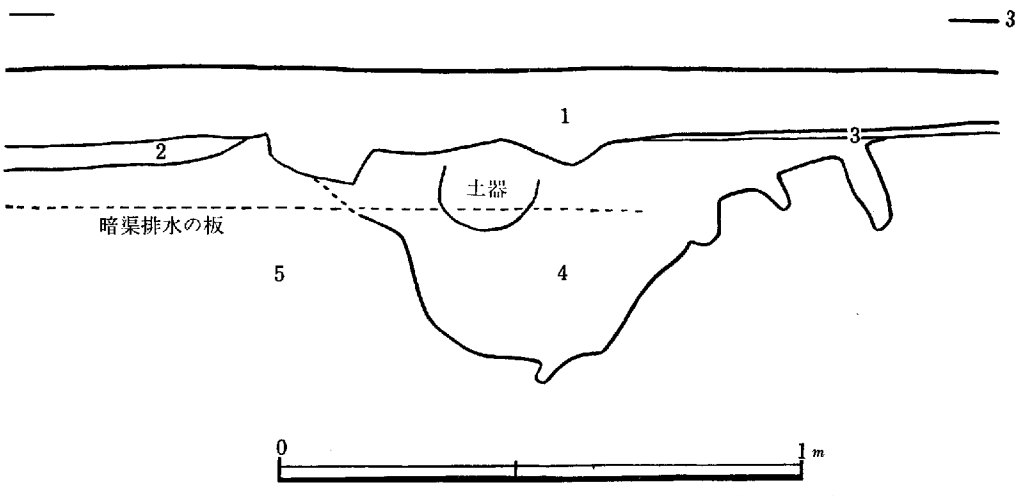
かなり長期間使用されたことが，埋没過程の土層断面に示されている。当所平均河道幅3.5cmで，深さ60cm以上であったが，灰色粘土が約30cm堆積してもなお，最深部での局部的な河ざらえを行なってこの水路に対する維持管理を続け，さらに暗灰色粘土が徐々に堆積し，全体としては20cm以上の河床上昇と，それに伴う水位の相対的上昇を繰り返しながらついに破棄せざるをえなかったことがうかがわれる。まず弥生中期に水路として機能し，継続的に古墳時代まで流水を保っていたことが，それぞれの層位から共伴する土器片をもってうかがい知ることができる。この水路の規模および長期にわたる管理形態からして，単なる排水路ではなく，主要には農業用水を確保した幹線水路の一本ではなかったかと思われる。ただし，調査区域内に限っていえば，この水路に付設した枝水路や水利施設はまったく認められない。

溝　　34

調査区の南限付近に，長さ約1.4mをとどめて検出されたものである。北部はすでに削平され，追求できなかったが，溝29程度の規模であったろうと推定される。

溝　　35

溝33の後裔水路といえる位置にあるが，すでに幹線水路としての流量を保持しえない小規模なものとなっ



1 耕土（灰色粘土）
2 淡灰色粘土
3 酸化鉄層
4 暗灰色粘土（含マンガン 土器 木炭片）
5 褐色微砂まじり粘土(含マンガン)

挿図10　溝　2　断　面　図

ている。幅約50cm，深さ約15cm程度である。

溝　　36

幅約1.3m，深さ約35cmの水路で，下層は有機物，木炭片，上東式土器片少量などを含む灰褐色粘土によって，上層は，土師器（雄町14類）やマンガン結核を包含する黒褐色粘土によって埋められている。

溝　　37

70～90cmの水路幅で，深さは約30cmをはかる。伴出遺物はないが，近接した小ピットから土師器破片が出土していて，このピットと水路の肩は同一層内にあるところから，古墳期の水路と思われる。

溝　　38

溝37と同一の層位関係にあり，水路幅40～50cm，深さ17cmを計測する。　　（葛　原）

第5章　遺　　物

第1節　土器・土製品

（1）縄文式土器（第55図）

第4調査区において縄文式晩期に属する土器片が出土した。出土する地点は第4調査区に限られており，弥生前期の基盤となった淡黄色微砂層中に含まれている。土器片を含む土層には少量の炭化物とサヌカイトの破片を含んでいる。溝14より西に多く検出されるが，溝14の堆積層中からも雄町4類の土器に混って出土している。淡黄色微砂層を掘り下げたが土器片は集中して発見されず，遺構も存在しない。採集された土器片の全量は約150片あり，年代的には2時期に分けられる。舟津原式に属するものと黒土BⅡ式に属するものである。

舟津原式に属するものは1～28で，甕形土器（第55図1～6）には口唇部にきざみめをほどこしているが凸帯文はなく，条痕文がみられる。肩部から胴部にかけて屈曲する部分には横位に瓜形文をほどこしたもの（10）もある。精製土器は表裏とも良く研磨されていて，口縁突起のある土器（17）もみられる。これらは皿状の器形を呈するものである。底部は2個あって，いずれもあげ底になっている。27には条痕文がほどこされているが，28には荒い擦痕がみられる。

黒土BⅡ式に属するものは，29～34で，深鉢形土器の口縁部に凸帯文をめぐらしているもの（第55図29～32）とへら磨きをほどこした浅い器形の土器（33，34）がある。深鉢形土器には口唇部にきざみめのあるものとないものとがある。

縄文式晩期の土器はすべて破片で完全な器形のわかるものはない。出土の状況も二次的に堆積したらしくまとまって出土しないし，遺構も残存していない。弥生式土器あるいは土師式土器の包含層中にも混入して出土している。そのためくわしい状況はわからないが，弥生前期の遺構がつくられる以前に，微高地が変形されたことがわかる。縄文晩期の土器片は他の調査区では検出されないことから，第4調査区に集落があったと推定される(1)。サヌカイトの破片も数片検出されているが石器として使用されたものはない。

注（1）　岡山平野では雄町以外で津島遺跡，原尾島百間川遺跡でも縄文晩期の土器片が出土している。

（2） 弥生式土器，土師器 （第56～65図，図版34～42）

弥生式土器は調査区全域で多量に出土し，住居址，溝，土壙などで一括出土したものが多い。調査区域が幅10m余の直線状であったため，年代的には確認出来ない時期もあり遺物がきわめて少ない場合もある。土師器は古い年代に属するものは比較的多く出土しているが古墳時代後期以後に属するものは少ない。土器は住居址，土壙，土壙墓，溝，包含層などで一括出土したものについて検討して編年した。以下確認された特徴のある時期について年代順に概述する。

前期前半の遺物は確認されていない。雄町１類の土器は第４調査区の壺棺として使用された土器と破片が少量出土している。壺の頸部には「削り出し凸帯」があって，下半に「ハ」の字状のヘラ描き沈線文があるもの（第66図 **a**），肩部と胴部に沈線文をほどこしたもの（第66図 **d**）がある。鉢では口縁部にきざみめ文をつけ，頸部にきざみめのある「削り出し凸帯」をつけたもの（第66図 **e**）がある。ほかに雄町１類に属する大きな壺棺が１個あるがぼろぼろになっている。

雄町２類の土器は門田式[1]と呼称されている時期で第４調査区の溝26で少量出土した。壺の頸部にきざ

表 8　備前西南部弥生・土師器編年表

時代			編年分類	土器番号
弥生時代	前期	津島		
		門田	a 雄町 1	129号墓壺棺
			b 雄町 2	1
			c 船山 2	
	中期	南方	a 高田	
			b 雄町 3	3～21，24～31
		弧池	a 船山 5	36
			b 弧池	33
			c 雄町 4	32，35，37～49
		前山Ⅱ	a 前山東	
			b 雄町 5	50～59，63～80，82～87，89～90，92～97，99～104，123，124，第１調区甕棺
		仁伍	雄町 6	118，125
	後期	上東	雄町 7	126～151，154，166，174～183，188，190～192，200，203，204，219，220
			雄町 8	205，206，208，209，212
			雄町 9	229～230，232，236
			雄町 10	231，235，240，244，245，248～249，253，263～265，267，278
			＋	
		酒津	a 雄町 11	286，288，290～293，297～299，307，308，310，312，315，318，321，324，325
			b 雄町 12	305～306，311
古墳時代		雄町	a 雄町 13	332，334，335，339～341，343～344，347，354，363，369，378
			b 雄町 14	333，342，346，349～353，356，361
			雄町 15	374，379，382，389

みめのある「貼り付け凸帯」をもつもの（1）がある。甕の破片は各地点の包含層中に表面の磨滅したものがある（第66図 **fghi**）。すべて小破片で口縁下に太いヘラ描き沈線文をほどこしている。沈線の間に列点を入れたもの（**j**）もある。

船山2類～高田式の土器片はほとんど確認されていない。

雄町3類は，第3調査区土壙32と第4調査区7号住居址で一括出土して確認された。ほかに土壙中に混在しているもの，第4調査区の土壙墓群にともなって出土するものがある。南方遺跡で土壙から一括出土し，南方Ⅱ式[2]と称したものである。壺は口縁部が外反し，頸部に凸帯がつくもの（3，4）とつかないもの（5，12）とがある。壺には櫛描き文をほどこすものが多いが櫛描き文のつけられていないもの（12）もある。無頸壺（6）は1点出土しているだけであらい櫛描き文がほどこされている。甕（8～11）は口縁部が「く」の字状にまがり，胴部にわずかなふくらみをもってくる。口縁部直下から内面にかけてヘラ磨き調整がおこなわれている。外面は縦に刷毛目調整が行なわれ，列点文が1ないし2列ほどこされているだけで櫛描き文は存在しない。鉢（15，17，20）は口縁を「く」の字にまげて胴部にややふくらみをもっている。外面をヘラ磨きにしたもの（15）と刷毛目を縦につけたもの（17，20）とがある。その外の器形に凸帯をつけた高杯（31）と小型の壺（29，30）がある。

船山5類の土器は確認されていない。

菰池式の土器は第4調査区の土壙墓で少量出土しただけである（33）。

雄町4類の土器は第4調査区の大型水路で多量に出土し，水路以外でも住居址，柱穴で出土した。従来知られている菰池式と前山Ⅱ式の間に入るものである。特徴点についてみると壺（32）では胴部がはり出し，頸部に凹線文をほどこしている。甕（37）は口縁端部が上方に肥厚して，肩部がはり出し，内面は胴部下半をヘラ削りしている。高杯（47，48）には三角形の透しがついて内面はあらく横に削っている。器台（49）は凹線文がついて縦に棒状浮文がある。

前山東地点の形式に属する土器は出土していない。

雄町5類の土器は第3調査区5号住居址床面，土壙22等で出土した。壺（50，52，54，55）と甕（57，58，63～68）の口縁部が上方にはり出して曲折し，外面には凹線文手法が多く使用されている。内面は胴部下半に縦のヘラ削りをほどこして，外面は胴部上半を刷毛目手法，胴部下半を縦のヘラ磨き調整で仕上げている。高杯（80，90，96，98，99）の口縁外面には凹線文手法が多くみられ，脚部にはヘラ描き沈線文と三角形の透しがみられるものであって一般につくりが丁寧である。第1調査区甕棺に使用されている甕と高杯がこの時期に属する。第3調査区5号住居址と土壙15の土器の一部には新しい手法が出現しており，6類につづくものである。

雄町6類の土器（117，118，125）は仁伍式[3]と称されるもので，第1調査区B地区の西傾斜面において弥生後期の土器とまじって出土した。上層の須恵器を含む遺物をのぞいて下層の土器は，弥生後期の土器と弥生中期後半の土器がほとんどである。弥生後期の土器以外は限定された年代のものであり，雄町6類が確認される。甕は口縁の凹線文が減少し，高杯の口縁外面の凹線文が減少する。器台には凹線文手法がほどこされる。

雄町7類の土器は第3調査区3，8号住居址で一括出土したものである。胎土があらく，壺，甕（126～128，140，143～145，147，149）とも，内面のヘラ削りを胴部下半のみ行っていたものが，胴部上半までヘ

ラ削りするようになる。外面は胴部下半に縦のヘラ磨きをほどこしている。高杯は口縁部の上端部が外方へ拡大してくる。脚部は前時期にヘラ描き沈線文をほどこしていたところが櫛描きに変り，三角形の透孔は縦のヘラ描き沈線状になって端にわずかな三角形の切り込みを残すものが多い（176，180～183，188，200）。

雄町８類の土器は７類の系統であって大きな変化はない。高杯においては口縁部がさらに外方に拡大し，上面に凹線文手法をほどこしている。脚部の文様では縦の沈線下部にあった三角形は消滅し，沈線文が櫛描きにおきかえられたものである。

雄町の９類の土器はいわゆる上東式と呼称される時期に該当する。壺は長頸壺（230）が完成し，高杯は口縁部が曲折して立ちあがり，脚部はゆるやかにカーブして広がり，円孔のあるものが多い。

雄町10類の土器は第１調査区１号住居址と西側斜面で一括出土した。壺の頸部はやや短かくなって，高杯（244，245，248，249）は口縁部が曲折して立ちあがり，脚部は曲折してひろがり，端部はうすくならず曲折部と端部上面に沈線を２～３条ほどこすものが多い。鋸歯文が多く使用され，特に多くほどこされた大高杯（269）がある。

雄町10類につづく時期は他の遺跡で出土がみられるが未報告である。該当すると考えられる土器片が少量あるが確定できない。ただ第１調査区溝２で出土している土器群（279，289，302，303，309，314，330，331）は，個体数が少ないので確定的な資料とならないが，雄町11類に先行するものと考えることができる。

雄町11類は第１調査区Ｂ地区東斜面で多量に出土し，土壙１，３，13で一括出土している。壺（286～288）は口縁部が上方に大きくはり出し，頸部は短かく下方がひろがってくる。甕（290，292，297，299）の口縁は大きく上方に曲折して，はり出し下部にもはり出しがあり，粗雑な凹線文状の文様がほどこされ，肩部がはって，底部は下端を削っている。内面は丁寧にヘラ削りをほどこしてうすい器壁である。高杯は杯部が深くなり，脚部は短くなって下方で曲折して広がり，円孔がある。杯は口縁部に稜をもつものがあって底部は中くぼみになる。

雄町12類の土器は11類につづくもので，備中南部の酒津式[4]に併行する時期で，第２調査区傾斜面で出土した。甕の口縁は上方に曲折して，櫛描き施文をほどこしたものが出現する。11類の形の甕も残るが口縁端部の下方へのはり出しを欠失するなど11類のものとは変化している。底部は下端を削った平底である。

雄町13類は，王泊６層[5]と呼称されるものの一部で第４調査区溝12で多量に出土した。甕は口縁部が上方に曲折し，幅２cm位で櫛描きをほどこしたものが多量化する。器壁のつくりはうすく，肩部がはって，胴部最大径が上方に偏した卵形で底部は丸底になるが，一部に平底に残存するらしい。高杯は14類にもひきつづいて短脚が残るがやや長くなるものと脚部が広がるもの（363）がある。大形鉢の口縁部は外反し，杯の底部は一部に平底部分を残すが丸底になる。この形器は14類で多くあらわれる。小形の丸底壺と甑，大皿状の土器がともなう。第３調査区６号住居址の土器（358，365，366）は13類の中で，もっとも古く，12類の直後のものらしい。

雄町14類の土器は，王泊６層と呼称されているものの一部で，備前原品の作遺跡[6]出土の土器に該当するものである。ただし，備前原品の作遺跡は海浜の遺跡であり，様相は異なる。雄町遺跡では第３調査区９号住居址，溝２で出土した。甕（346．353）の口縁部は幅が小さくなり，外反するものがある。器形は肩のはりがなくなって球形化し丸底である。坩（379，382），皷形器台（389）をともなっている。第４調査区溝２と井戸中の土器はこの時期の終末期のものである。

雄町15類の土器は第4調査区で最上層の溝から出土したものであって，年代的には限定されるものではない。

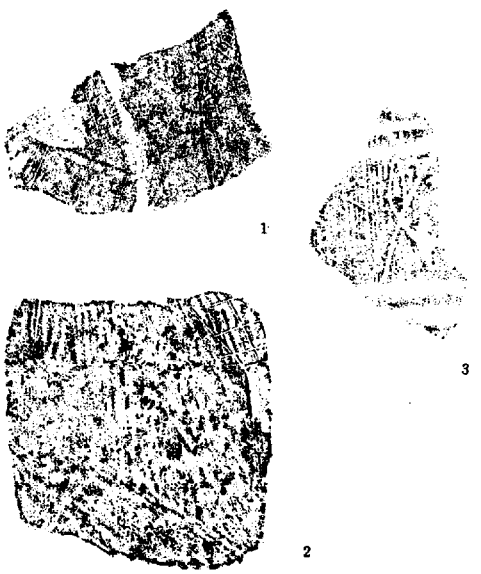
雄町 3，4，5，7，10，11，13，14類の土器については，量と器種が多いことから形式と考えてさしつかえないものであろう。

注(1) 森本六爾，小林行雄「弥生式土器聚成図録」 1938～9年
鎌木義昌「門田貝塚の文化遺物について」『吉備考古』 84号 1947年
(2) 「南方遺跡発掘調査概報」 岡山市教育委員会 1971年
(3) 高橋 護「郷内村小学校裏貝塚出土の弥生式土器の編年的位置について」『遺跡』 23号 1955年 瀬戸内考古学会
(4) 弥生式土器集成 資料編
(5) 坪井清足「岡山県笠岡市高島遺跡調査報告」 1951年
(6) 三杉兼行，間壁忠彦「備前原品の作遺跡出土の土器について」『遺跡』
なお，文章中櫛描き文と呼称しているものは，板目の文様であることが考えられる。

(3) 土器に描かれた絵画 (挿図第11図)

絵画と言えるものは家を2軒描いたものが明確なものである。その外に2点絵画か文様か明確に判断しがたいものがある。

1. 絵のある土器片は弥生中期後半の壺片らしい。焼成は堅緻で一部赤味がかった黄褐色を呈する。肩部にあたる部分をたてにヘラ磨きを施し，2軒の住居を配している。破片の大きさが7cm×4.5cmしかないため構図はわからないが，2軒が肩部に転回するように配されていることから2軒以上の住居を描いて集落を描こうとしたものらしい。住居の構造については右側の方は寄せ棟の高床の住居である。左側の方はどちらの方向を描いたものか上部の破片がないのでわからない。柱は3本描かれている。配置からもう1本以上あることがわかるので3間以上の高床住居らしい。



挿図11 土器に描かれた絵画

2. 第2調査区包含層中で出土した弥生後期後半の壺か甕の破片である。外面は斜めに交叉したヘラ磨きで内面は横向きのヘラ削りがなされている。色調は灰白色を呈する。

3. 第2調査区包含層中で出土した弥生後期の器台の破片である。凹線文で区切られた中に線刻がある。

(正 岡)

(4) 須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器

雄町遺跡各調査区における須恵器，緑釉陶器，灰釉陶器の中で確実に遺構にともなうものは，第4調査区大溝（D—12）最上層の須恵器のみである。あとのほとんどはすべて第2調査区の旧河道敷と思われる斜面堆積土層から，多量の須恵器，緑釉陶器，灰釉陶器などが一括して出土している。第3調査区，第4調査区においても，柱穴状ピット，柵列状遺構，条里状遺構などにともなう須恵器もみられるがほとんど小破片で

量的にも非常に少い。

須　恵　器

第4調査区溝12の各層序については遺構の項で詳述しているので触れないが，その最上層から出土している須恵器の杯は，口縁部が少し内傾し6㎜前後のたちあがりを持っている。底部のほぼ中程までヘラ削り調整を行っている。6世紀中頃と見てよいのではないかと思われる。この大溝は，用水路あるいは排水路として，弥生時代中頃から綿々と6世紀代まで続いていたことを物語っている。

第2調査区，旧河道敷と思われる所から出土している須恵器は，6世紀代の杯蓋から，9世紀代，あるいは10世紀代以降に含まれると思われるものまで一括して出土している。

（第70図2—1）の杯蓋は，口縁部直径12.4㎝をはかり，口縁部と天井部とをわける稜は短く鋭い。口縁端部まで垂直に近く上面はヘラ削りをほどこしているが，自然釉のため明確でない。

（第70図2—2・3）の杯身は口縁部直径10～12㎝でたちあがりは内傾し，5～6㎜をはかることができる。受部先端は，4～5㎜上にひらくように張り出している。底部は，ヘラで切り離した部分だけたいらで，凹凸をもってゆるく引きあげている。

（第70図2—4）の高杯は，焼けひずみ品である。高さ6.3㎝の小型品で，受皿部の底部とたちあがりの境に沈線を2本ほどこし，その下部にヘラで押えたような列点文をめぐらせている。

（第70—2図—6）の高杯は高さ約8㎝，口縁部直径12.5㎝で，全体に焼きがあまく，瓦質のような感じを受ける。脚部には文様も透しもない。

（第70—2図—8）の長頸壺は，高さ19㎝，頸高8.5㎝で，中程に2本の沈線をほどこしている。腹部は焼けひずみを生じており，底部は割れ目まである。頸部，肩部から腹部にかけて，自然釉がかかり，重ね焼きの破片がついている。

緑　釉　陶　器

緑釉陶器は，第2調査区の旧河道敷から，100点近くの小破片が，須恵器，灰釉陶器などとともに出土している。また，第3調査区，第4調査区からも数点ずつ出土している。

出土している緑釉のほとんどは，杯身，あるいは皿状になると思われる器形のもので口縁部片が10数点，中には一部をおさえ片口状にしているものもある。高台を有するものは10数点，糸切り底のもの数点，糸切りのように全体が台になっている底部に沈線をほどこし，高台のようにしているヘラ切りのものなどがある。胎土は，須恵質で硬質のもの，あるいは，白陶色，灰白色，黄白色を呈している軟質のものである。色調は釉薬の配合関係，あるいは胎土の状態により濁緑色ないし暗（黒）緑色を呈するもの，黄緑色を呈するもの，あざやかな淡緑色を呈するものなど個体によって色調に差異がありけっして同一色調とはいえない。軟質の白陶質の皿・盤あるいは杯になるかと考えられるものの中に数点陰刻線文様とほどこしているものが存在する。

灰　釉　陶　器

灰釉陶器は第2調査区から須恵器，緑釉陶器などとともに40数点近くが出土しているがほとんどが小破片である。

（第70図2—12）の皿は口縁部直径15㎝をはかり内面全体に明淡緑色の灰釉をほどこしている。灰釉を

ほどこした内側の表面に，3～5㎜大の剝離痕が認められる。これは焼成の際直接器を重ねず器壁間に窯道具を置いて焼成したものであると思われる。胎土は，白灰色を呈し，高台は丸みをもっている。

他の破片は，口縁部小破片，底部高台および体部の小破片で，皿，盤，碗になるものと思われる。また内面だけでなく，外側にも明らかに釉がけを行っている破片も数点みられる。

小　　結

これらの奈良時代，平安時代を中心とする須恵器，緑釉陶器，灰釉陶器は小破片が大多数である。またそのほとんどが第2調査区を中心とする出土である。第2調査区あるいは雄町遺跡の大部分が，備前国府が方8町と仮定する，高橋B案(1)によれば，備前国府域内に含まれ，これらの遺物もほとんどが備前国府で使用されていたものが中心であろう。

『延喜式』「主計上」にみられる陶器（須恵器）を調貢すべき国は「摂津，和泉，美濃，播磨，備前，讃岐」の6国が挙げられているように，10世紀前後の備前における須恵器生産は，畿内の陶邑古窯址群(2)などが衰退するのとは逆に和気，邑久郡を中心に展開している。

そしてこれらの備前産の須恵器等を調貢するかわりに，畿内で生産された緑釉，あるいは，尾張で生産された瓷器等(3)が備前へもたらされたものであろう。このことは昨今，中国縦貫道において調査されている美作国府の実例からみても推測することができる(4)。　　（伊　藤）

注（1）　高橋　護「古地形からみた備前国府」『岡山県埋蔵文化財報告』 1971年
（2）　田辺昭三「陶邑古窯址群」Ⅰ　平安学園考古クラブ　1965年
（3）　楢崎彰一氏の御教示によれば，これら出土している灰釉陶器は，ほとんど尾張猿投窯址群の生産品である。
（4）　岡田　博「美作国府発掘調査の中間概報」『文化財だより』 第13号　岡山県文化財保護協会
現在まで緑釉片のみで200点近く出土している。なお，一部須恵器の実測は井上弘，山磨康平両氏の協力を得た。

（5）分銅形土製品（第71図　図版44-1）

総数で16点ある。（第4調査区の1点は同一個体の破片が同一住居址の埋土に入っていた）完形品は1点

表 9　分銅形土製品分類表

施文（文様）	両面か片面か	くびれ部の文様	上部の穴列	はり出した端部の穴	上端部	
櫛描文のまわりに小刺突文をめぐらすもの	片面	横位の櫛描き	上縁から裏方向に斜めの穴列がある	上下方向に穴を1個ずつあける	上縁に穴列をつくるために裏にくぼみをつけたもの	1
					上端部を裏面に肥厚させたもの	2
					なにもしないもの	3,4
					不明	5,6,7,8,9,10
		櫛描きが左右に連続する	〃	〃	なにもしないもの	
2本組の小竹管状文をまわりにめぐらすもの	片面		〃	〃	〃	12
竹管及びほそい棒による刺突文	両面	横位の文様	穴はない	穴はない	〃	13
		文様がない	〃	〃	〃	14
	片面		〃	裏方向に1個ずつ穴をあける	〃	15
				裏方向に2個ずつ穴をあける	〃	16

で他はすべて破片である。住居址の埋土中で検出したものは7点ある。溝の中から検出されたものは1点，包含層中から検出されたものは8点である。文様と形態にはそれぞれかなりの違いがある。両面に文様の施されたものが2点ある。これは第3調査区3号住居址埋土中より検出されたもので土質の点からも雄町7類に属する。片面に文様の施されたものには上端部に上縁面から裏方向にあけられた穴がならぶものと，はり出した4端に上面から裏方向に穴をあけたものがある。文様と形態で分類したものが表9である。

（6） 紡　錘　車 （第78図1　図版44-2　表10）

総数は14点ある。初めから紡錘車としてつくったものは1点である。その他はすべて土器片の転用である。そのうち1個は未製品で穴をあけかけてやめている。完形品は7点ある。第3調査区3号住居址中の1点（11）が弥生後期初めである。その他はすべて弥生中期のものである。

表 10　紡　錘　車　一　覧　表

番号	出土地点	最大径 cm	厚さ mm	重さ g	材質	備考
1	0—3　H—5	4.01	0.51	9.45（9.95）	土器片	完形品　弥生中期後半
2	0—3　H—5	5.63	0.55	12.19（12.55）	土器片	半分　弥生中期後半
3	0—3　H—5	4.88	0.34	10.10（10.65）	土器片	完形品　弥生中期後半
4	0—3　H—5	5.60	3.60	6.35（6.65）	土器片	半分　弥生中期後半
5	0—3　H—5	2.95	0.465	3.15（3.3）	土器片	半分　弥生中期後半
6	0—3　H—5	3.24	3.55	3.60（3.75）	土器片	完形品　弥生中期後半
7	0—3　H—5	5.04	0.40	8.95（9.3）	土器片	未製品　弥生中期後半
8	0—3	4.01	0.54	7.2（7.6）	土器片	一部欠けている　弥生中期後半
9	0—3	2.45	0.49	2.45（2.6）	土器片	完形品　弥生中期後半
10	0—3　方—2	3.56	0.485	3.58（3.7）	土器片	破片　弥生中期後半
11	0—3　H—3	5.05	0.62	14.25（15.0）	土器片	完形品　弥生後期前半
12	0—4　溝	4.635	0.94	13.20（13.95）	土製品	半分　弥生中期
13	0—4	4.30	0.62	10.25（11.0）	土器片	完形品　弥生中期後半
14	0—4	2.53	0.54	2.15（2.2）	土器片	破片　弥生中期後半

重量は乾燥して測定　（　）内は9月14日自然乾燥で測定

（7） 土　　錘 （第72図，図版45-1　表12）

総数は28点ある。ほとんど包含層中から検出された。これらは形と重量からいくつかに分類できる。同一地点には同一の形式がみとめられる。太い管状のものは第2調査区第13層中から3点出土している。（1～3）長手の管状のものは第1調査区のB地区から3点出土している。（4～6）両端に穴のあいた太い棒状のものは第2調査区第3層中から3点出土している。（7～9）端部を扁平にして穴をあけているものは，第2，第4調査区で4点出土しているが完形品は1点もない。第3調査区8号住居址からは丸玉に穴をあけたものと表面に溝をつけたものが1点ずつある。年代はずんぐりした管状のもの，両端に穴のあいた太い棒状のものは，包含層中の土器は雄町13類のものが大半をしめることから古墳時代前半のものである。太い管状のものは酒津式土器と雄町式土器がまじって出土するので弥生時代末から古墳時代前半である。第3調査区8号住居址から出土したものは埋土中に弥生時代中期後半と後期初めの遺物がまじっていたためその年代のどちらかに属する。その他の土錘は比較的新しい年代のものである。

石　　錘　（第73図　図版45-2　表11）

石錘は9点ある。完形品は8点である。形態から2つに分類できる。周りに溝をめぐらす形態6点と両端を打ち欠いたもの3点がある。4は石鏃としてつくられているが，後に叩石に転用している。年代の限定で

表 11　石　錘　一　覧　表

番号	出土地点	形	長径 cm	短径 cm	厚さ cm	重さ g	備　考
1	0—1	有　溝	8.375	7.955	3.645	367.6	弥生後期以前
2	0—2	有　溝	8.395	7.40	6.05	470.2	たたき石に転用欠けている
3	0—3　H—8	有　溝	7.51	6.335	5.08	410.8	弥生後期初め以前
4	0—3	有　溝	5.1	4.855	3.89	130.6	
5	0—4	有　溝	4.35	4.025	3.24	78.2	
6	0—4	有　溝	7.50	6.915	5.74	417.95	
7	0—4　溝	両端打ち掻き	8.47	7.97	2.790	264.2	弥生中期中葉以前
8	0—4	両端打ち掻き	7.85	7.48	1.61	162.4	
9	0—2	両端打ち掻き	7.35	6.595	4.665	328.05	
10	0—3	有　溝	2.69	1.65	1.195	6.10	

表 12　土　錘　一　覧　表

番号	出土地点	形	長径 cm	短径 cm	重　さ g	備　考
1	0—2	太い管状	7.455	5.05	186.85 (193.2)	完形品
2	0—2	太い管状	5.285	3.405	59.40 (63.75)	完形品
3	0—2	太い管状	3.75	3.075	36.60 (38.35)	完形品
4	0—1	管状	6.55	2.89	55.25 (58.95)	完形品
5	0—1	管状	6.62	2.975	54.68 (58.6)	完形品
6	0—1	管状	6.535	2.895	47.40 (51.25)	完形品
7	0—2	双孔棒状	9.865	3.15	72.30 (75.5)	完形品
8	0—2	双孔棒状	4.625	2.44	21.65 (22.6)	半分
9	0—2	双孔棒状	8.58	2.635	44.70 (45.9)	端部欠
10	0—2	端部扁平な棒状	4.92	1.335	8.60 (9.25)	半分
11	0—4	端部扁平な棒状	5.52	1.90	16.80 (18.15)	半分
12	0—4	端部扁平な棒状	5.44	1.905	16.80 (17.8)	半分
13	0—4	端部扁平な棒状	6,01	1.975	17.60 (19.1)	半分
14	0—3　H—8	表面に溝のある楕円形	2.87	2.49	18.30 (19.25)	完形品
15	0—3　H—8	穴のある球形	2.23	2.09	8.55 (8.95)	完形品
16	0—1	紡錘形	3.59	1.265	4.35 (4.6)	端部欠
17	0—1	紡錘形	3.72	0.94	3.30 (3.65)	端部欠
18	0—1	紡錘形	2.775	1.035	2.95 (3.0)	端部欠
19	0—2	紡錘形	4.085	1.19	4.60 (5.0)	端部欠
20	0—2	紡錘形	4.20	1.0	3.7 (4.0)	端部欠
21	0—2	紡錘形	2.99	1.31	4.95 (5.4)	端部欠
22	0—2	紡錘形	5.03	1.44	7.75 (8.35)	端部欠
23	0—2	紡錘形	3.55	0.885	2.70 (3.0)	完形
24	0—2	紡錘形	2.955	1.0	2.70 (2.9)	端部欠
25	0—3	紡錘形	4.355	1.21	6.0 (6.6)	端部欠
26	0—4	紡錘形	2.91	1.12	3.20 (3.6)	端部欠
27	0—4	紡錘形	3.55	0.91	2.25 (2.35)	端部欠
28	0—4	紡錘形	5.03	1.44	7.75 (8.35)	端部欠

重量は乾燥して測定　（ ）内は9月14日自然乾燥で測定

きるものは1が弥生後期の土器を含むピット中にあったので，弥生後期以前，5は弥生後期初めの住居址埋土中に入っていたので弥生後期初め以前，8は雄町4類の溝中に入っていたので弥生中期以前に比定できる。

（正　岡）

第2節　石器・石製品（第74-77図，図版46）

雄町遺跡出土の石器は総数438点，それに剝片が多数ある。各種類ごとに数例ずつ計25点を紹介する。

石庖丁

本遺跡からサヌカイトを材料とした打製石庖丁23点のほかに磨製石庖丁が1点ある。

打製石庖丁にはA，紐かけのくりこみが無いものと（1），B紐かけのくりこみを両側片にもつものがあり（2），Aは中期前葉までであり，Bはその後のものらしい。

石槍（4）

破片を含めて4点ある。（4）は表裏共に大剝離面を残し側辺に刃をつけているが，基部から6.4cmまで刃をつぶし着柄のための加工をしている。

磨製石斧（5）

（5）は両側辺に打ち欠きを残したままの半磨製石斧ともいえるもので，断面が扁平である点が特徴である。

扁平片刃石斧（6，7）

雄町遺跡ではこの2点だけしかない。破片ではあるが（6）の方がやや大きいだろう。7は側面図を書いた側が大きくえぐられている。どちらも風化がはげしく研磨痕等の観察ができない。

打製石斧（8）

撥形のものが土壙墓の中から副葬品のような状態で発見された。河原石を利用したもので表裏とも自然面を残している。刃部欠損。

太型蛤刃石斧（9）

3点あり閃緑岩，花崗岩を材料としている。9は敲打のあと頭部を除いて全面研磨されているが研磨の方向が観察できない。他の2点は頭部破片である。

石鏃（10～19）

総数279点あり出土石器の63%をしめる。すべてサヌカイト製である。作り方から表裏ともに大剝離面を残し六角形の扁平な断面を示すものと，13，15，17のように調整剝離が中央部分までおよび，断面が菱形になるものがある。基部の状態から平基式，凹基式，平基有茎式，凹基有茎式，凸基有茎式の六種類に分けることができる。凸基無茎式のものがみあたらないが，さらに検討すれば存在するのかも知れない。最後に14，15のような小型の石鏃が中期前葉の遺構からまとまって発見されていることを指摘しておこう。

叩石（20，21）

やや細長い手頃な河原石の小口に敲打した跡がついているものがほとんどで，21のように両側辺を2ヶ所ずつ着柄装置のようなくりこみをつけたものが他に1点ある。

砥石（22～25）

49点もある。弥生時代のものばかりではなく古墳時代のものもあるようだが十分な検討を加えてはいな

い。22のような大型の砥石でも中央部が凹んでおりあまり大きなものを砥いたのではないようだ。25の右下かどのところに穴をあけた跡がついており，提砥だったのかも知れない。

そ の 他

十分な検討を加えていないが不定形打製石器が存在する。

（栗 野）

表 13　雄町遺跡出土石器一覧表

	磨製石庖丁	打製石庖丁	石槍	磨製石斧	打製石斧	扁平片刃石斧	太型蛤刃石斧	石鏃	石錐	叩石	砥石	石錘	その他	合計
0—1		3						1			4	1	9	18
H 1		1									2		1	4
H 2													1	1
0—2		5	1				1	6		4	2	5	6	30
0—3		5				1		46		1	8	1	9	71
H 2								5						5
H 3								15			5			20
H 4											1			1
H 5				1			1	44		1	3			50
H 8		3						83		2	8	1		97
0—4	1	8	1			1	1	54	4	2	14	3	22	111
H 5											1			1
H 6								2						2
H 8		2						5						7
H 9			1											1
H10								1						1
H11								1						1
H12								1						1
土壙墓					1			10						11
大溝				1							1			2
0（地点不明）			1					5					1	7
合計	1	27	4	2	1	2	3	279	4	10	49	11	49	442
報告書	1	2	1	1	1	2	1	10		2	4	11		36

※数字は破片を含めた個体数を表わす。

表 14　石　器　計　測　表

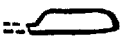
番号	名　称	長 mm	幅 mm	厚 mm	重量 g	石　材	出　土　地　点	備　考
1	打製石庖丁	117.0	44.5	9.4	57.6	サヌカイト	0—4　H8	中期前葉（雄町３）
2	打製石庖丁	98.5	46.0	12.0	75.2	サヌカイト	0—3　長方形土壙２	後期前葉（雄町７）
3	磨製石庖丁?	(40.0)	(37.6)	(5.3)	(13.6)	緑泥片岩?	0—4　15～16ＮＩＥ	
4	打製石槍	123.7	36.4	10.5	(51.0)	サヌカイト	0—4　H9	中期後葉
5	半磨製石斧	85.0	48.0	16.0	110.0	変成岩か?	0—3　H5	中期後葉（雄町５）
6	扁平片刃石斧	(42.5)	(17.0)	(13.0)	—	凝灰岩?	0—3　S17Ｎ４ pit 12	
7	扁平片刃石斧	43.8	46.5	11.0	34.0	輝緑岩?	0—4　16　ＳＩＥ2—3	
8	打製石斧	(137.0)	75.0	25.0	(281.5)	硬砂岩	0—4　土壙墓Ｃ群11	中期前葉（雄町３）
9	太型蛤刃石斧	(117.0)	67.0	53.0	(670.0)	閃緑岩	0—3　H5	中期後葉（雄町５）
10	石　鏃	41.0	23.0	5.5	4.7	サヌカイト	0—3　９Ｎ２Ｅ１	
11	石　鏃	34.0	16.4	3.6	2.5	サヌカイト	0—3　H5	中期後葉（雄町５）
12	石　鏃	31.2	27.9	4.2	2.7	サヌカイト	0—3　H5	中期後葉（雄町５）
13	石　鏃	32.5	19.5	4.1	1.4	サヌカイト	0—3　H5	中期後葉（雄町５）
14	石　鏃	26.0	16.5	2.8	1.0	サヌカイト	0—4　H8	中期後葉（雄町３）
15	石　鏃	17.5	13.0	2.4	0.5	サヌカイト	0—4　土壙墓Ｌ３	中期前葉?
16	石　鏃	43.9	30.8	6.8	7.5	サヌカイト	0—3　H3	後期前葉（雄町７）
17	石　鏃	44.3	13.6	4.5	2.7	サヌカイト	0—3　H5	中期後葉（雄町５）
18	石　鏃	38.7	18.7	4.2	2.5	サヌカイト	0—2　４Ｓ２Ｅ５	
19	石　鏃	21.7	29.4	2.8	1.1	サヌカイト	0—3　H8	後期前葉（雄町７）
20	叩　石（抉入）	168.0	79.0	40.0	760.0	砂　岩	0—2　５ＳＩＥ５	
21	叩　石	109.0	68.5	45.5	540.0	硬砂岩	0—3　H8	後期前葉（雄町７）
22	砥　石	224.0	73.0	62.0	832.0	軟質凝灰岩	0—3　３Ｎ３柱穴15	四面使用　仕上砥　古墳時代前期（雄町14）?
23	砥　石	113.0	46.0	40.0	263.0	軟質凝灰岩	0—4　井戸３	四面使用　仕上砥　古墳時代前期（雄町14）?
24	砥　石	29.0	25.0	11.5	—	軟質凝灰岩	0—3　H8	全面使用　仕上砥　後期前葉（雄町７）
25	砥　石	54.0	28.2	9.8	—	更砂岩	0—3　東トレ３ pit 19	全面使用　中　砥　中期後半～後期初頭

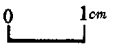
※長・幅・厚は最大値を示す。（ ）は欠損している石器の現状値を示す。

第３節　金　属　製　品（78図2，図版47-1，3）

（1）鏡　　片（挿図第12図，図版47-3）

第４調査区１号住居址床面から小片が１点出土している。鏡は平縁の一部しか残っていないので鏡式は不明である。平縁の幅は１cm厚さ３mmである。住居址は小型の方形住居址で床面の土器片は雄町14類と推定される。





挿図12　鏡片断面図

（2）刀子状鉄器（第78図２，図版47-1）

第４調査区１号住居址の床面で刀子状鉄器が１点出土している。両端を破損していて不明瞭である。刃の部分は一方から研ぎ込んでいる。幅１cm位で有機質が斜め方向に両面に付着している。

（3）鉄　　斧（第78図２，図版47-1）

鉄斧としては２点出土している。１は袋状鉄斧で第４調査区の凹地中から出土した。層位から古墳時代後期以降である。袋状になっているが錆がはげしくて詳しいことはわからない。大きさは全長7.3cm，幅4.6cmである。２は扁平片刃鉄斧で，第３調査区のピット中から出土した。形態は扁平片刃石斧に類似している。先端はやや広がっていて一方から研いでいる。全長6.2cm，刃幅3.9cm，厚さ５mmである。

（2）やりがんな（第78図２，図版47-1）

やりがんなは３点ある。完形品は１点である。２と３は第３調査区５号住居址の埋土中より出土した。２は先端部を両方向から研ぎ込んでいる。先端から2.4cmのところで錆の状況が変るので木質部があったらしい。大きさは全長5.6cm，幅1.3cm，厚さ2.5mmである。３も２と同様である。先端部を欠いているが木質は残っている。大きさは現存長４cm，幅1.2cm厚さ2.5mmである。４は第３調査区９号住居址の埋土中から出土した。両端を欠いている。木質が錆とともに付着している。大きさは現存長11.1cm，幅８mm，厚さ３mmである。一方が扁平になっている。

不明鉄片

以上の外に鉄片が９点出土している。細片であって何かわからない。

第４節　玉　　類（第79図1，図版47-2，表15）

玉類は土製勾玉を含めて13点ある。玉の種類は管玉８，水晶玉１，小玉１，ガラス小玉２，土製勾玉１である。年代は３が雄町４類に，13が雄町10類に属する。

表15　玉　類　一　覧　表

番号	出土地点	形	長さ	幅	色調	材質	備考（穴のあけかた）
1	0—1	管玉	1.90	0.485	淡緑色	碧玉	片
2	0—4	管玉	1.03	0.335	緑色	碧玉	両
3	0—4　溝	管玉	1.30	0.395	暗緑色	碧玉	両
4	0—4	管玉	1.70	0.375	灰白色	珪板岩	片
5	0—4	管玉	2.065	0.42	緑り斑点まじり淡緑色	珪板岩（斑点あり）	両

番号	出土地点	形	長さ	幅	色調	材質	備考(穴のあけかた)
6	0—4	管玉	2.21	0.49	淡緑色	珪板岩	両
7	0—4	管玉	2.7	0.56	白の斑点まじり暗緑色	珪板岩(斑点あり)	両
8	0—4	管玉	3.125	0.795	淡緑色	珪板岩	両
9	0—3 H—8	切子玉	0.58	0.59	透明	水晶	片
10	0—4 溝	玉	0.475	0.48	黒緑色	堆積岩の一種	片
11	0—4	ガラス玉	0.375	0.485	水色	ガラス	
12	0—4	ガラス玉	0.32	0.385	水色	ガラス	
13	0—1	勾玉	4.73	1.60	灰白色	土製	

岡山大学教授　光野千春による

第5節　木器，木製品 (第79図2，図版48～50)

雄町遺跡で木器，木製品の出土したのは第2～4調査区である。第2調査区では河川中の堆積層に建築材，板，井戸枠，杭，火きり臼などを出土した。第3調査区では柱穴の下部で礎板を，第4調査区では溝の中から杭，井戸の中から櫛を出土した。

建築材は第2調査区の旧河川の堆積層中で雄町12～13類の土器をともなって多数検出した。直径20cmの丸太材の先端を切っているものもあるが割り材が多い。細い枝の先端を加工したものも多い。第3調査区の7号住居址で出土した礎板は3個ある。3個にはそれぞれ柱材が組みあうように切りこみをつけている。礎板の大きさは①長さ54cm，幅17.5cm，厚さ10cm，凹みの長さ23cm，幅14cm，深さ3.5cm，②長さ59cm，幅16cm，厚さ10cm，凹みの長さ21cm，幅13cm，深さ3.5cm，③長さ48cm，幅17cm，厚さ8cmである。

火きり臼は第2調査区の旧河川の堆積層中で雄町12～13類の土器をともなって出土した。大きさは長さ9.4cm，幅4.3cm，厚さは厚い部分1.9cm，うすい部分0.6cm，火きりの穴は3個ある。うすい部分の端に直径0.4cmの穴がある。携帯用の火きり臼とでも言えるものであろう。

櫛は雄町14類の井戸の中で検出された。12本の細い材をU字形にまげて基部をたばねている。全体に漆を塗っている。大きさは長さ16.9cm，基部の幅3.3cmである。　(正　岡)

第6節　自然遺物

表16　種子一覧表

出土地区	遺構	種	数量	長さ 幅 厚さmm	年代
雄町第2調査区	包含層	ヒメクルミ		18 21 7×2 2分の1	雄町10類
〃 〃	〃	モモ		16 14 12	雄町13類
〃 〃	〃	〃		16 12 10	〃
〃 第3調査区	土壙7	炭化玄米	1	4.4 2.4 1.7	雄町7類
		炭化小豆	1	5.5 4.0 3.7	〃
〃 第4調査区	井戸	センナリビョウタン	約1300		雄町14類

出土地区	遺構	種	数量	長さ	幅	厚さmm		年代
雄町第4調査区	溝 14	センナリビョウタン	12	10	5	1		雄町13類
				9	4	1		
		モ モ		18	14	10		
				16	14	10		
				16	12	10		
				18	16	14	2分欠ける	
				13	9	6	3分欠ける	
				16	14	10	2分欠ける	
				15	12	10	2分欠ける	
				13	11	5	2分の1	

対照　白桃モモ　長さ32，幅21，厚15
岡山大学農業生物研究所教授　笠原安夫による

表17　種子一覧表

種子	溝14 粘土流身下部層	溝14 西側肩	溝14 上層杭のセンター頭	溝14 東側肩	溝12	種子	溝14 粘土流身下部層	溝14 西側肩	溝14 上層杭のセンター頭	溝14 東側肩	溝12
モミ	16				1	ノミガナ	1				
マクワウリ	1		1		2	メナモミ	4				
スイカ			8			センナリホオズキ	3				
センナリビヨウタン			2			キランソウ	1				
計	17		11		3	シソ	3		1		1
タガラシ					14	メハジキ					1
ヤナギタデ	7				1	エビヅル	3				
サナエタデ	4				1	エノキグサ	4	1			
コナギ	5		2		8	カタバミ	3				2
ホタルイ	14	1	9	23	1	ヘビイチゴ					5
計	30	1	11	23	25	キイチゴ		3	5	1	
タカサブロウ	1				1	ナズナ	1				1
キツネアザミ	1				1	ザクロソウ	23	52	12	3	14
ノミノフスマ	3		1		3	アカザ	11	1	1		9
コハコベ	2				1	カナムグラ	4				2
ハルタデ	5				5	エノコログサ	3				
イヌタデ	2	2	2		1	その他	7	5			5
ヒメソナ	1	1			1	計	71	62	19	4	40
コゴメガヤツリ	1	1			2						
アゼスゲ	3		3	1		合計	141	67	47	28	87
ヌカキビ	4				1	不明	5	3	2	2	6
その他					8	合計＋不明	146	70	49	30	93
計	23	4	6	1	19						

その他の種

溝14流身部粘土下層　ヨモギ（1），トバナ（1），ヒメジソ（1），フユイチゴ（1），イヌビユ（3）

溝 14 西側肩　チドメグサ（1），イラクサ科（4）

岡山大学生物研究所教授　笠原安夫による

まとめにかえて

住居址

第1～第4調査区までで24個の住居址を確認した。第2調査区は傾斜面のため住居址は無かったが第1調査区で2個，第3調査区で10個，第4調査区で12個ある。もっとも古い年代のものは弥生時代中期前葉のもので，第4調査区の7，8号住居址である。平面形は円形であるが，やや楕円形に近い形をしている。柱穴は6本ないし9本で構成している。中期中葉のものは第4調査区の11号住居がある。平面形は円形らしいがほとんどが用地外になるので確認されていない。したがって詳細はわからない。中期後半の住居址は，第3調査区5号住居址，第4調査区9号住居址がある。まるみがかった不整円形で，4本柱である。いずれも埋土中から分銅形土製品を出土している。

後期前葉の住居址は第3調査区に，2，3，8号住居址がある。平面形は3号住居址の最終期では円形であるが，建てかえる前の住居の形は辺が弧状になった不整円形である。柱は4本を主体とし，最終期では7本ある。後期中葉の住居址は，第1調査区1号住居址がある。直径10.2mの大きな円形住居址である。柱は中央に4本あって，周りに小さな柱があるらしい。後期では前半，後半を通じて，直径8～10mの大きな住居址がある。古墳時代前期の住居址は8個ある。これらのうち比較的古く雄町13類に属するものには，第1調査区2号住居址，第3調査区の1，4，6，7号住居址がある。平面形では円形，方形，6角形があるが，いずれもベッド状施設をもっている。柱は円形，方形のものは4本で6角形のものは6本である。6角形の7号住居址では柱の下に礎板が利用されて残っていた。柱と柱を結ぶ内側が5～10cm低くなって中央付近に炉がつくられている。雄町14類に属するのは第3調査区9号住居址，第4調査区1，5，12号住居址である。平面形は方形で柱は4本と2本があるらしい。これらにはベッド状施設はない。以上の他の住居址については年代が確定しがたいものである。

第3調査区では4号住居址と9号住居址の近くにある溝2と溝3は調査区域をはずれる部分もあるが埋土中の遺物と土層の状況から同一の溝であるらしく，2個の住居址を方形に囲むような状況である。大きさは約22m×20mで南東部がつながらないであくらしい。溝の埋土中の遺物は雄町13類と14類の土器を含んでいる。4号住居址と9号住居址は，それぞれ雄町13類，14類の遺物を含んでいるので併存はしないがそれぞれ溝と有機的な関係があるらしい。

住居址で火災のために破棄されたものは5個ある。弥生時代中期後半のものが，第3調査区5号住居址，第4調査区9号住居址で，後期のものは第1調査区1号住居址，第3調査区5号住居址である。

（正　岡）

埋葬遺構について

雄町遺跡の今回の発掘では第1調査区で弥生中期後半の甕棺墓が1個発見されたが，第2，第3調査区では土器棺，土壙墓と考えられるものは1基も発見されていない。ところが第4調査区では弥生前，中期の埋

葬遺構が200基ちかく検出された。そのうち約130基を発掘したが壺棺墓２，木棺墓４基を除いて他はすべて土壙墓である。

土壙墓は単独で存在するものと切り合って群集するものとの二様がある。この土壙墓の平面形態は隅丸長方形，楕円形，小判形，長方形の４類型に大別される。平面形態では隅丸長方形のものが大半をしめる。この形態の土壙のほとんどは長さ120㎝前後，幅約40㎝の規模である。平面形態で埋葬年代の相違を決定することはむずかしいが小判形（Ｃ群を代表とする）のものは比較的古く，雄町３類の土器を出土し弥生中期前葉に属する。雄町４類の時期には小判形掘り方のものは存在しないと考えられるが，雄町３類の時期にはＨ群にみられるように隅丸長方形のものもあり，Ｂ群のような楕円形のものも共存している。

壺棺墓は２個発見され，それらはいずれも弥生前期中葉に属する。同時期の土壙墓は確認されていない。

木棺墓と考えられるものは４基検出した。121号墓を除き，106号，125号，128号墓の規模は他の土壙墓にくらべてかなり大きい。木棺墓はいずれも土壙墓群とは切り合い関係をもたず，はなれた位置につくられている。遺物は出土しておらず年代は定かでないが隣接する群と関連をもち，意識的に単独墓としてつくられたものと推定される。

発掘した約130基のうち歯を検出したのは５例で，人骨痕跡が確認されたのは６例を数える。そのうち，両方を共伴するものは２例である。（表６参照）

副葬品には土器，石器があるだけで玉類，金属製品を伴出するものは存在しない。土器を副葬品として伴う例は10例前後認められ，石器の副葬はＣ―11号墓一例だけである。Ｌ－２号墓では石鏃が10本出土している。そのうち６本は先端がおれており，出土状態も底面に近い位置であるにもかかわらず一個所にまとめられた状態ではない。したがって副葬品とするより，人体に射こまれた可能性が大である。が，断定はさけたい。なおこのＬ群では土器の出土がみられないにせよ，周辺の土壙墓群との関連および石鏃の形態からみて弥生中期前半期に属することはまず間違いないであろう。

第４調査区における埋葬遺構の現存する深さは最深のもので40㎝前後，浅いものは数㎝しか残存せず，マンガン粒の土壙部への凝集から想定されるだけのものなども存在する。

以上の事実認識に基づき，とくに問題となるのは当時の掘りこみ面の復元による土壙墓本来の規模ならびに形態についてであろう。たとえば古墳時代前期前半の竪穴住居址（１号，２号，３号）が10㎝程度の深さをとどめるにすぎないことは削平深度とかかわり，おそらく上面が数十㎝削平され消滅していると推定される。とするならば深いものは１ｍ余の掘りこみをもっていたとする想定が可能となる。掘り方上面の平面形態は土壙墓のばあい底面近くが多様であろうとも，ほとんど同じ規模の長楕円形であったと推定される。また埋葬形態は土壙墓では底面規模からみて屈葬ないし屈葬にちかい状態であったのではなかろうか。ついで問題となるのは，埋葬遺構の群集する地域では同時代の住居遺構が検出されていないということである。しかるに大型水路によって分離された微高地東部分では埋葬遺構は１基も検出されず，同時代の住居址（７号，８号，11号）が確認されている。埋葬遺構が存在する微高地西部分は南へのびるにしたがって地山面が高くなっており，調査区域外の南方，現在の山陽本線敷以南には同時代集落が形成されていた可能性が強い。以上の状況から判断して，200基ちかく検出された埋葬遺構は埋葬地区として当時の人たちが意識的に分離したものと推定される。そこで問題となるのはこれらの埋葬遺構群が単一の微高地を占拠した弥生時代集落の構成員によって形成されたものか，あるいは複数の微高地を占拠した弥生時代人の共同墓地であったのか

ということである。有力なる根拠は提示しえないけれども可能性としては前者のケースが濃厚であると考えている。ひきつづき，最近問題とされている方形周溝墓との関連についてふれるならば，雄町遺跡第4調査区における埋葬遺構群には方形周溝墓的溝状施設はまったく付属しないと断定できる。これは岡山市南方遺跡の場合(1) でも同様であった。最後に群集することの意味を問題としなければならない。各群は数基ないし10数基が切り合った例が多い。そうした一般的なあり方を示す一方R群の場合には20基をこえると推定される。この群の把握自体になお若干の問題は残っている。というのはE群，F群などにみられる隣接するものが真実分離されたものなのか否か決定できないという問題，あるいは削平による消滅の可能性など今後さらに検討すべき点を包摂していることも確かである。しかし，群として存在する事実は動かしがたく，各群での切り合い関係にみられるとおり，ごく短期間に営まれていることは確定的であろう。この「群」が示す構成単位はいったい何を反映しているのであろうか。この問題が特に重要となるのであろうが比較資料も少なく，今回の限定された資料でいえることは，各群が弥生時代前半期（なかでも中期前，中葉）における何らかの機能を有した小さな単位を示していることは確実であろう。　　（葛原，泉本）

注(1)　岡山市教育委員会『南方遺跡発掘調査概報』 1971年

溝

溝または溝状遺構は，その立地条件が洪積台地あるいは沖積平野であるかを問わず，弥生遺跡の中においてしばしば検出される。そうした溝の機能については，集落を区画することが第一義(1) と考えられているが，集落単位を空間的に画するばかりでなく，防禦的機能を付加した(2) 例，ならびに農業用の用・排水路と考えられる水路(3) など，その機能と意義はいっそう分化されつつある。ここで，概要を記してきた総計30本ちかい溝ないし水路についても，おのずから目的を異にして利用または使用されているのであるが，若干の特徴点を整理しておこう。

①　微高地上を貫流する弥生前期の水路（溝3，溝26，溝27）

走向方位は北東から南西を示し，周辺の地形からすればまったく理解しがたい方位をとっている。つまり，旭川の左岸の旧河道の一本は，本調査区の北西約2kmにあたる「竜口（たつのくち）」付近で分枝し，「祇園（ぎおん）」から「赤田（あこだ）」へと連続する南北線上にあることが，そうした地点における下部の土壌構造が砂や礫層からなる事実ばかりでなく，いまなお湧水地帯であることによって知られている。だから，この調査区にあっても，大小の規模を問わず，北西から南東へ貫流する水路であれば不自然ではない。ところが，上記3本の溝はまったく異なる走向で，特に溝27は底部のみ明らかに河ざらえをうけた痕跡をとどめる事実と共に注目される。これら微高地上を貫流する水路は，津島遺跡で解明されたように，弥生前期の水田が微高地上の縁辺にあったとすれば，そうした所へ流れを導いたものであるかもしれない。本来，稲の属性が湿性の禾本科植物であるにせよ，常に滞水状態の地形が開田されたのではないことを暗示するようで興味深い。

②　緒源的な堰をもつ弥生中期の水路等（溝14，溝13，溝32）

「水門扉のおこりは水路を人為的に閉塞することから始まり……(中略)……泥や木片等を以て水路を閉ざしたもの」(4) である想定は，現実に存在する。数百本の杭や矢板をもって人工的な水利施設を創建した緒源は，少なくとも弥生中期中葉（雄町4類）まで遡り，すでに年中「かけながし」の状態での水田管理と乖離した農業技術の進展を物語っている。だから溝14の底部は常に河ざらえを行なった痕跡として水平な河床面を

とどめ，河床の掘り下げに意を注ぐ反面，堤防の嵩上げ工事のなかった反映とみてよいであろう。流水の自由な調整は，何よりも籾まき期における水面の保持，ついで発芽期における分けつの抑制など稲作技術の構造自体の変革と深く連関しつつ，この期を画して農業集団間での流水に対する統合および配分がさらに重要な課題になってきたことを想定させる。出土土器が示すように，縄文晩期からこの沖積地に生活を切り開いた人々は，この時期に沖積地を居住地と定めた数少ない集団のひとつを構成し，やがて稲作技術に基づく生産経済を展開させ，終始「母村」としての性格を維持しつづけたことは，約400年後の溝12の水利施設にみられるとおり，他の集団に対する圧倒的な優先権を水利のうえに継承しつつ確立していたことを物語っている。

③ 河床の土器片堆積層とその時期（溝12，溝2）

河道は幹線水路としての幅が広ければ広いほど，河床の洗掘作用もうけやすい。そこで，河床の床固め方法としてふつう数本の杭を打ち込む方法がみられるが，珍奇な現象として土器片が河床をいっぱいにおおう場合がみられる。溝12では土師器（雄町14類）で，溝2でも土層中に多量の土器片（雄町14類）を包含していた。こうした河道は他の遺跡でもしばしば検出されている(5)。これらは床固めというより別の社会的原因による結果である可能性が強いにせよ，どうもこの時期に集中するようで気がかりな点である。また溝2などにみられるとおり，溝の両脇にハの字状に杭の痕跡をとどめる例もこの時期に多いようである。(3)。その機能については，類例をいっそう積み上げる以外にないが，まず護岸用の杭と考えて誤りないであろう。おそらく，ソダ類や竹材を組みあげて，それらを流れに接する溝の内壁にゆ着させ，その止め金的機能をもってハの字状に打たれた杭ではなかろうか。板材の加工に用する大型木材と，その加工工程の中で吸収される尨大な労働力を節減しつつ，なお下流集団からの水の要求にこたえるにはもっとも合理的な技術として普遍化したものと想定しうる。（葛　原）

注（1） 和島誠一，田中義昭「住居と集落」『日本の考古学』 Ⅲ
（2） 森　浩一，鈴木博司「観音寺山弥生集落調査概報」 1968
（3） 近藤義郎「津島遺跡と武道館事件―津島遺跡の性格―」『岡山史学』 第22号 1968 滋賀県教育委員会「大中の湖南遺跡調査概要」 1967
（4） 内村三郎「水力堰堤門扉の構造に就いて」『河川講演集』 河川協会編
（5） 兵庫県社会文化協会「田能遺跡概報」，岡山市教育委員会 「南方遺跡発掘調査概報」 1971
（6） 岡山県教育委員会「岡山県津島遺跡調査概報」

土　　壙

土壙は第1，第3，第4調査区で確認された。土壙としては柱穴，土壙墓以外をまとめたが，形態も大きさもことなることから用途がちがうと考えられる。長方形土壙は第3調査区で2個と第4調査区で1個確認されている。大きさは一辺2～3m位で，年代は弥生中期から後期前半である。性格，用途については不明である。不整円形の土壙は各時期にみられるが用途は不明である。第3調査区では，7，15，22，26，27号土壙で灰を多量に含んだものがある。平面形は隅丸長方形ないし不整楕円形で底部は一方あるいは一部が低くなって2段になっている。15，22では土器片が灰とまじって多量に入っている。掘り込みは垂直にちかく，現状では1m位の深さがありかなり深い。下部の状況は焼けたところがあって灰が層をなしている。い

ずれも自然に埋没していて上層まで灰が多い。年代は弥生時代中期後半から後期である。南方遺跡[1]でも灰が多量につまった土壙が確認されている。（正岡）

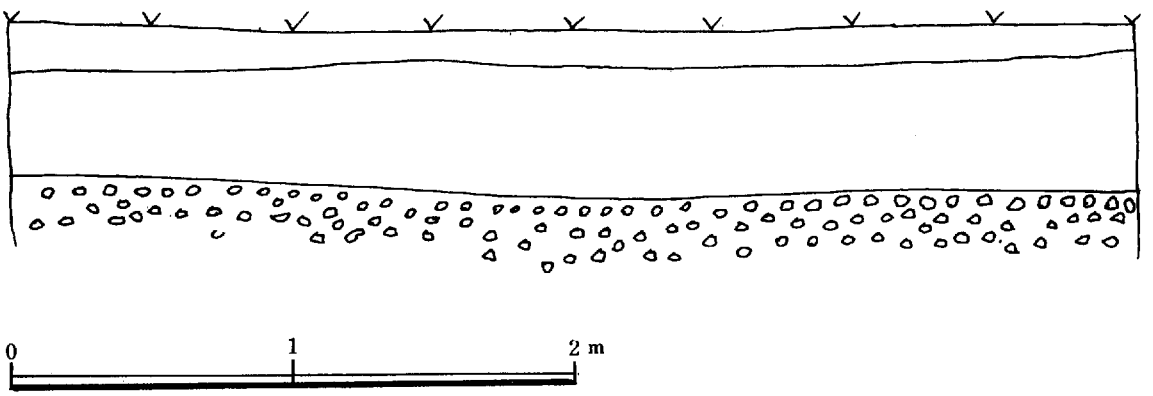
注（1）「南方遺跡発掘調査概報」岡山市教育委員会　1971年

高島新屋敷調査区

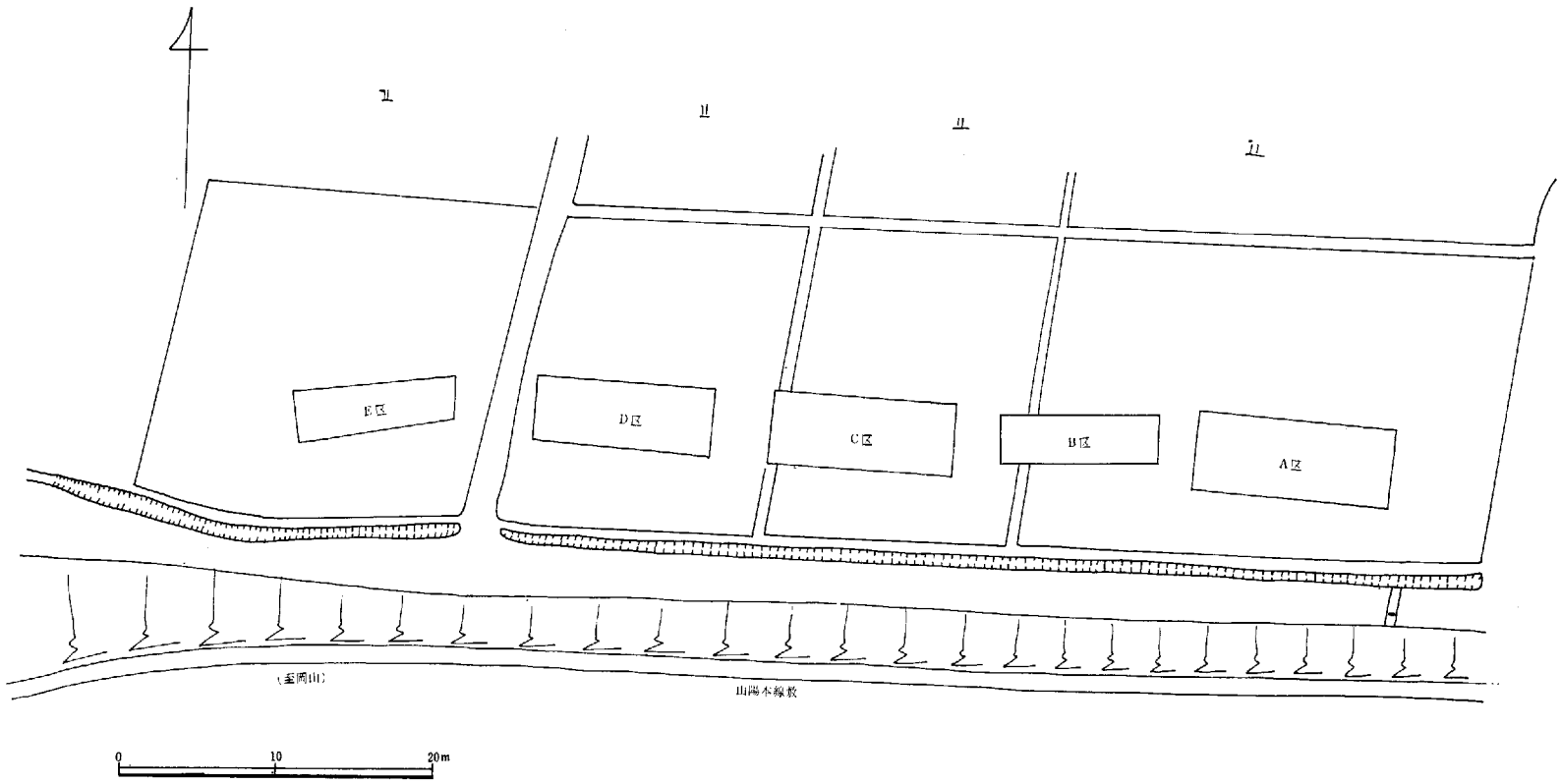
高島新屋敷調査区

岡山市高島新屋敷（たかしましんやしき）に所在する沖積地の弥生遺跡と想定された地点で，調査対象面積は約300㎡におよぶ。かつて上東式土器などを採集した地点であるにもかかわらず，何らの遺構も検出しえなかった。発掘調査は昭和43年8月後半の約2週間をついやし，新幹線のセンターと平行して幅約6m，長さ約10mのトレンチを計5本掘削することによって，土壌構造を看取する作業により，遺跡の有無の検討をすすめた。およその土壌構造は，耕作土下約1mに達すと，こぶし大の礫につきあたり，その直下は激しい湧水層となっている。湧水量は，トレンチ間の畦畔をおし流すほどのいきおいを示した。このことは，この地域が旭川の旧河道にあたり，いまなお伏流水路として生きていることを示している。礫層の上層は，数十cmの黄褐色粗砂層または細砂層が堆積している。このような層序の中には，安定した粘土質の微高地を認めることはできず，したがって，かつて形成され自然堤防およびその上にのる遺構などをいっさい認めることができなかった。この調査区から東方へ約300m離れた新幹線の敷地部分においても，水道管埋設工事が行なわれたが，上記とほぼ同様の土壌構造を認めることができた。

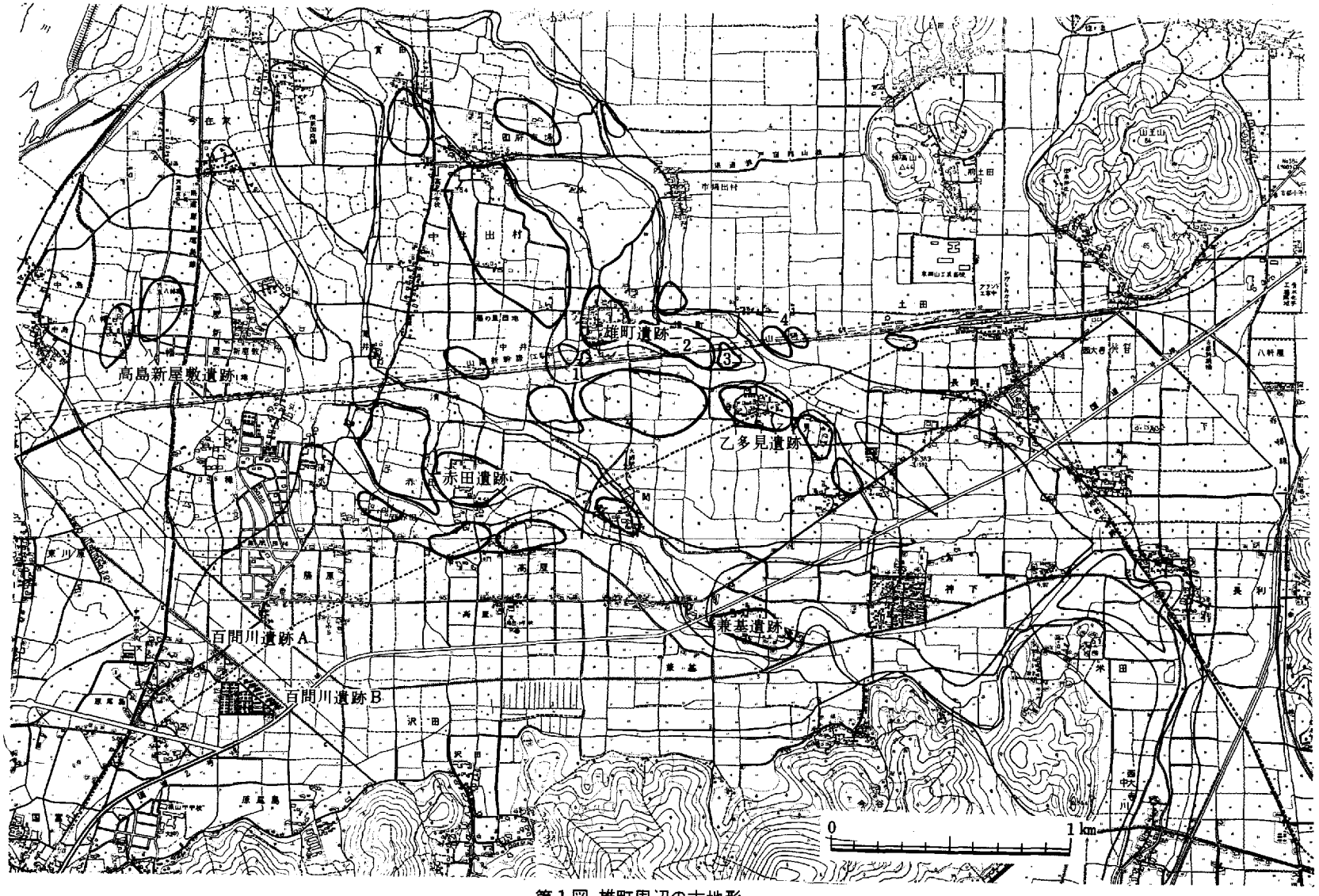
以上の調査結果に基づき周辺の地形を検討するならば，調査区の北方約500mの八幡神社境内あたりが若干高いので，弥生時代の集落址があるとすれば，その付近ではないかと思われる。　（河本，葛原）



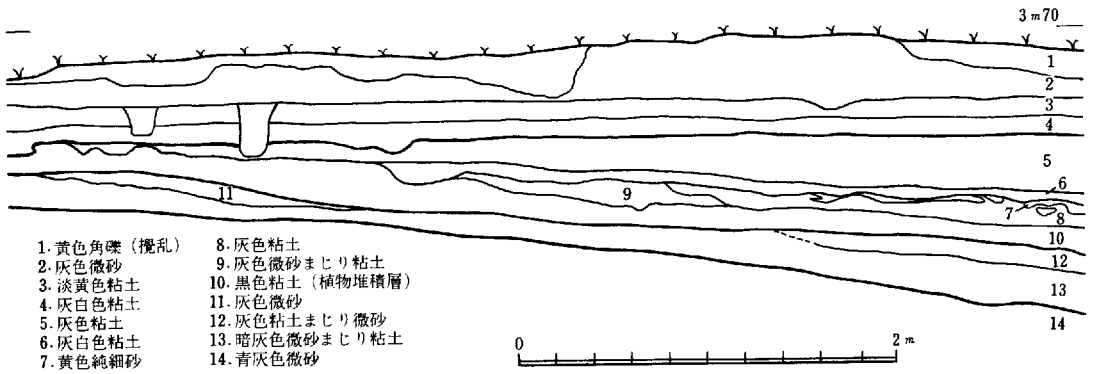
挿図1　D区北壁土層断面図



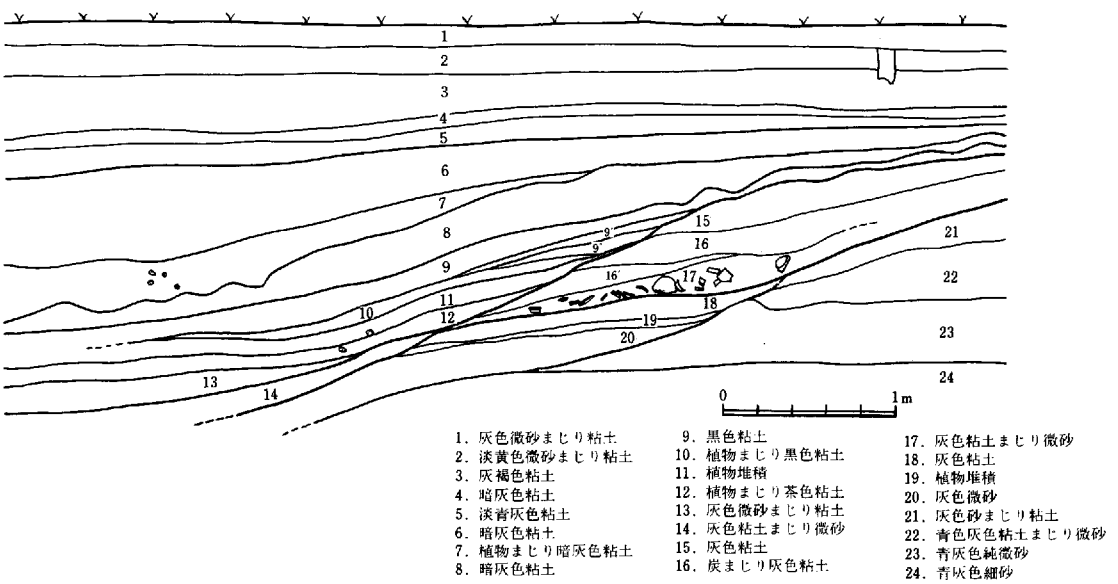
挿図 2　高　島　新　屋　敷　平　面　図



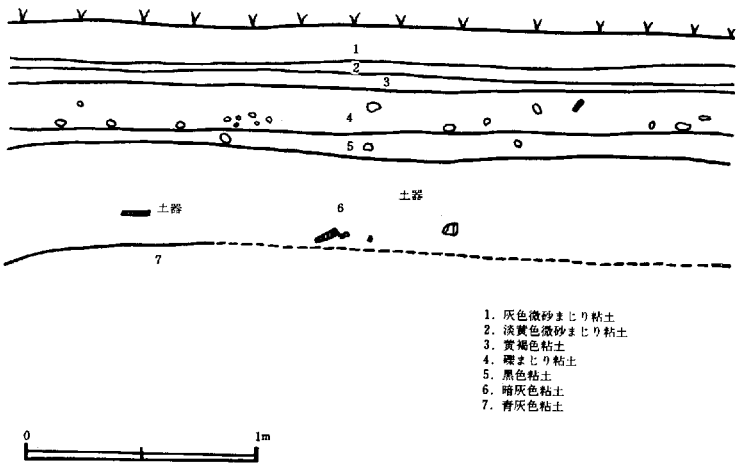
第1図 雄町周辺の古地形



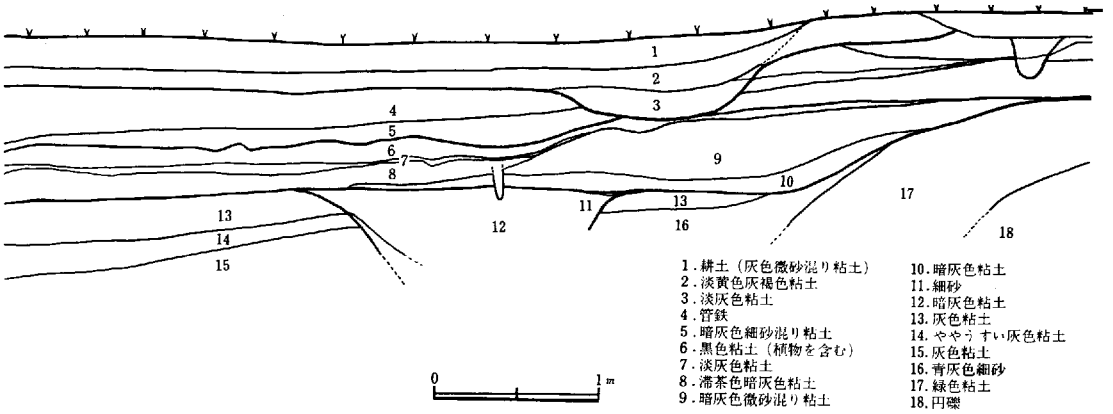
第２図１　第１調査区Ｂ地区東西土層断面図



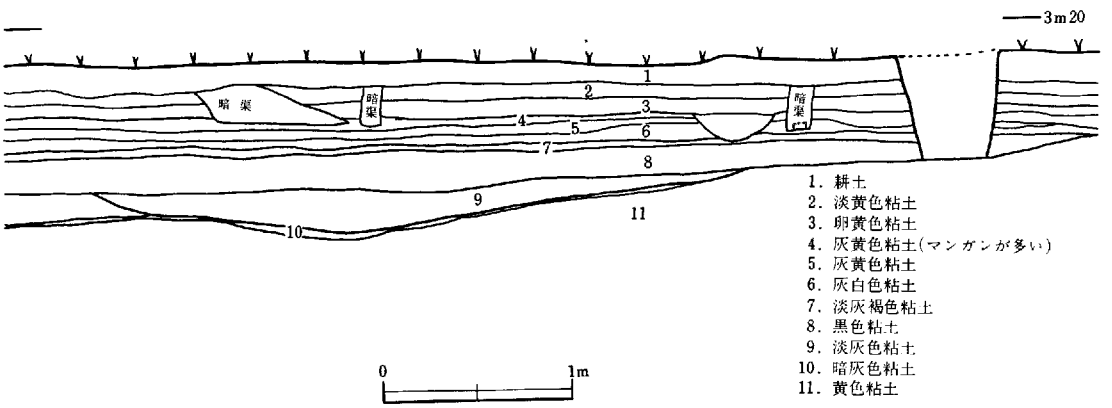
第２図２　第２調査区南北土層断面図



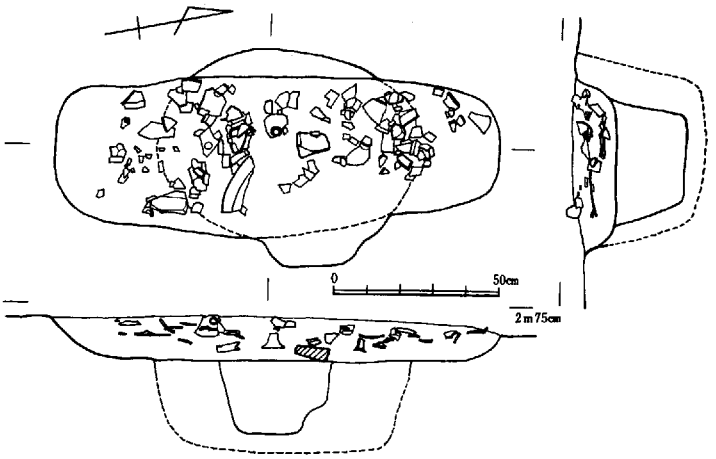
第３図１　第２調査区　No.16～17土層断面図



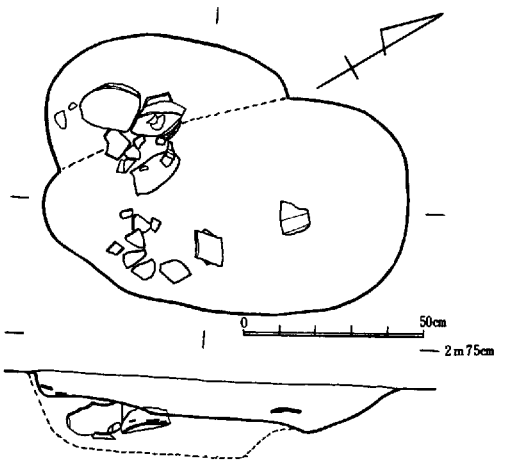
第３図２　第２調査区南北土層断面図



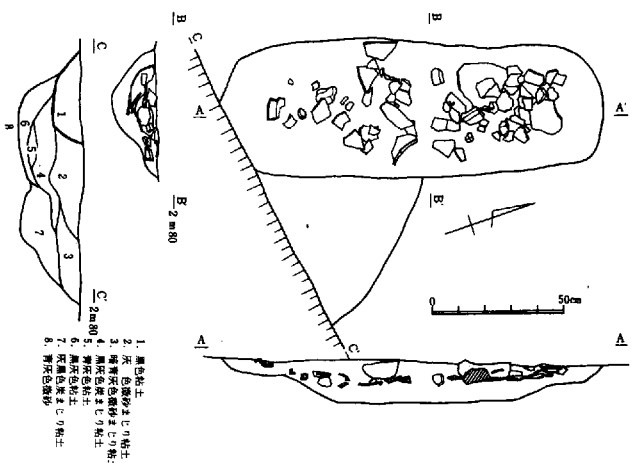
第３図３　第４調査区南北土層断面図



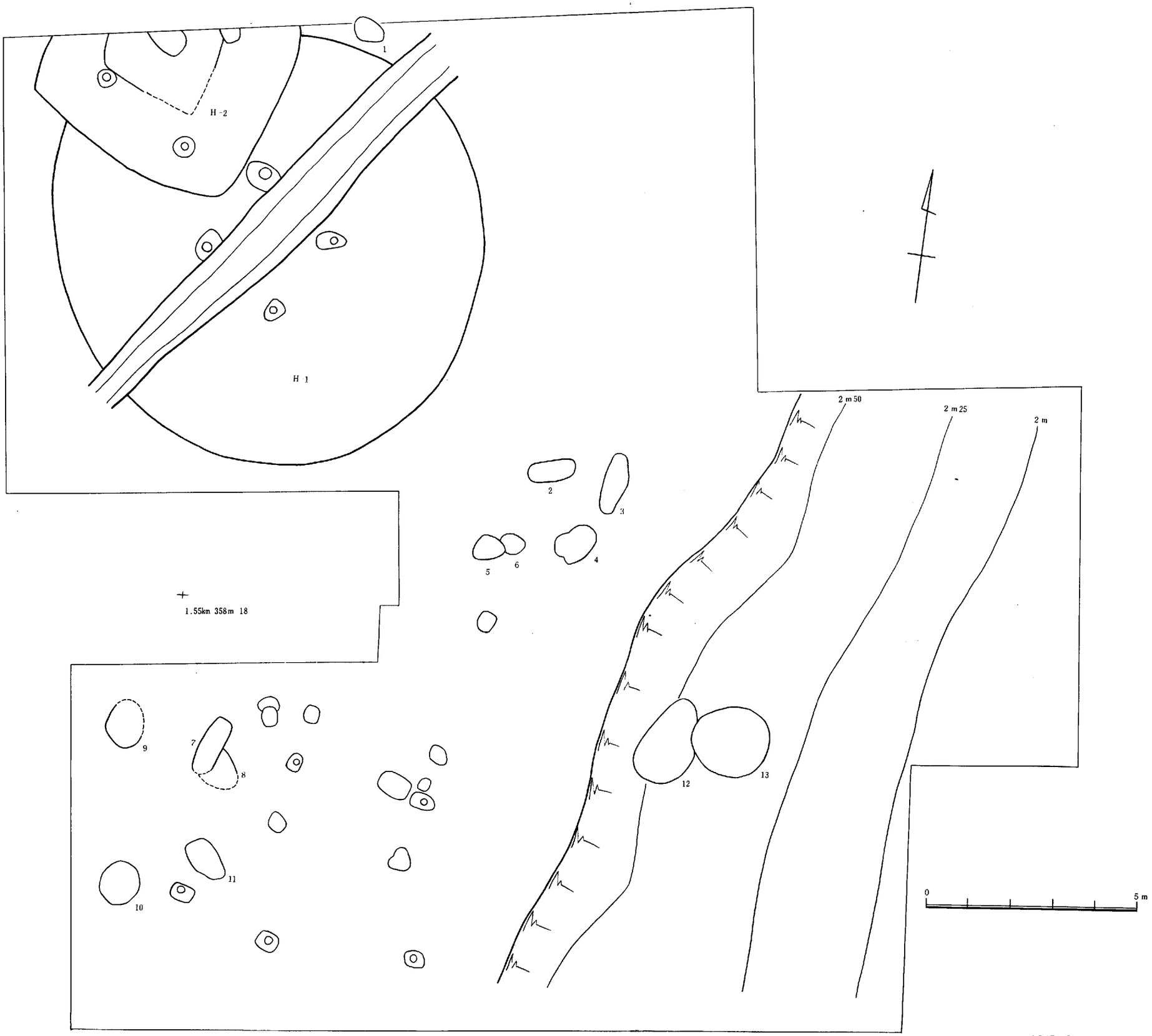
第６図１　第１調査区土坑３実測図



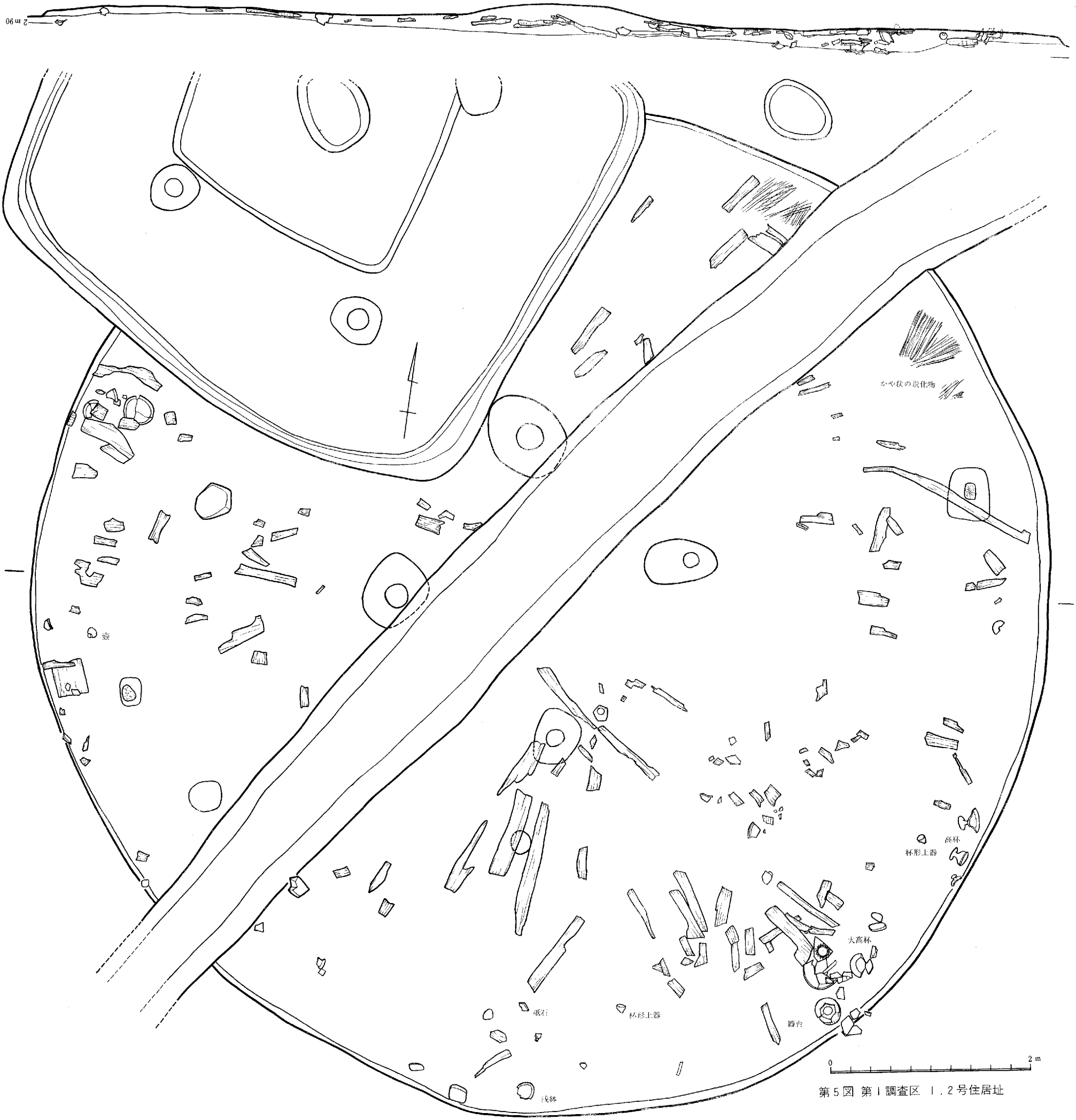
第６図２　第１調査区土坑４実測図



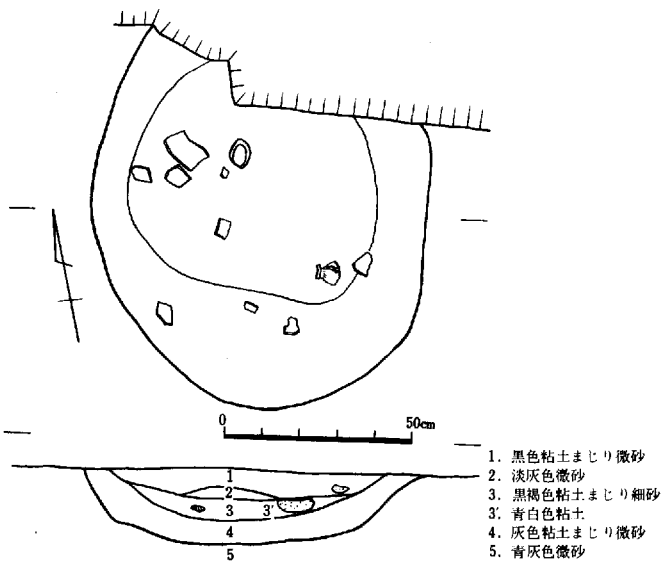
第６図３　第１調査区土坑７，８実測図



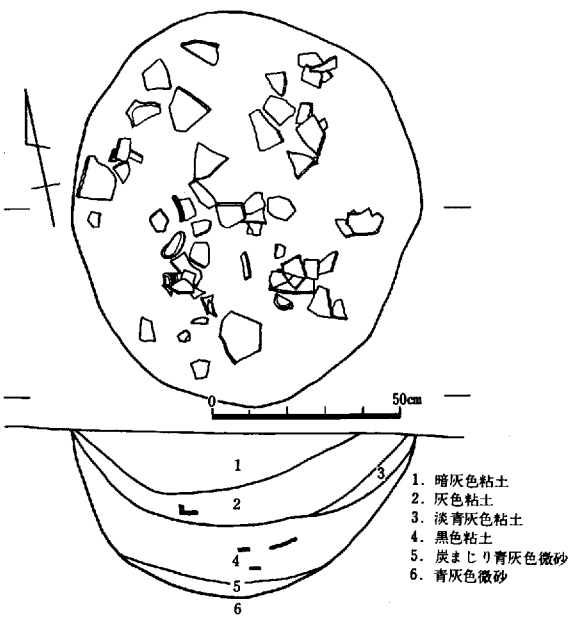
第4図 第Ⅰ調査区 B区平面図



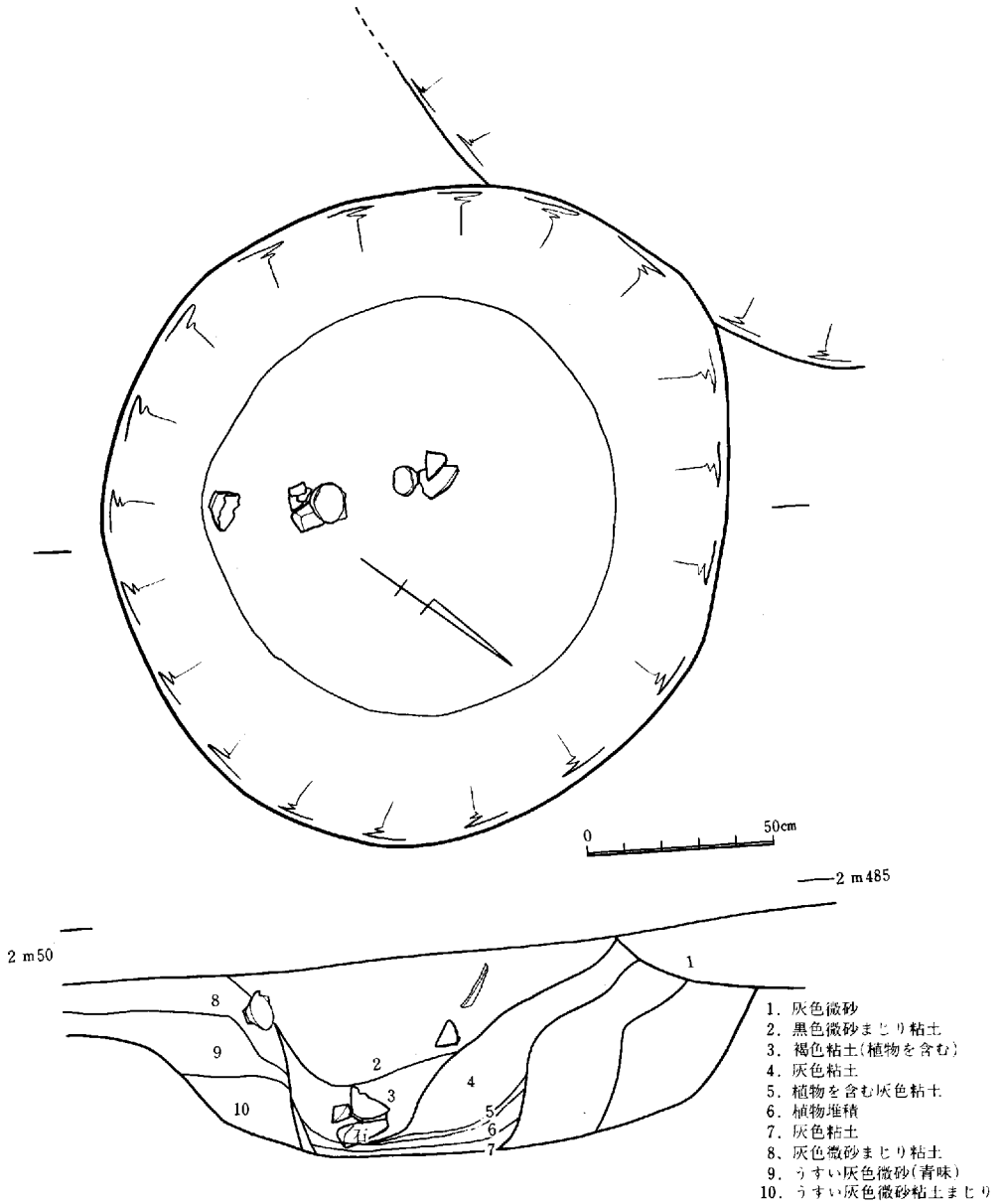
第5図 第Ⅰ調査区 1．2号住居址



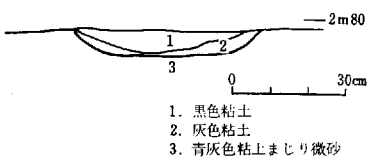
第７図1　第１調査区土坑９実測図



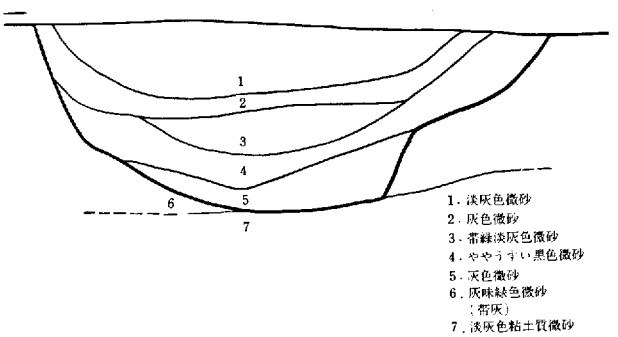
第７図２　第１調査区土坑10実測図



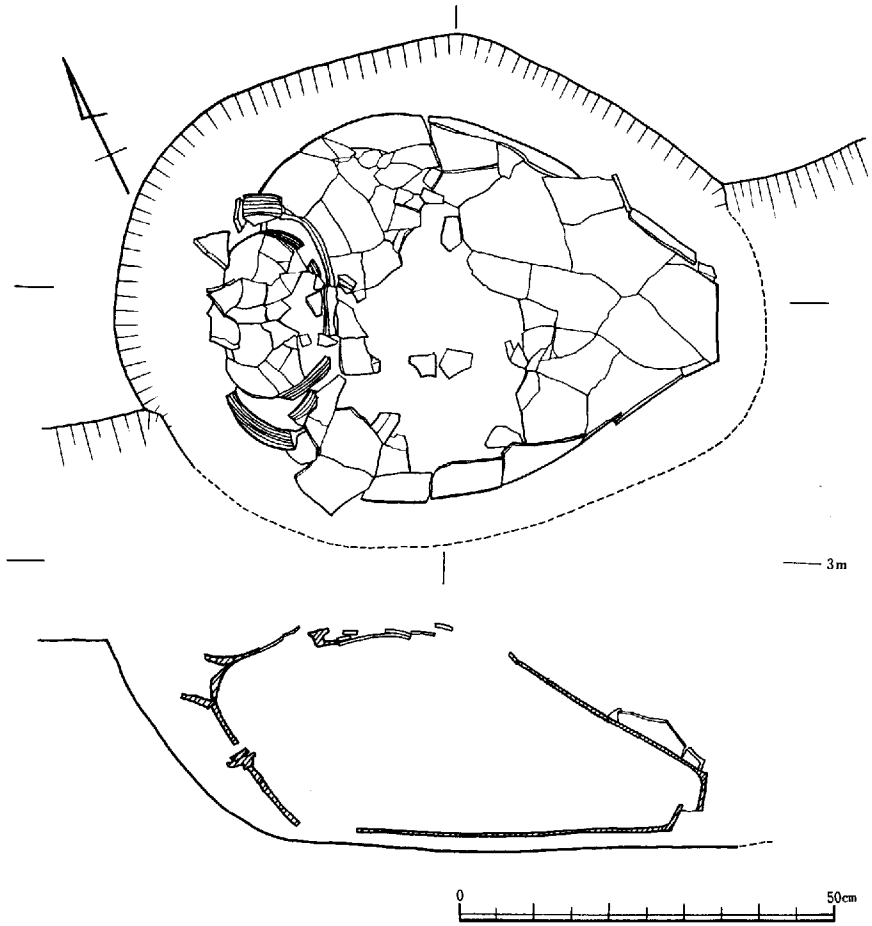
第8図1　第1調査区土坑13実測図



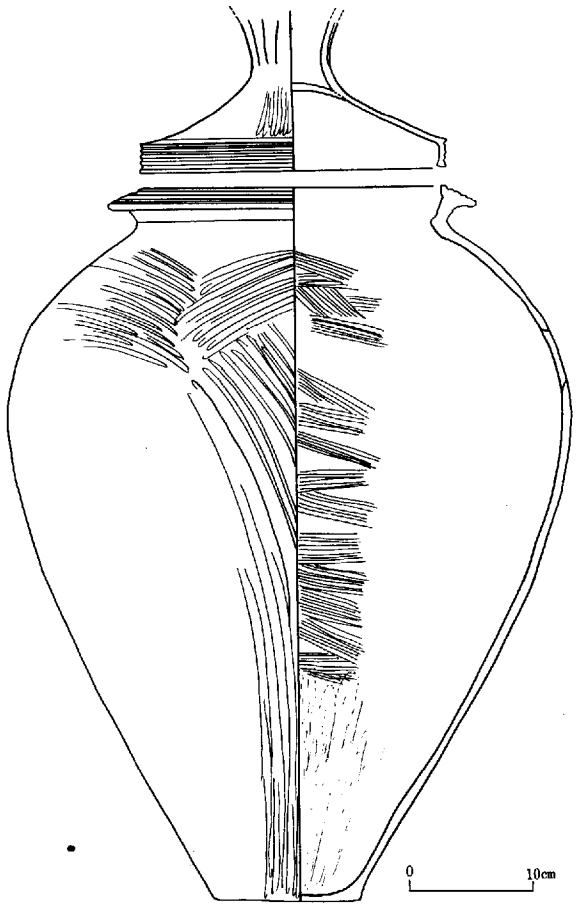
第8図2　溝1断面図



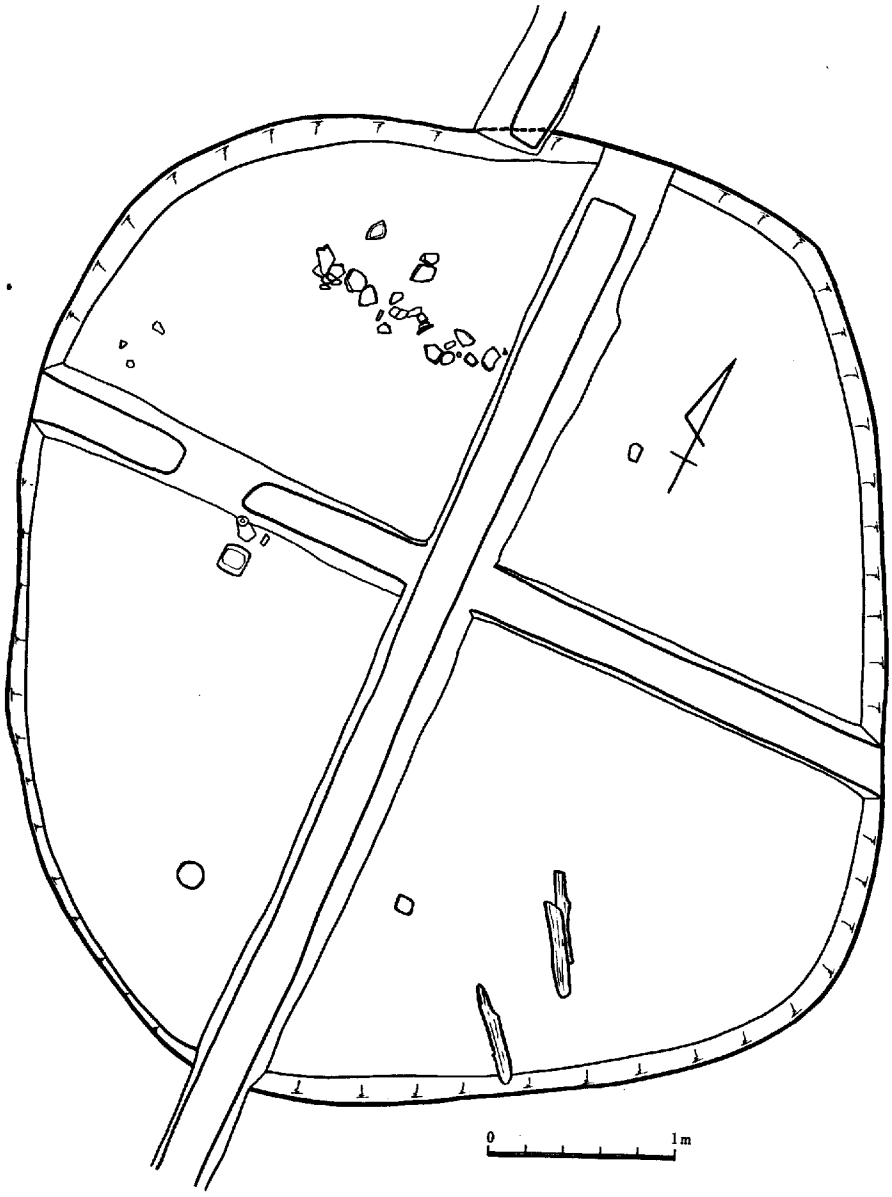
第8図3　溝2断面図



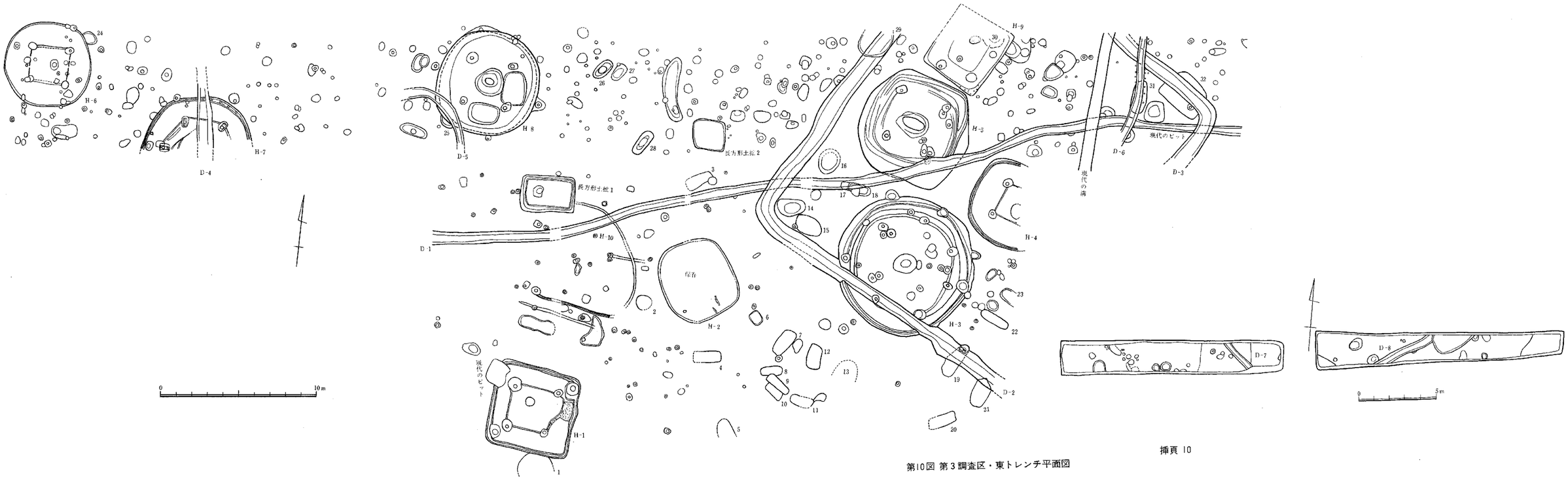
第９図１　第１調査区甕棺出土状況実測図



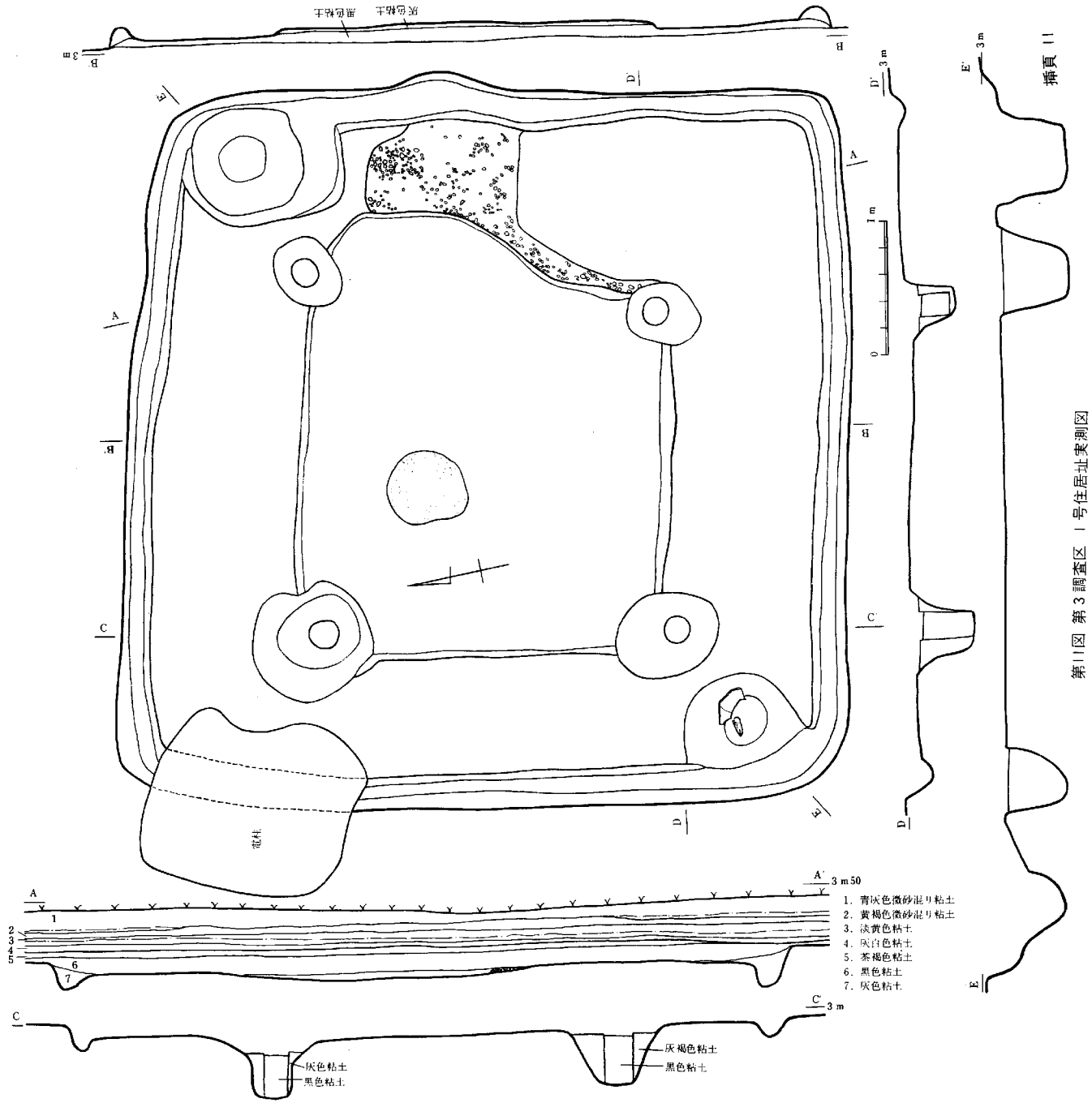
第９図２　第１調査区甕棺実測図



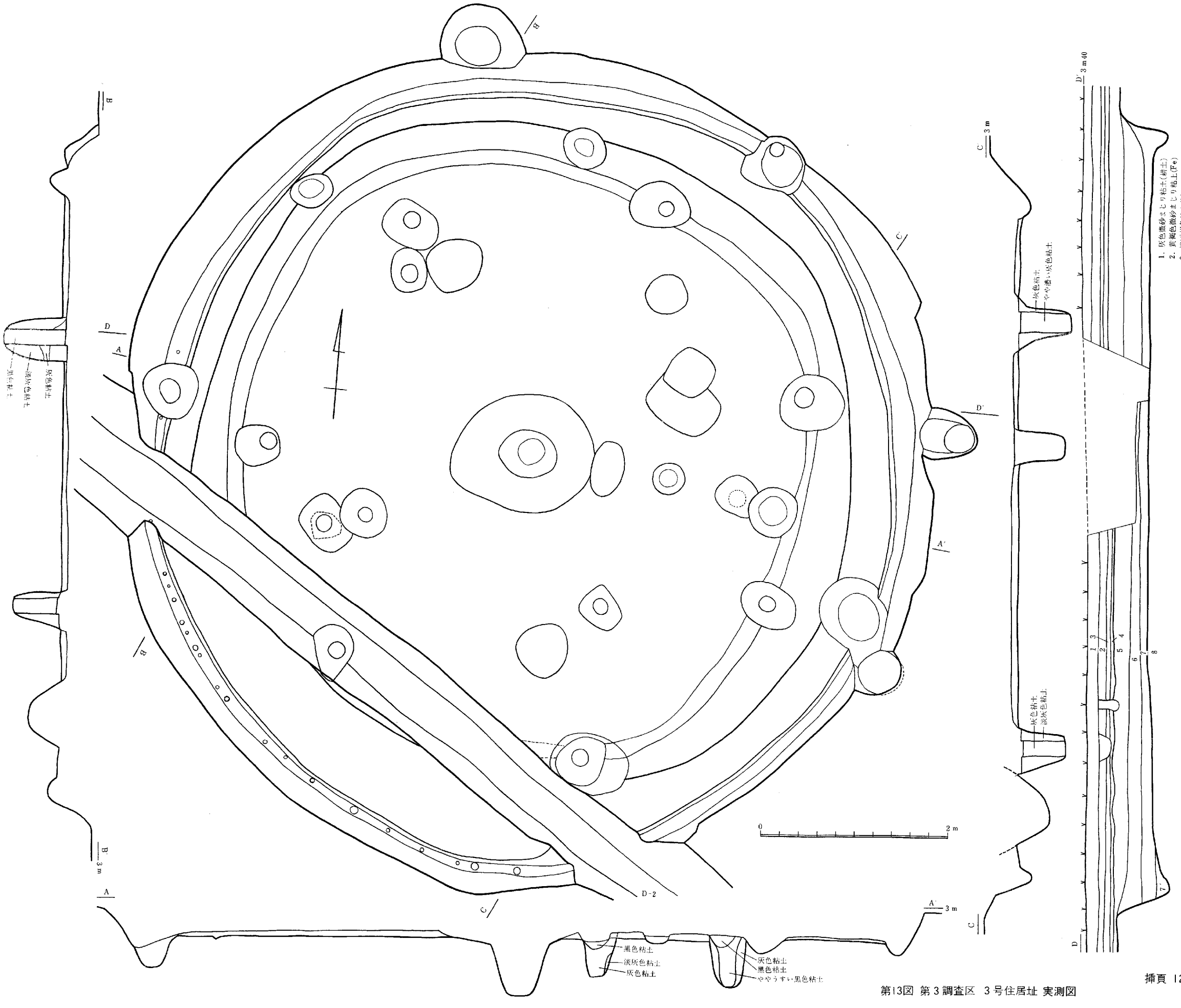
第12図 第３調査区２号住居址実測図（保存未調査）



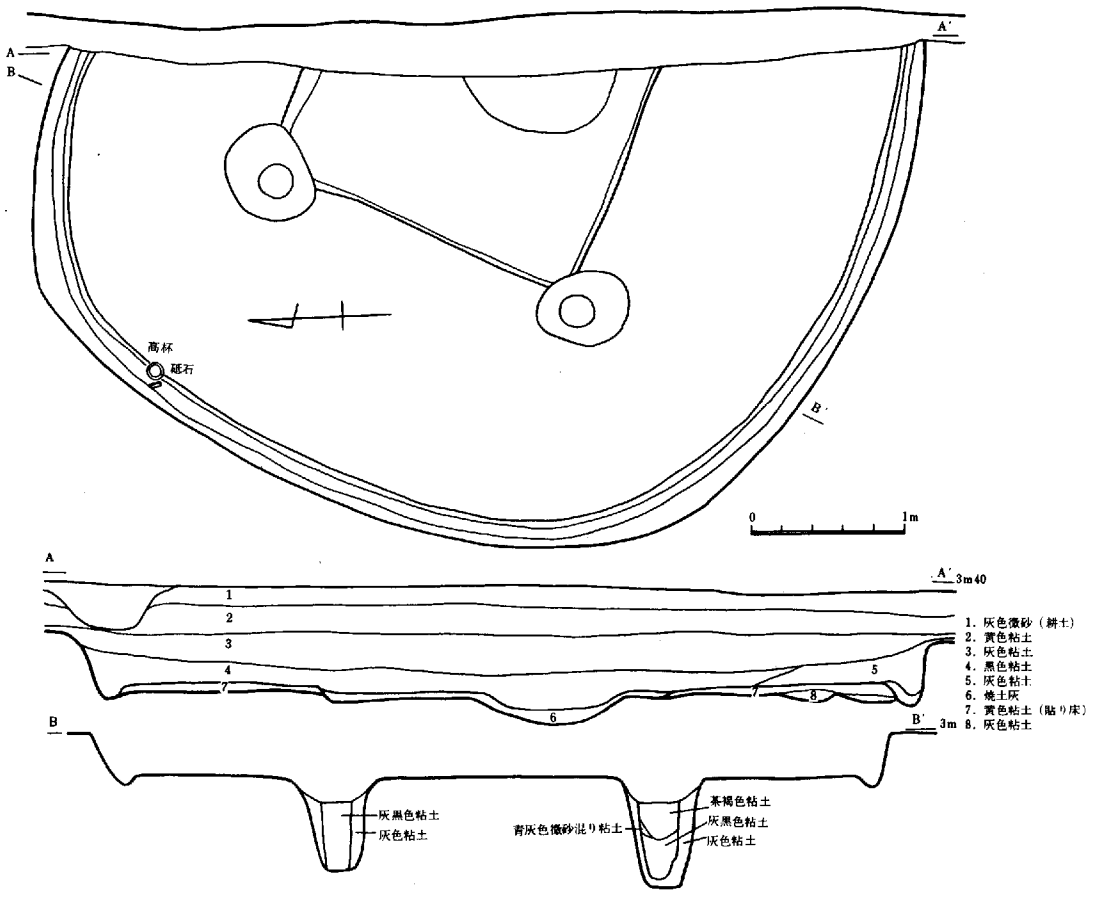
第10図 第3調査区・東トレンチ平面図



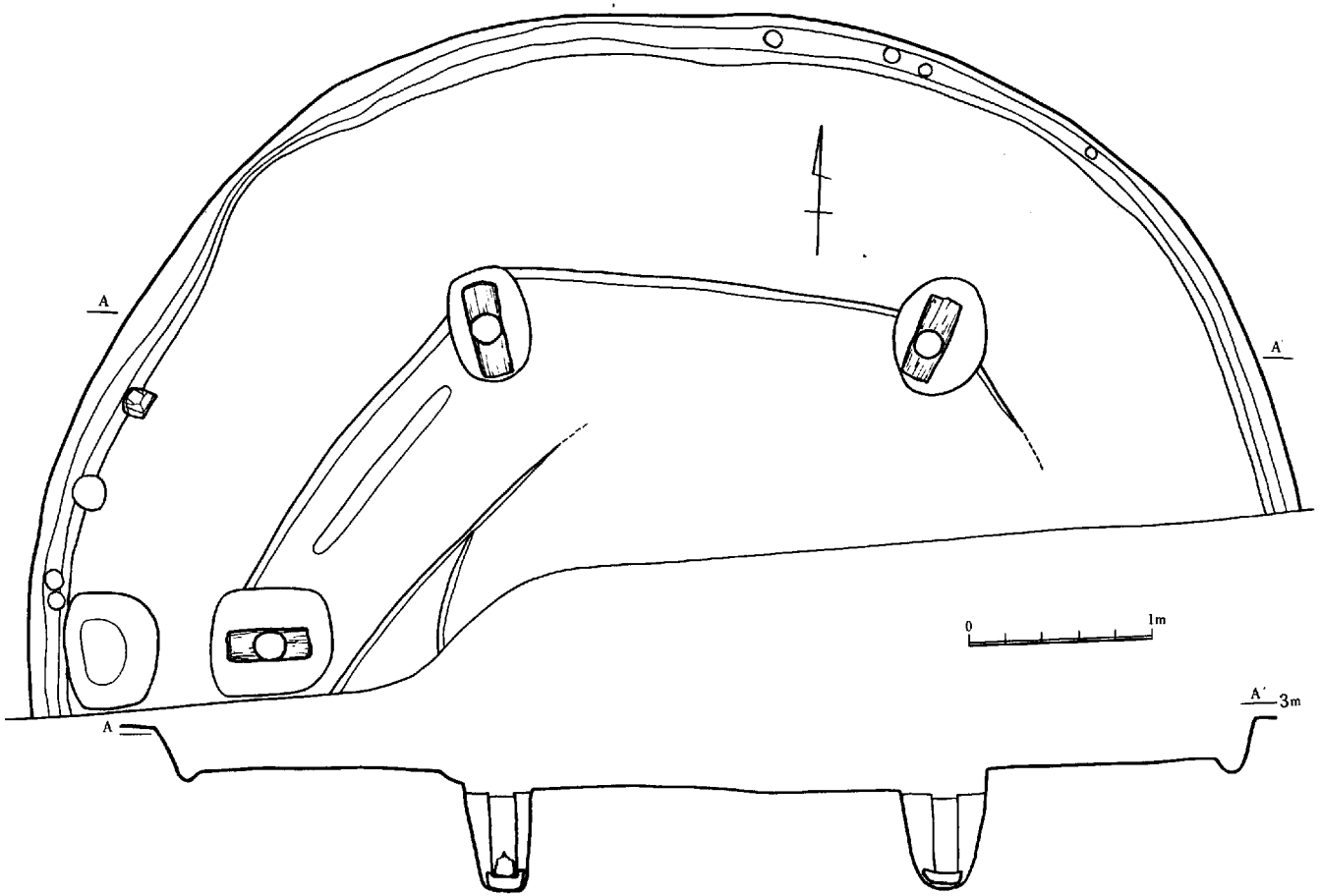
第11図 第3調査区 1号住居址実測図



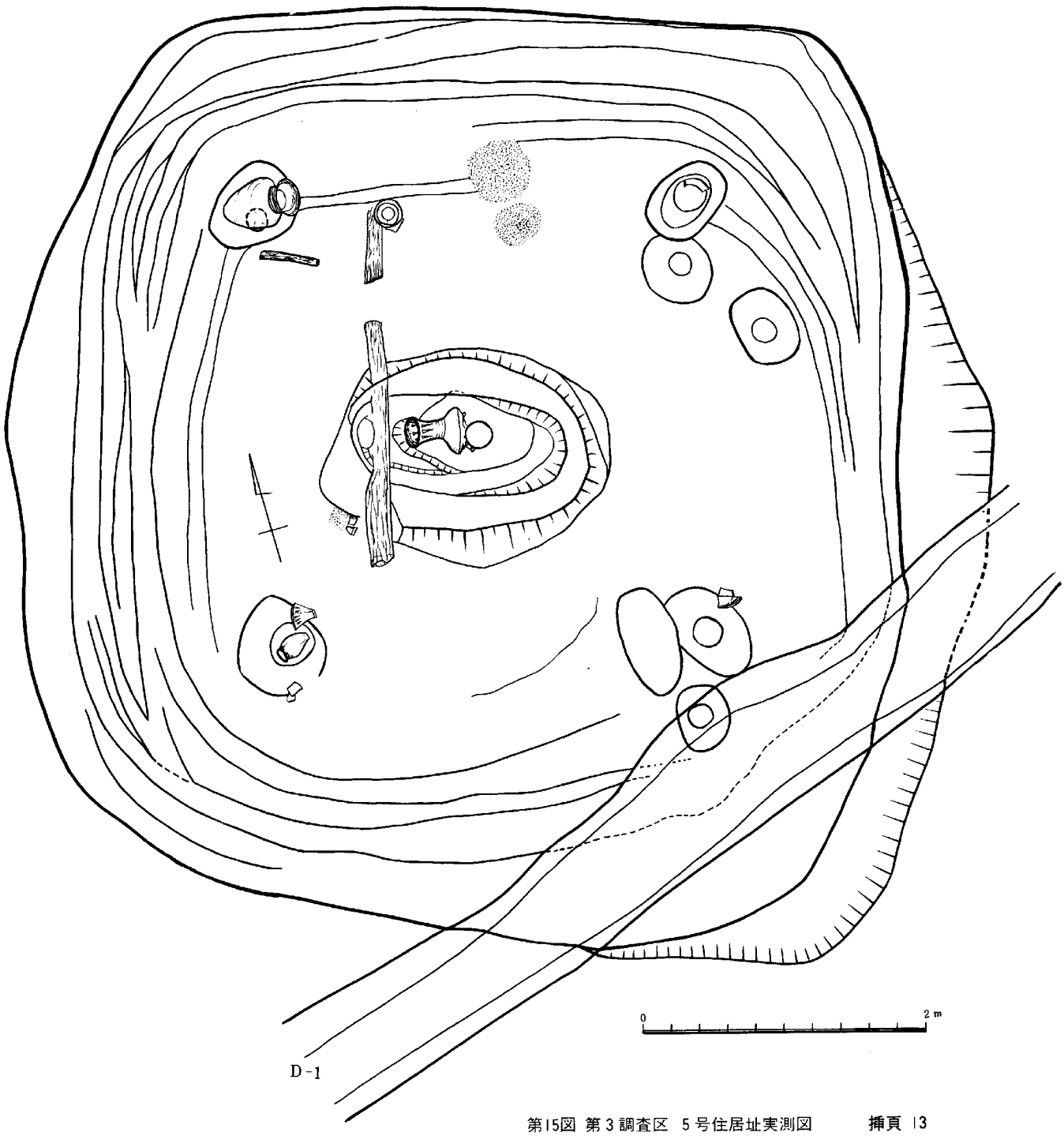
第13図 第3調査区 3号住居址 実測図



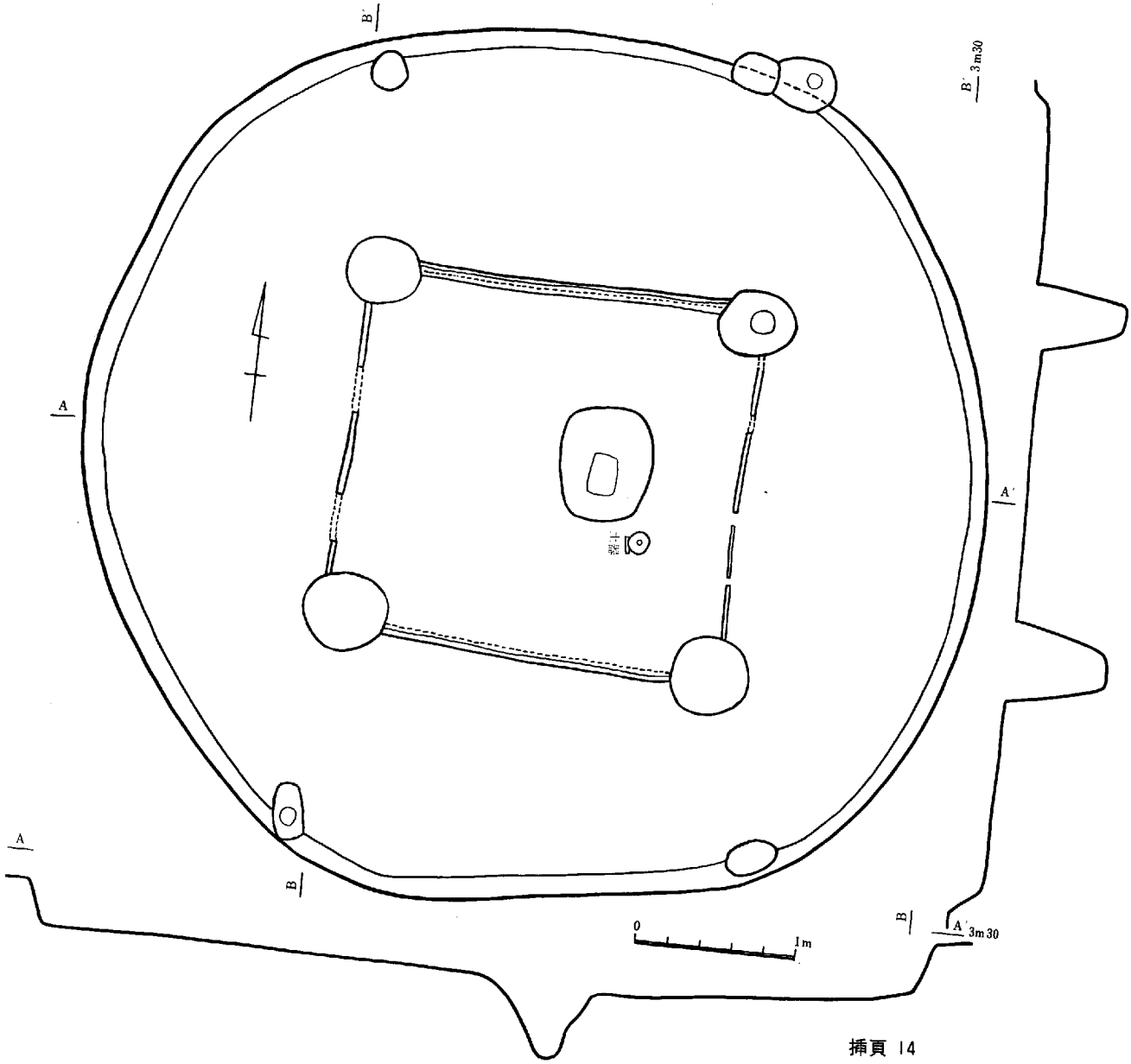
第14図 第３調査区４号住居址実測図



第17図 第３調査区７号住居址実測図

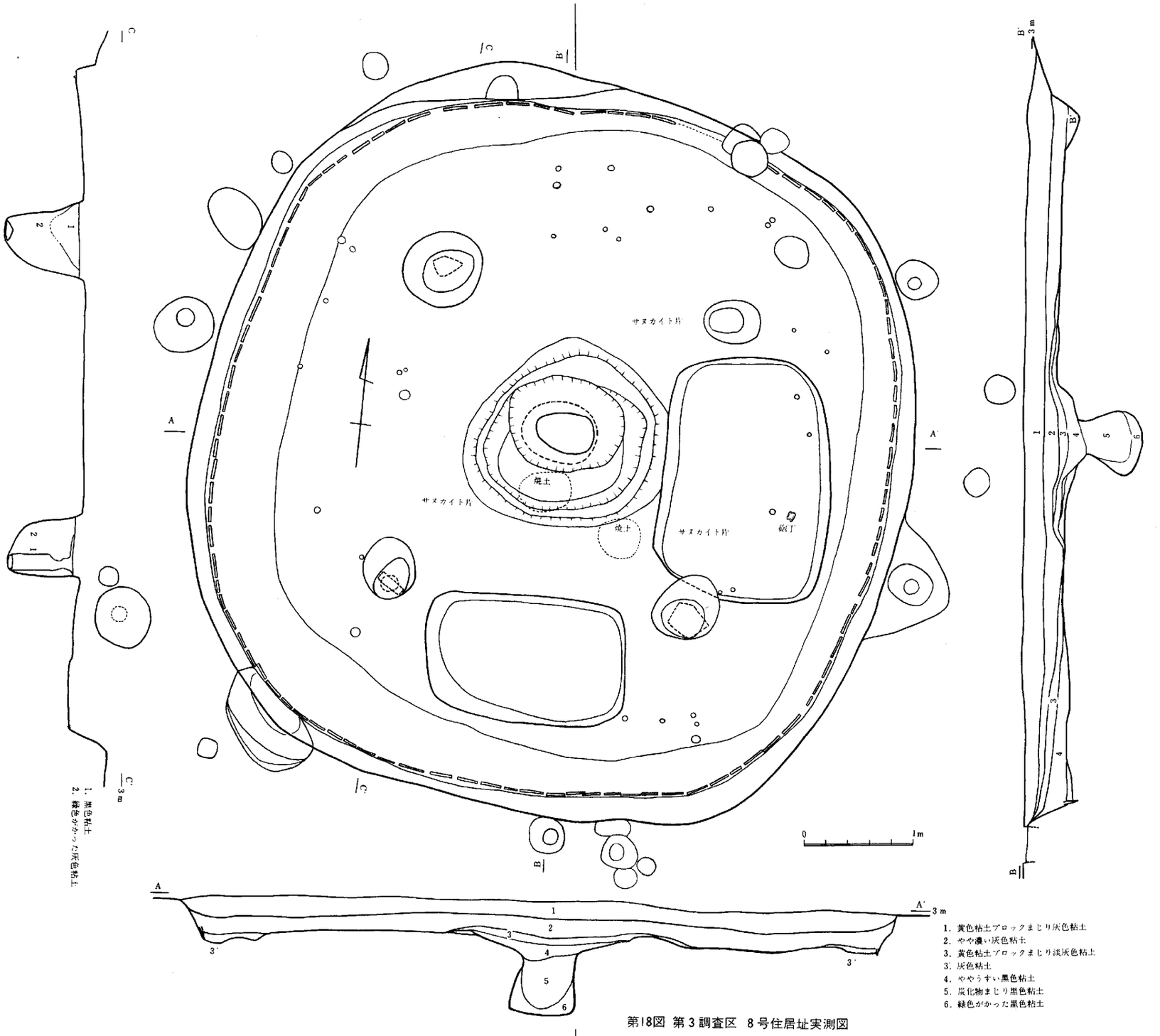


第15図 第3調査区 5号住居址実測図　　挿頁 13

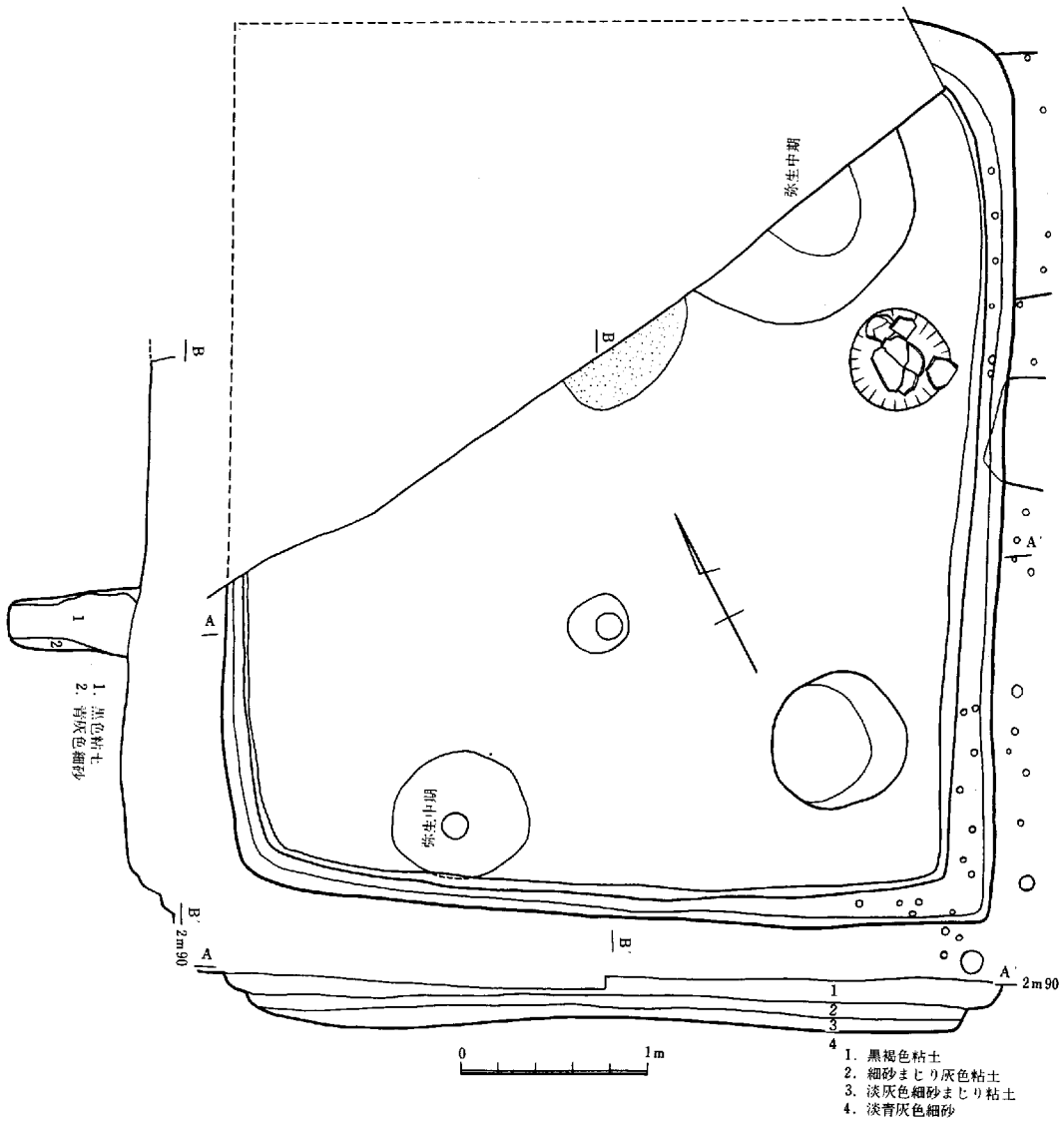


挿頁 14

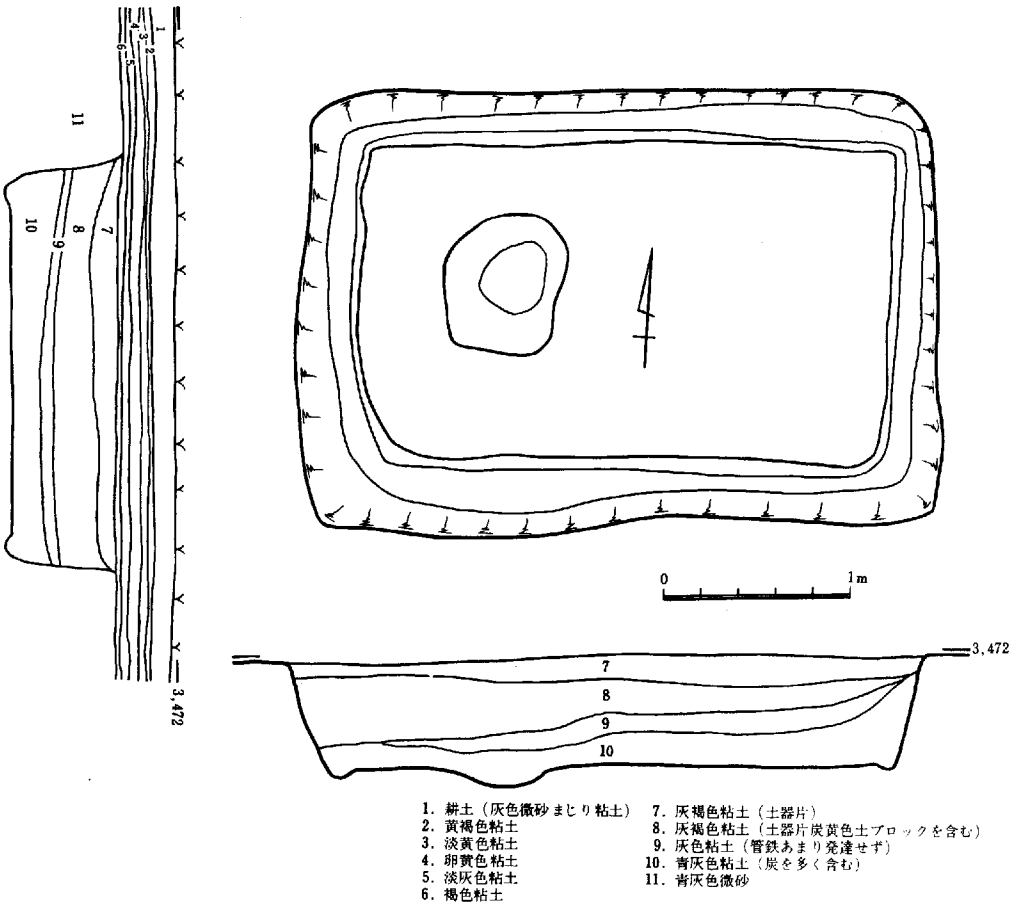
第16図 第3調査区 6号住居址実測図



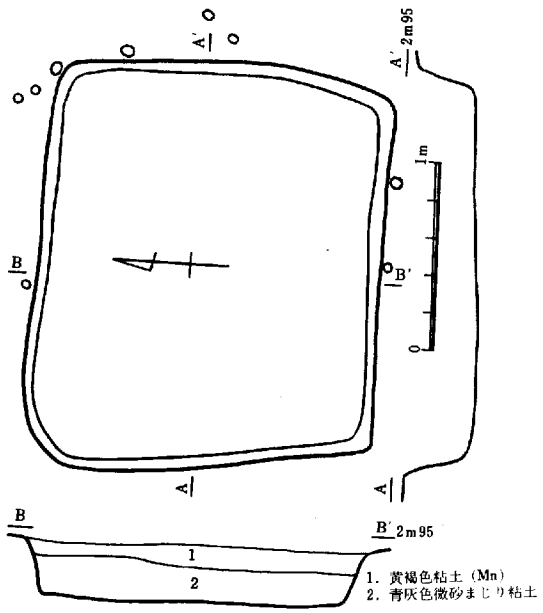
第18図 第3調査区 8号住居址実測図



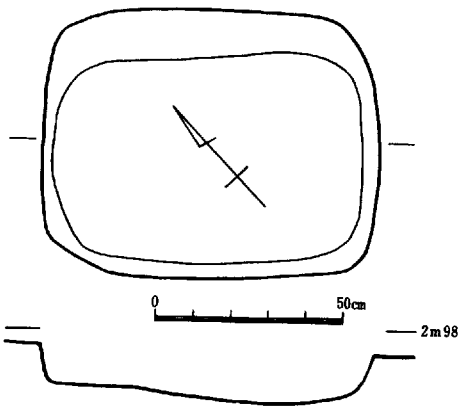
第19図 第３調査区９号住居址実測図



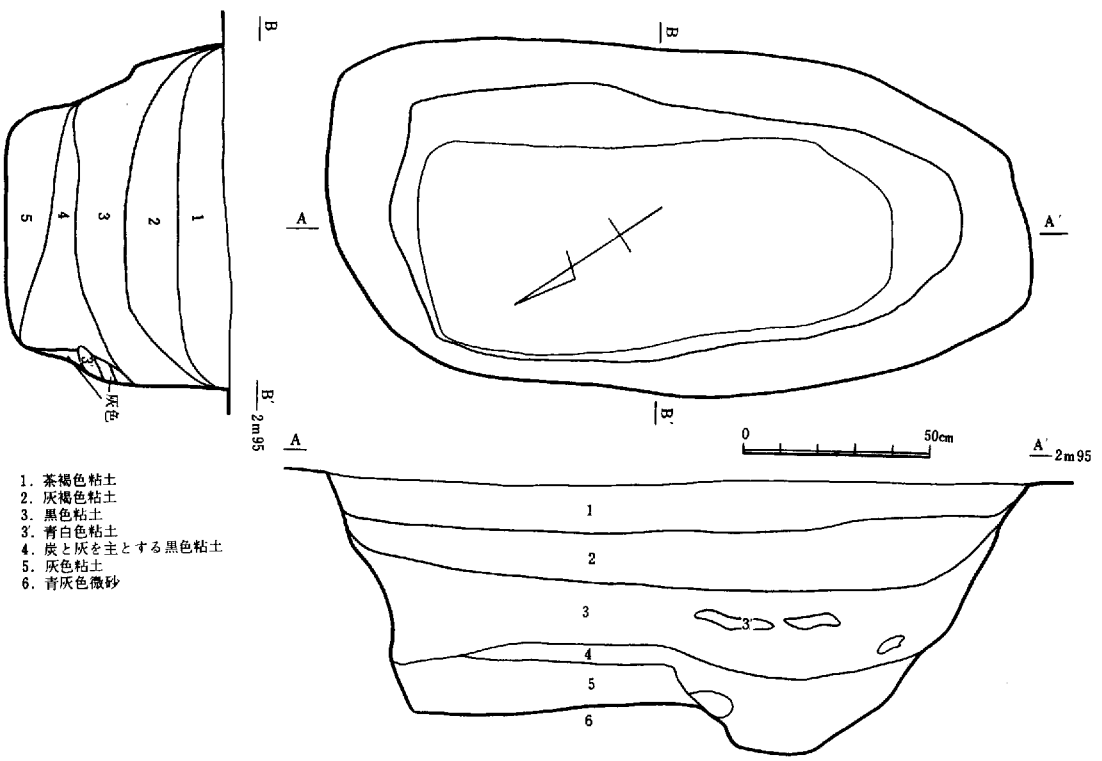
第20図1　第3調査区長方形土坑1実測図



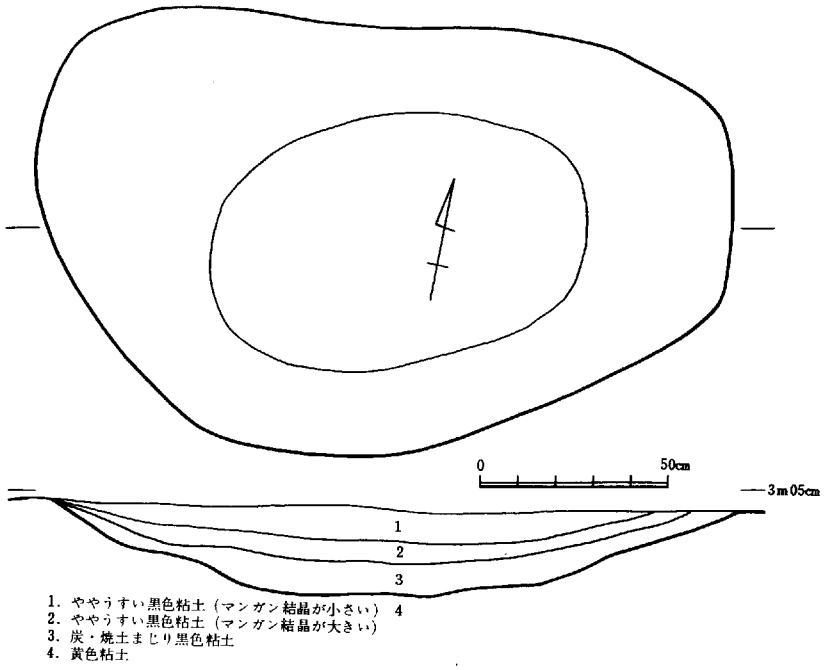
第20図2　第3調査区長方形土坑2実測図



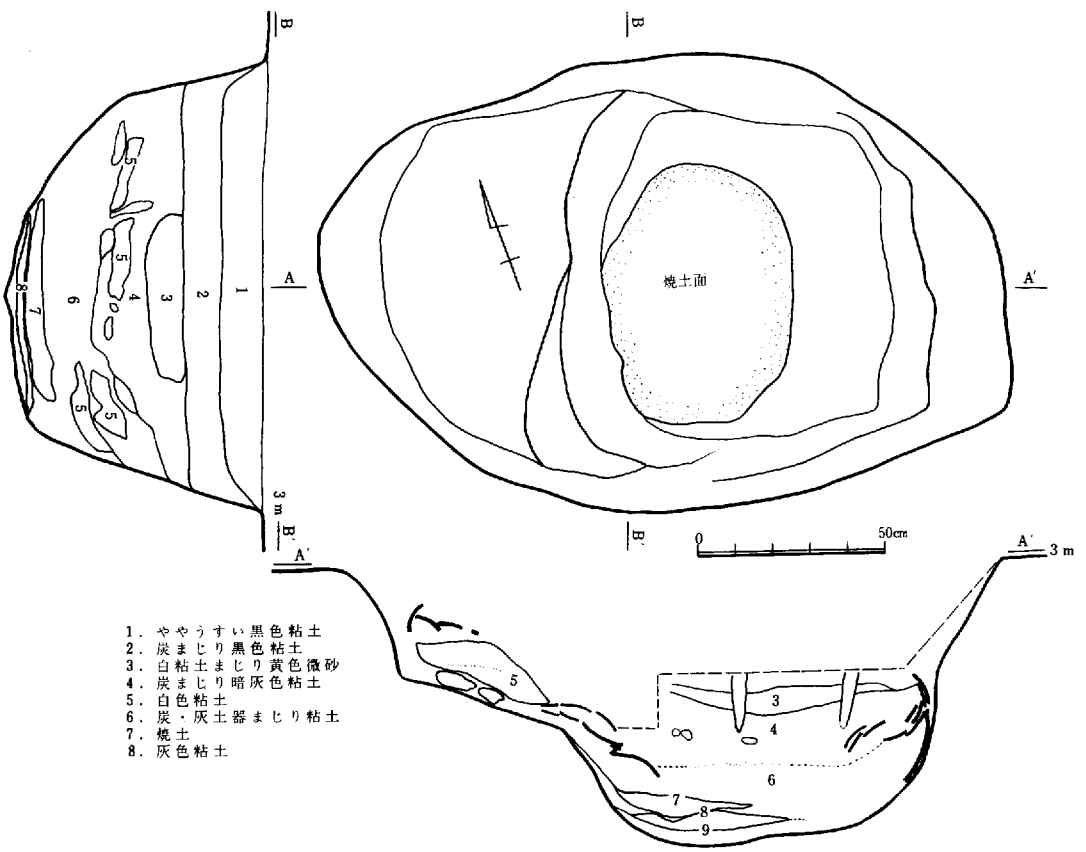
第21図1　第3調査区土坑6実測図



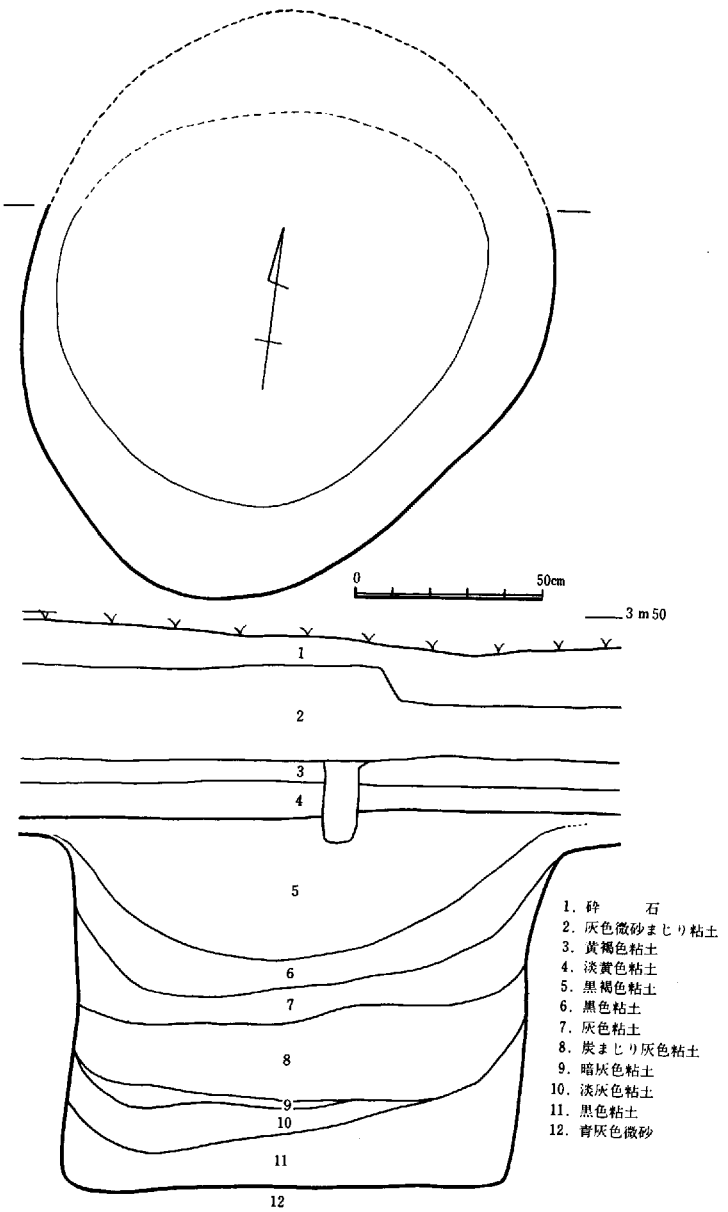
第21図2　第3調査区土坑7実測図



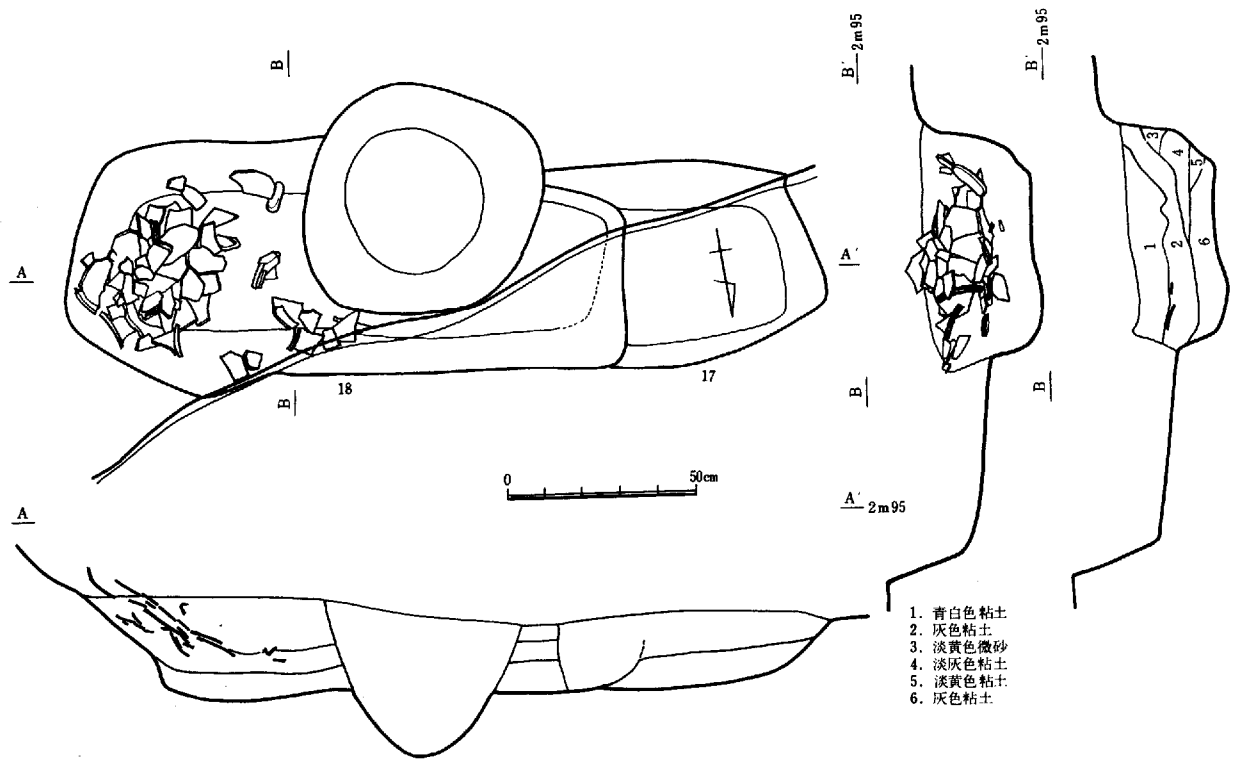
第22図1　第3調査区土坑14実測図



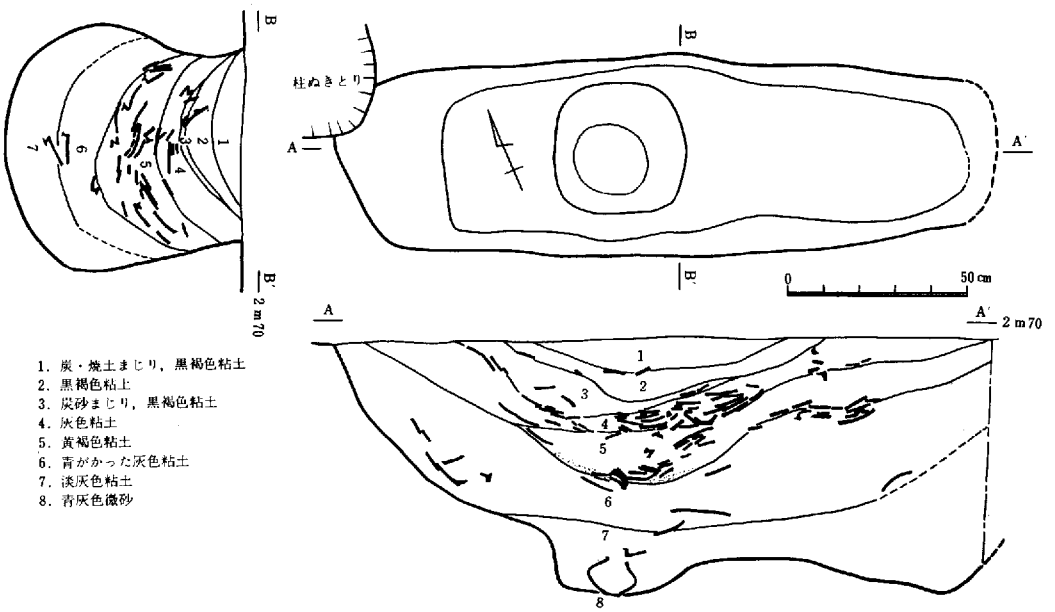
第22図2　第3調査区土坑15実測図



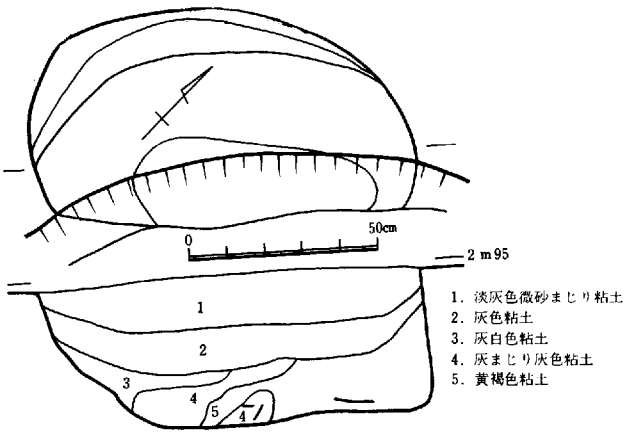
第23図 第３調査区土坑16実測図



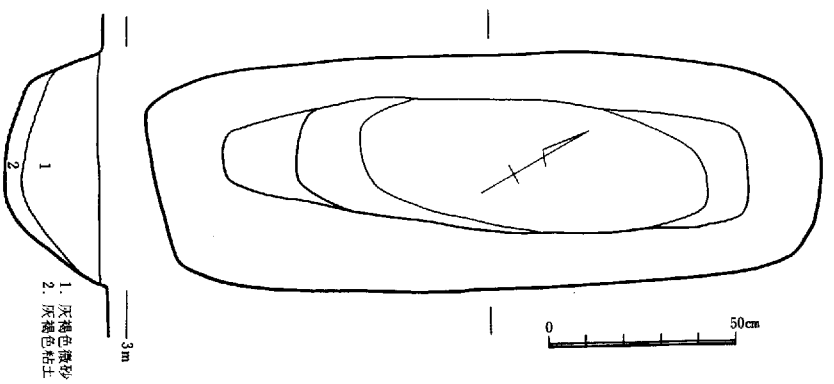
第24図 第3調査区土坑17,18実測図



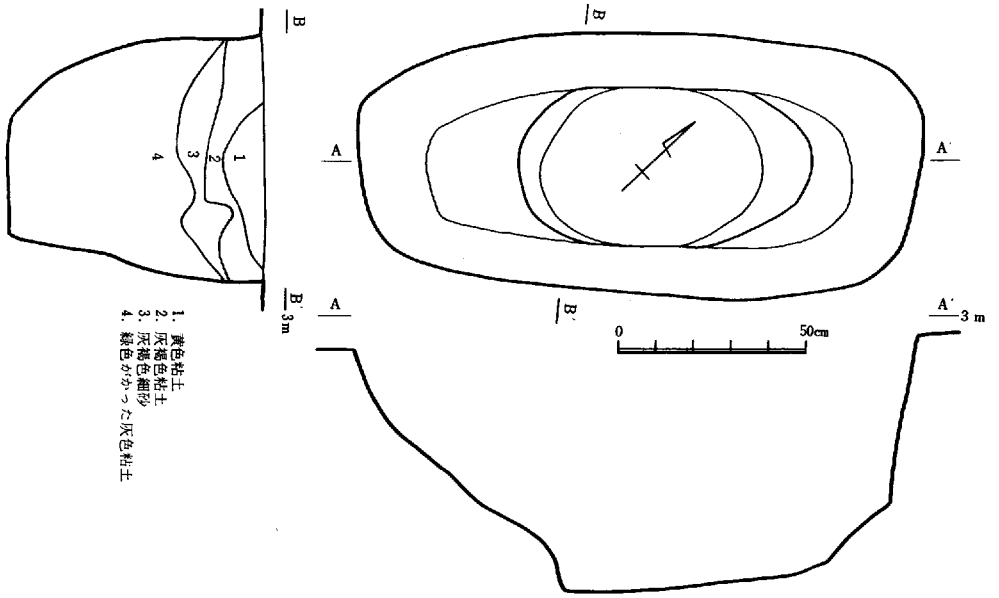
第25図1　第3調査区土坑22実測図



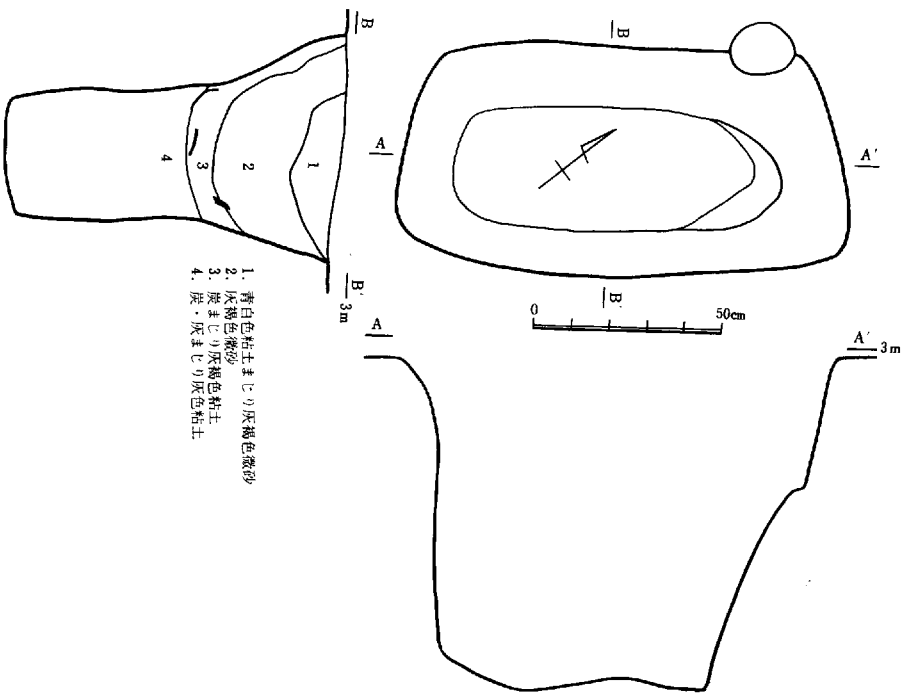
第25図2　第3調査区土坑25実測図



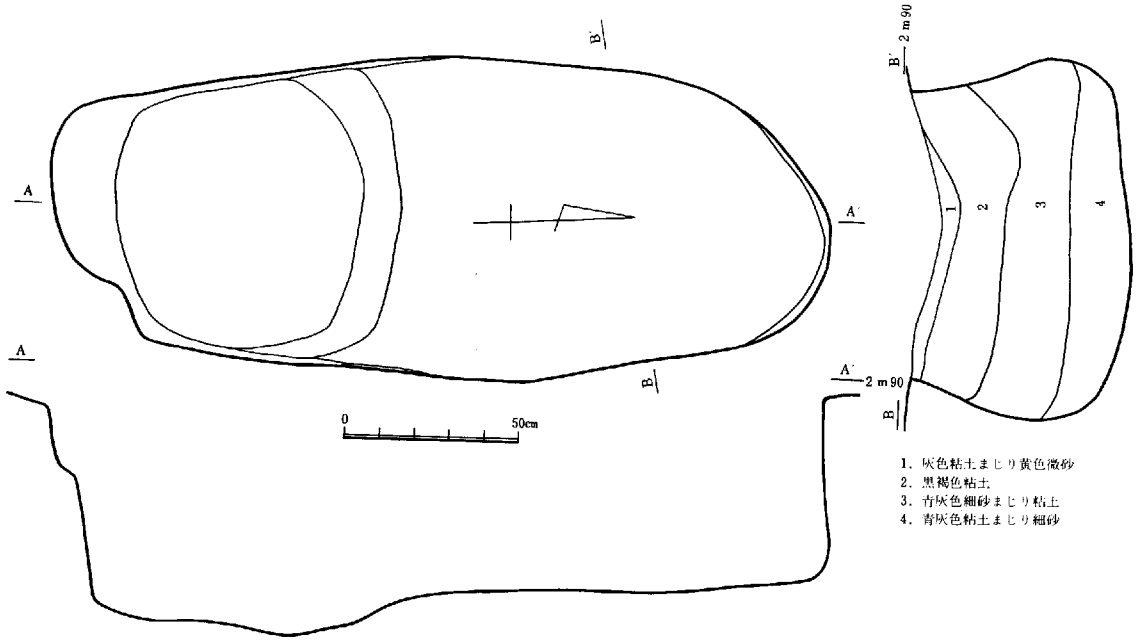
第25図3　第3調査区土坑28実測図



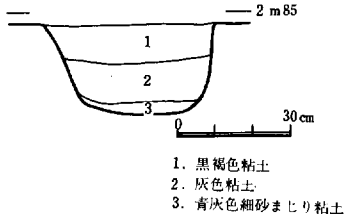
第26図1　第3調査区土坑26実測図



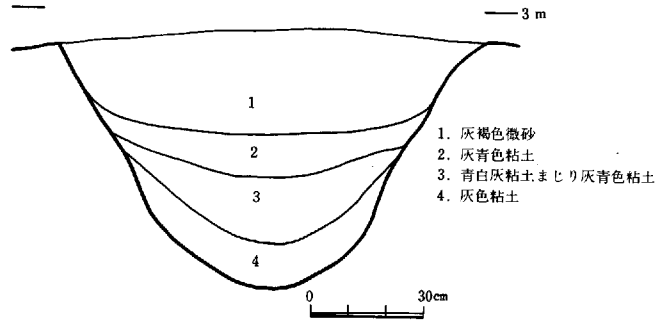
第26図2　第3調査区土坑27実測図



第27図1　第3調査区土坑31実測図



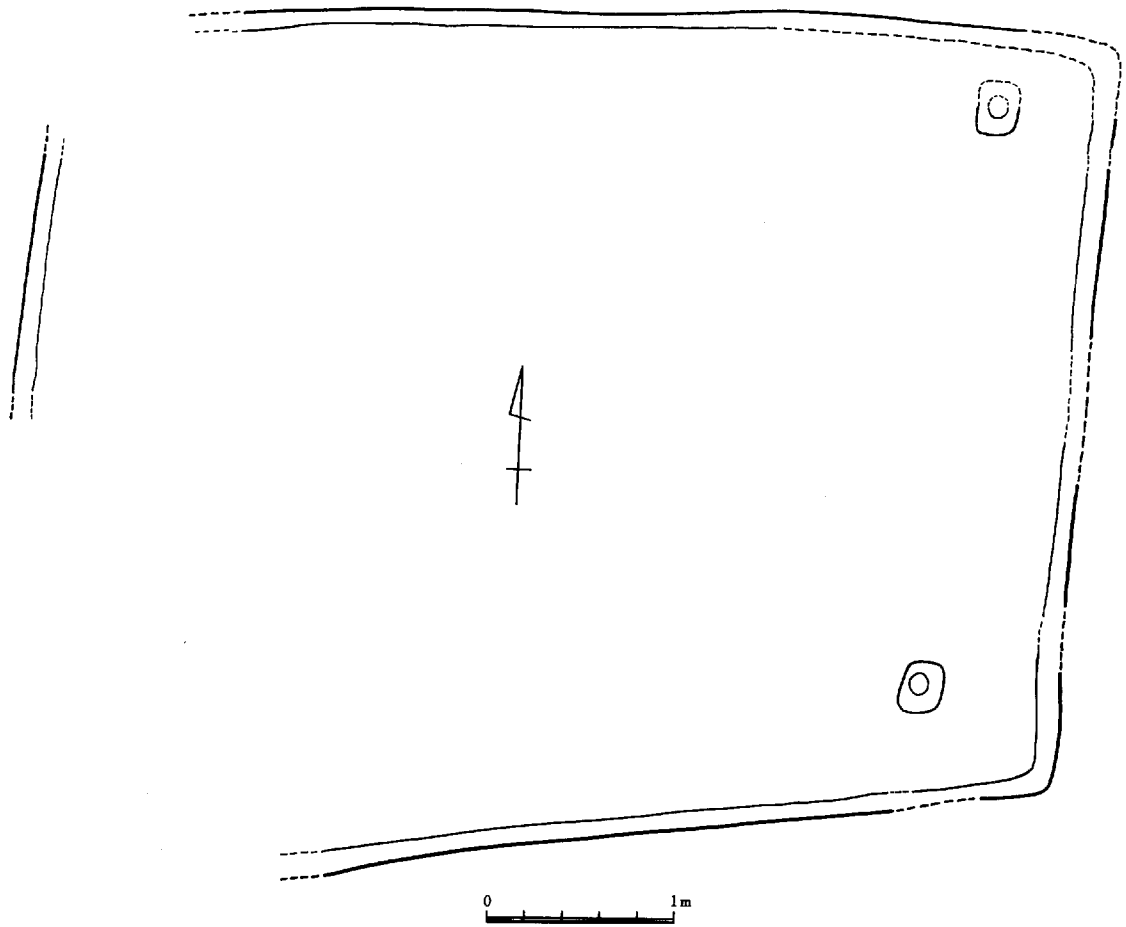
第27図2　溝1断面図



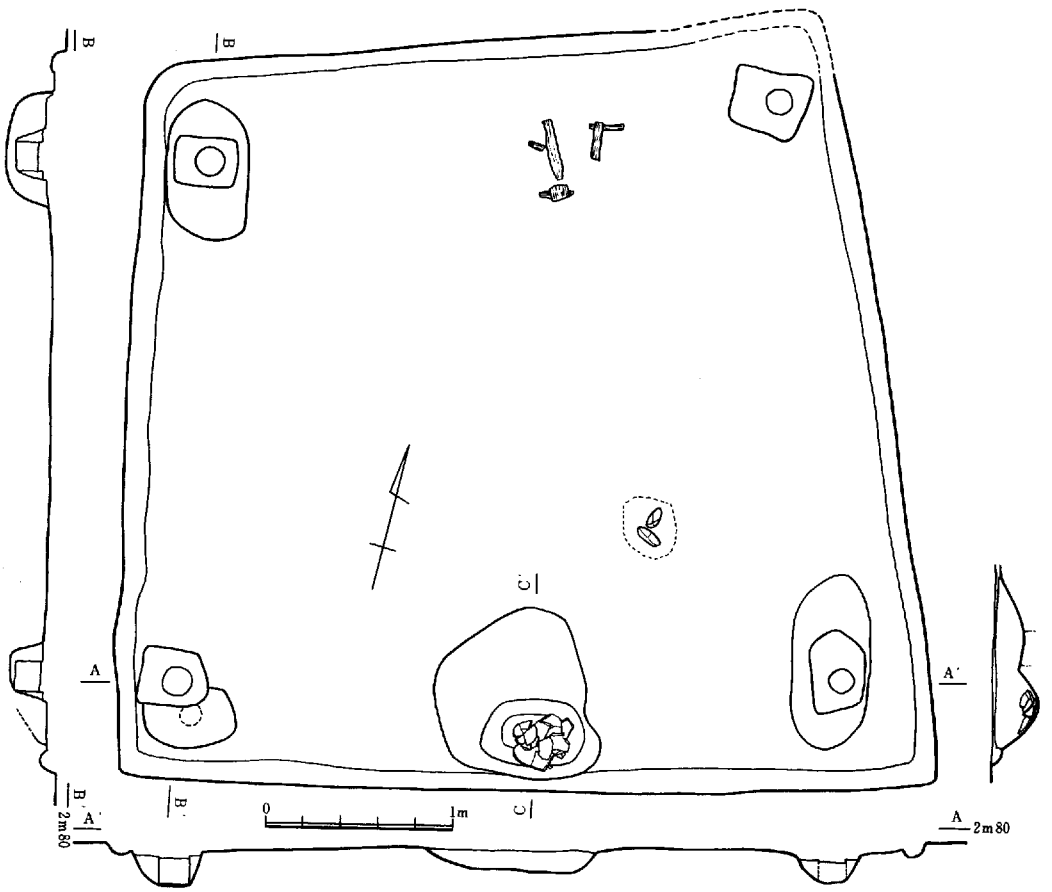
第27図3　溝2断面図

第28図 第4調査区1号住居址実測図

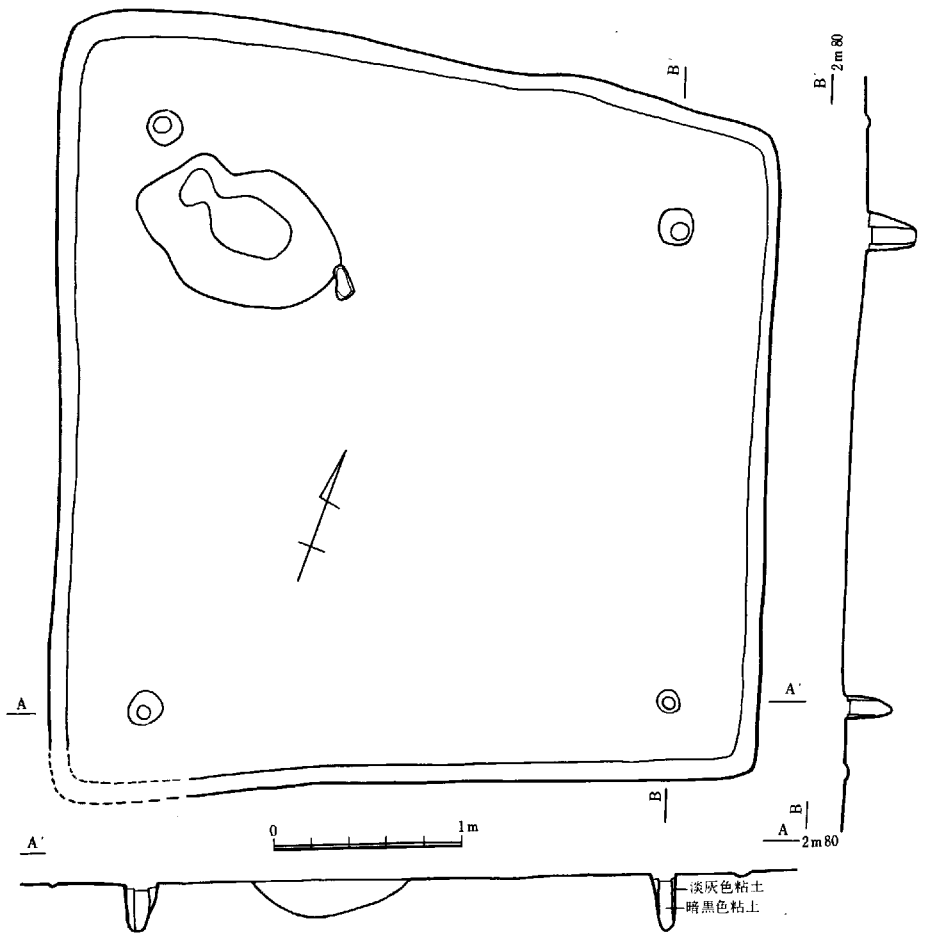
第29図 第4調査区 2号住居址実測図



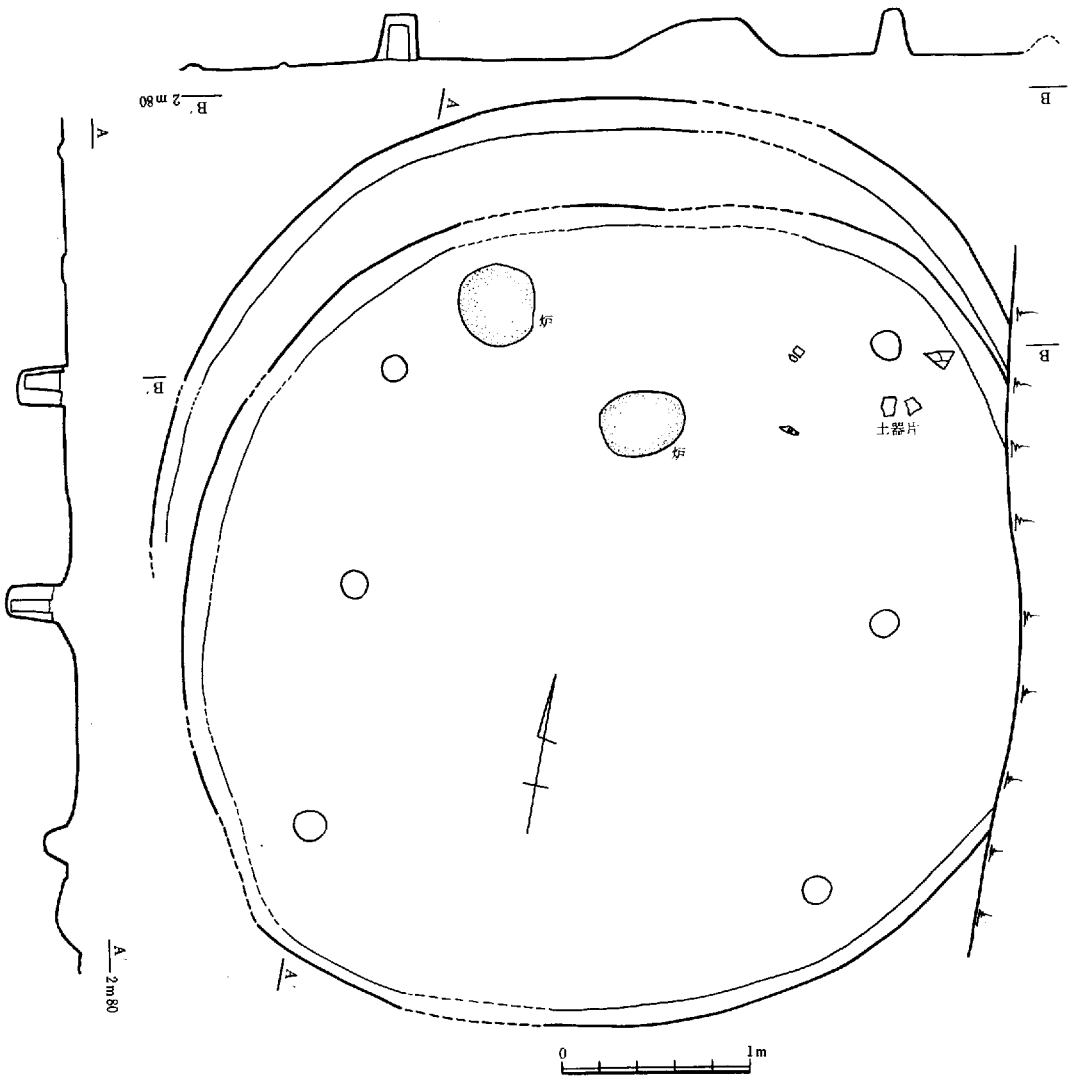
第30図 第4調査区4号住居址実測図



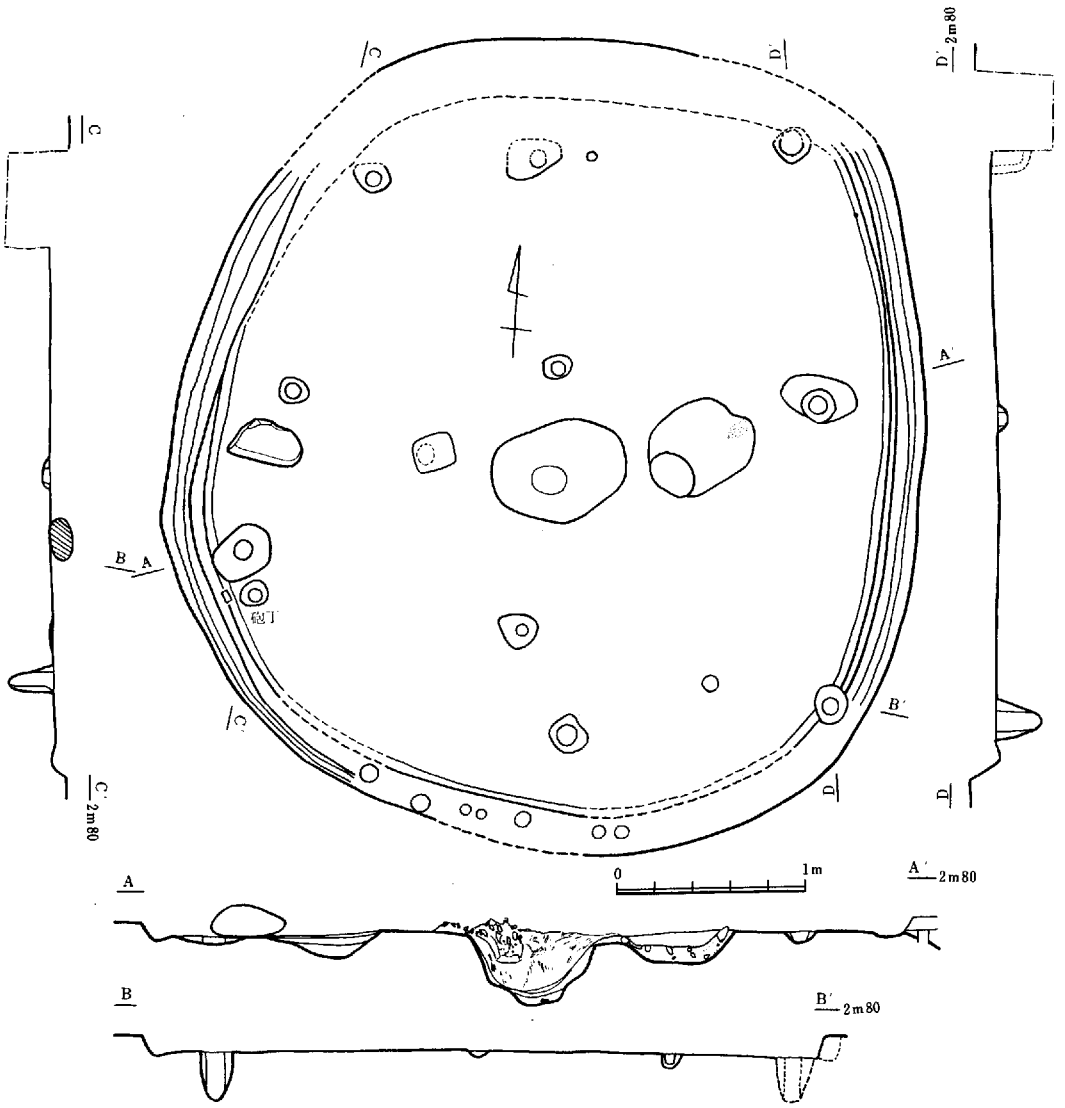
第31図 第4調査区5号住居址実測図



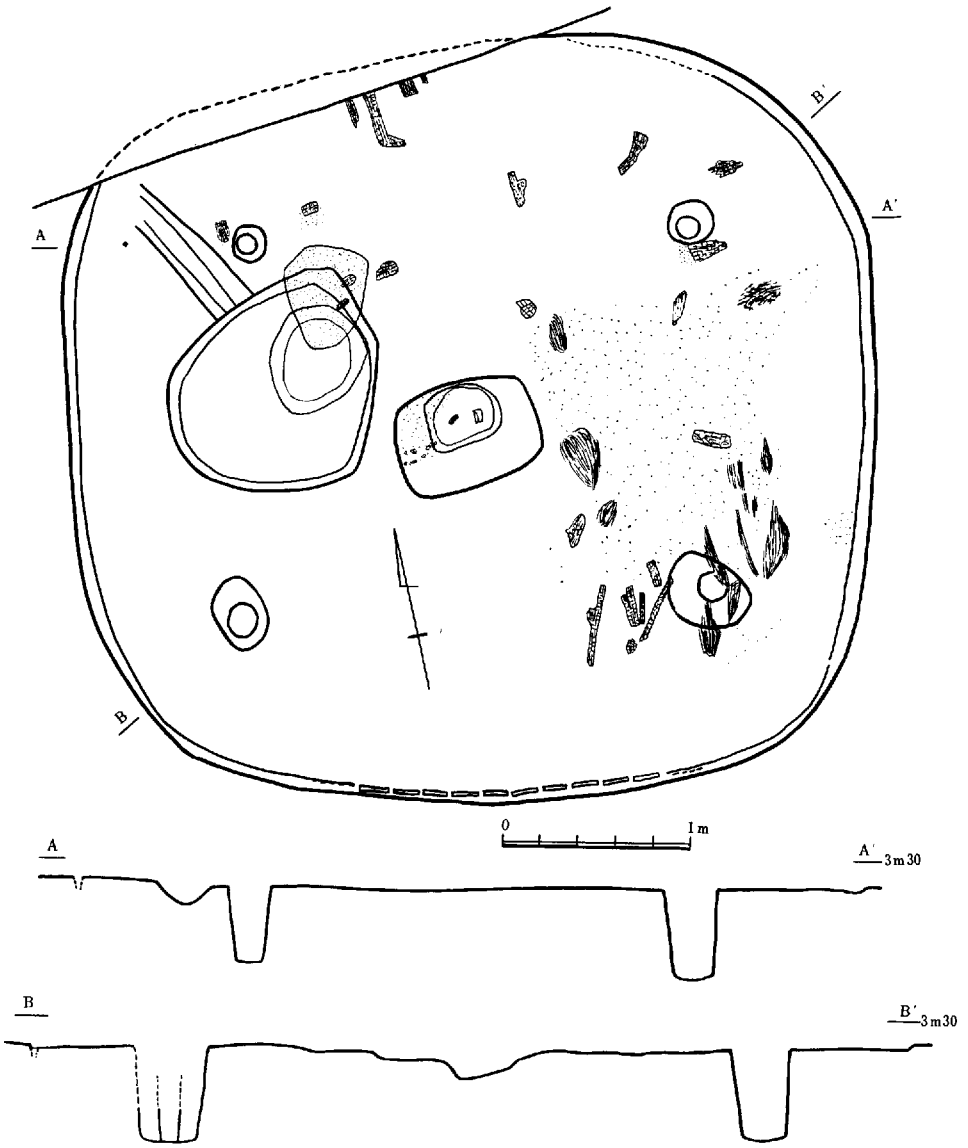
第32図 第4調査区6号住居址実測図



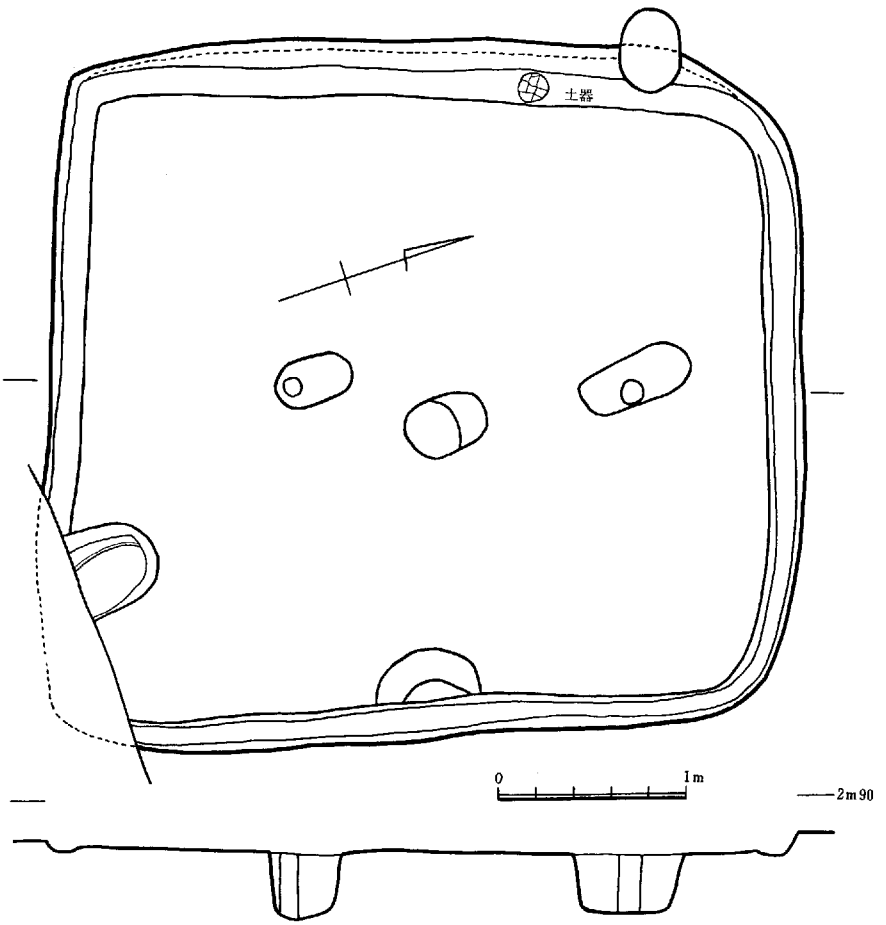
第33図 第４調査区７号住居址実測図



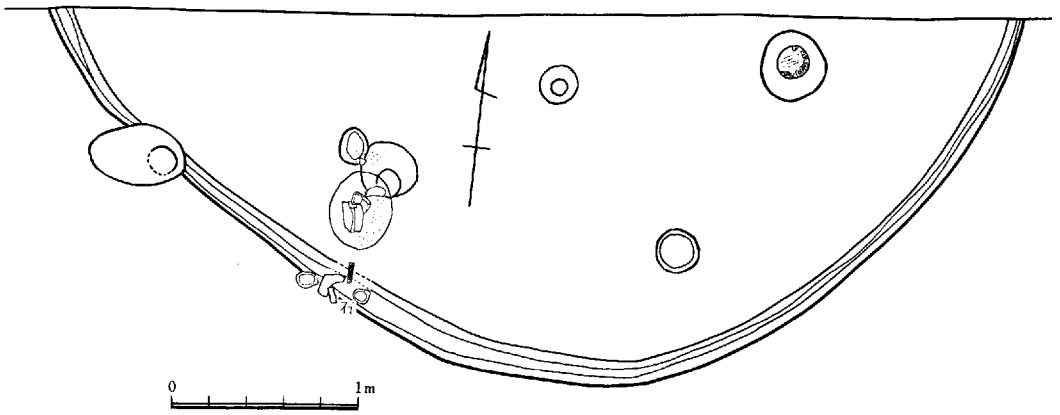
第34図 第4調査区8号住居址実測図



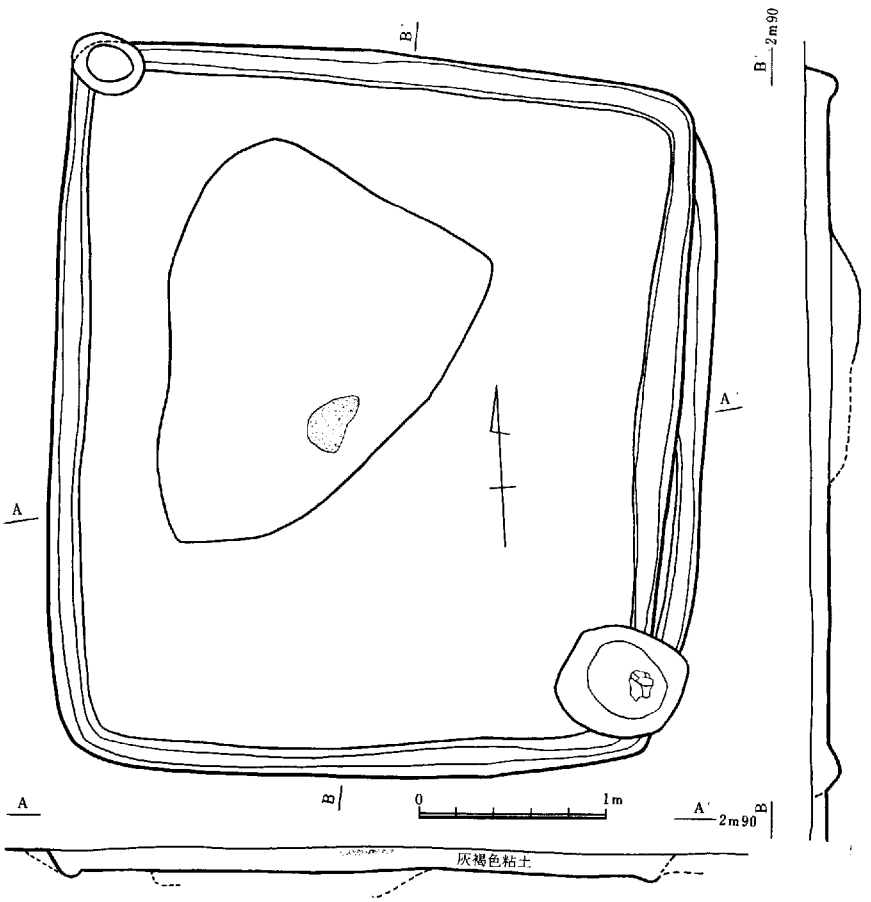
第35図 第4調査区9号住居址実測図



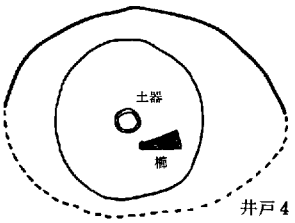
第36図 第4調査区10号住居址実測図



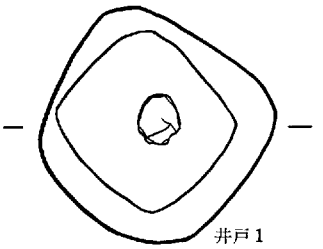
第37図1　第4調査区11号住居址実測図



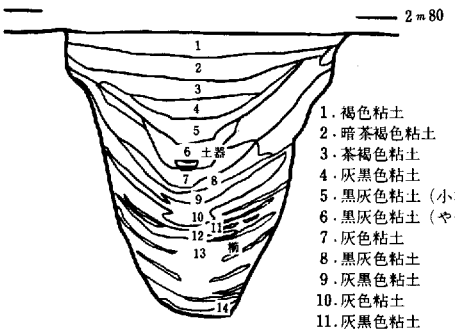
第37図2　第4調査区12号住居址実測図



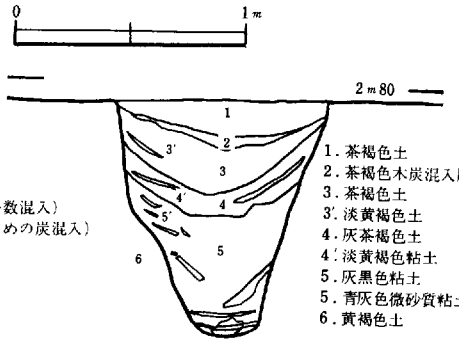
井戸4



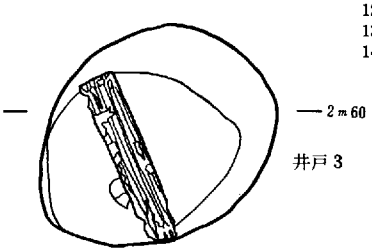
井戸1



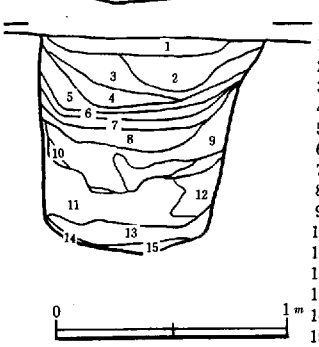
1. 褐色粘土
2. 暗茶褐色粘土
3. 茶褐色粘土
4. 灰黒色粘土
5. 黒灰色粘土（小木炭多数混入）
6. 黒灰色粘土（やや大きめの炭混入）
7. 灰色粘土
8. 黒灰色粘土
9. 灰黒色粘土
10. 灰色粘土
11. 灰黒色粘土
12. 青灰色微砂混り粘土
13. 灰黒色粘土
14. 青灰色微砂



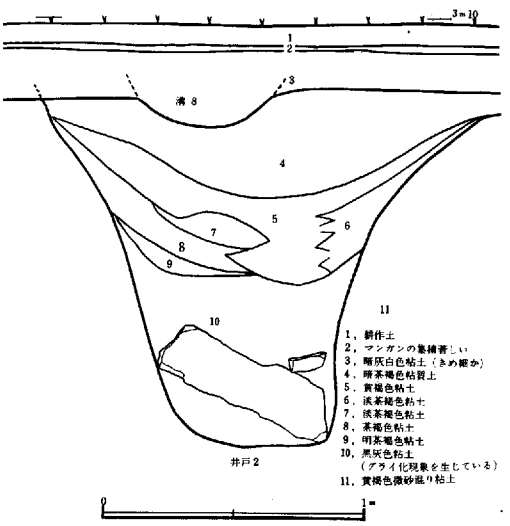
1. 茶褐色土
2. 茶褐色木炭混入層
3. 茶褐色土
3'. 淡黄褐色土
4. 灰茶褐色土
4'. 淡黄褐色粘土
5. 灰黒色粘土
5. 青灰色微砂質粘土
6. 黄褐色土



井戸3



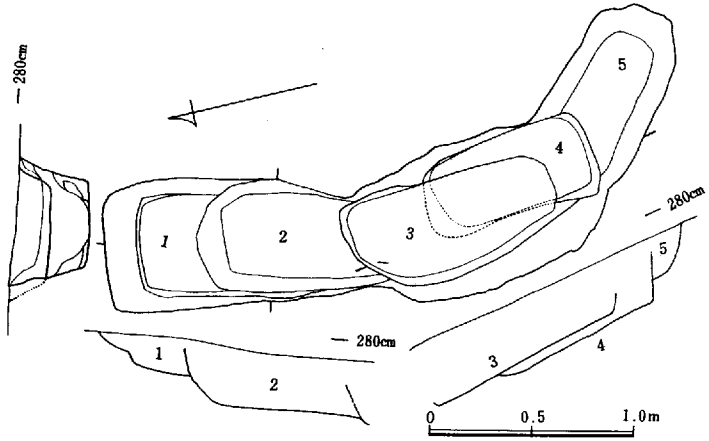
1. 灰茶褐色粘土
2. 木炭を含灰色粘土
3. 灰色粘土（炭まじり）
4. 灰色粘土
5. 青灰色粘土
6. 灰色粘土混り微砂
7. 黒灰色粘土
8. 淡灰色粘土混り微砂
9. 炭黒色粘土
10. 炭黒色微砂混り粘土
11. 黒色粘土（木炭小片混入）
12. 青灰色微砂（木炭小片混入）
13. 黒色炭粘土
14. 青灰色粘土混り細砂
15. 青灰色細砂



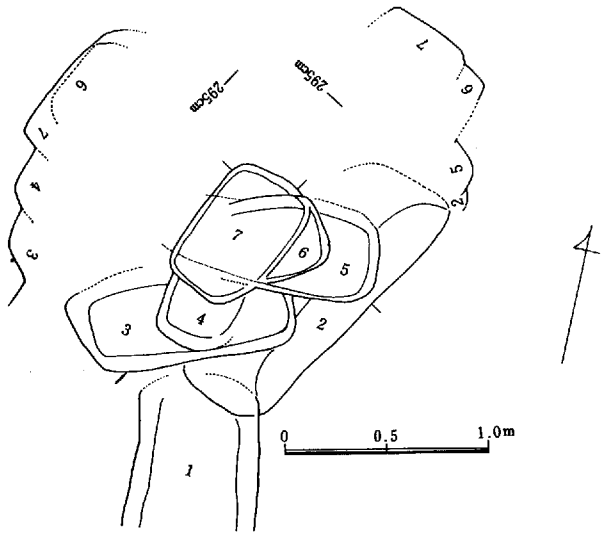
1, 耕作土
2, マンガンの集積著しい
3, 暗灰白色粘土（きめ細か）
4, 暗茶褐色粘質土
5, 黄褐色粘土
6, 淡茶褐色粘土
7, 淡茶褐色粘土
8, 茶褐色粘土
9, 明茶褐色粘土
10, 黒灰色粘土
（グライ化現象を生じている）
11, 黄褐色微砂混り粘土

第38図 第4調査区井戸実測図

土坑墓A群

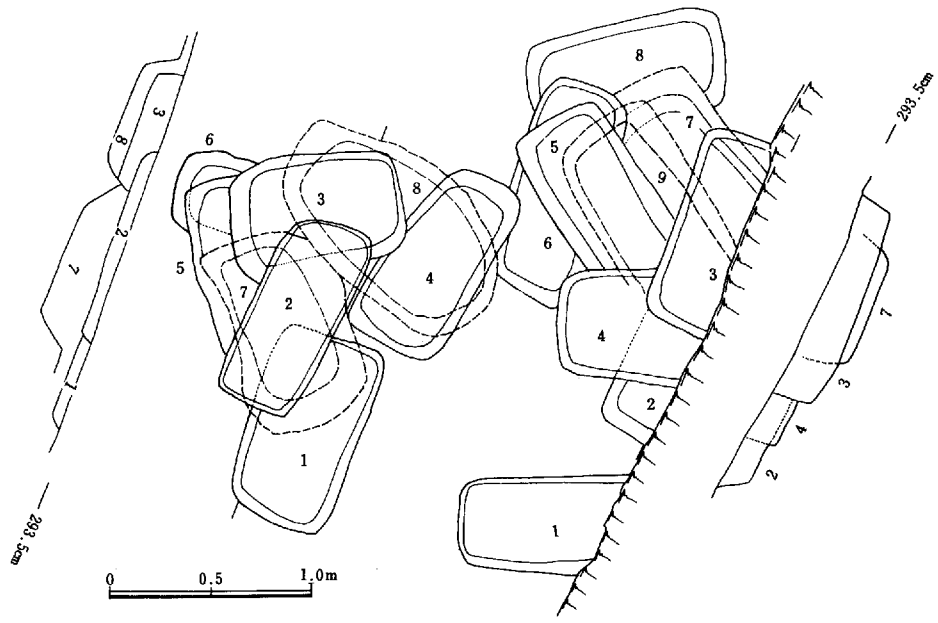


土坑墓D群

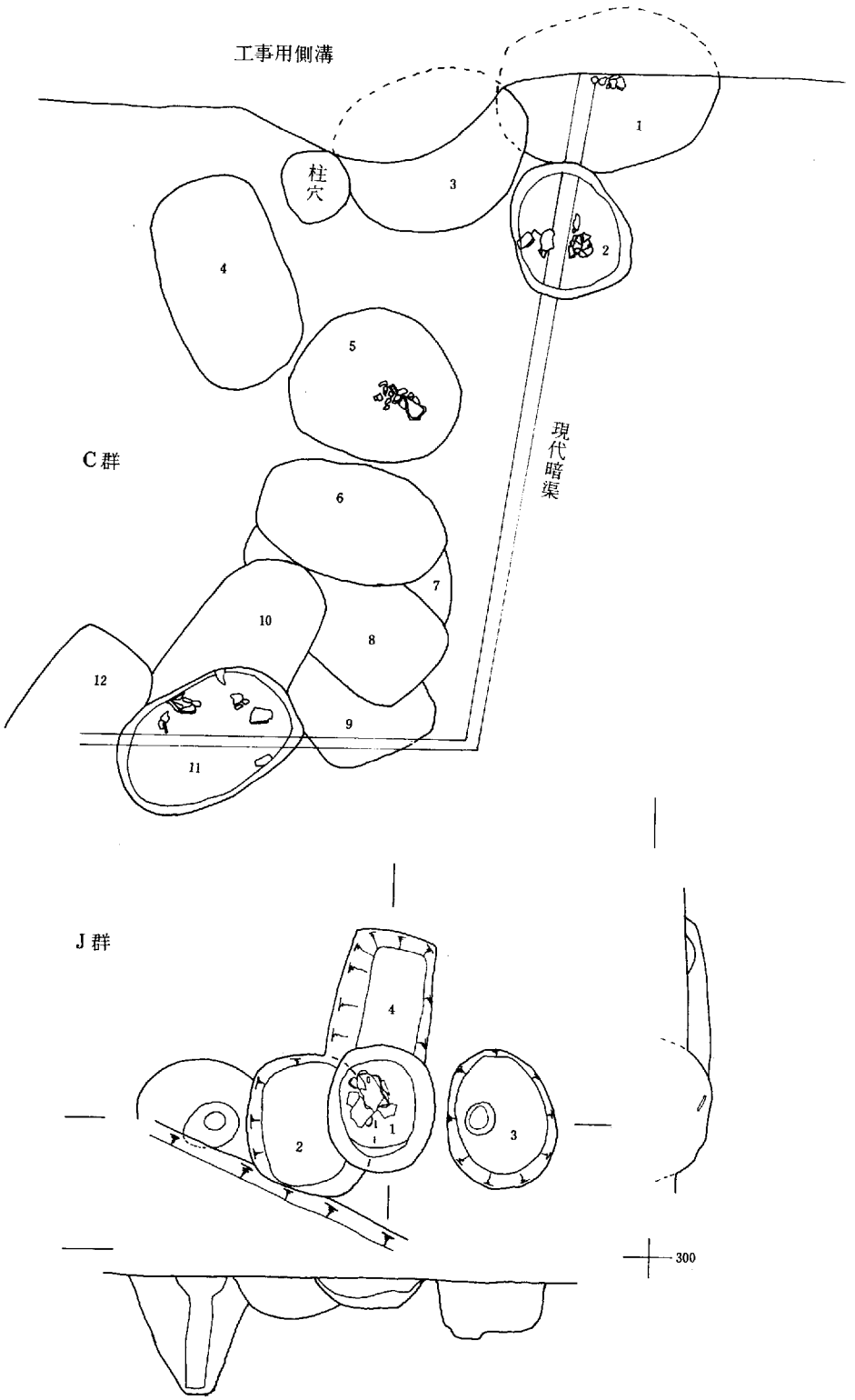


土坑墓E群

土坑墓F群

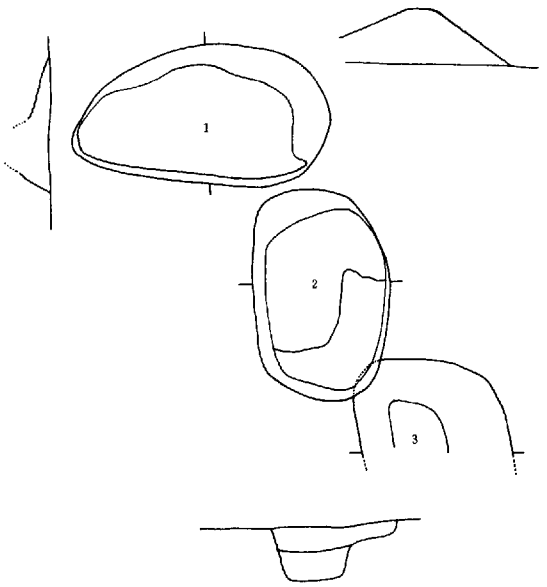


第39図 土坑墓A群，D群，E群，F群，

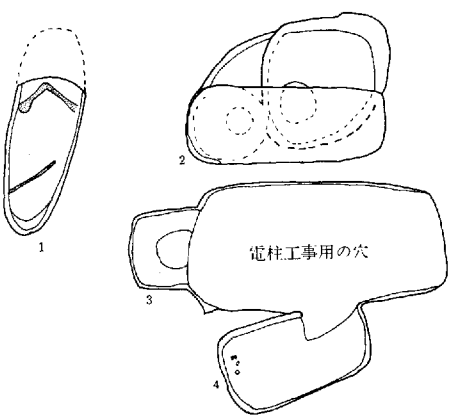


第40図 土壙墓 C群, J群

土坑墓G群

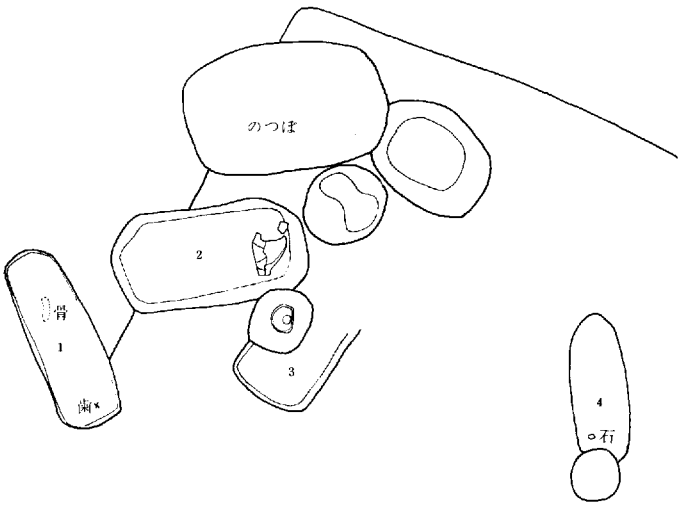


O群

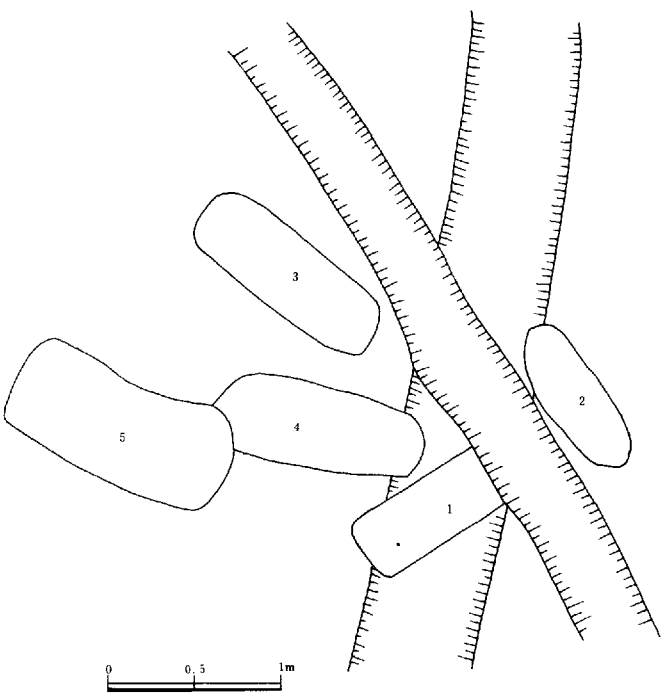


第41図 土坑墓 G群, O群

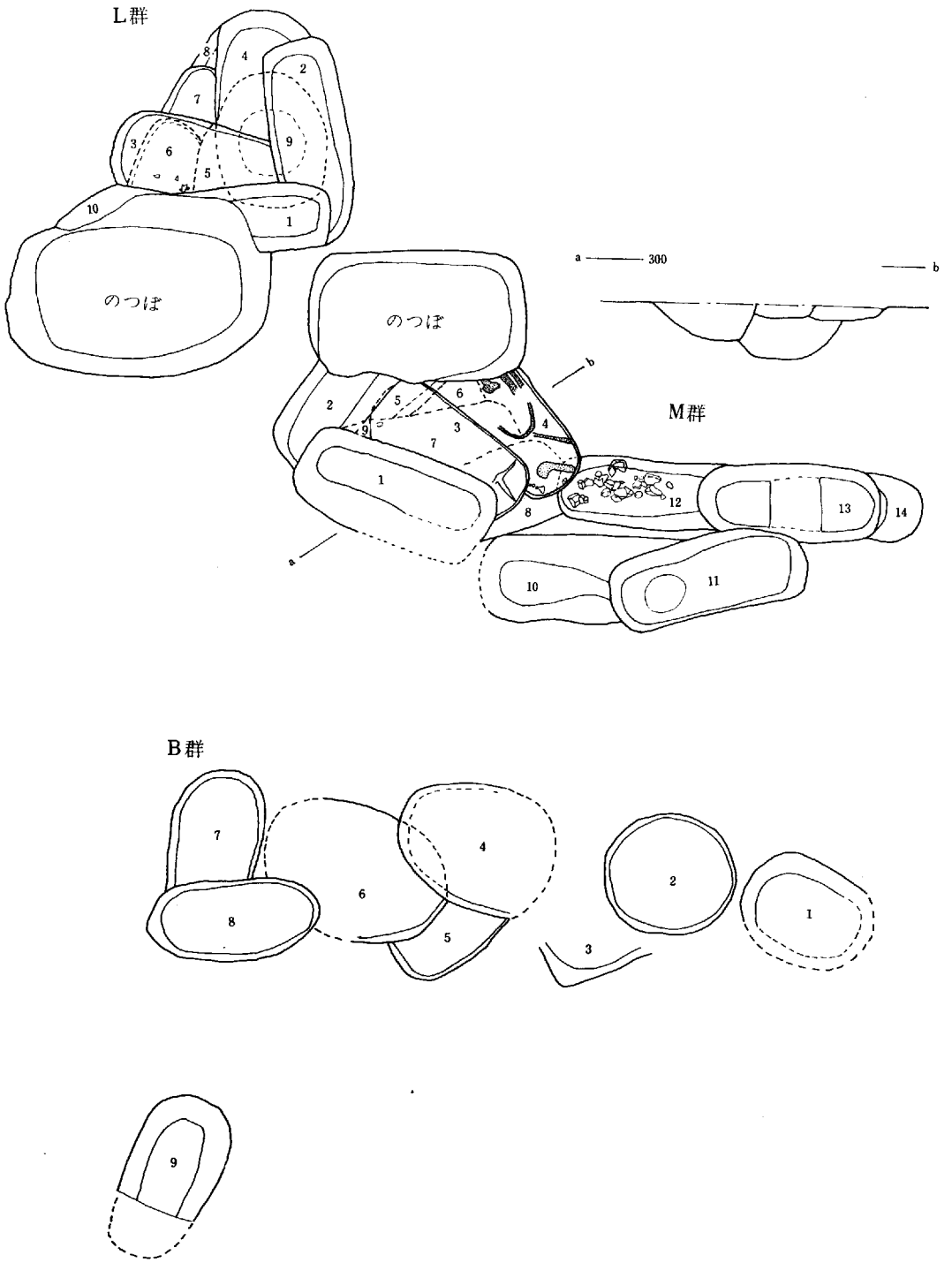
土坑墓K群



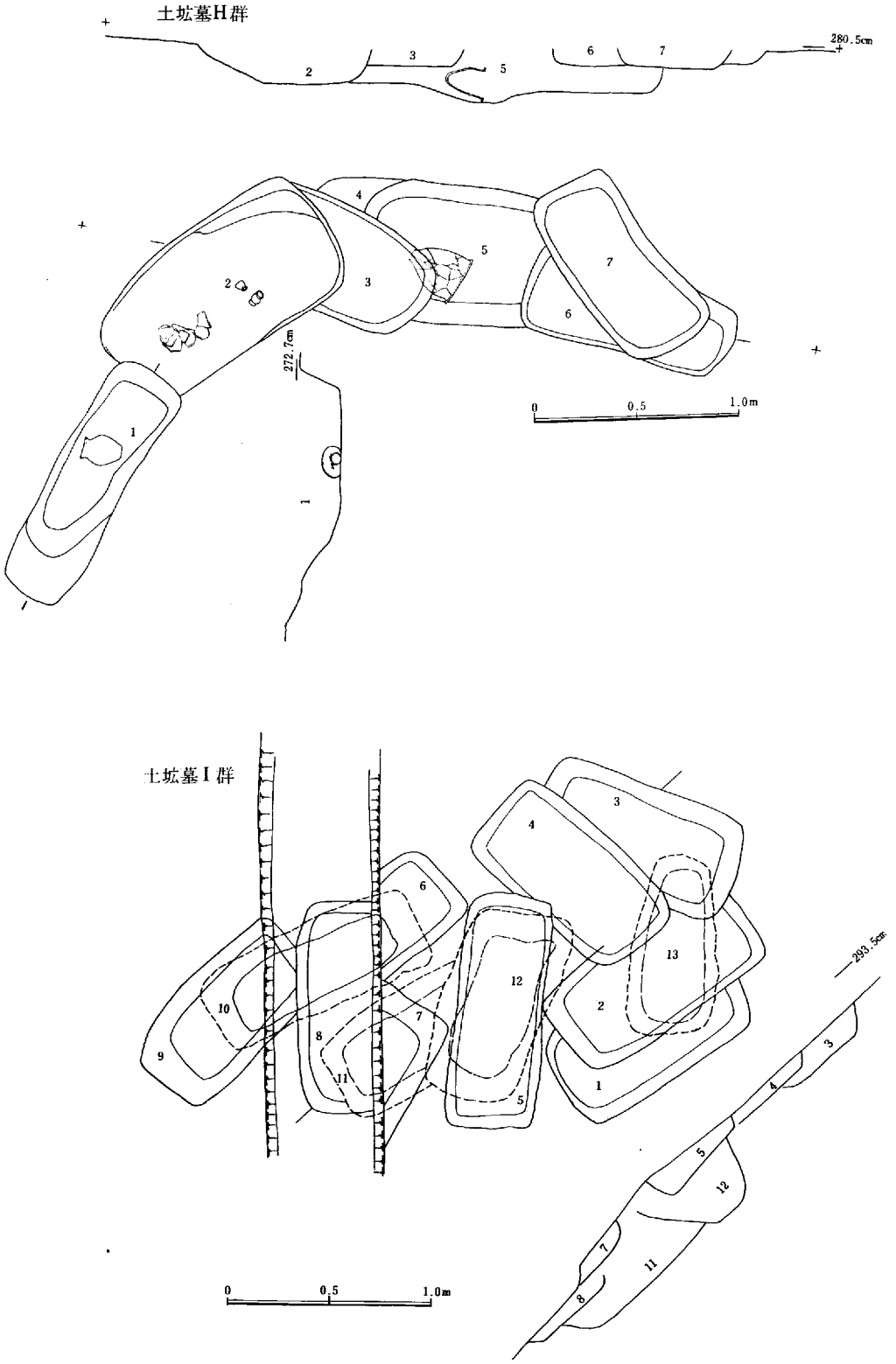
土坑墓N群



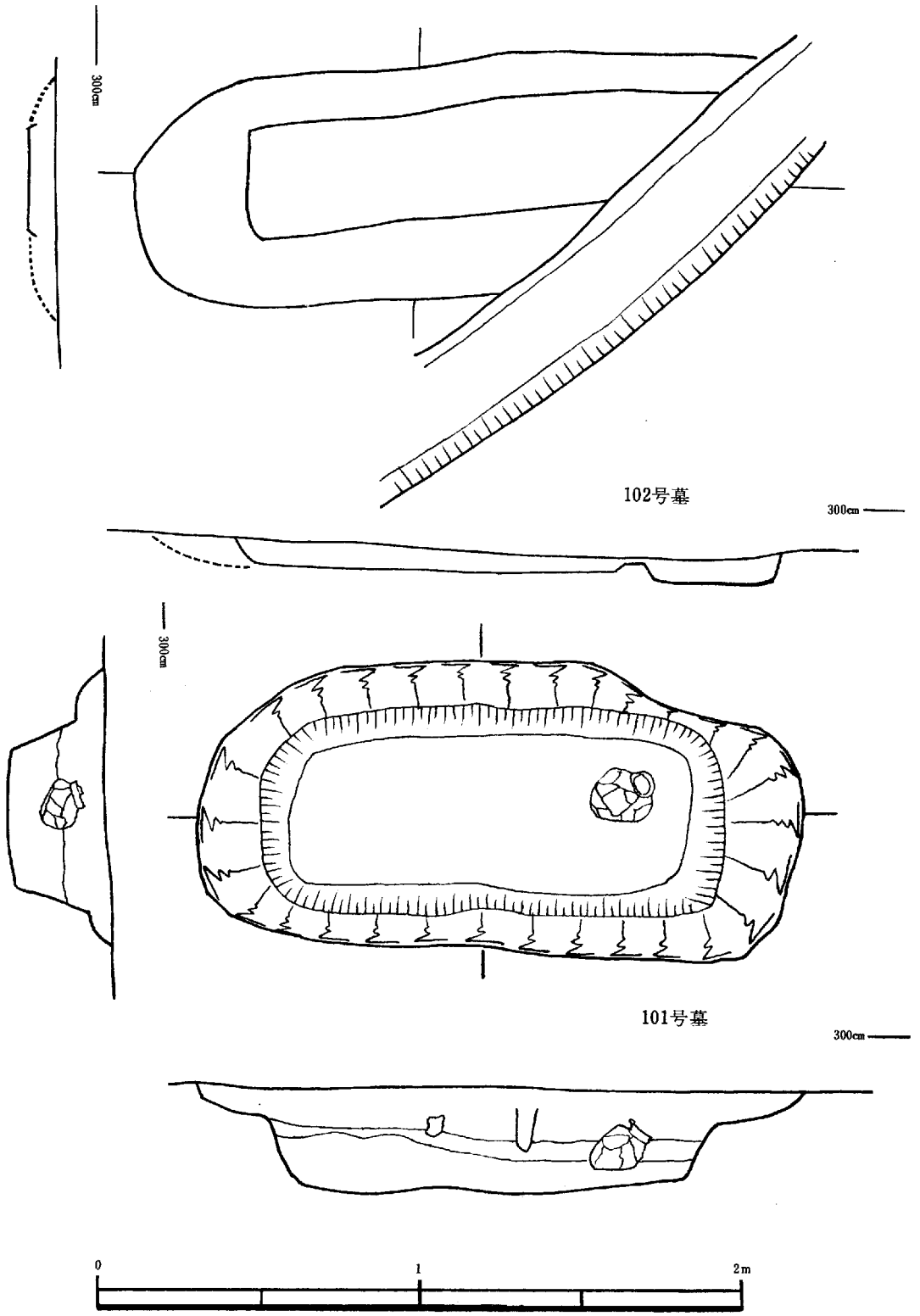
第42図 土坑墓 K群, N群



第43図 土坑墓 B群, L群, M群

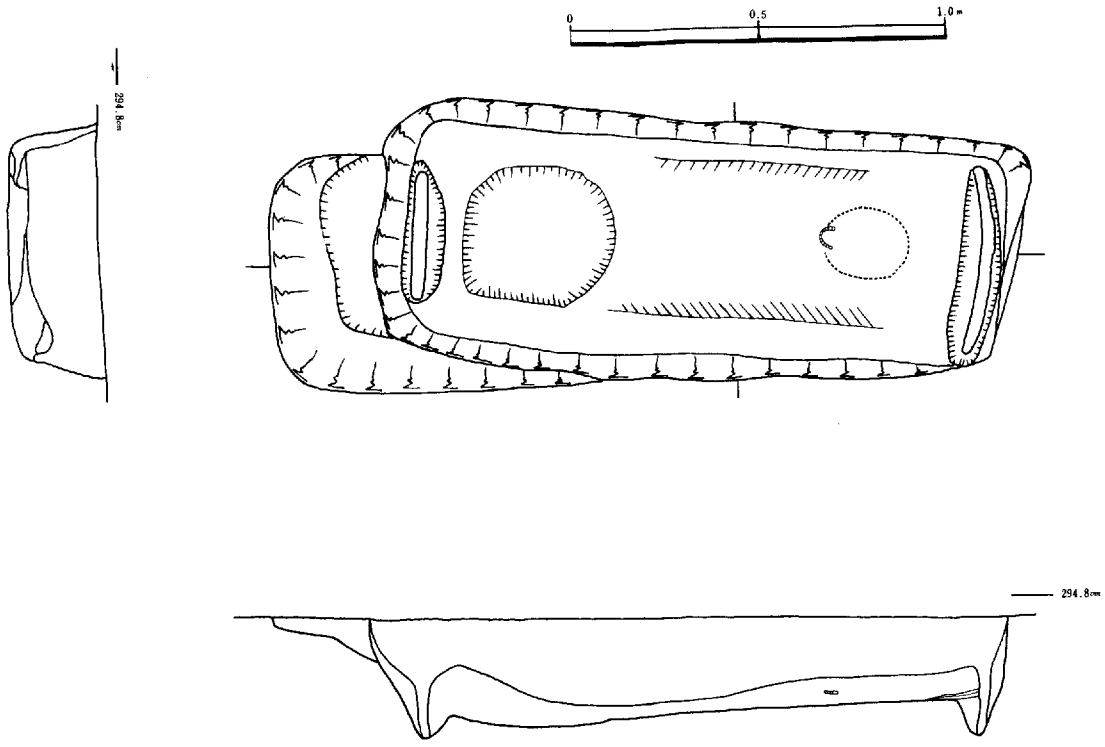


第44図 土坑墓 H群, I群

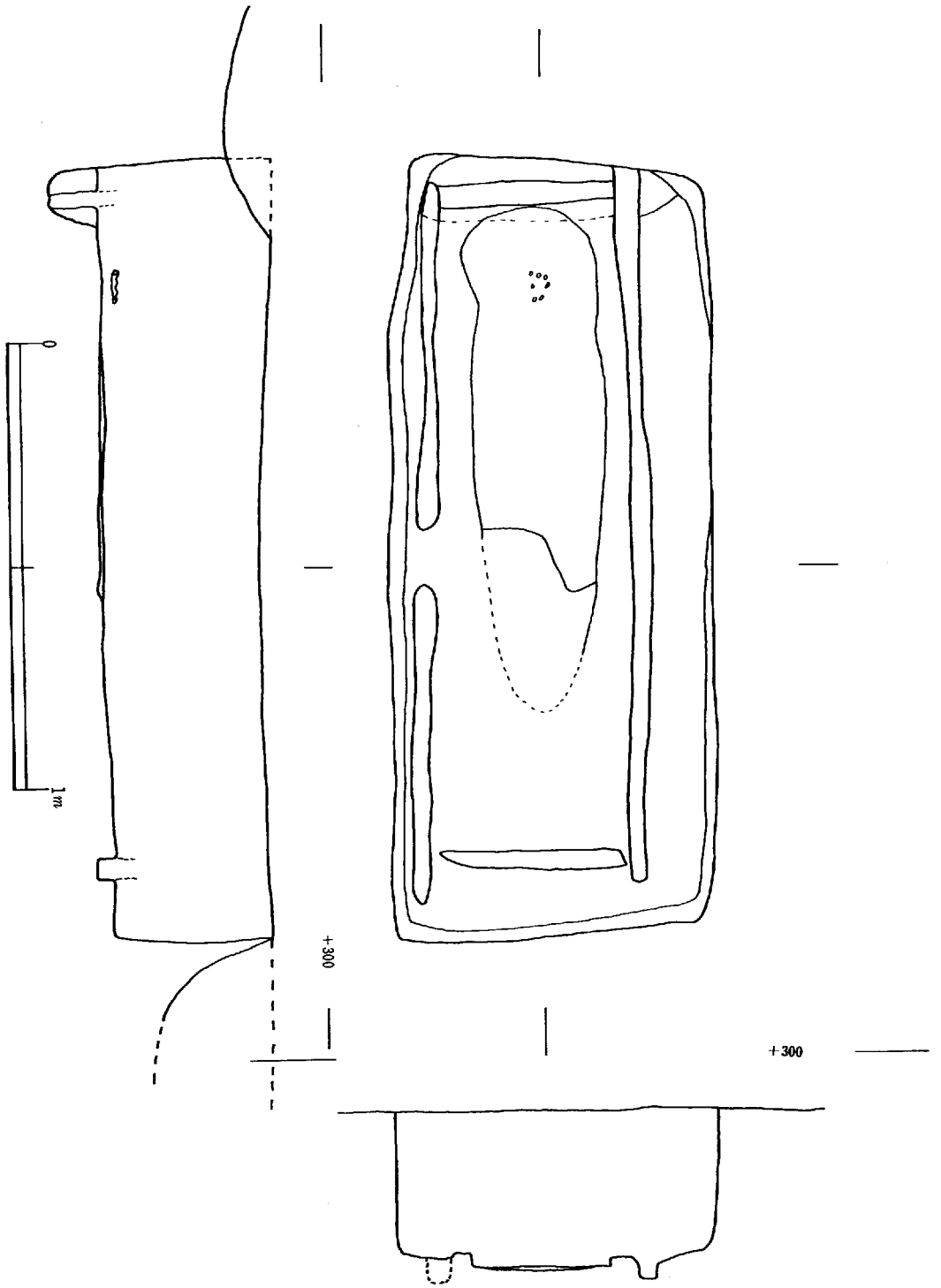


第45図 101号墓, 102号墓

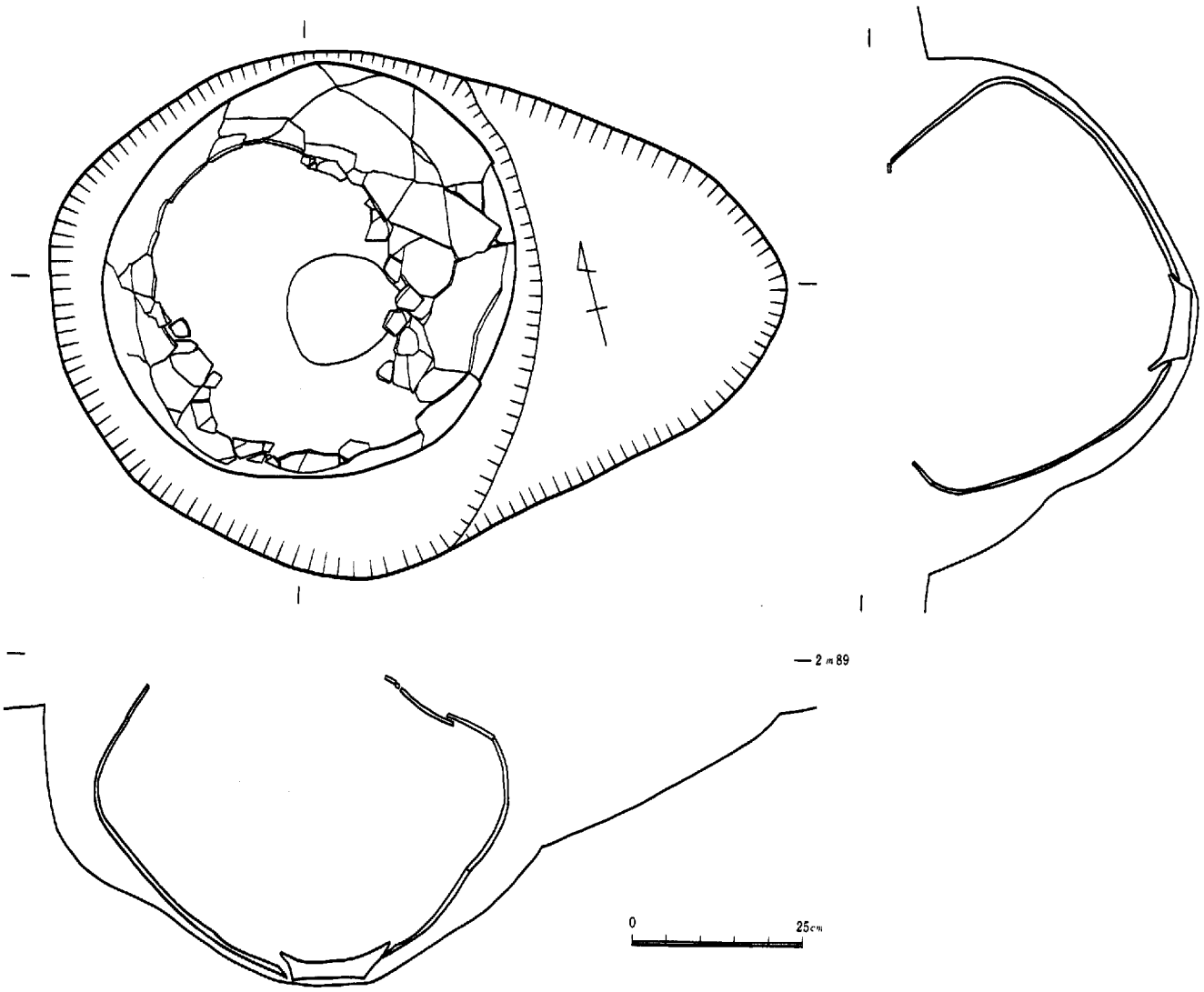
土坑墓106号



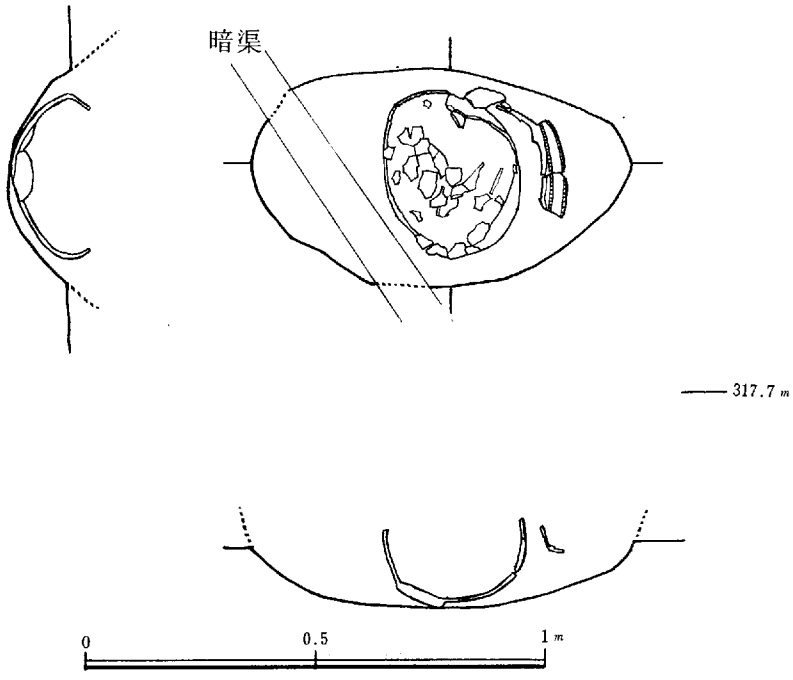
第 46 図　土 坑 墓 10 6 号 墓

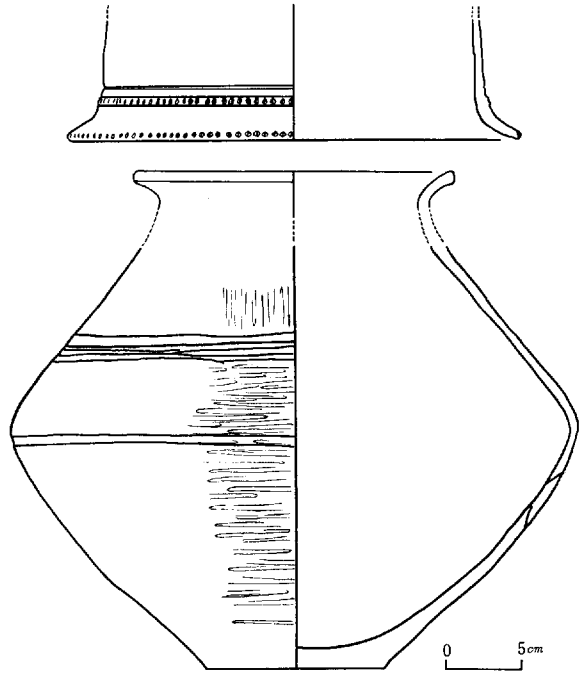


第47図 125号木棺墓

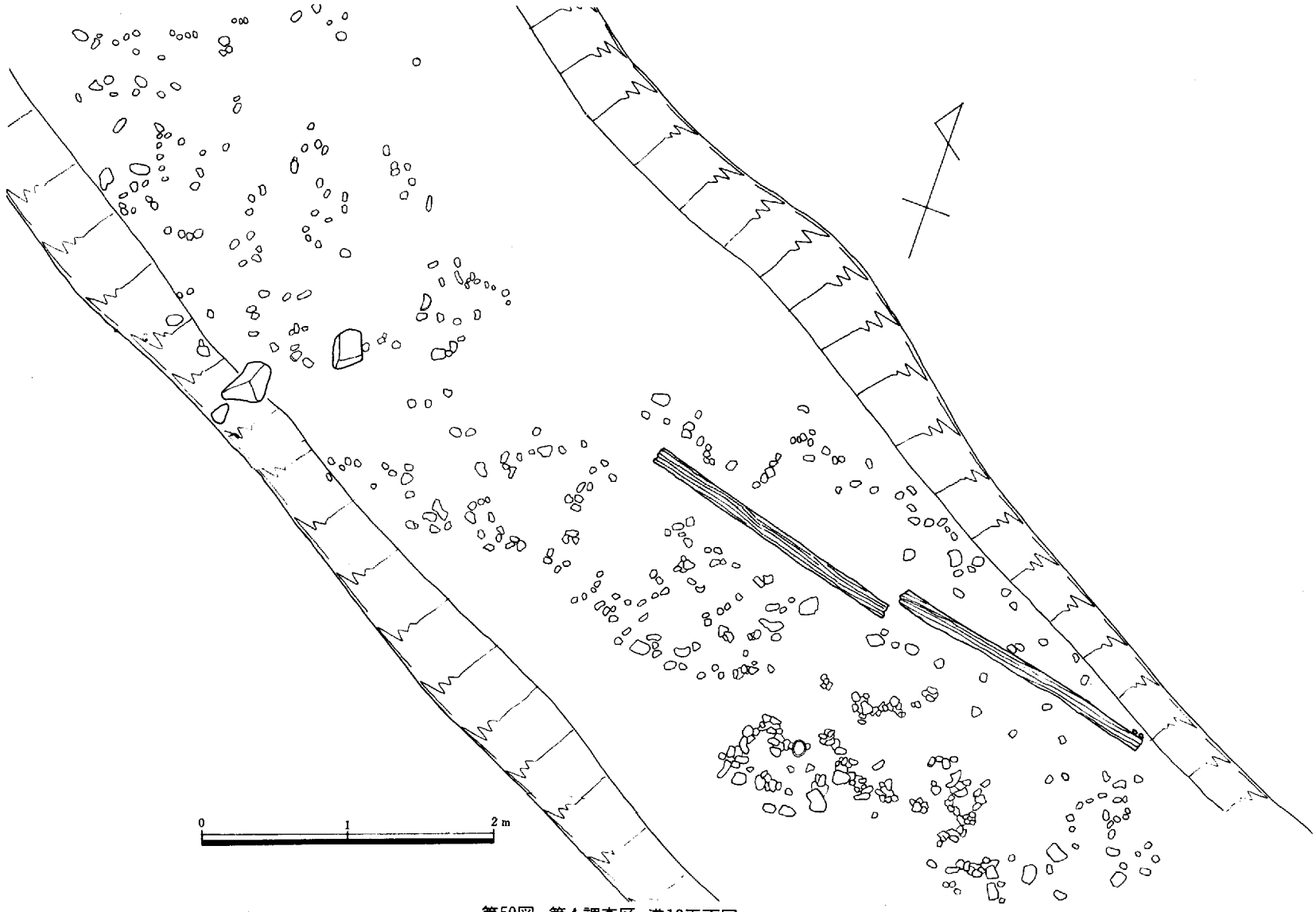


第48図 第4調査区107号墓

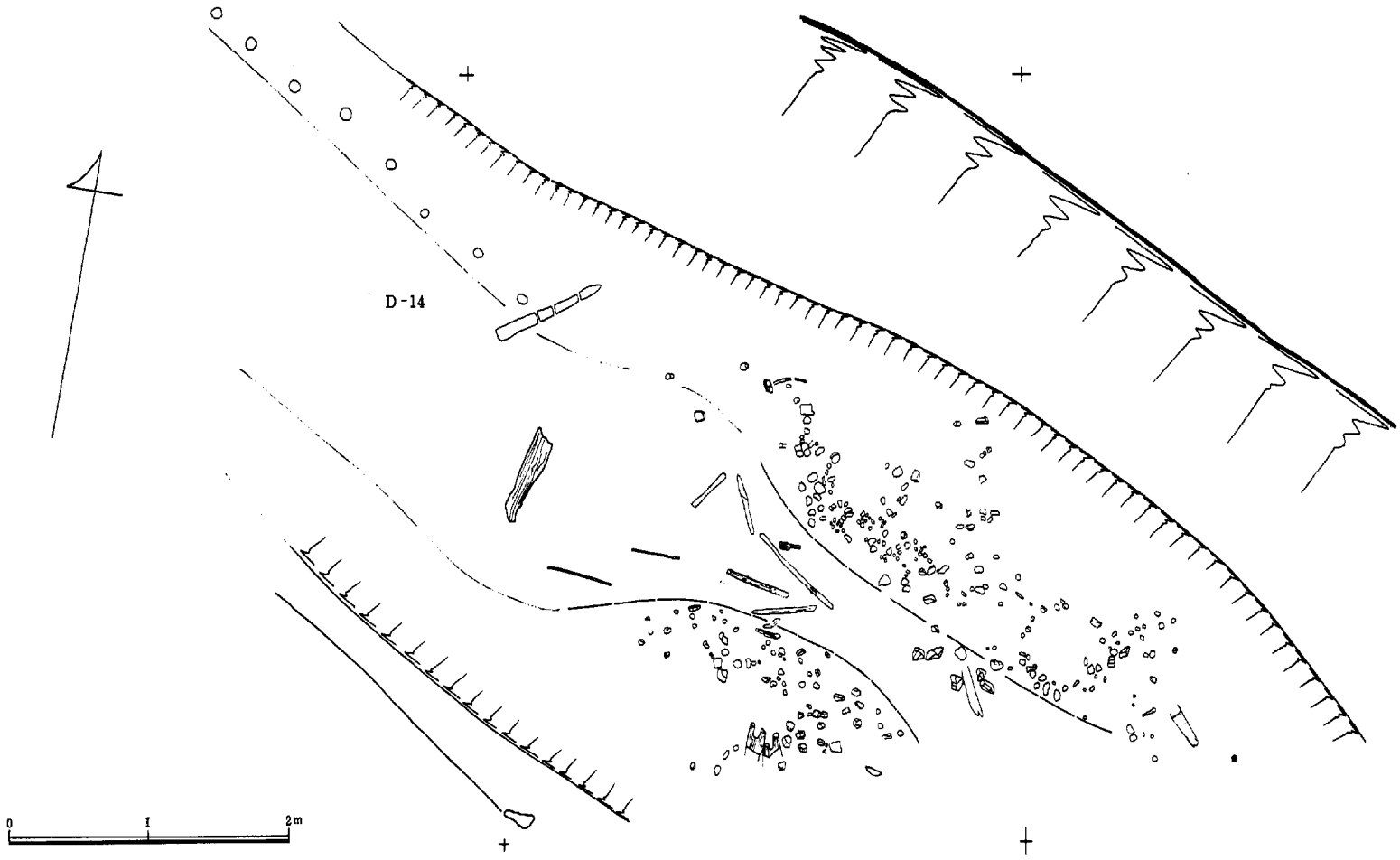




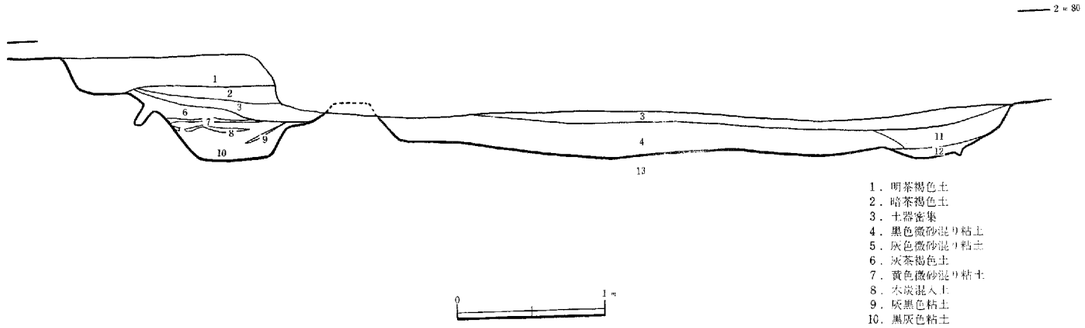
第 49 図　壺棺 129 号墓



第50図　第4調査区　溝12平面図

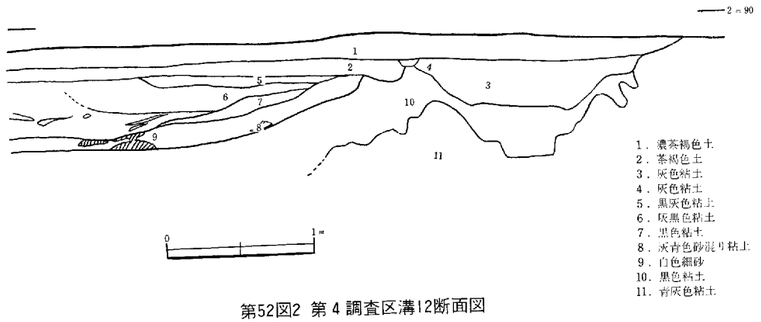


第51図　第４調査区　溝14平面図



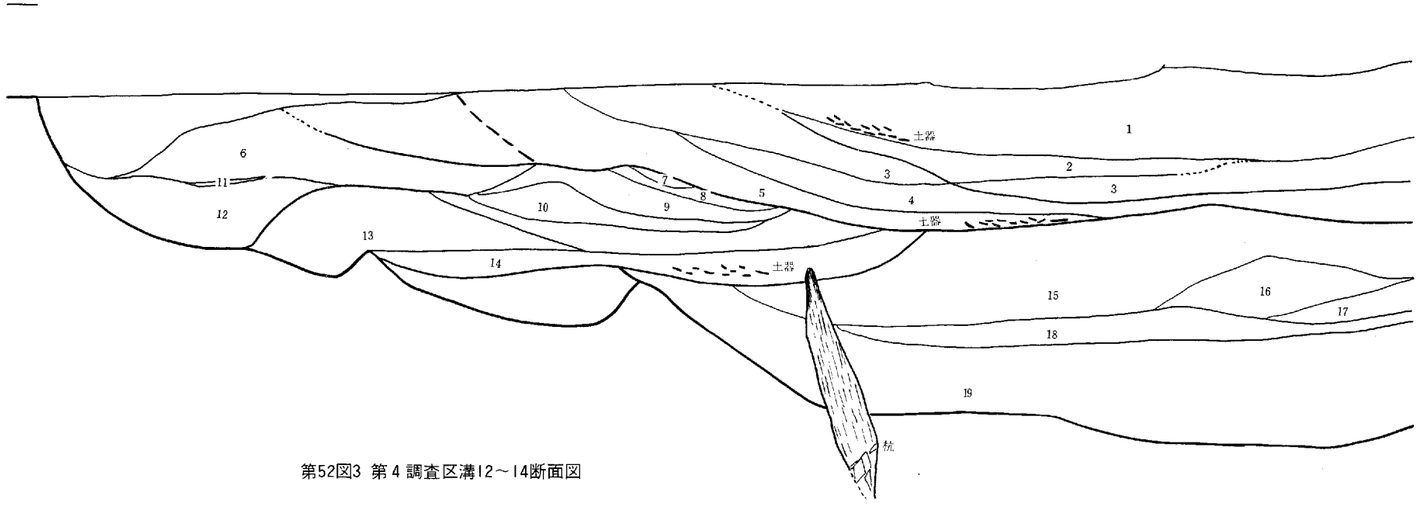
1．明茶褐色土
2．暗茶褐色土
3．土器密集
4．黒色微砂混り粘土
5．灰色微砂混り粘土
6．灰茶褐色土
7．黄色微砂混り粘土
8．木炭混入土
9．灰黒色粘土
10．黒灰色粘土
11．黒色粘土
12．白色細砂
13．青灰色粘土

第52図1 第4調査区溝12断面図

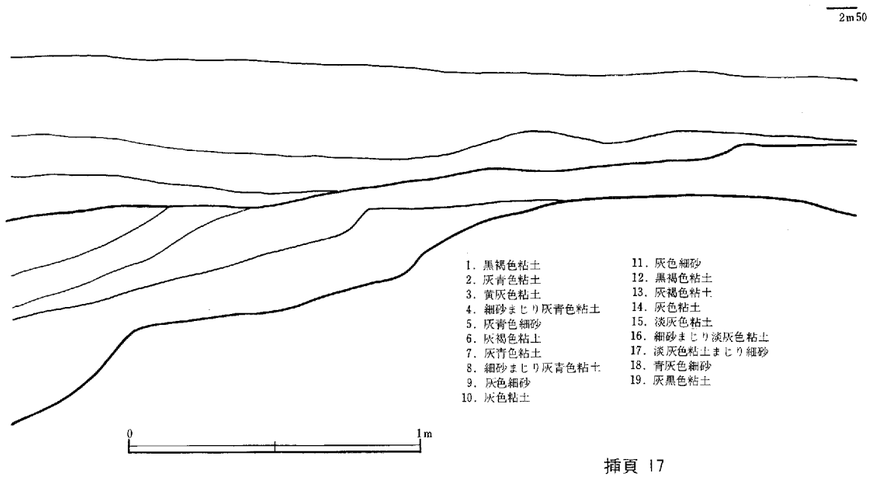


1．濃茶褐色土
2．茶褐色土
3．灰色粘土
4．灰色粘土
5．黒灰色粘土
6．灰黒色粘土
7．黒色粘土
8．灰青色砂混り粘土
9．白色細砂
10．黒色粘土
11．青灰色粘土

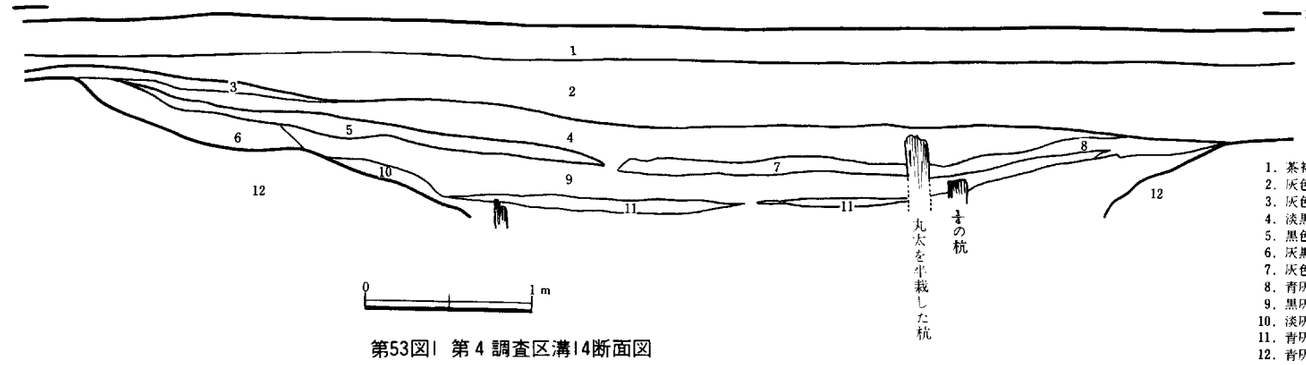
第52図2 第4調査区溝12断面図



第52図3 第4調査区溝12～14断面図

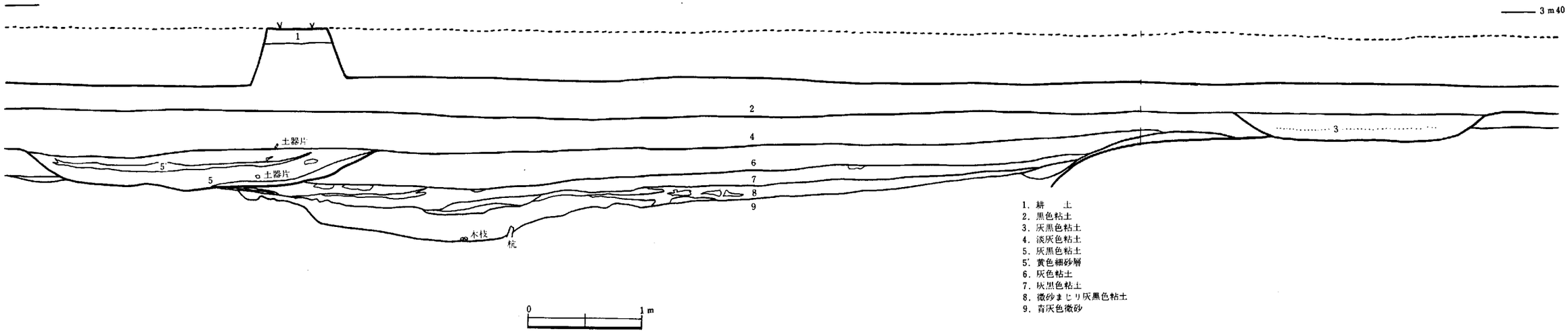


1．黒褐色粘土
2．灰青色粘土
3．黄灰色粘土
4．細砂まじり灰青色粘土
5．灰青色細砂
6．灰褐色粘土
7．灰青色粘土
8．細砂まじり灰青色粘土
9．灰色細砂
10．灰色粘土
11．灰色細砂
12．黒褐色粘土
13．灰褐色粘土
14．灰色粘土
15．淡灰色粘土
16．細砂まじり淡灰色粘土
17．淡灰色粘土まじり細砂
18．青灰色細砂
19．灰黒色粘土



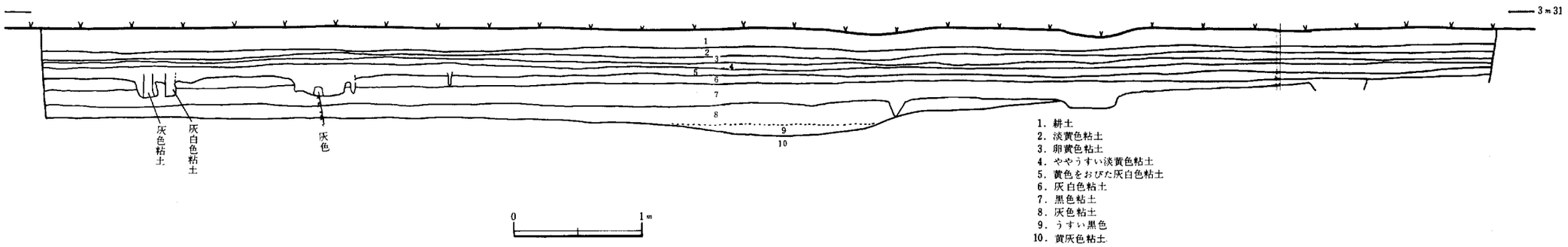
1. 茶褐色土
2. 灰色粘土
3. 灰色粘土(木炭の流入がみられる)
4. 淡黒灰色土
5. 黒色粘土
6. 灰黒色土
7. 灰色微砂混り粘土
8. 青灰色微砂と黄褐色微砂と混在
9. 黒灰色有機質土
10. 淡灰黒色土
11. 青灰色粗砂
12. 青灰色粗砂混り粘土

第53図1 第4調査区溝14断面図



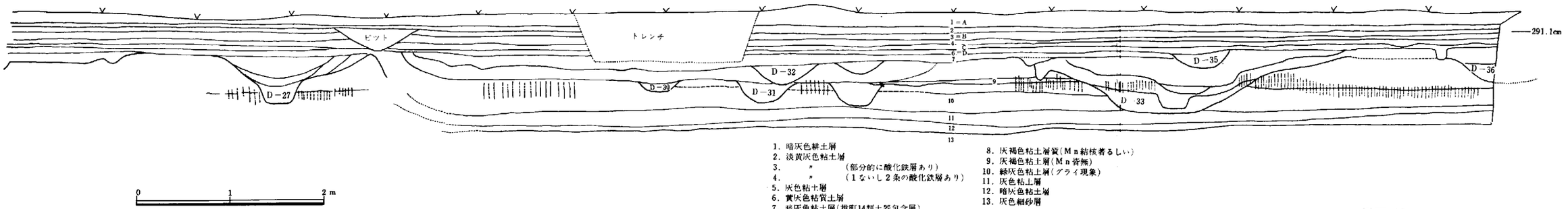
1. 耕　　土
2. 黒色粘土
3. 灰黒色粘土
4. 淡灰色粘土
5. 灰黒色粘土
5'. 黄色細砂層
6. 灰色粘土
7. 灰黒色粘土
8. 微砂まじり灰黒色粘土
9. 青灰色微砂

第53図2 第4調査区溝12～13断面図

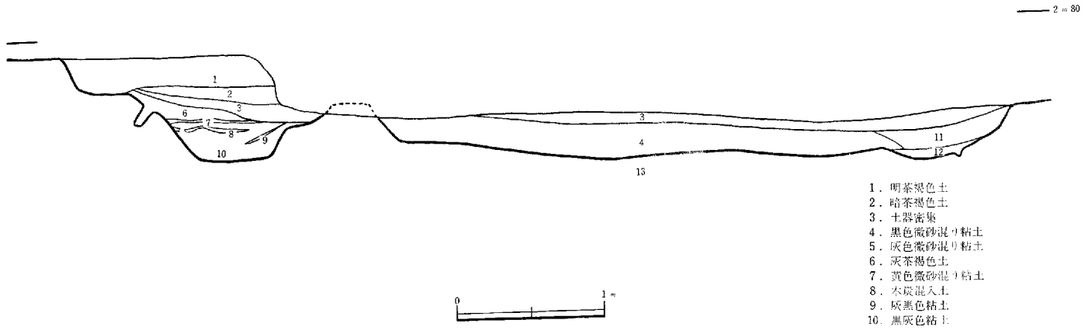


1. 耕土
2. 淡黄色粘土
3. 卵黄色粘土
4. ややうすい淡黄色粘土
5. 黄色をおびた灰白色粘土
6. 灰白色粘土
7. 黒色粘土
8. 灰色粘土
9. うすい黒色
10. 黄灰色粘土

第53図3 第4調査区溝17断面図

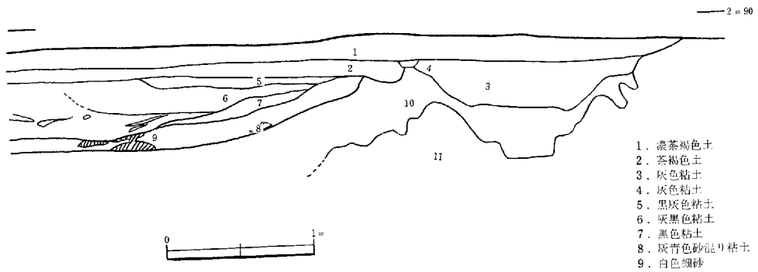


第54図 第4調査区 溝27～36断面図



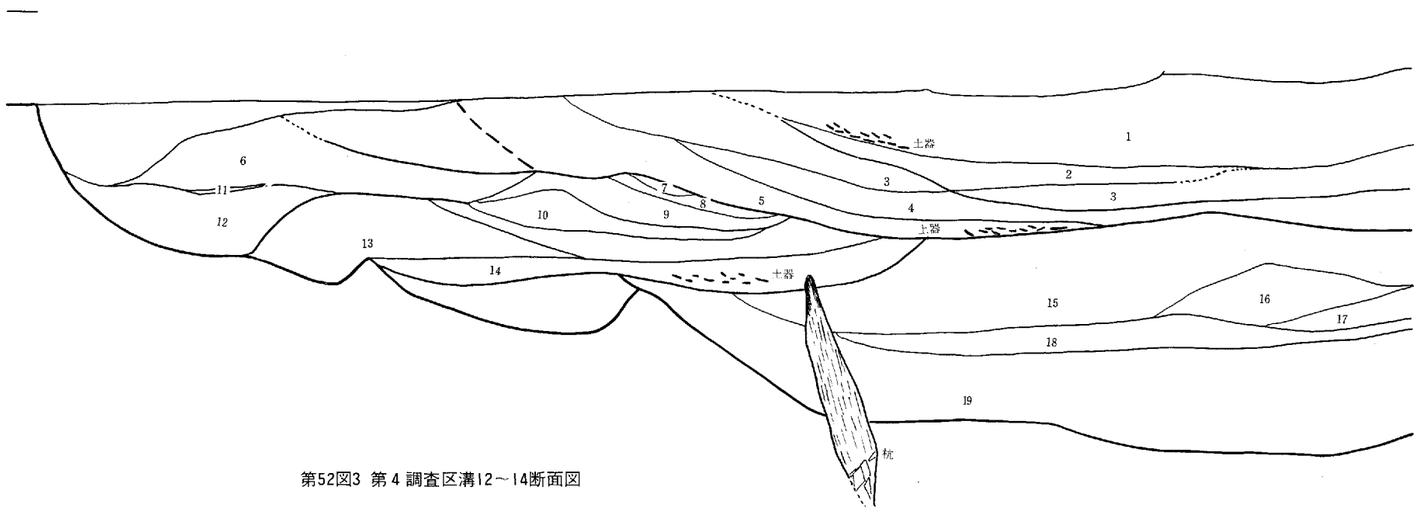
1．明茶褐色土
2．暗茶褐色土
3．土器密集
4．黒色微砂混り粘土
5．灰色微砂混り粘土
6．灰茶褐色土
7．黄色微砂混り粘土
8．木炭混入土
9．灰黒色粘土
10．黒灰色粘土
11．黒色粘土
12．白色細砂
13．青灰色粘土

第52図1 第4調査区溝12断面図

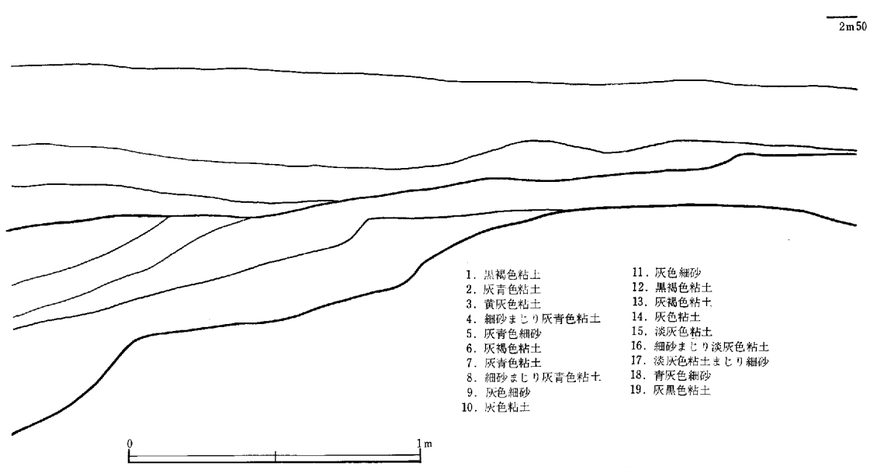


1．濃茶褐色土
2．茶褐色土
3．灰色粘土
4．灰色粘土
5．黒灰色粘土
6．灰黒色粘土
7．黒色粘土
8．灰青色砂混り粘土
9．白色細砂
10．黒色粘土
11．青灰色粘土

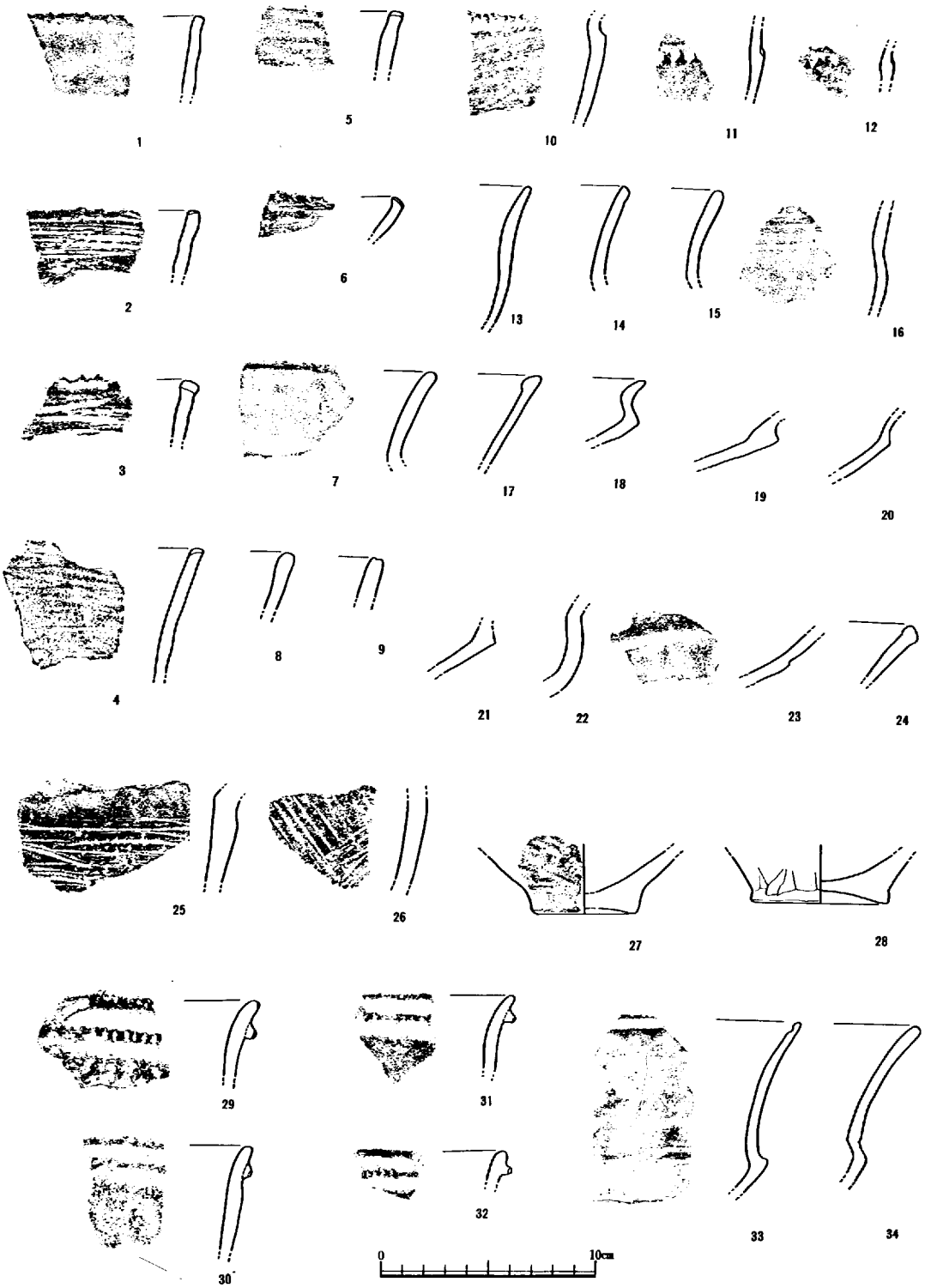
第52図2 第4調査区溝12断面図



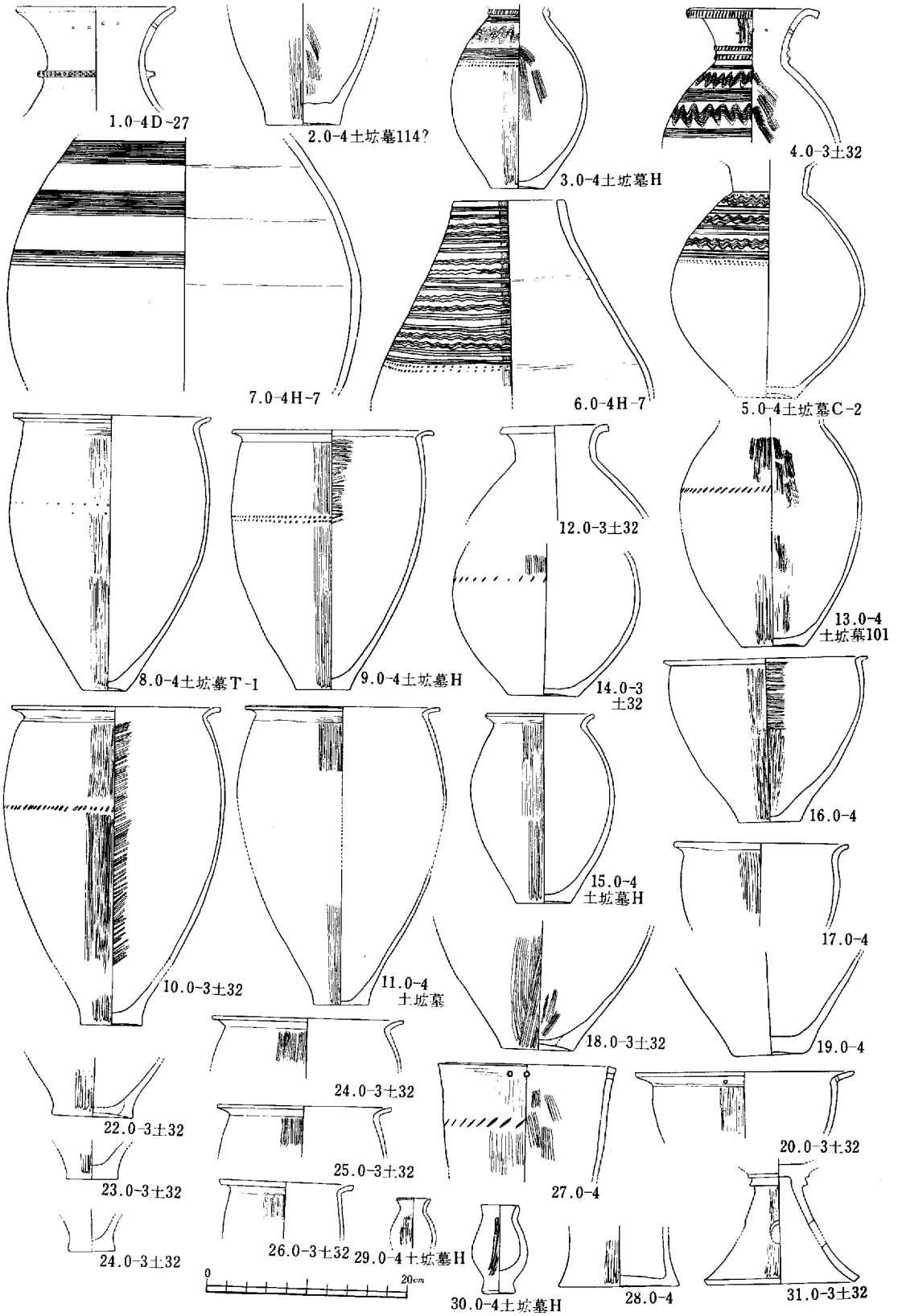
第52図3 第4調査区溝12～14断面図



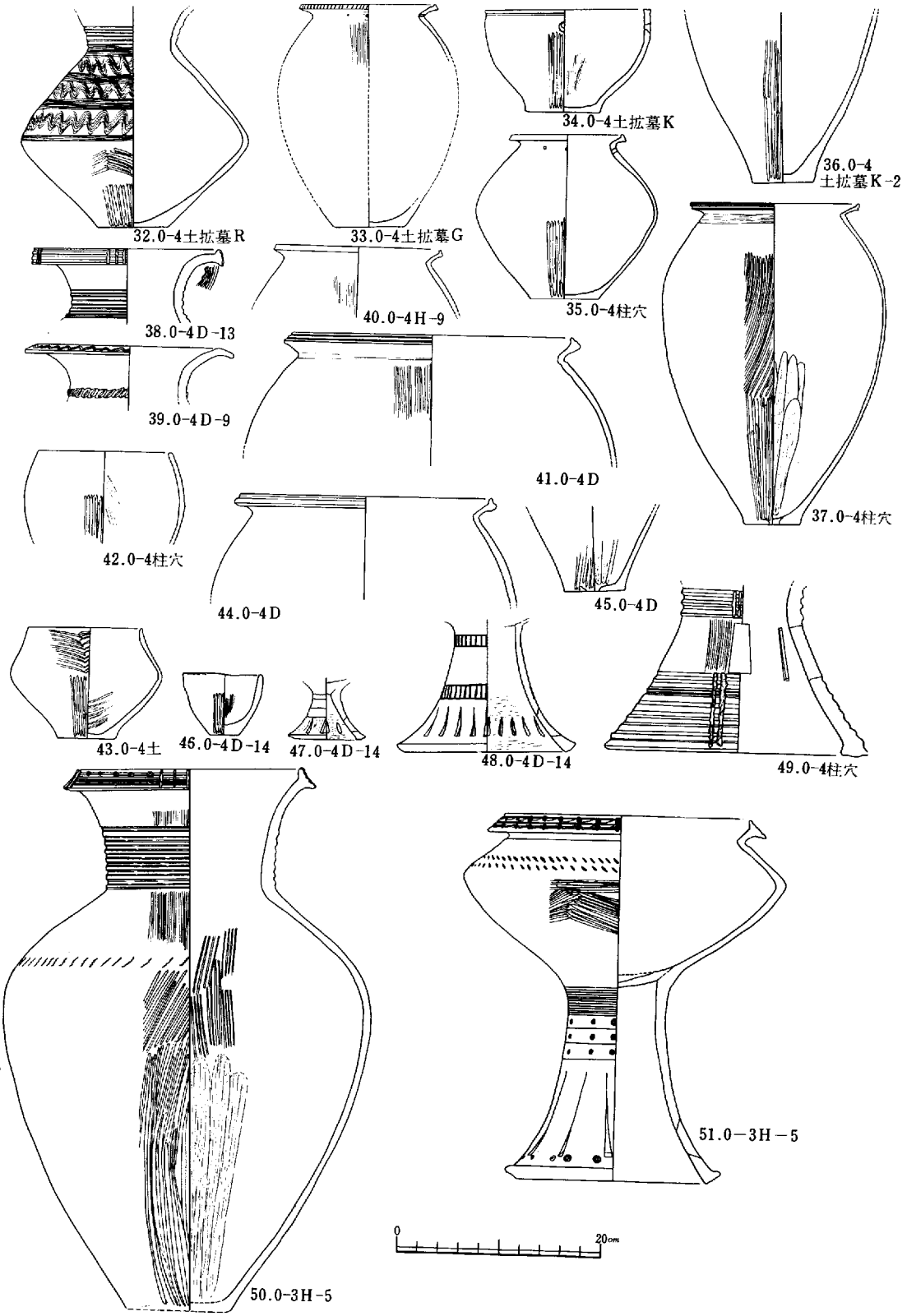
1．黒褐色粘土
2．灰青色粘土
3．黄灰色粘土
4．細砂まじり灰青色粘土
5．灰青色細砂
6．灰褐色粘土
7．灰青色粘土
8．細砂まじり灰青色粘土
9．灰色細砂
10．灰色粘土
11．灰色細砂
12．黒褐色粘土
13．灰褐色粘土
14．灰色粘土
15．淡灰色粘土
16．細砂まじり淡灰色粘土
17．淡灰色粘土まじり細砂
18．青灰色細砂
19．灰黒色粘土



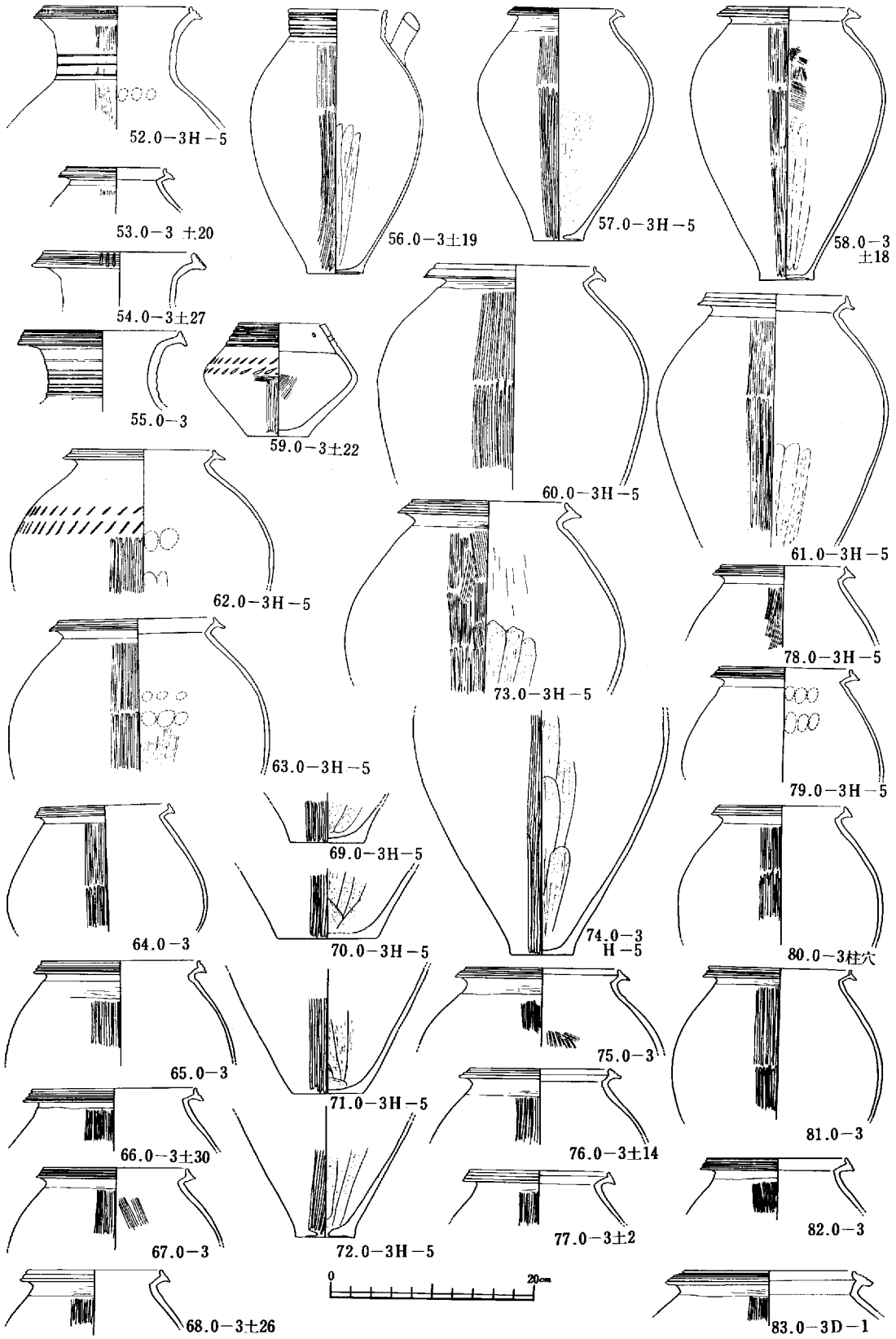
第55図 縄文式土器拓影（$\frac{1}{3}$）



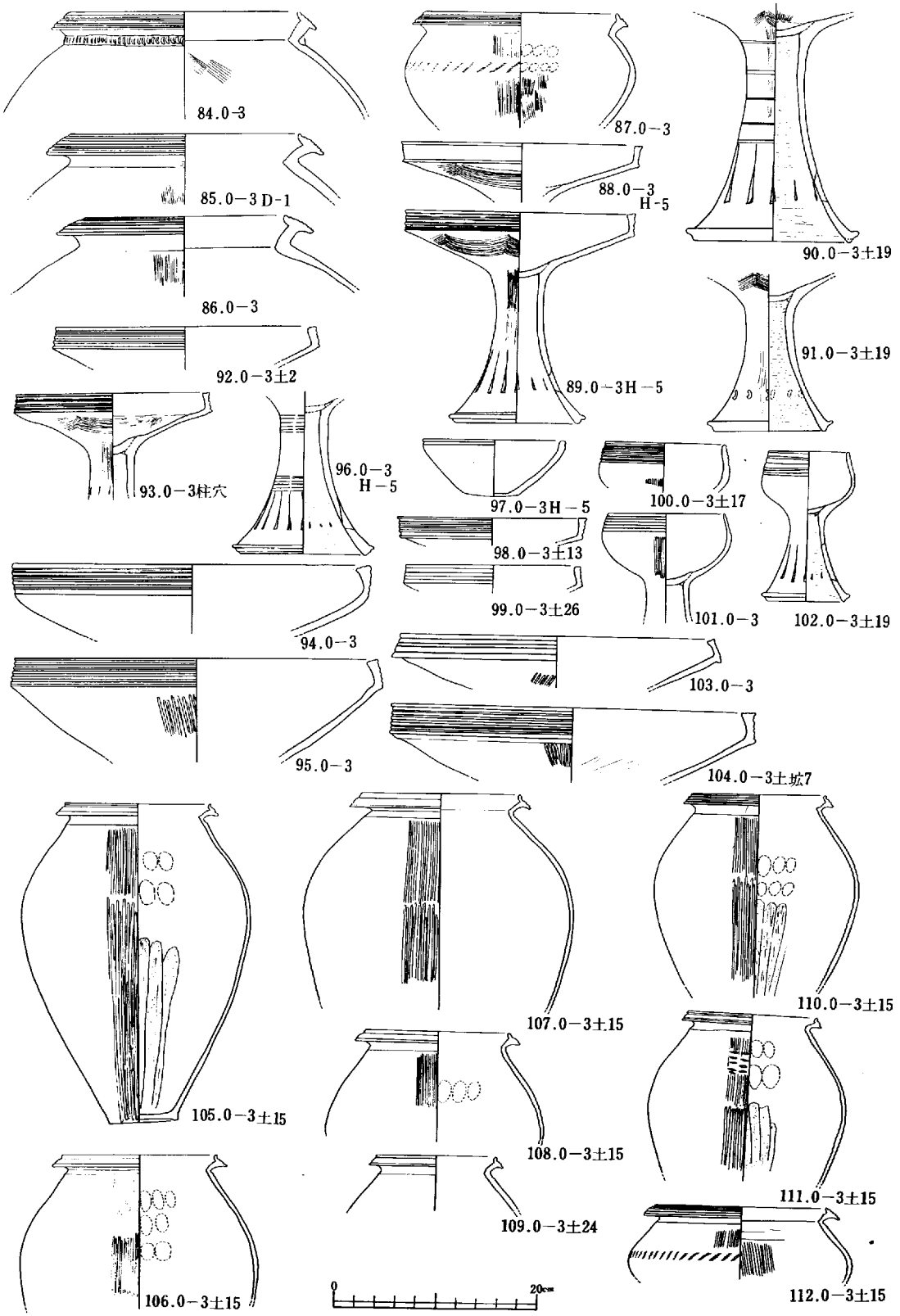
第56図 土器実測図（雄町２類～３類）（$\frac{1}{6}$）



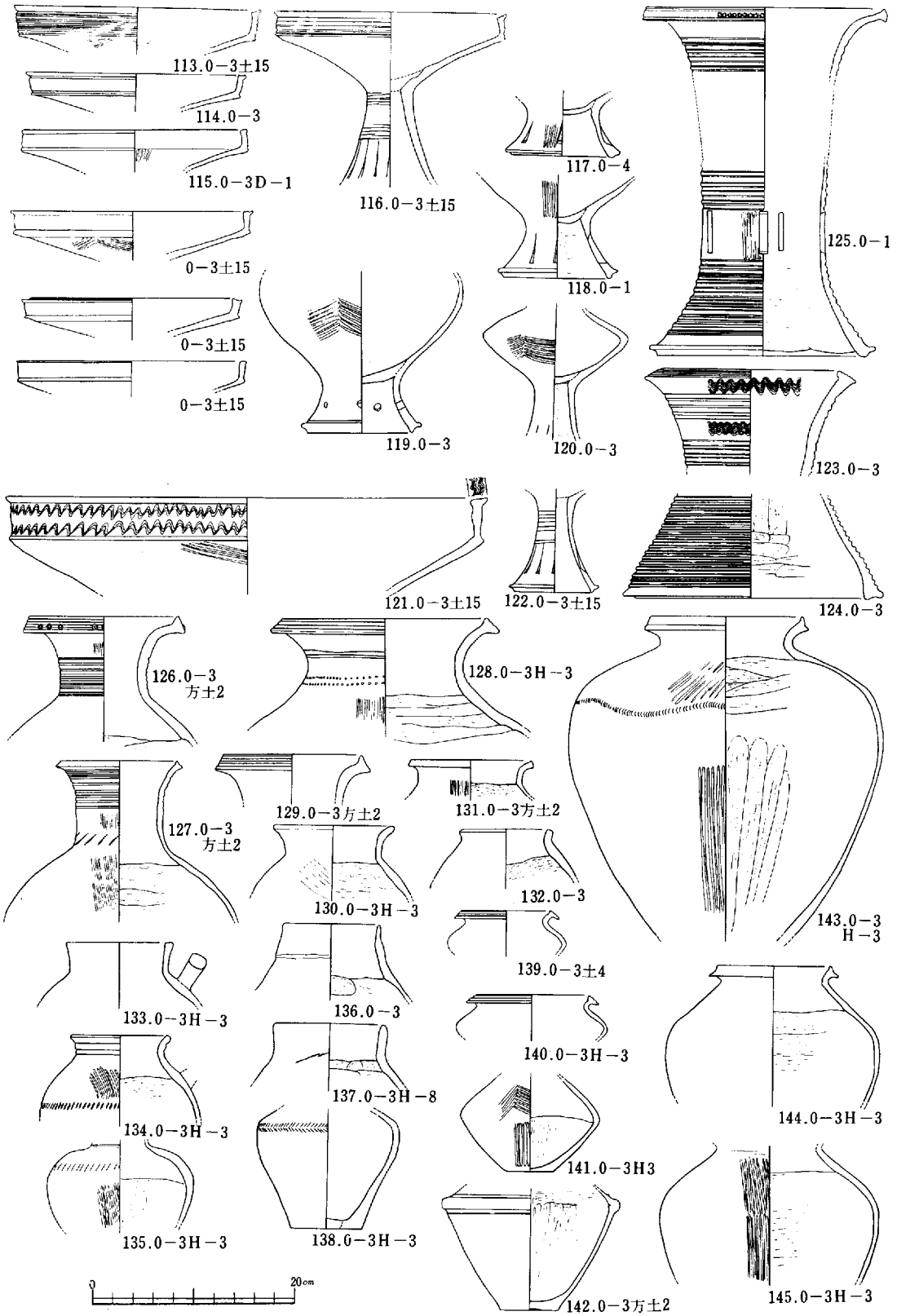
第57図 土器実測図（船山５類，菰池，雄町４類，雄町５類）（$\frac{1}{6}$）



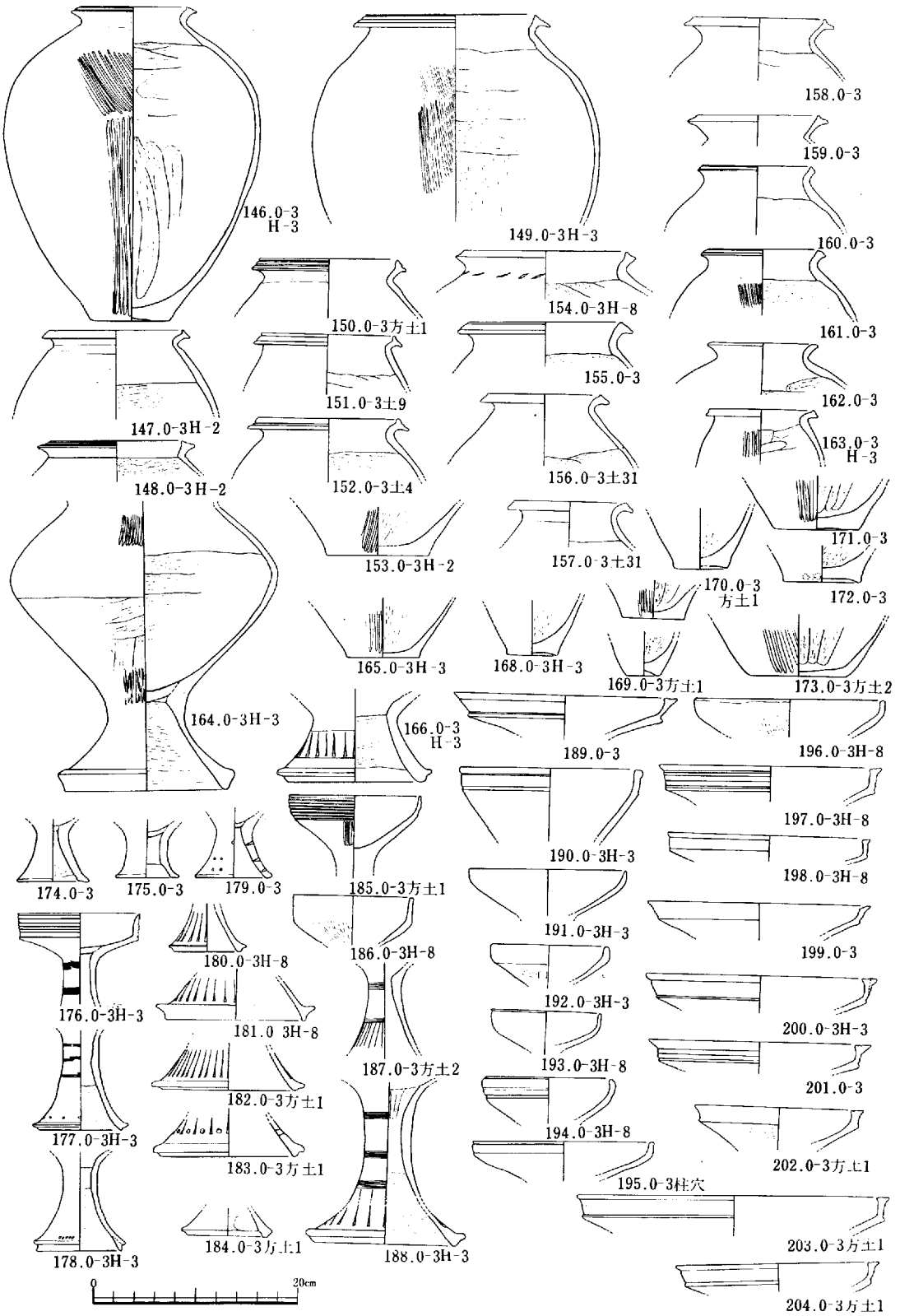
第58図 土器実測図（雄町５類～６類）（$\frac{1}{6}$）



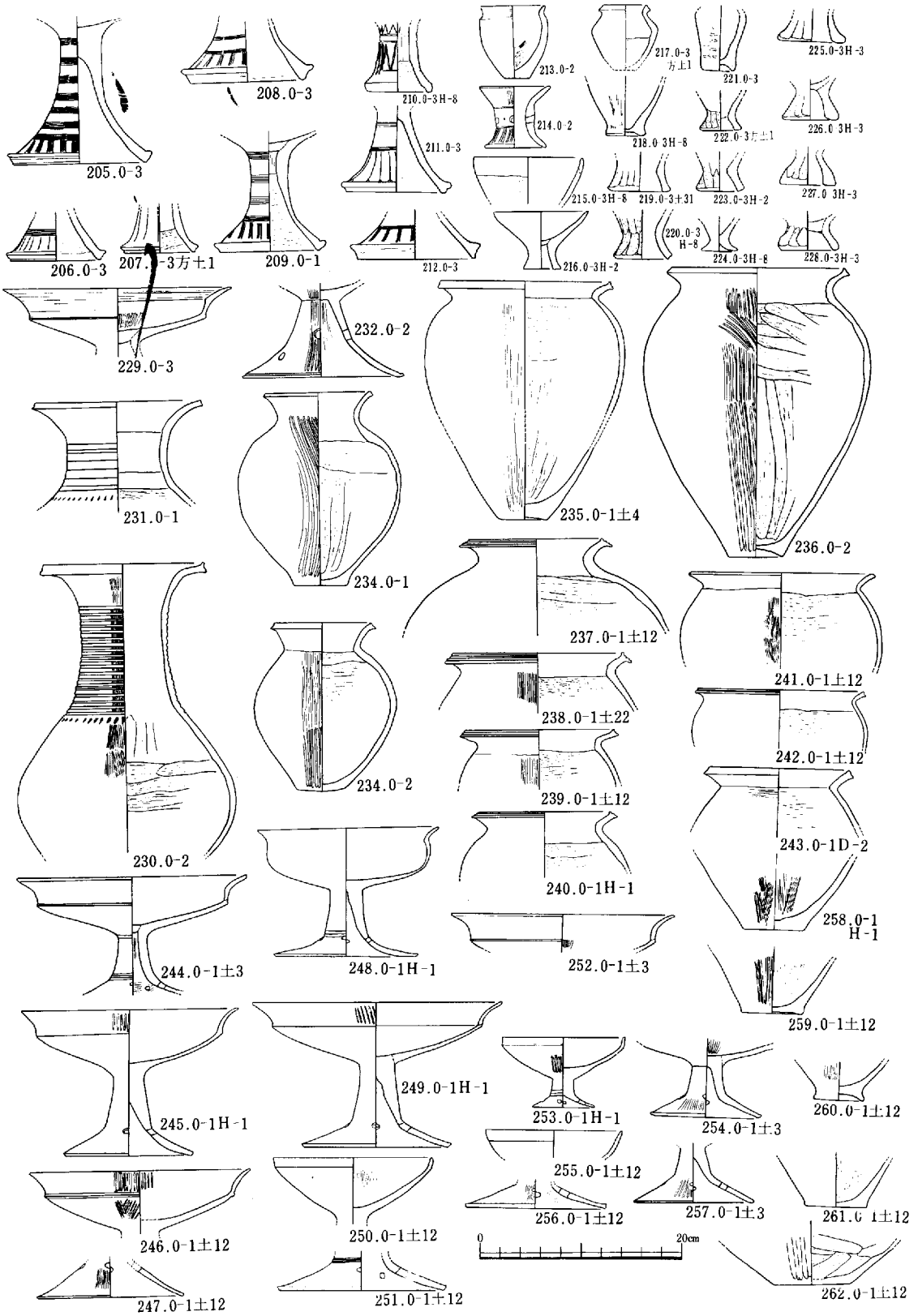
第59図　土器実測図（雄町5類～6類）（$\frac{1}{6}$）



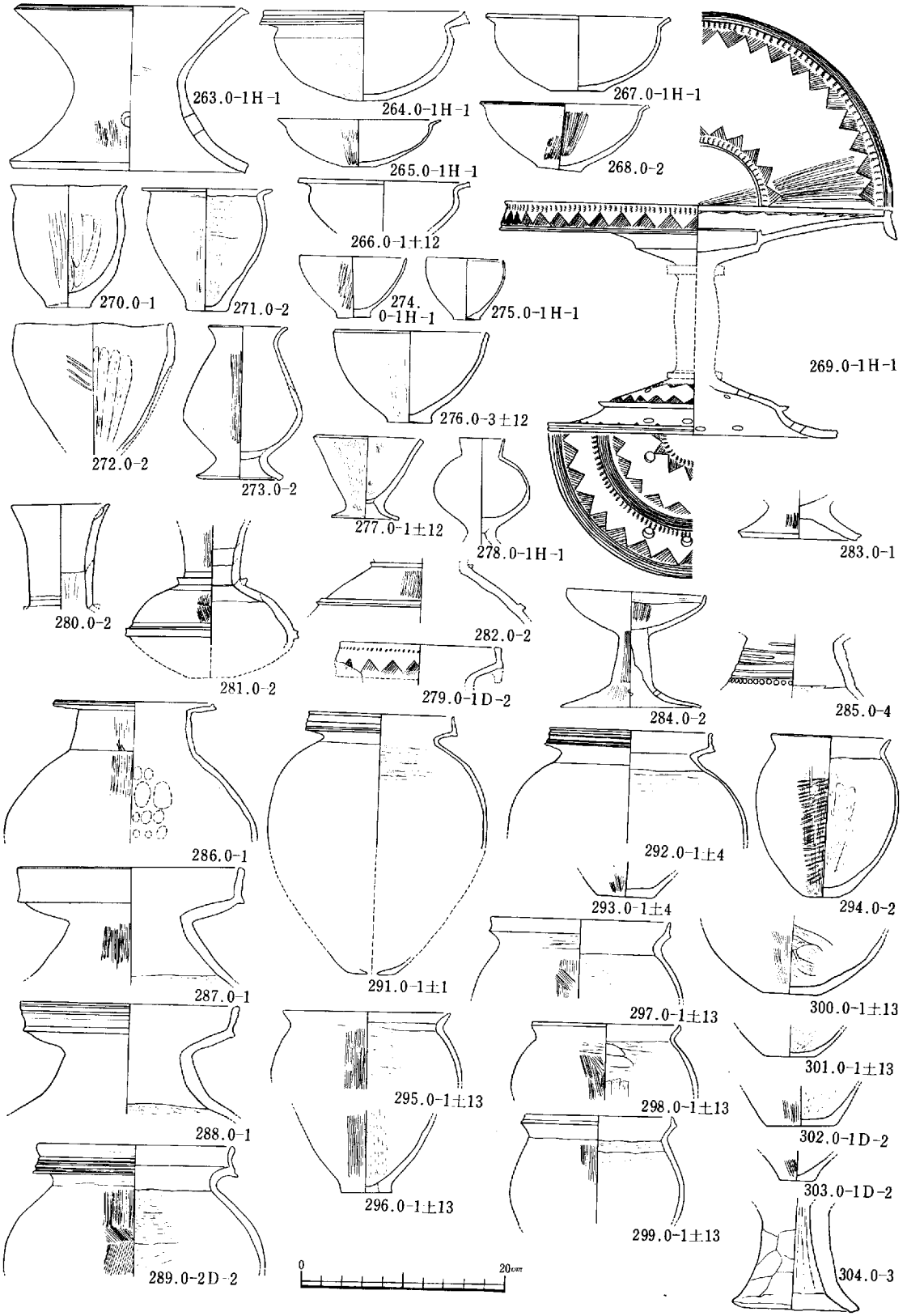
第60図 土器実測図（雄町５類～７類） (1/3)



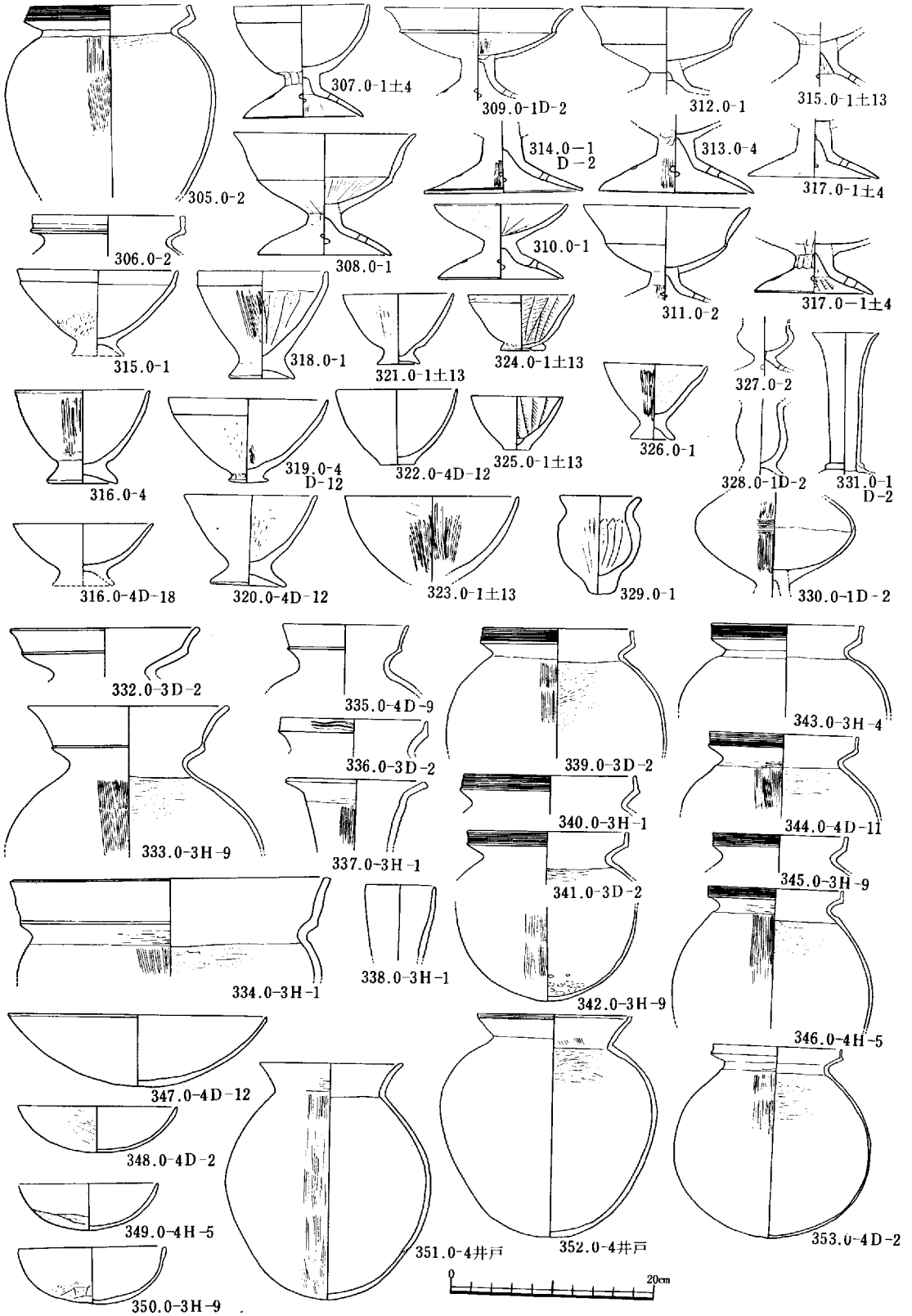
第61図 土器実測図（雄町７類）（$\frac{1}{6}$）



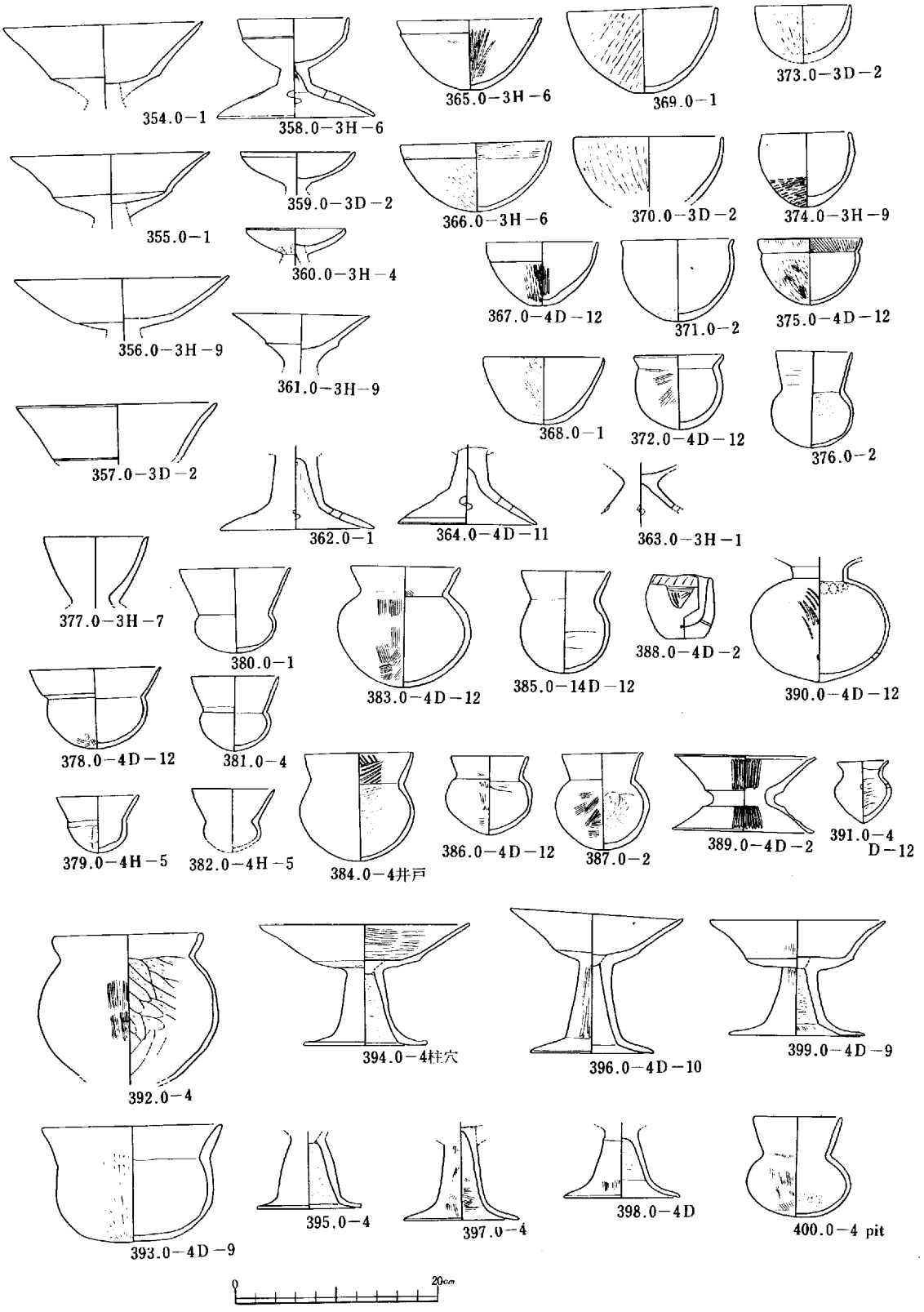
第62図 土器実測図（雄町７類～10類）（1/8）



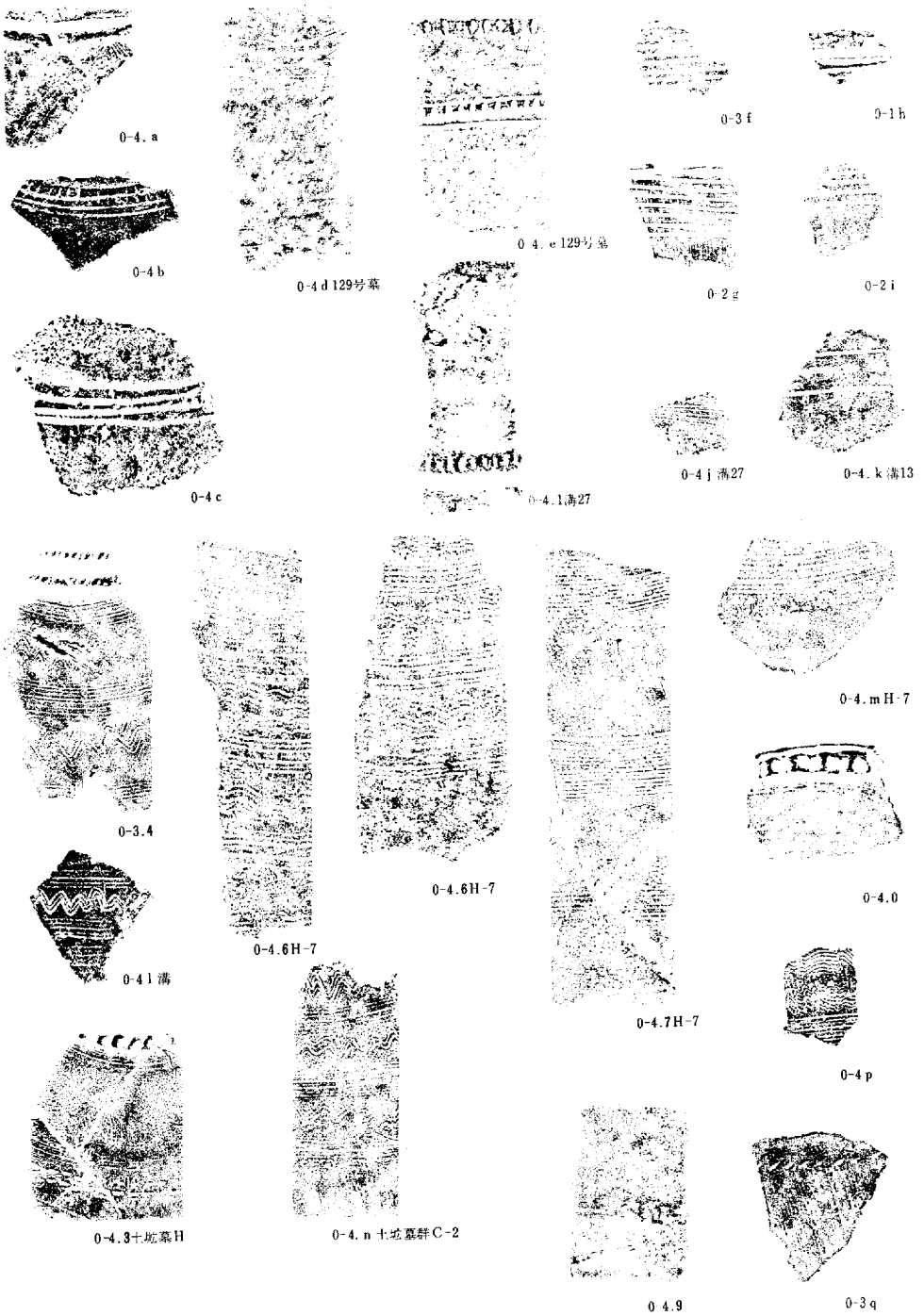
第63図 土器実測図（雄町10類～12類）（$\frac{1}{6}$）



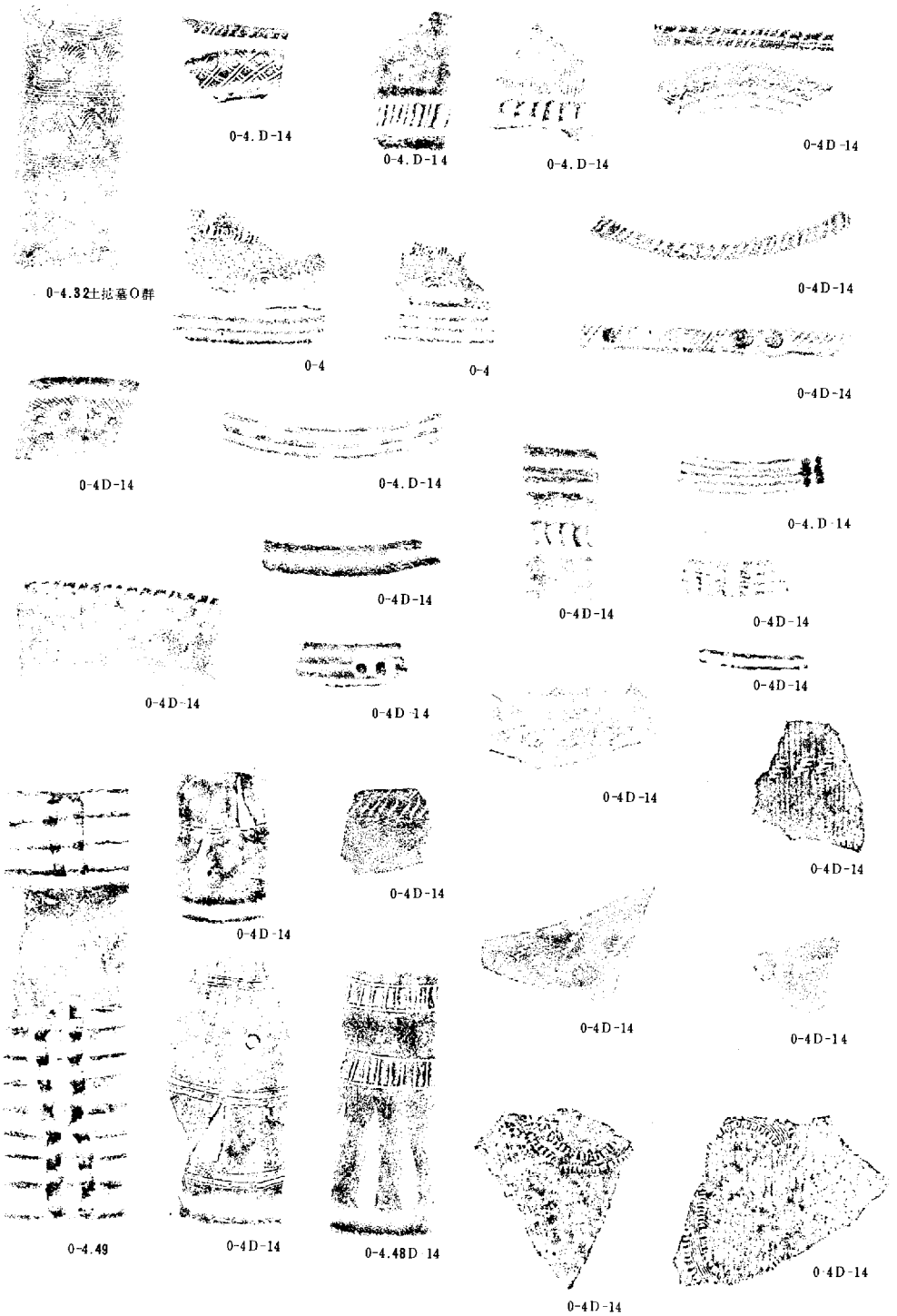
第64図 土器実測図（雄町11類～14類）（$\frac{1}{6}$）



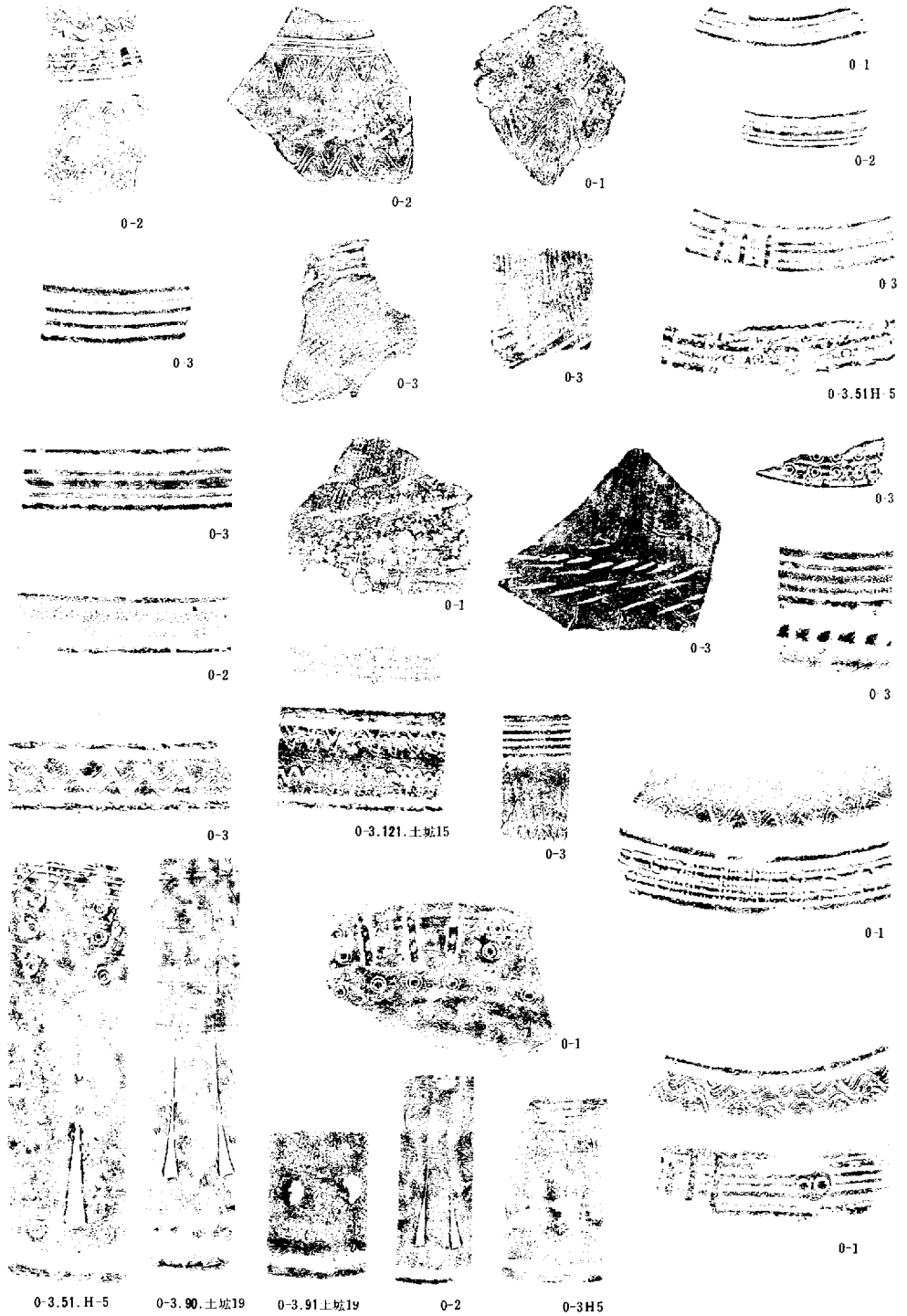
第65図 土器実測図（雄町13類～15類）（$\frac{1}{6}$）



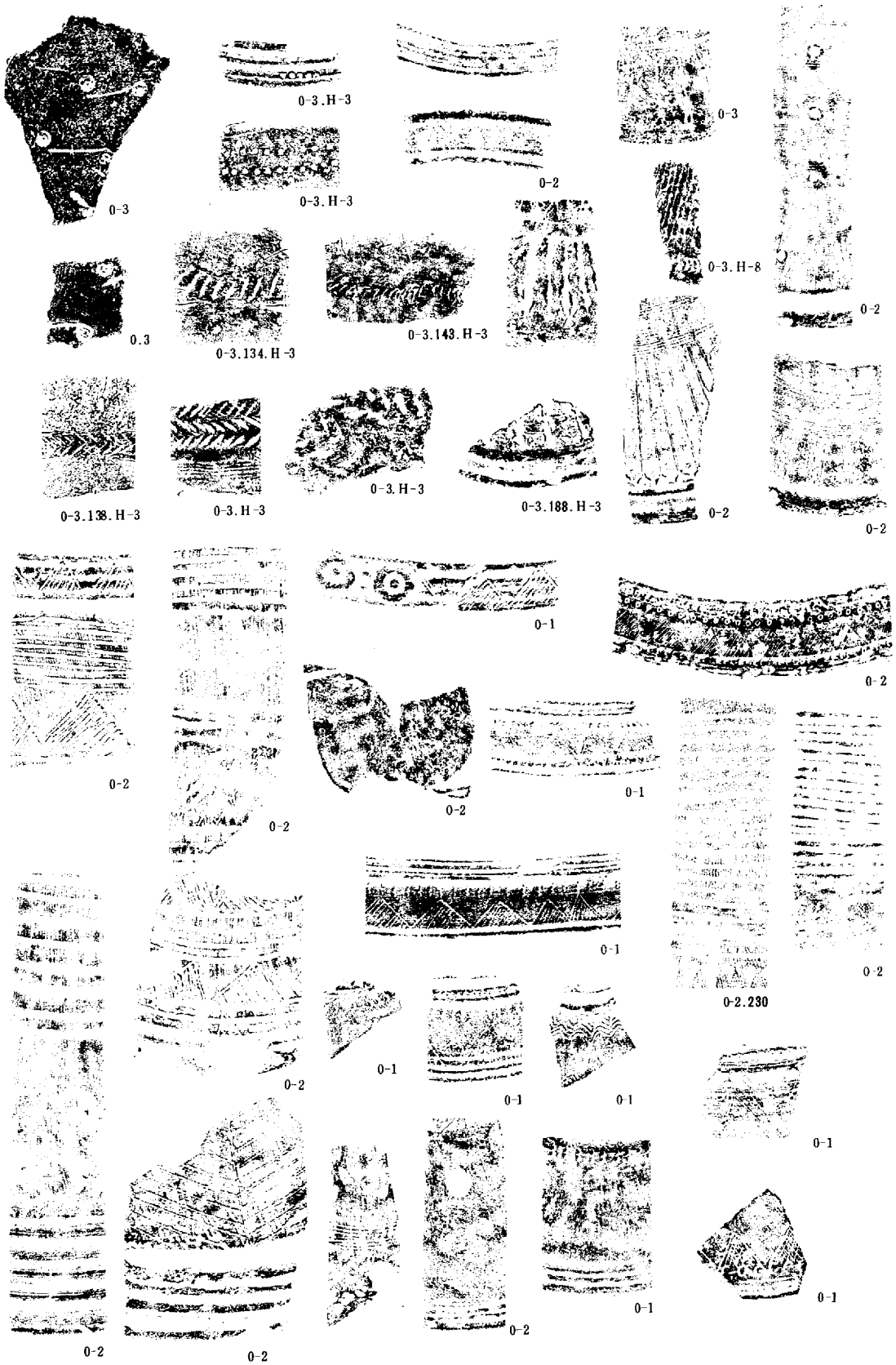
第66図 土器文様（弥生前期，中期）（$\frac{1}{3}$）



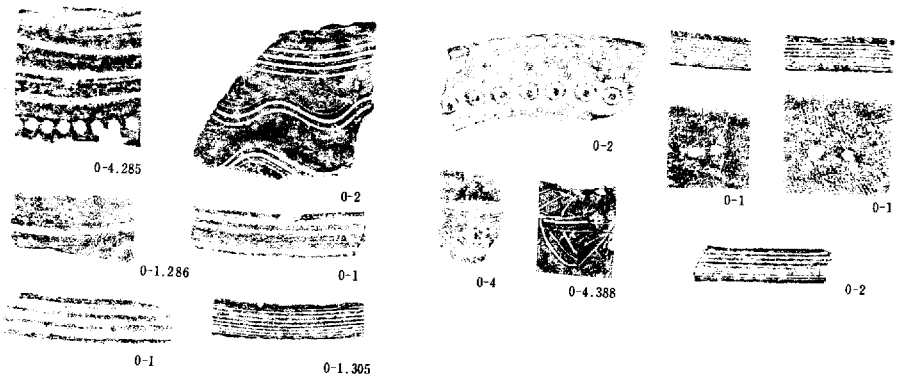
第67図 土器文様（弥生中期）（$\frac{1}{3}$）



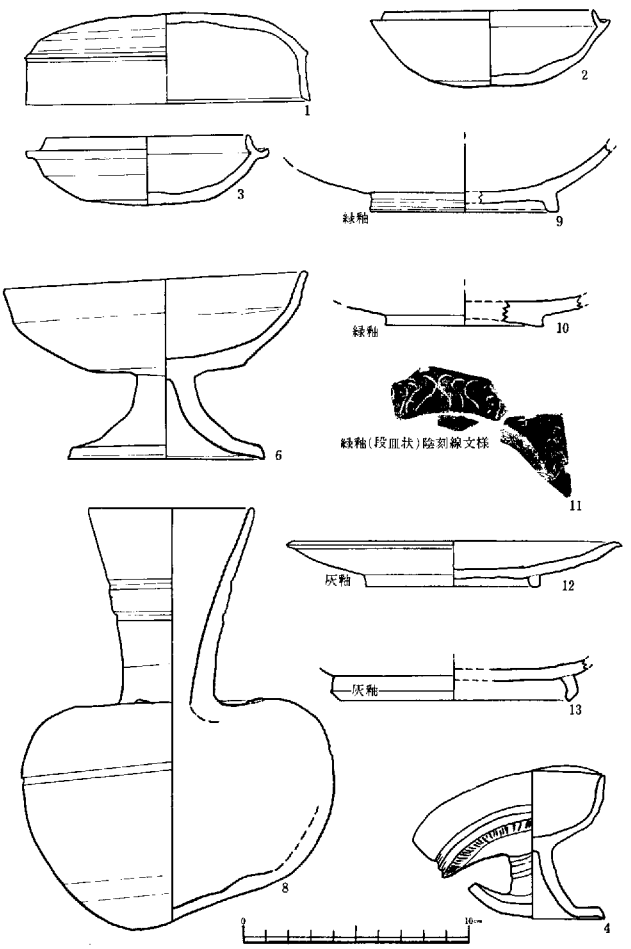
第68図 土器文様（弥生中期）（$\frac{1}{3}$）



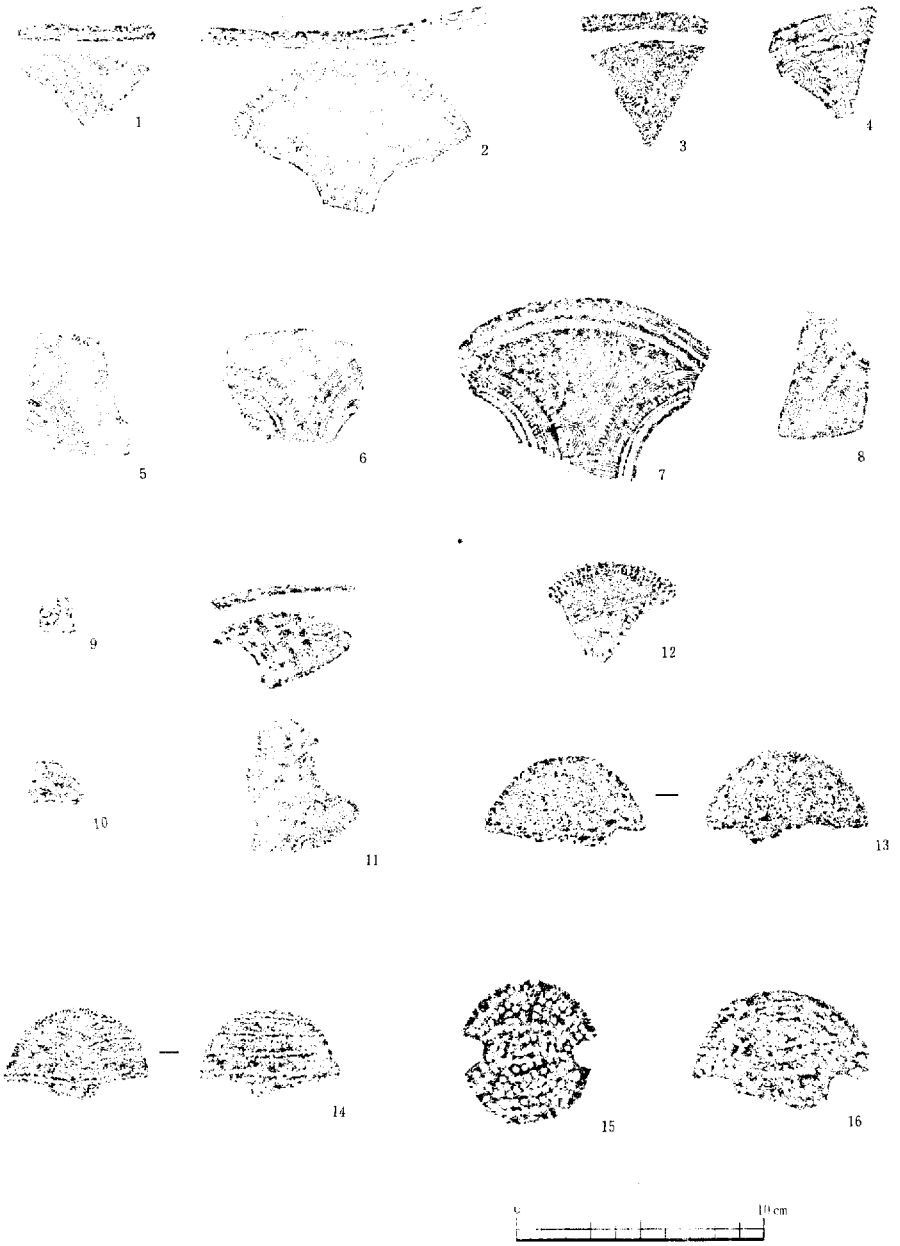
第69図 土器文様（弥生 後期）（$\frac{1}{3}$）



第70図１　土器文様（弥生後期，土師器）（$\frac{1}{3}$）

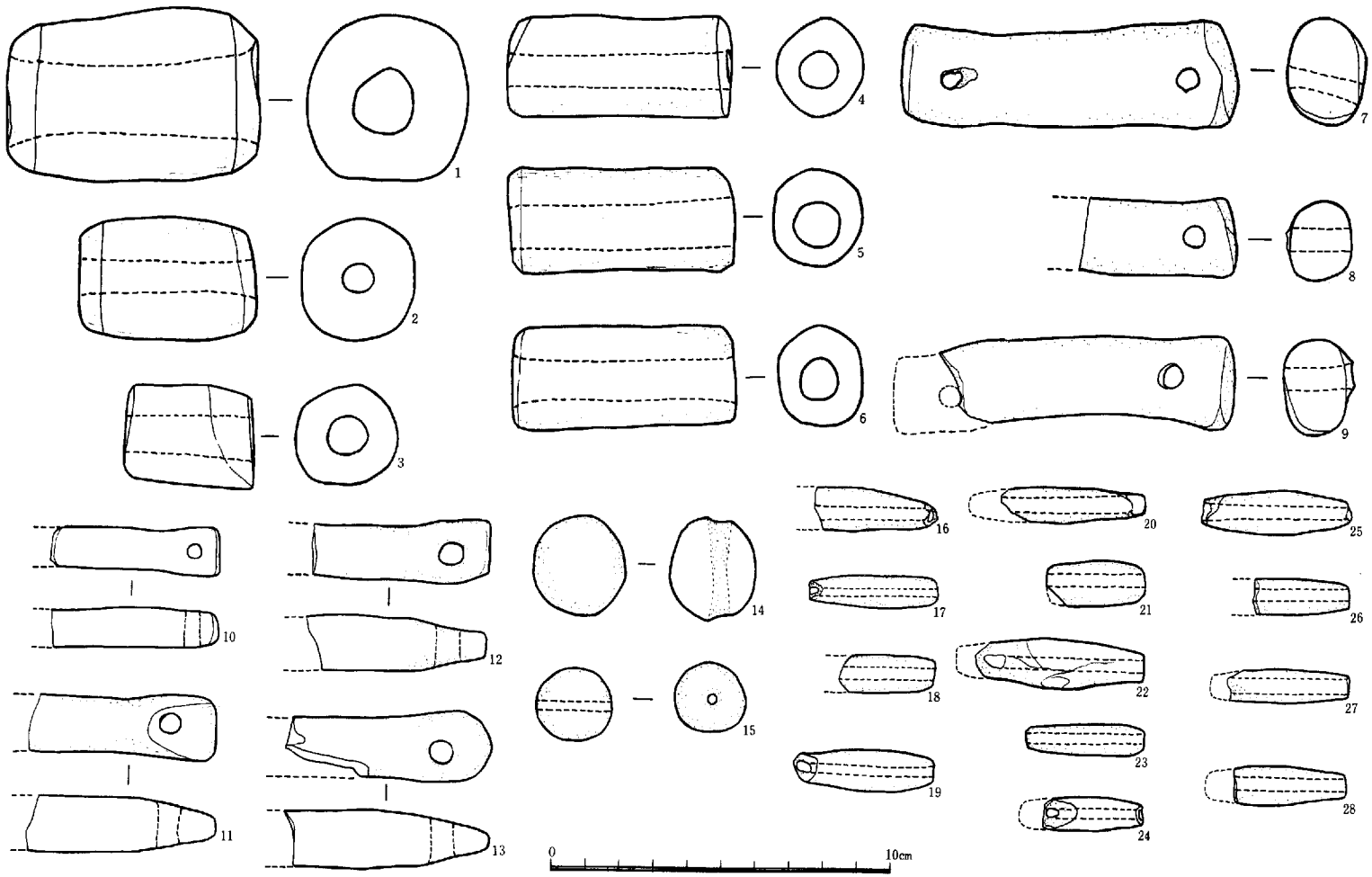


第70図２　須恵器 緑釉，灰釉実測図

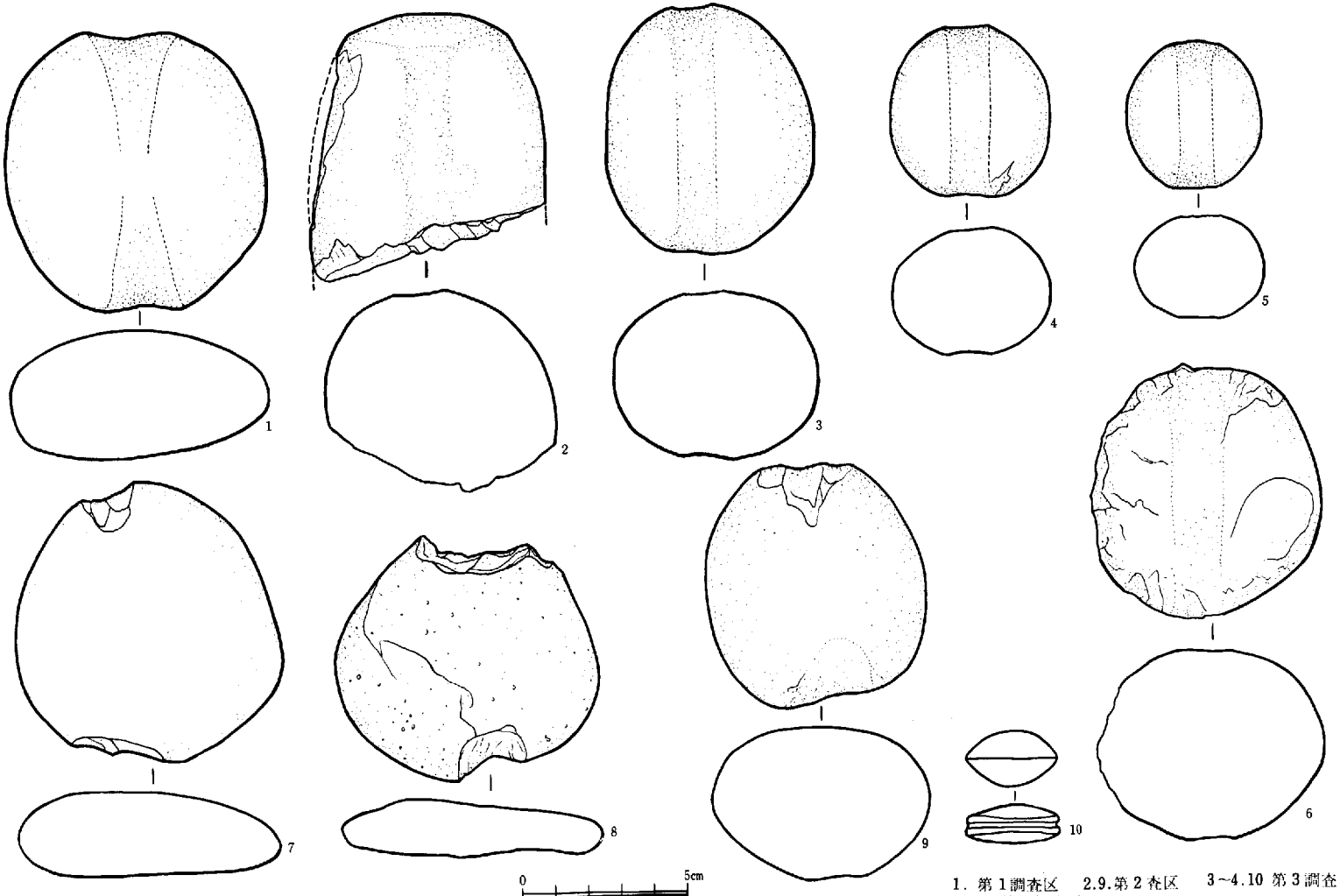


第71図 分銅形土製品拓影（$\frac{1}{3}$）

4．5第1調査区包含層　6．第2調査区包含層　13.14 第3調査区H－3埋土
8.12.15 第3調査区H－5埋土　16 第3調査区H－8埋土
1～3．9 第3調査区包含層　11.第4調査区H－9埋土　7.第4調査区溝
10.第4調査区包含層

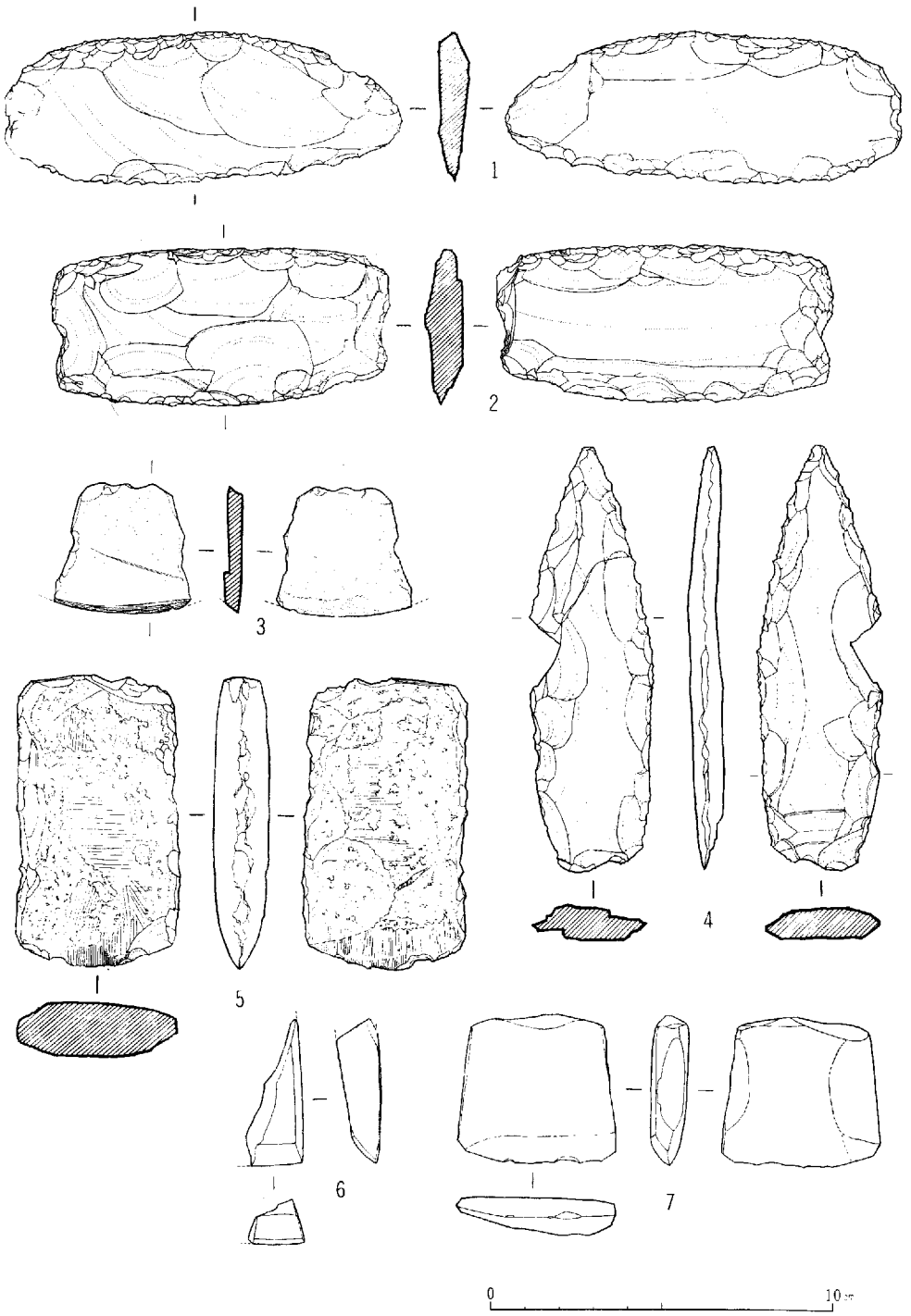

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
0
10cm

第 72 図 土 錘 実 測 図

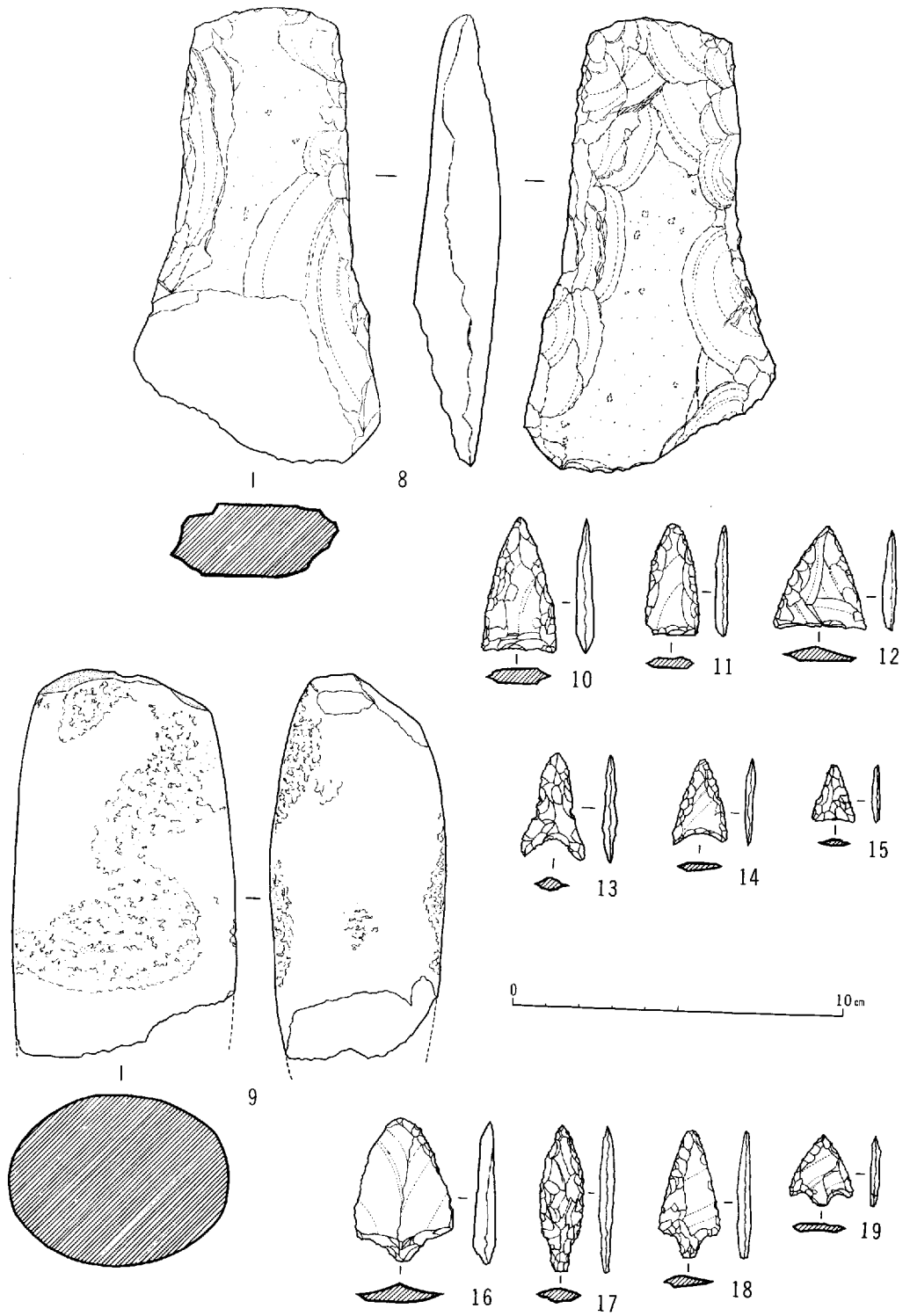


1. 第1調査区　2.9.第2査区　3~4.10 第3調査区
6~8. 第4調査区

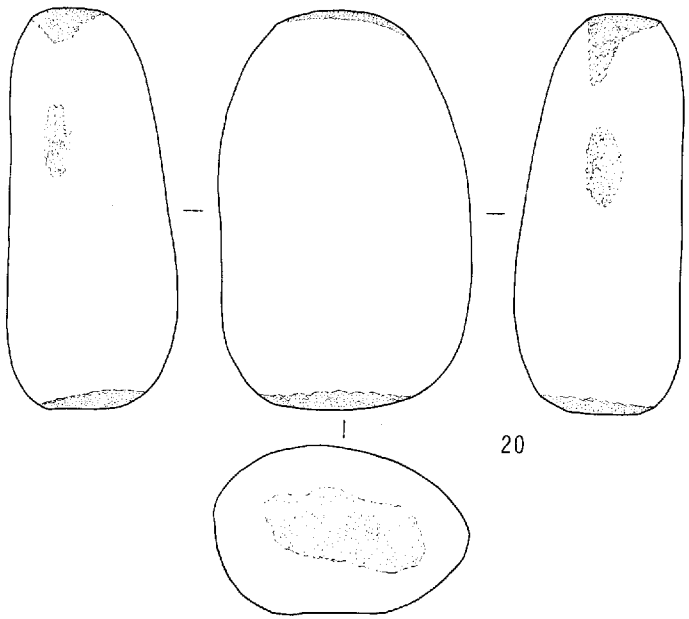
第 73 図 石 錘 実 測 図

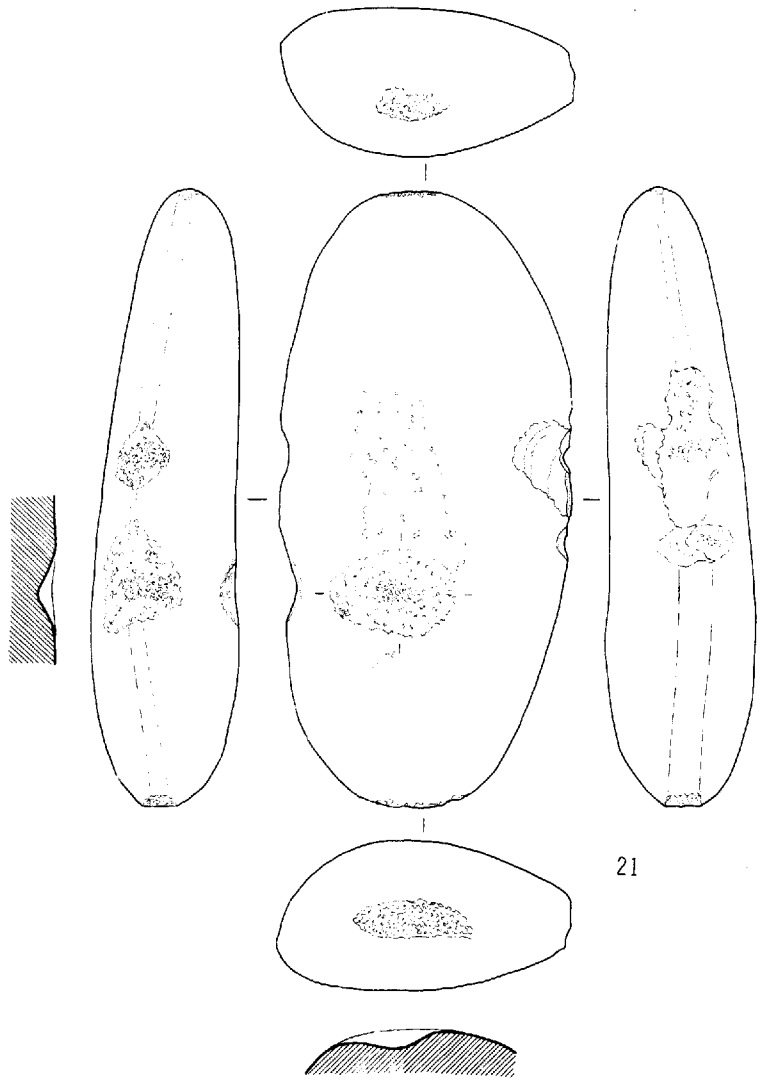


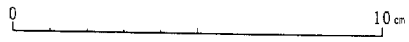
第74図 石庖丁，石槍，磨製石斧，扁平片刃石斧実測図（$\frac{1}{2}$）



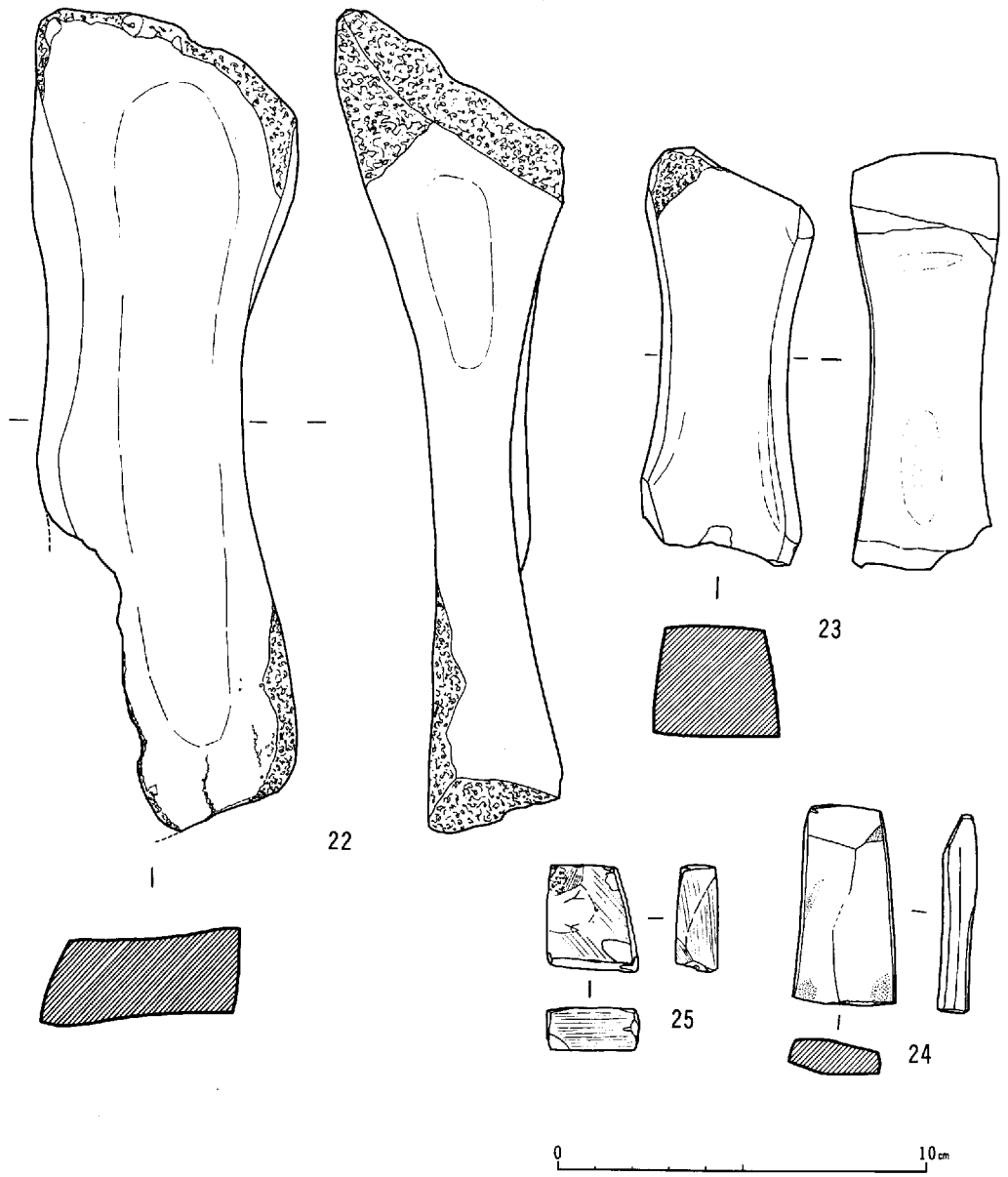
第75図 打製石斧，太型蛤刃石斧，石鏃実測図（$\frac{1}{2}$）



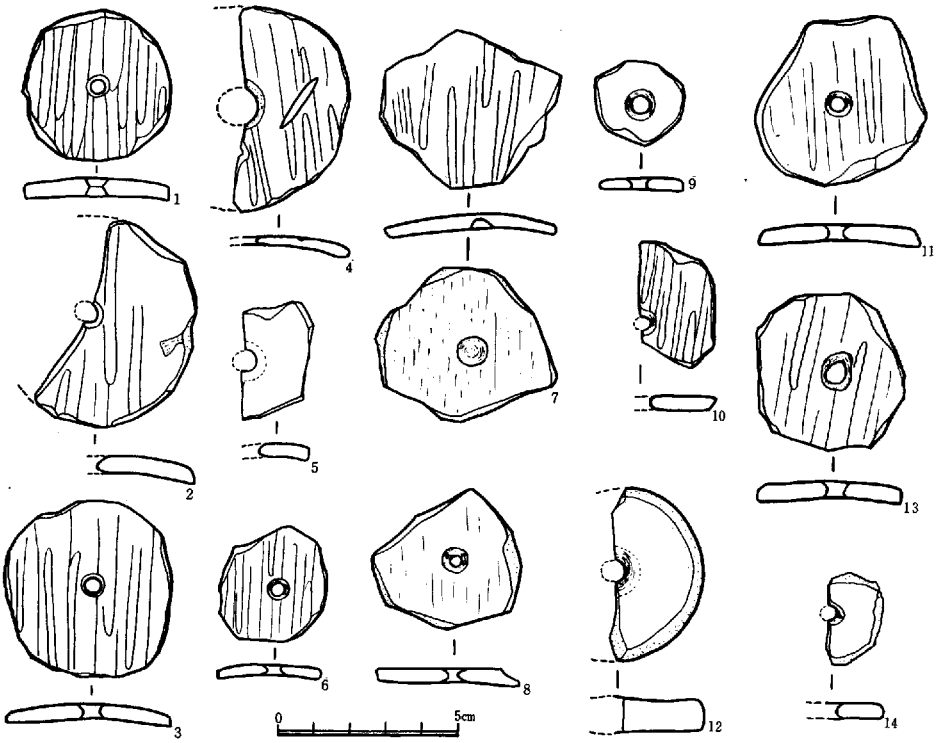




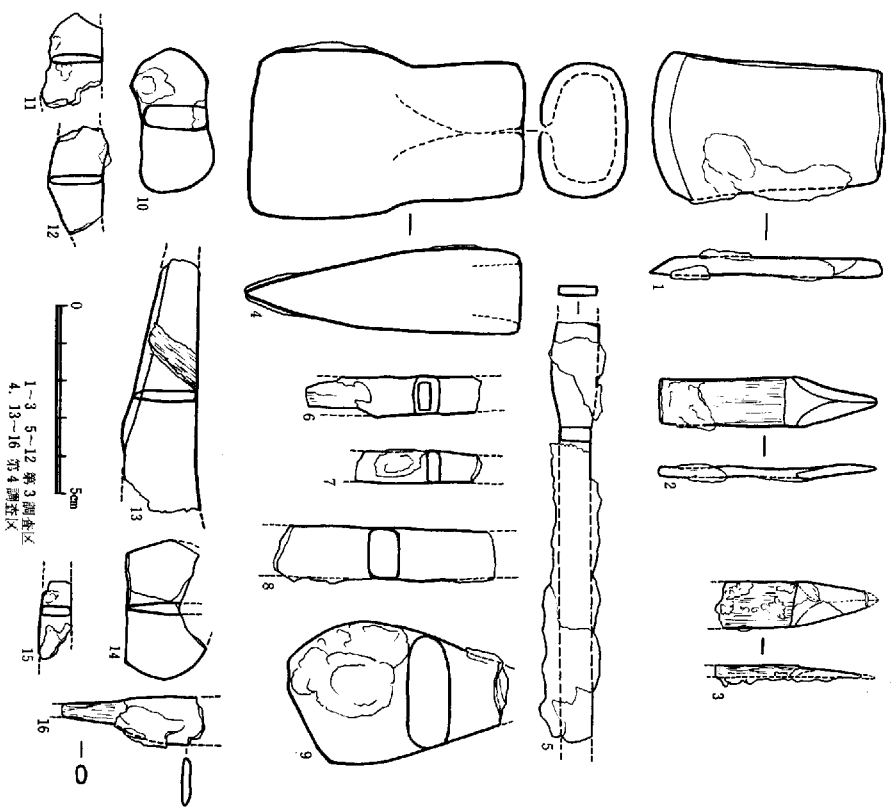
第76図 叩石実測図（$\frac{1}{3}$）



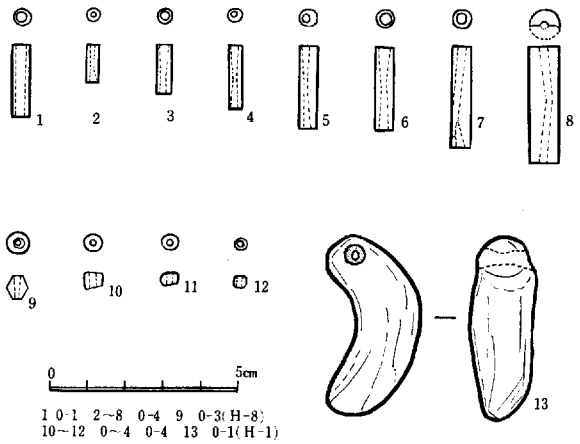
第77図 砥石実測図（$\frac{1}{2}$）



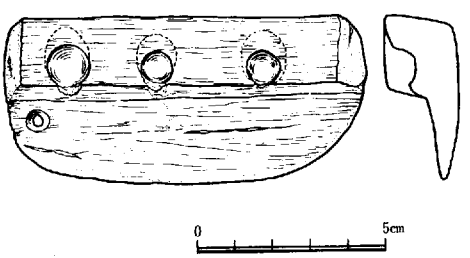
第78図1　紡錘車実測図



第78図2　鉄器実測図



第 79 図 1　玉 類



第79図2　火 き り 臼

1　不老山東口古窯址遠景（前面から）

不老山図版 I

2　不老山東口古窯址（後背部から）

1　不老山東口古窯址灰原東西断面　（南から）

不老山図版 2

2　不老山東口古窯址灰原南北断面南側（東から）

1　不老山東口古窯址　灰原南北断面北側（東から）

2　不老山東口古窯址　ピットI（東から）

1　不老山東口古窯址，溝及び土塁（南から）

2　不老山東口古窯址，溝及び土塁断面　I（北から）

3　不老山東口古窯址，溝及び土塁断面　II（南から）

不老山図版 4

1　不老山東口古窯址　窯体と前庭部（東から）

不老山図版 5

2　不老山東口古窯址　窯体部（東から）

1　不老山東口古窯址　焼成室（東から）

不老山図版 6

2　不老山東口古窯址　窯体（西から）

1　不老山東口古窯址　焼成室南窯壁

不老山図版 7

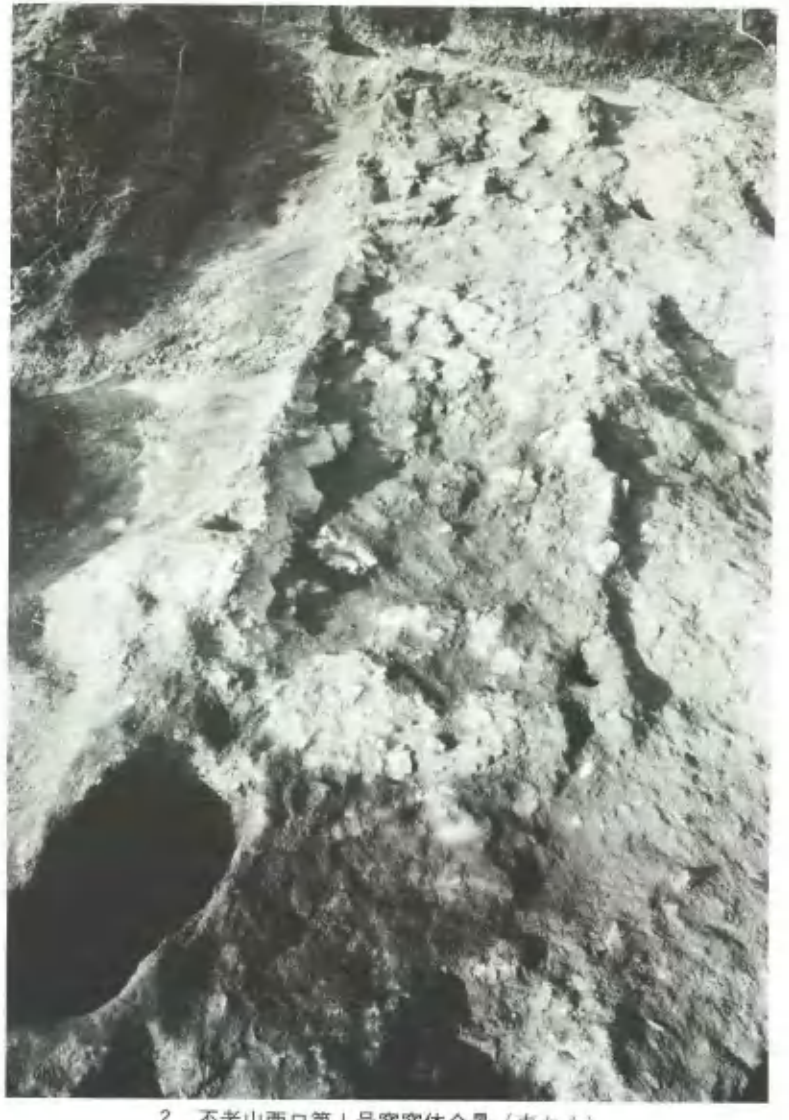
2　不老山東口古窯址　焼成室北窯壁と床面切断面

1　不老山西口古窯址遠望（南から）

不老山図版 8

2　不老山西口第２号窯東側壁（西から）

1　不老山西口第２号窯窯体全景（南から）



2　不老山西口第１号窯窯体全景（南から）

1　不老山西口第1号窯焼成室上部縦断面　（東から）

不老山図版10

2　不老山西口第1号窯焼成室下部縦断面　（東から）

1　不老山西口第２号窯焼成室と煙道との接続部

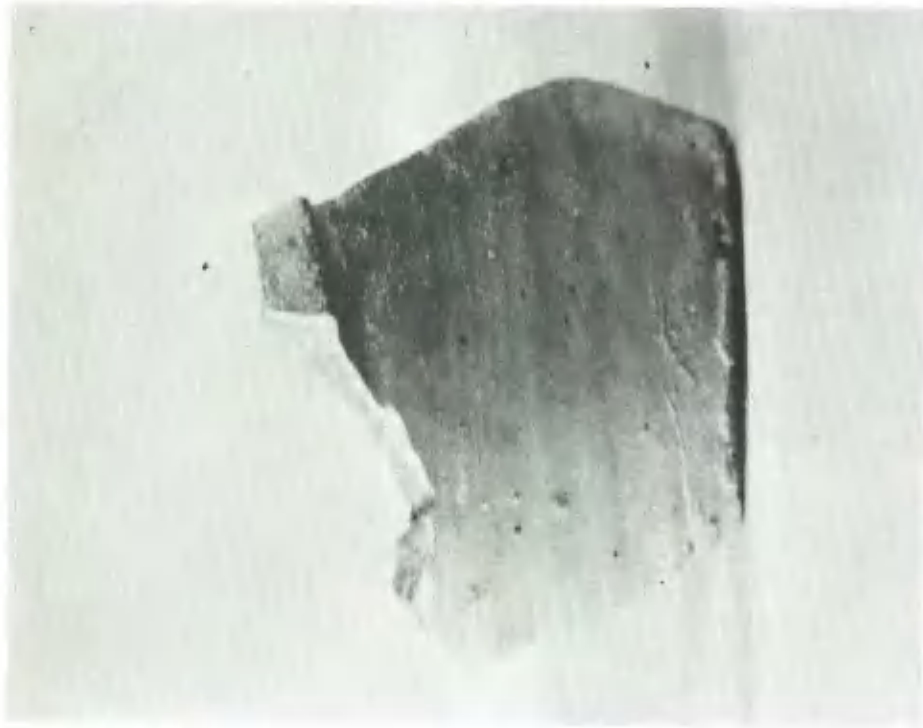
不老山図版11

2　不老山西口第２号窯西側壁及び天井残存体裏面

不老山図版12

不老山東口出土遺物

2　不老山西口第1号窯出土捕鉢



1　不老山西口第2号窯出土捕鉢

不老山図版13

1　船山遺跡（北西より）

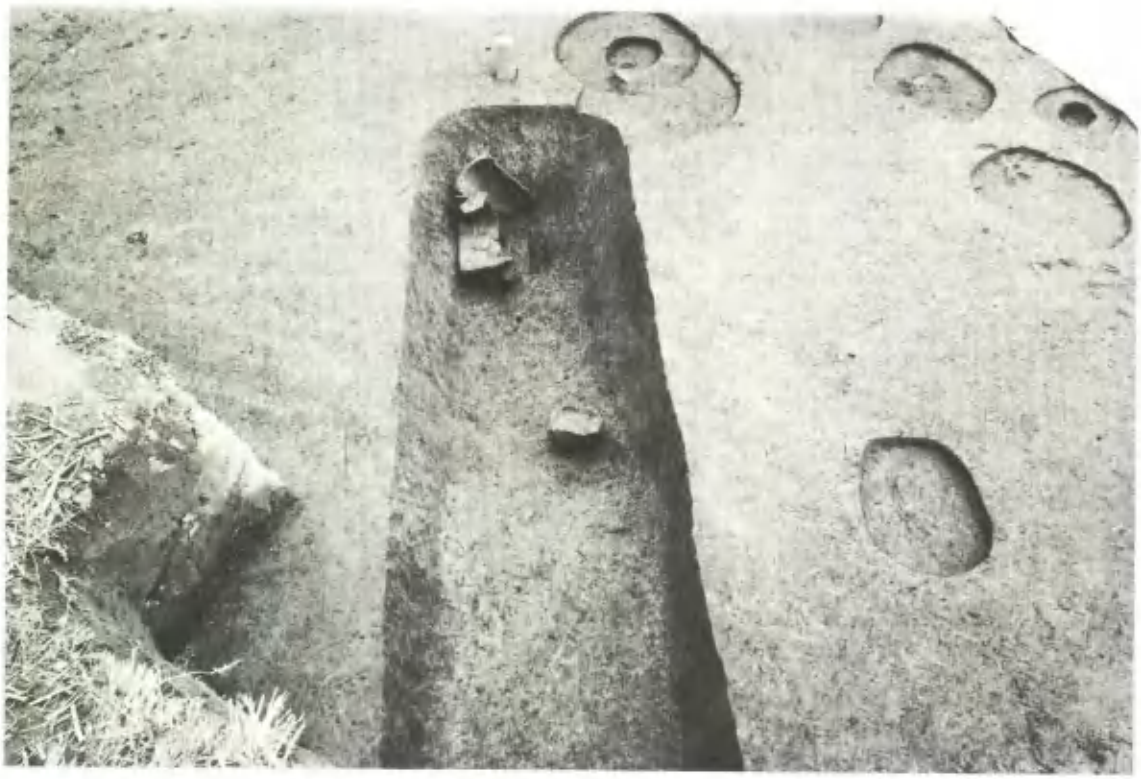
船山図版 I

2　1号住居址（北より）

1　2号住居址（北より）

船山図版2

2　4号住居址（北より）



1　舟形土坑1（西より）

船山図版3

2　土　坑1（南より）

1　土　坑16（北より）

船山図版4

2　溝2断面（南より）

1

2

a

b

14

d

c

船山図版 5

土器，石器

11

7

8

15

22

30

27

34

35

船山図版 6

土　器

1　大門，鶴山丸山古墳を望む（北西より）

大門図版 I　　2　古墳時代前期溝断面

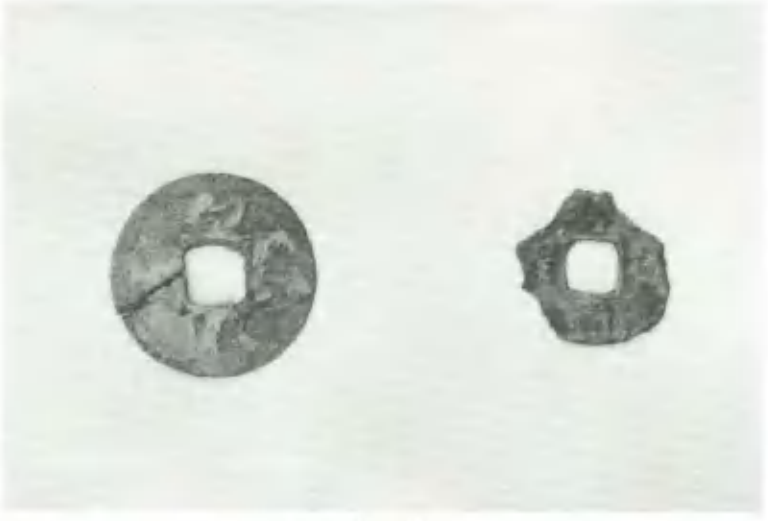
1　窯柳塚主体部（東より）

大門図版 2

2　築地状遺構（北東より）

1　築地状遺構に伴う暗渠（北東より）

大門図版 3　　2　石散布状況（北東より）



2　銅　銭

3　瓦

1　条里制溝

1　第1調査区発掘前（東より）

雄町図版1　　2　第1調査区1号住居址（南より）

1　第Ⅰ調査区　1号住居址（南より）

雄町図版2

2　第Ⅰ調査区　2号住居址（南より）

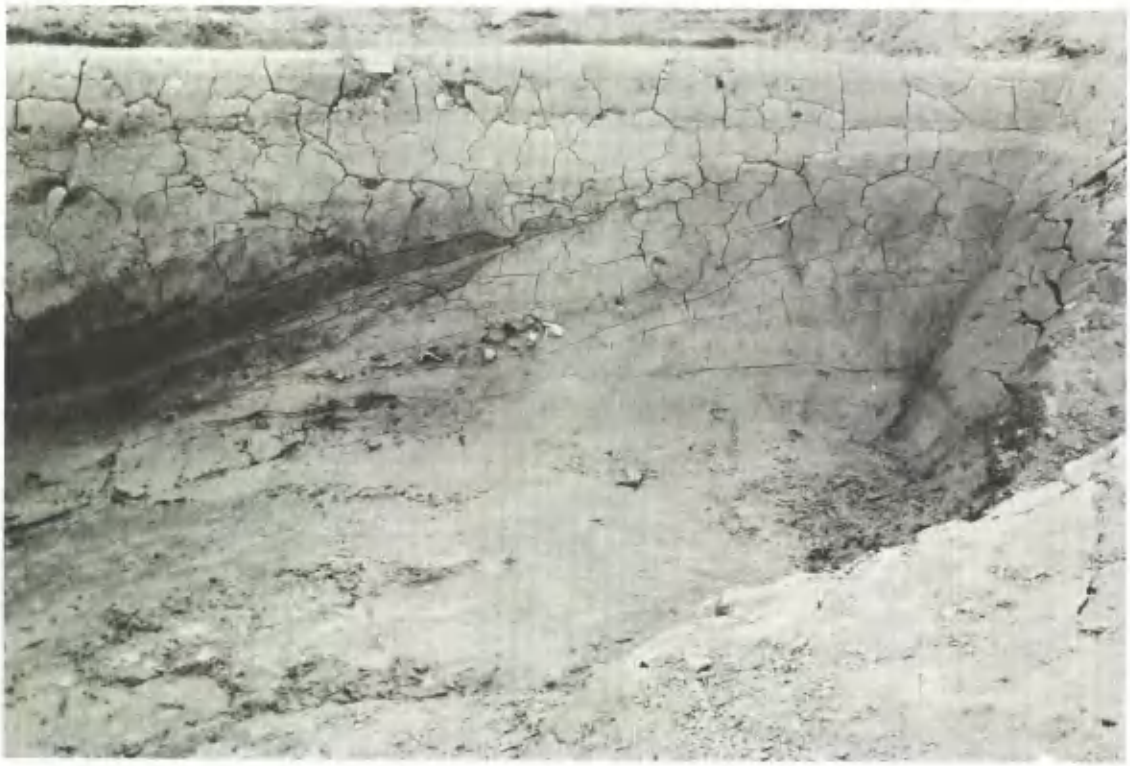
1　第Ⅰ調査区甕棺（北側より）

雄町図版 3

2　第Ⅰ調査区甕棺（西側より）

1　第Ⅰ調査区土坑 3

雄町図版 4　　2　第Ⅰ調査区土坑 8



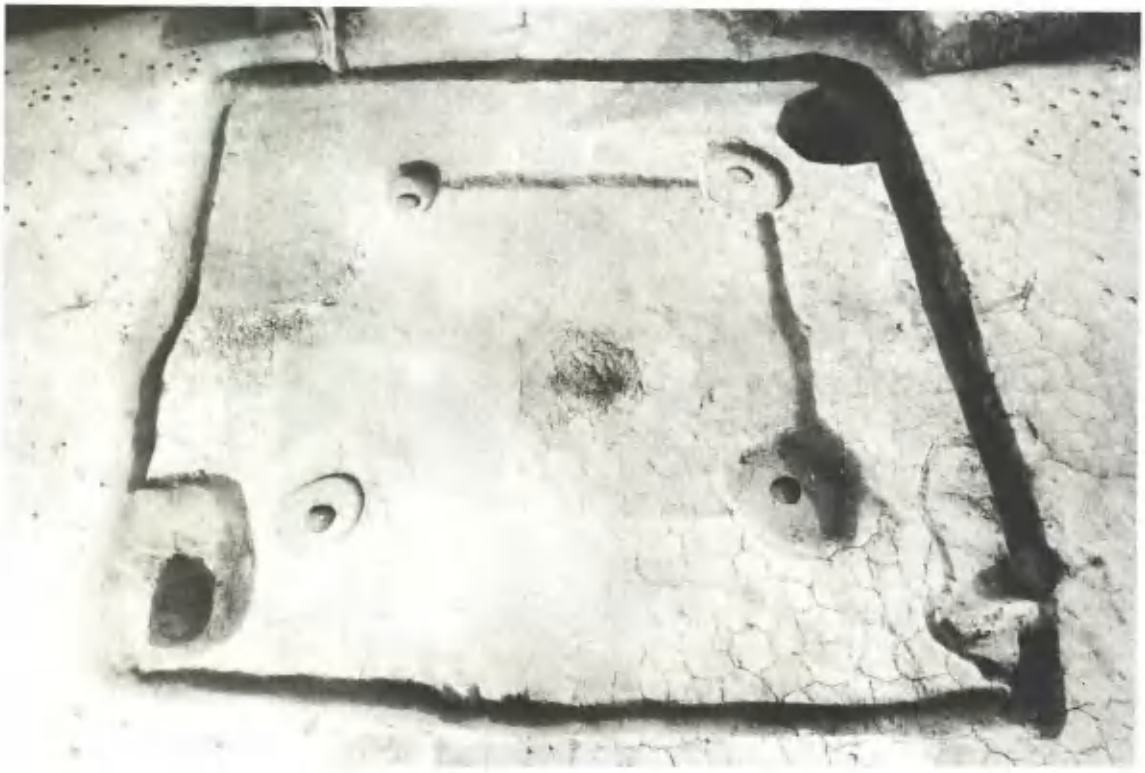
1　第2調査区土層断面（東より）

雄町図版5　　2　第2調査区遺物包含層

1　第2調査区石敷（南西より）

雄町図版6

2　第2調査区井戸（西側より）



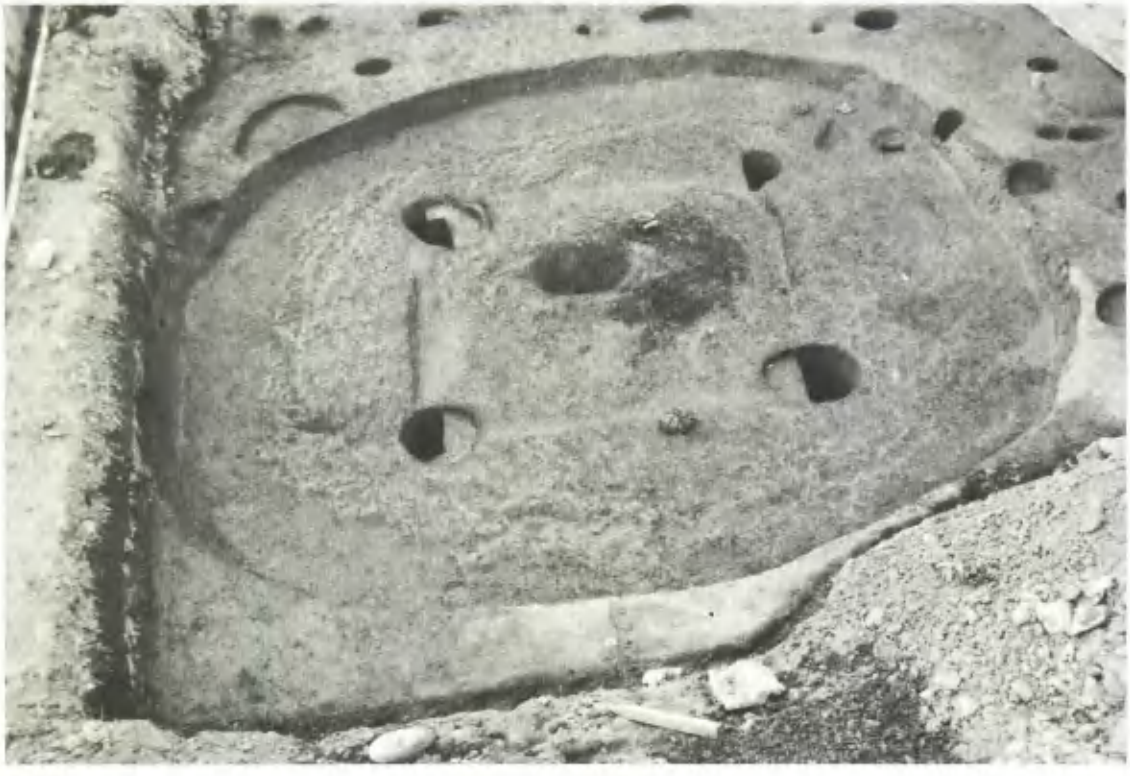
1　第3調査区1号住居址（北より）

雄町図版7　　2　第3調査区2号住居址（南より）

1　第3調査区3号住居址（東より）

雄町図版8　　2　第3調査区3号住居址（南より）

1　第3調査区4号住居址（南より）



雄町図版9

2　第3調査区6号住居址（西より）

1　第3調査区5号住居址遺物出土状況（南より）

雄町図版10

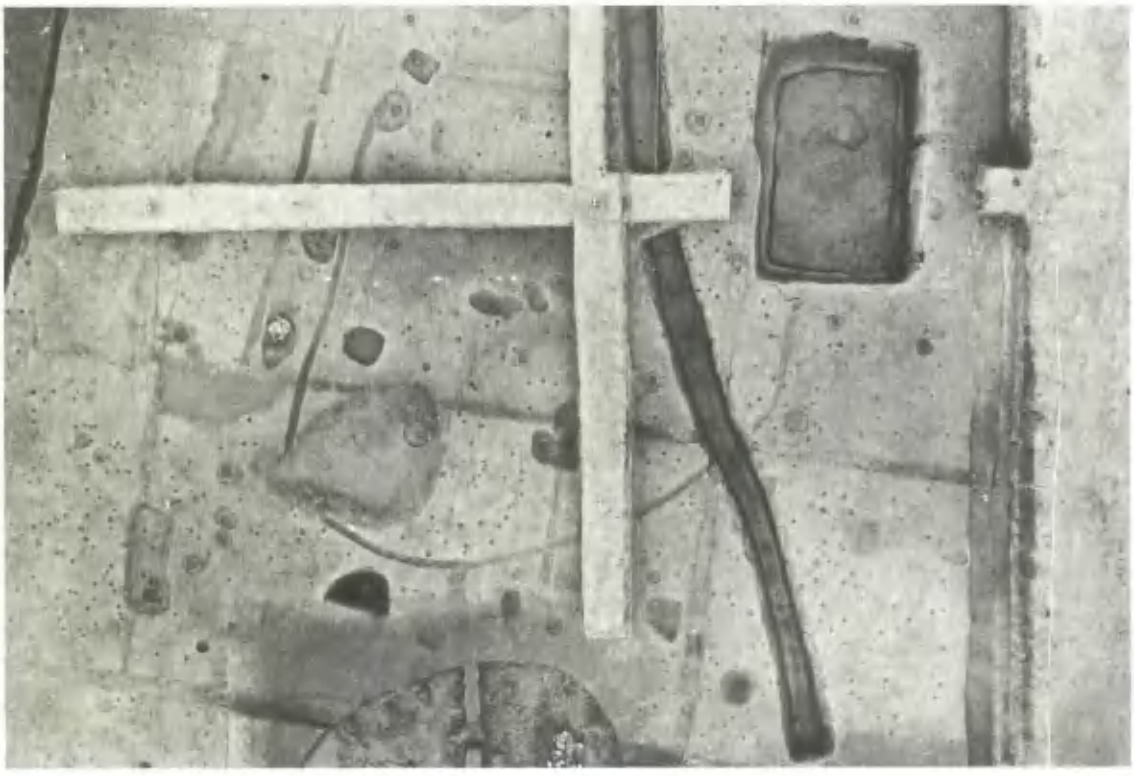
2　第3調査区 5号住居址（南より）

1　第3調査区7号住居址（南より）

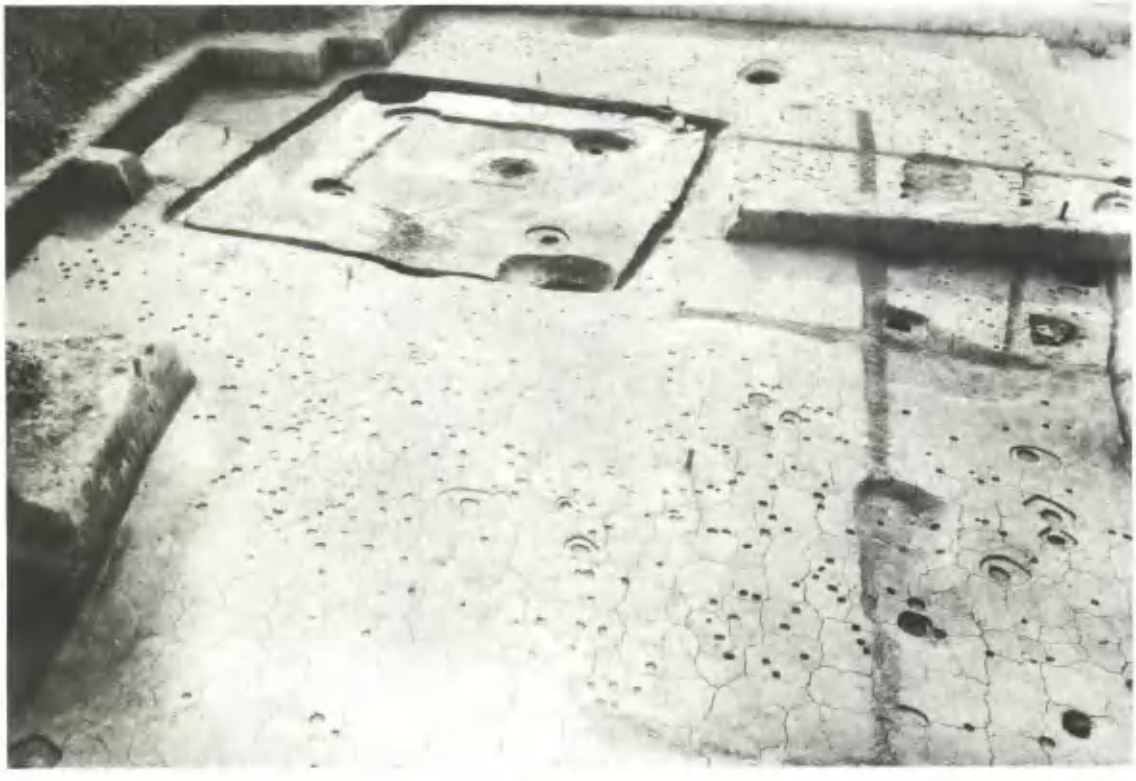
雄町図版11　　2　第3調査区7号住居址（南より）

1　第3調査区8号住居址（南より）

雄町図版12　　2　第3調査区9号住居址（南より）



1　第3調査区10号住居址



雄町図版13　　2　第3調査区1号住居址周辺

1　1号住居址敷石

4　7号住居址礎板

2　5号住居址遺物出土状況

5　7号住居址礎板

雄町図版14　　3　5号住居址遺物出土状況

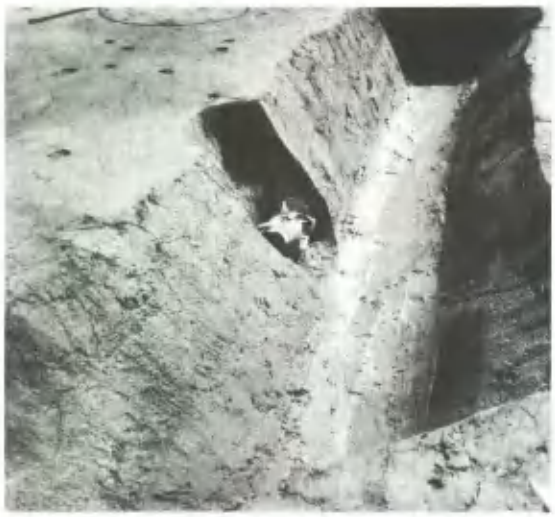
6　8号住居址側板

1　第3調査区長方形土坑1

雄町図版15

2　第3調査区長方形土坑2

1　土坑 7



4　土坑19と溝 2

2　土坑15

5　土坑22

雄町図版16　　3　土坑18

6　土坑26, 27

1　第4調査区軌道敷全景（東より）

2　第4調査区　側道敷住居址群（東より）

雄町図版17

1　第4調査区1号住居址（南より）

雄町図版18

2　第4調査区5号住居址（北より）

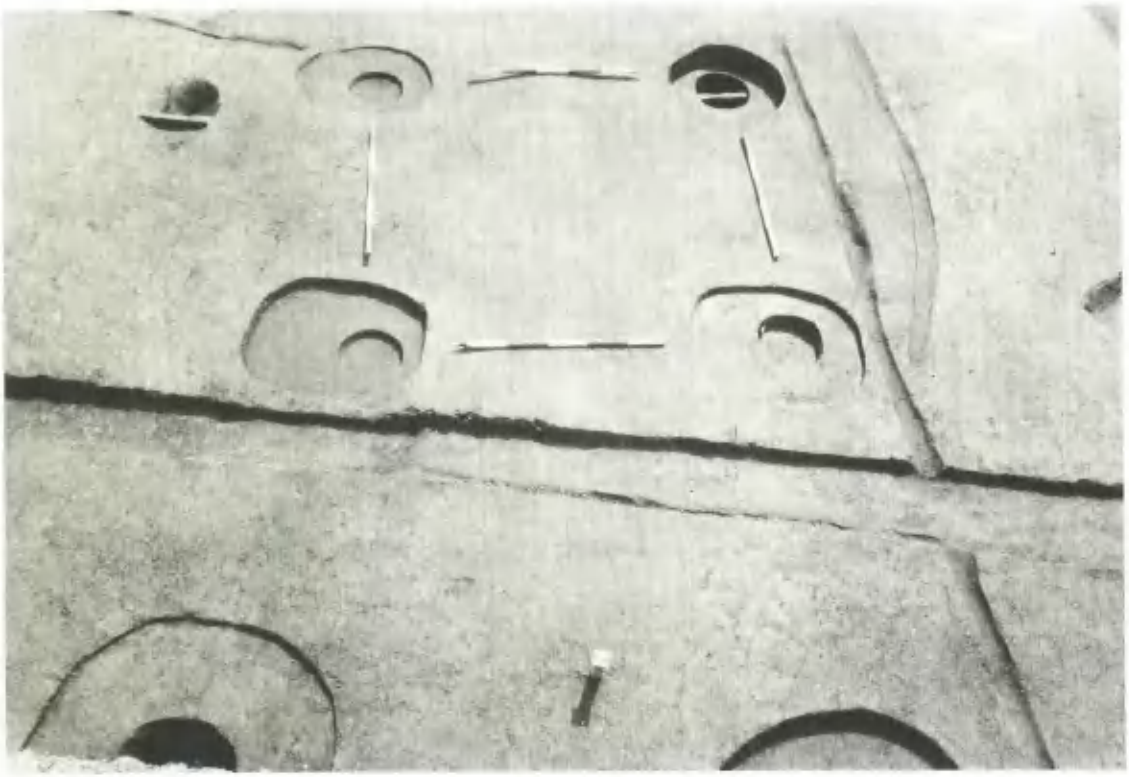
1　第4調査区8号住居址（東より）

雄町図版19　　2　第4調査区6.7.8.号住居址（北より）

1　第4調査区9.10号住居址（南より）

雄町図版20

2　第4調査区建物2.柵列2　（南より）



1　第4調査区建物1（北より）

雄町図版21　　2　第4調査区建物1,柱穴5断面（南より）

雄町図版22

2　第4調査区条里制遺構部分（東より）

1　第4調査区井戸1（西より）

雄町図版23

2　第4調査区井戸3（西南より）

1　第4調査区井戸4 断面（南より）

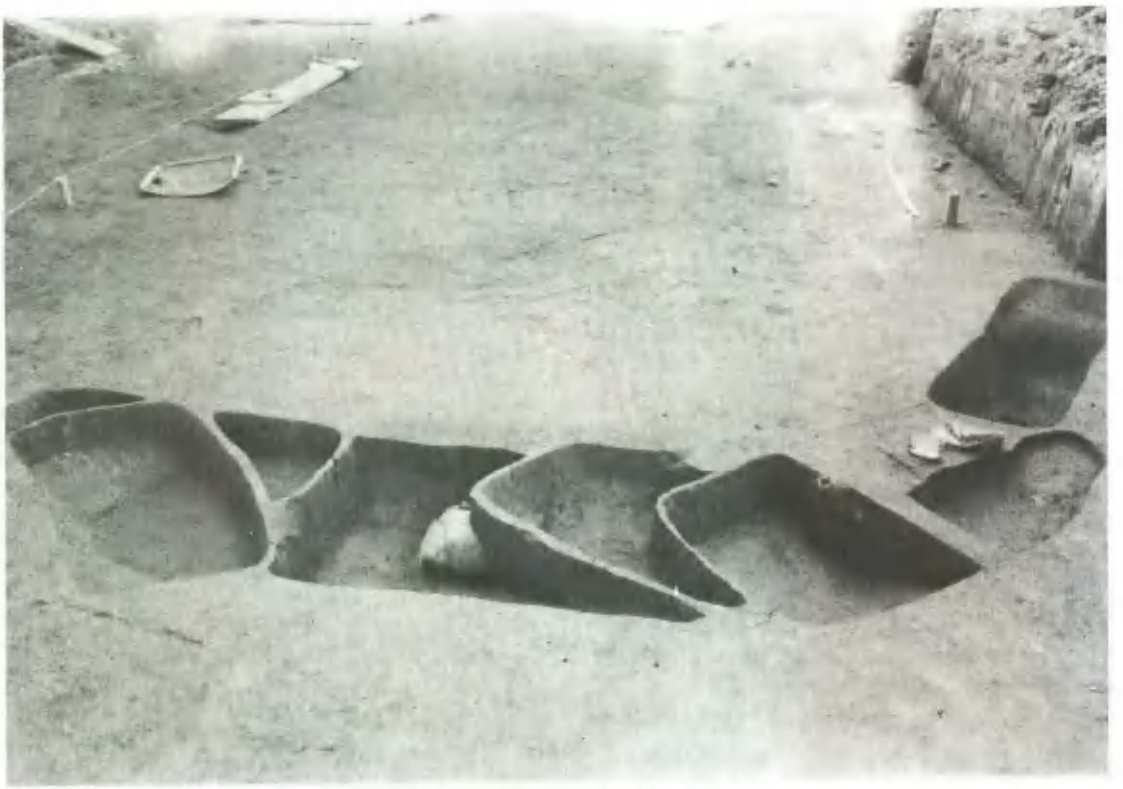
雄町図版24　2　井戸 4 底面の土器

3　井戸 4 堅櫛出土状況

1　第4調査区土壙墓C群（西南より）

雄町図版25

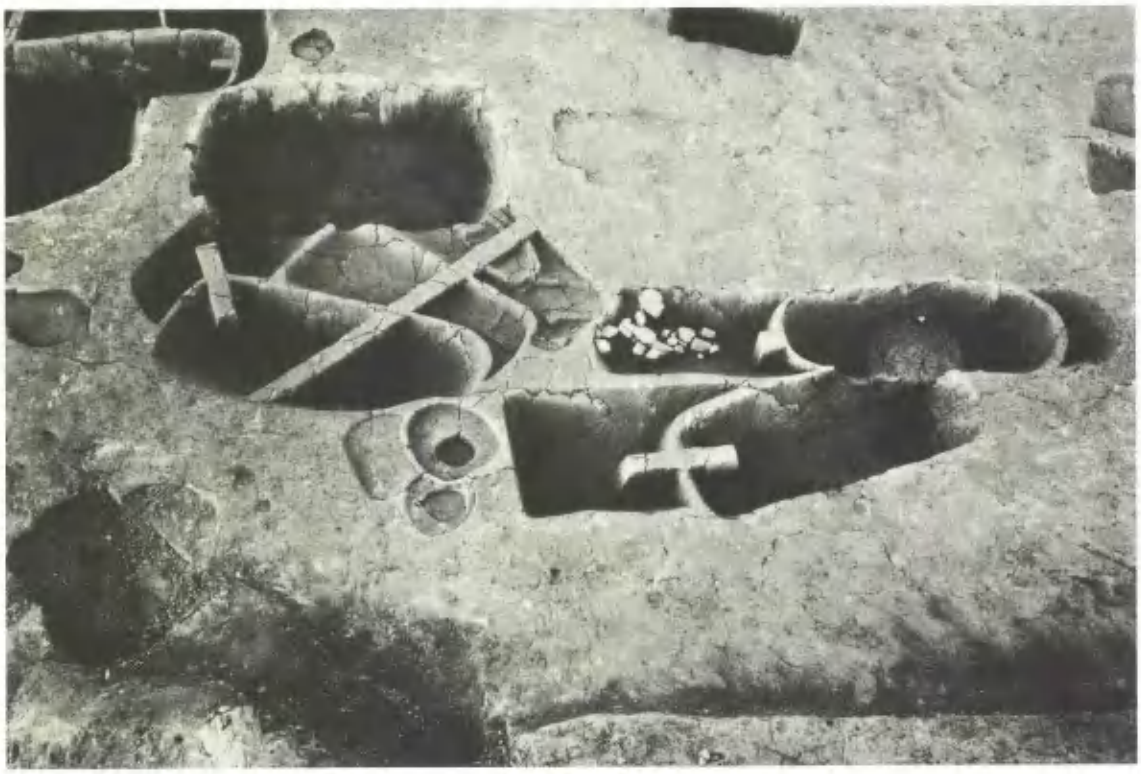
2　第4調査区土壙墓E，F群（東より）



1　第4調査区土坑墓H群（東より）

雄町図版26　2　第4調査区土坑墓I群（西より）

1　第4調査区土壙墓J群（北より）



雄町図版27

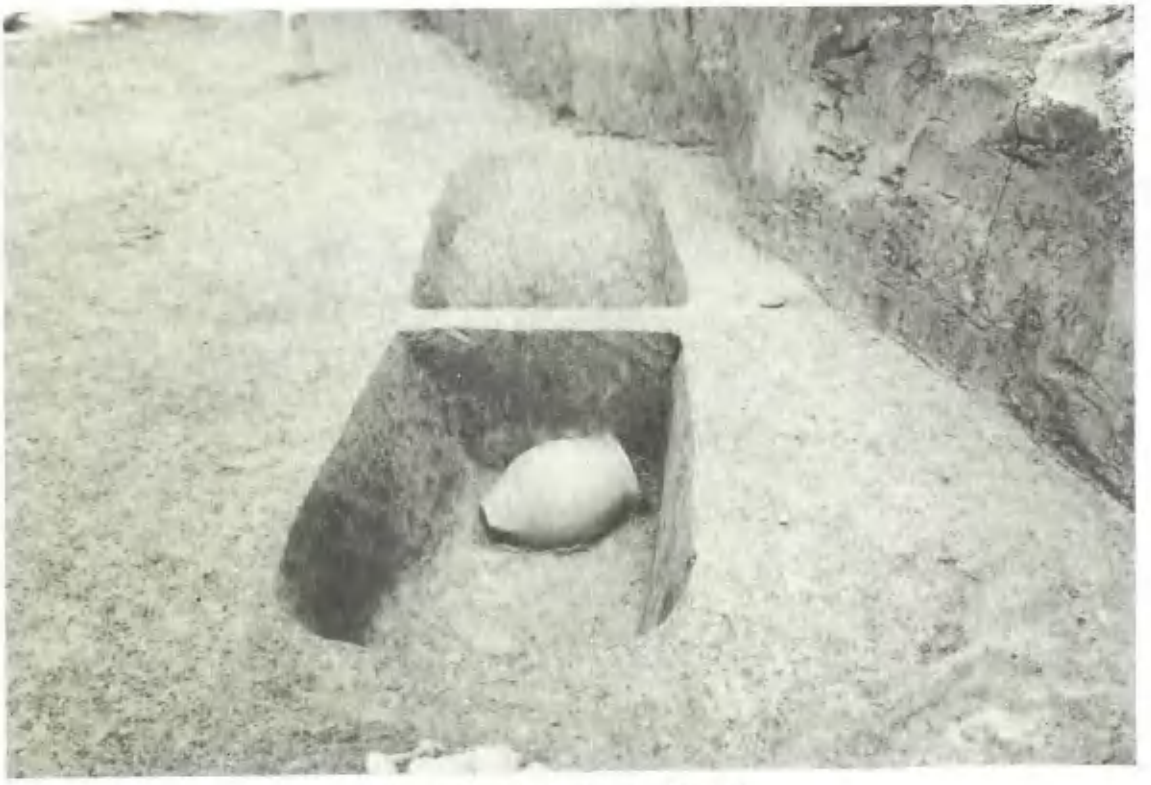
2　第4調査区土壙墓M群（南より）

1　129号壺棺墓

2　土坑墓L-2号石鏃

3　第4調査区107号壺棺墓

雄町図版28



1　第4調査区土壙墓群H－1号（東より）

雄町図版29　2　第4調査区101号土壙墓（東より）

1　第4調査区106号木棺墓（東北より）

雄町図版30　　2　第4調査区125号木棺墓（西より）

1　第4調査区溝14（北西より）

雄町図版31　　第4調査区溝14井堰（南より）

1　第4調査区溝12（南より）

雄町図版32

2　第4調査区 溝12 溝14（東より）

1　第4調査区溝18～溝23（南より）

雄町図版33　2　第4調査区溝28～溝33（北より）

129号墓

1

15

5

3

4

11

9

8

29

15

31

雄町図版34

弥生式土器（前期、中期）

32

34

37

48

43

46

49

50

56

58

59

57

111

雄町図版35

弥生式土器（中期）

112

89

51

119

91

90

101

102

96

118

125

127

128

143

雄町図版36　　弥生式土器（中期，後期）

144

164

142

141

176

205

209

178

211

210

210

181

214

213

雄町図版37

弥生式土器（後期）

231

234

281

273

278

236

234

271

雄町図版38

弥生式土器（後期）

268

267

265

277

276

275

274

249

269

245

248

253

284

263

雄町図版39

弥生式土器（後期）

288

287

286

318

324

310

312

322

308

304

雄町図版40

弥生式土器（後期）

353

352

351

384

358

366

365

371

368

369

348

350

367

375

389

347

雄町図版41

土師器

376

386

383

385

381

178

380

388

390

393

400

391

389

396

394

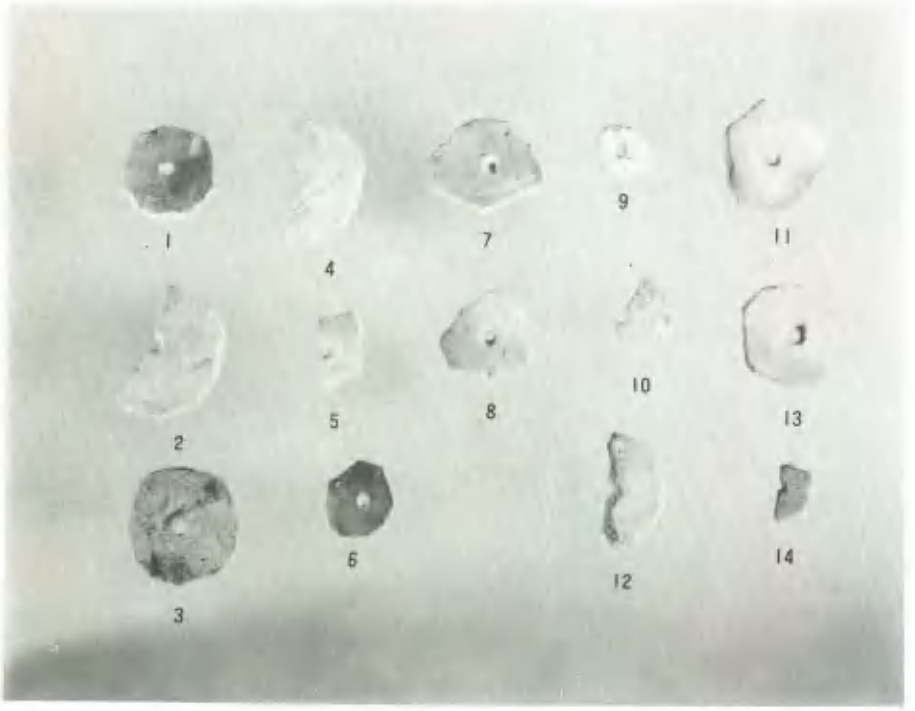
雄町図版42

土師器

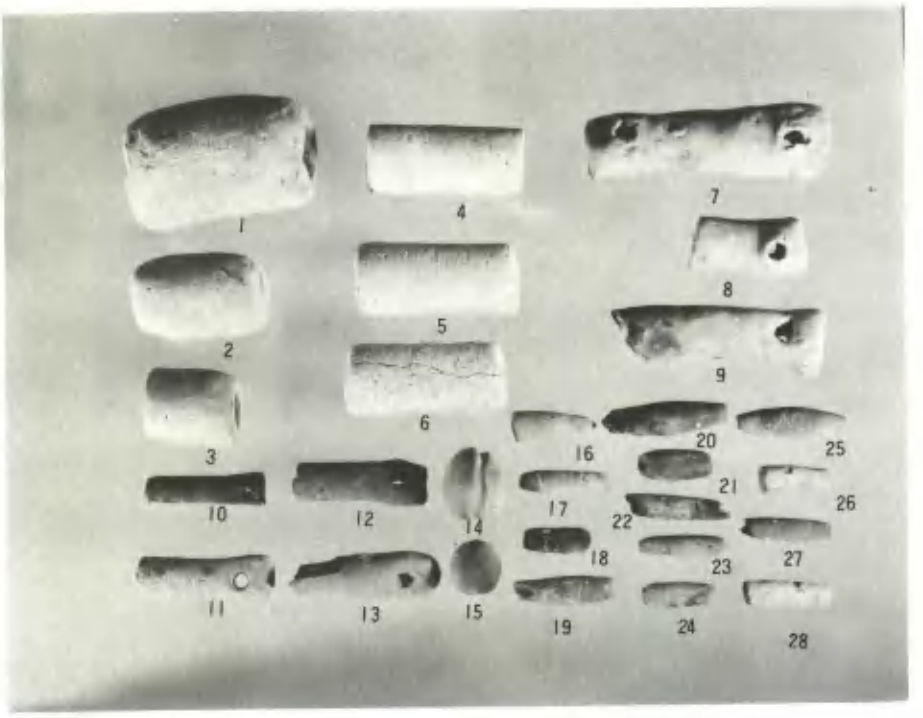
雄町図版43

須恵器

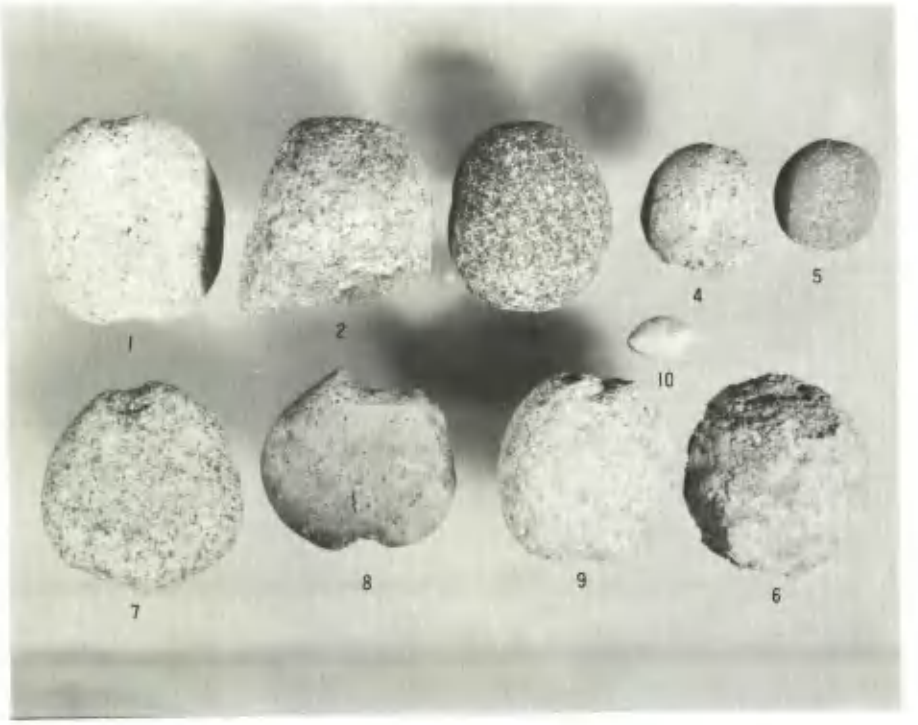
1　分銅形土製品



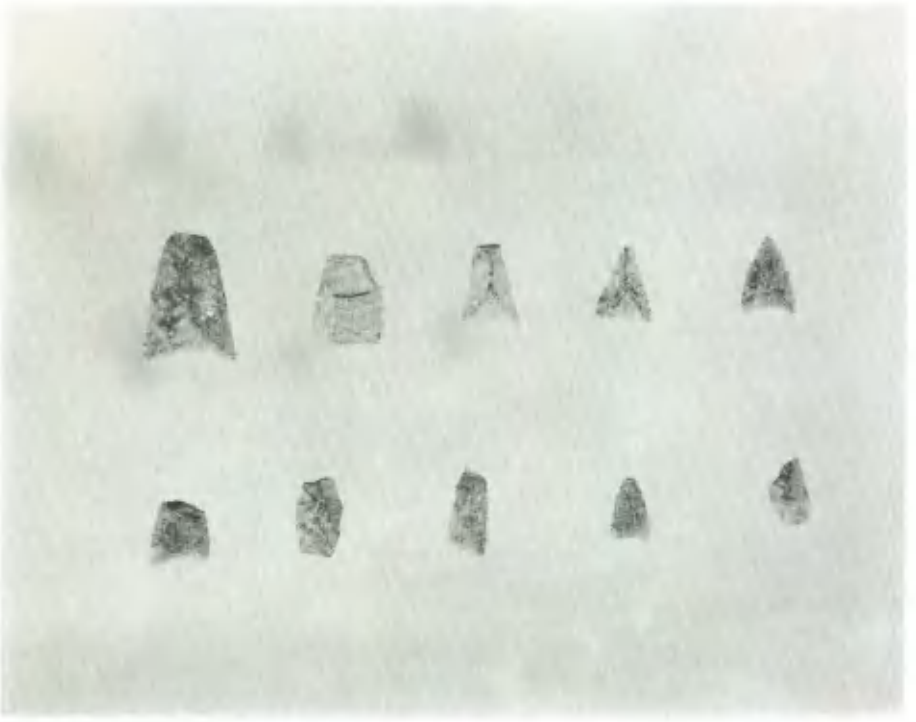
雄町図版44　　2　紡錘車



1　土　　錘



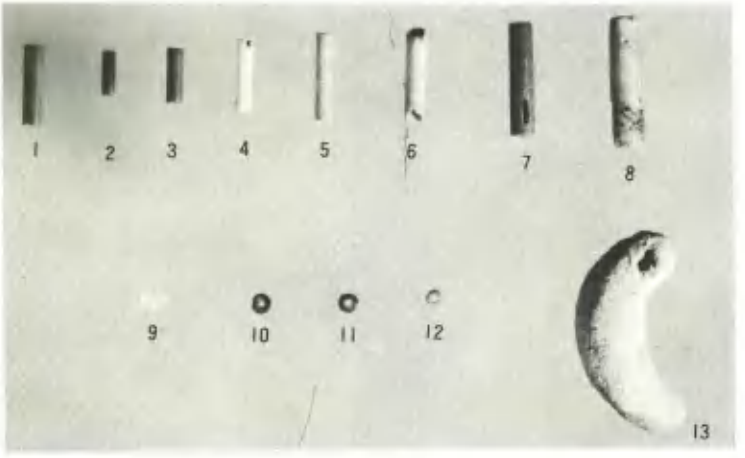
雄町図版45　　2　石　　錘



1　土広墓群L－3号出土石鏃

雄町図版46　　2　砥石，その他

1　鉄製品



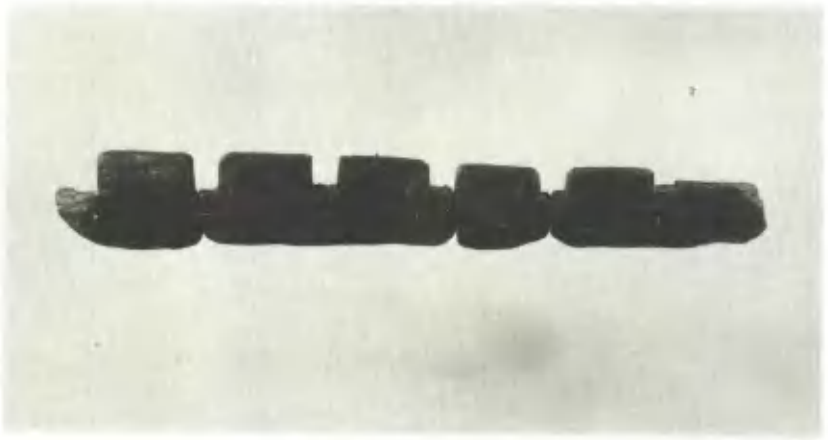
雄町図版47

2　玉　　類

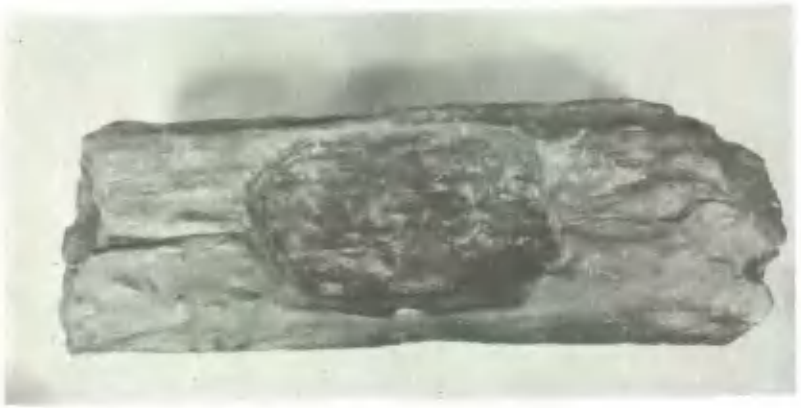
3　鏡　　片

1　櫛

雄町図版48　　2　火きり臼



雄町図版49　木製品



雄町図版50

木製品　中、下は礎板

埋蔵文化財発掘調査報告

昭和47年３月10日 印 刷
昭和47年３月31日 発 行

発 行　岡山県教育委員会
印 刷　山陽印刷株式会社